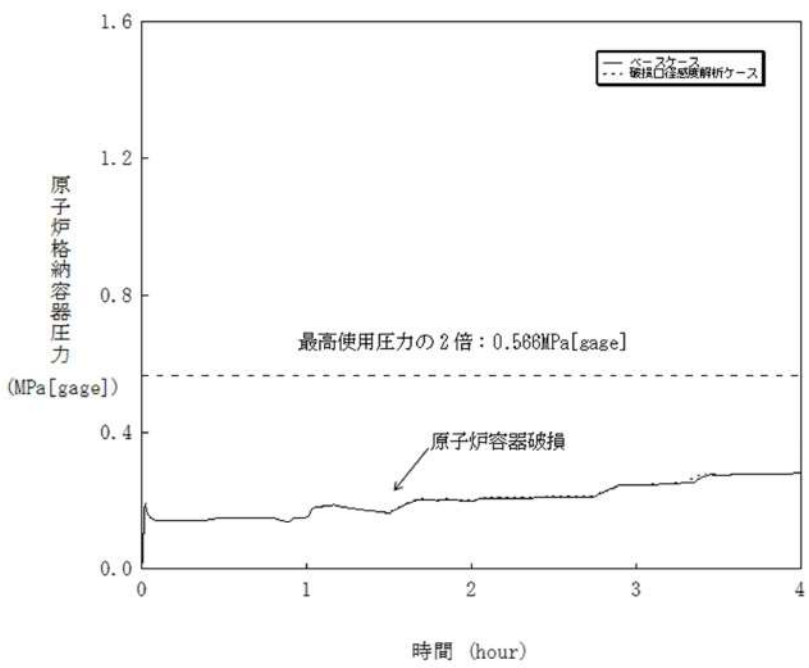


赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p style="text-align: center;">図 5-2-2 原子炉容器の破損口径感度解析（2）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

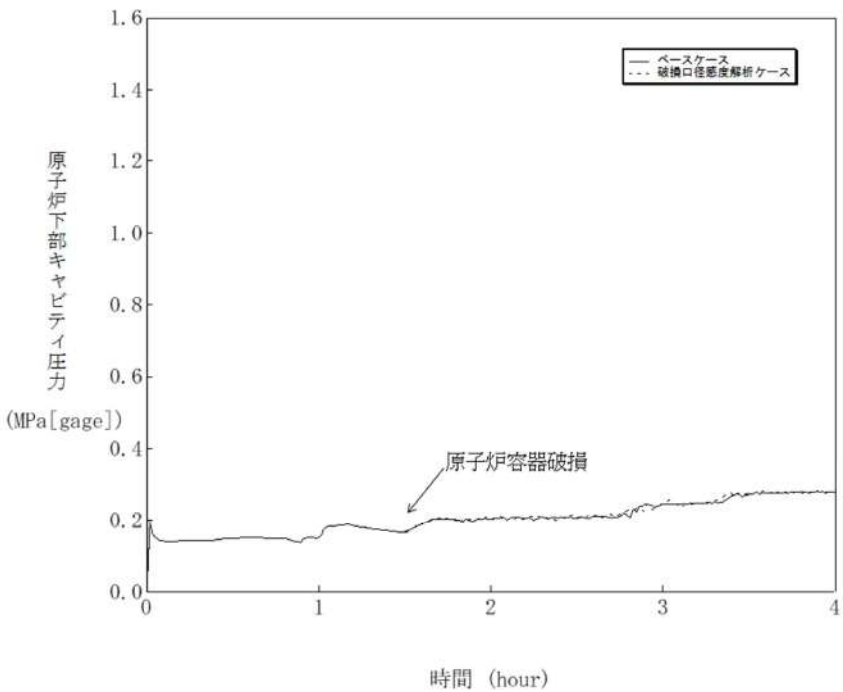
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-2-3 原子炉容器の破損口径感度解析（3）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p style="text-align: center;">図 5-2-4 原子炉容器の破損口径感度解析（4）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-2-5 原子炉容器の破損口径感度解析（5）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-3-1 エントレインメント係数感度解析（1）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-1-1 エントレインメント係数の感度解析 (ドライウェル圧力)</p>	<p>図 5-3-2 エントレインメント係数感度解析 (2)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-1-2 エントレインメント係数の感度解析 (格納容器下部水温)</p>	<p>図 5-3-3 エントレインメント係数感度解析 (3)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-3-4 エントレインメント係数感度解析（4）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">時間 (hour)</p>	

図 5-3-5 エントレインメント係数敏感度解析 (5)

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-2-1 デブリ粒子径の感度解析 (ドライウェル圧力)</p>	<p>図 5-4-1 デブリ粒子の径感度解析 (1)</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について)

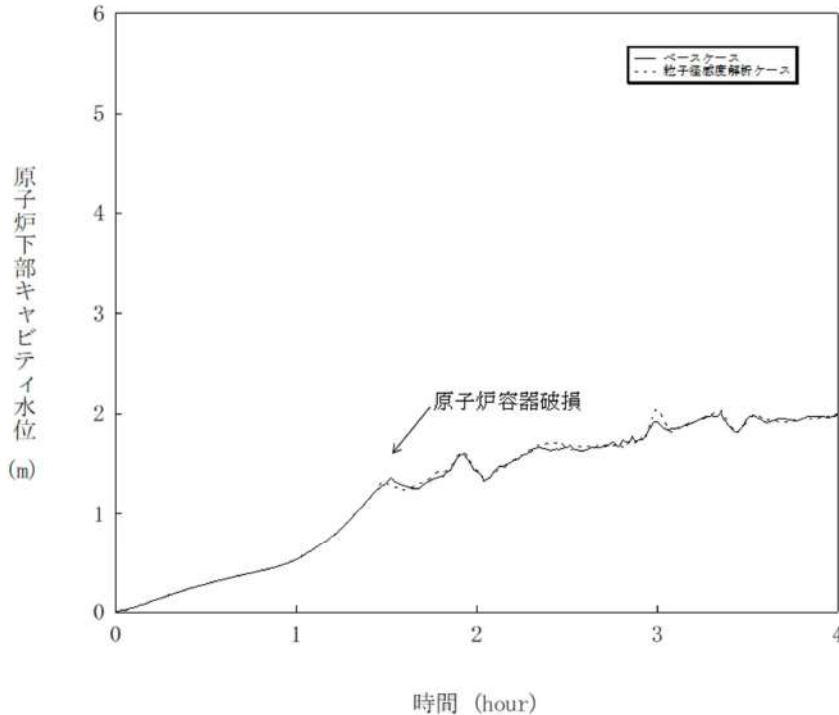
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-2-2 デブリ粒子径の感度解析 (格納容器下部水温)</p>	<p>図 5-4-2 デブリ粒子の径感度解析 (2)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1328 986 1682 1018">図 5-4-3 デブリ粒子の径感度解析（3）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-4-4 デブリ粒子の径感度解析（4）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-4-5 デブリ粒子の径感度解析 (5)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>6. まとめ</p> <p>原子炉圧力容器外におけるFCIについては、これまでに実ウランを用いて種々の実験が行われているが、外部からの強制的なトリガーを与えない場合には水蒸気爆発は発生しないという結果が得られている。外部トリガーを与えた場合でも水蒸気爆発に至らなかったケースが複数確認されており、また、水蒸気爆発が発生した場合においても機械的エネルギーへの変換効率は小さく、大規模な水蒸気爆発には至っていない。したがって、実機において大規模な水蒸気爆発に至る可能性は極めて小さいと考えられる。</p> <p>原子炉圧力容器外FCIのうち、圧カスパイクへの影響因子について、実現象と解析モデルにおける取り扱いに着目し、以下に挙げるものを抽出した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 格納容器下部（ペDESTAL）領域のプール水の状態（サブクール度、水位） ・ 溶融炉心の落下量及び粒子化（破損口径、落下速度、粒子化割合） ・ プール水とデブリ粒子との伝熱（デブリ粒子径） ・ 原子炉格納容器内での水蒸気の流動 <p>これらの項目について、不確かさの幅を考慮した感度解析を実施し、圧カスパイクに対する影響を評価した結果、いずれの項目においても圧カスパイクに対する感度は小さく、重大事故等対策の有効性評価に影響を与えないことを確認した。</p>	<p>6 まとめ</p> <p>原子炉容器内 FCI から水蒸気爆発に至り原子炉格納容器が破損する事象については、これまでの専門家による検討結果では、発生する可能性は非常に低く、問題は解決済みと結論付けられている。また、原子炉容器内 FCI から圧カスパイクに至る事象については、1次冷却材圧力を上昇させることはあるが、原子炉格納容器への直接的な脅威にはならない。</p> <p>原子炉容器外 FCI についても、実験より、デブリ粒子を覆う蒸気膜は安定性があり、外部トリガリング等の外的な要因がなければ、蒸気膜の崩壊は起こりにくいといえ、実機においては、原子炉下部キャビティ水は準静的であることから、外部トリガリングとなり得る要素は考えにくいため、大規模な水蒸気爆発に至る可能性は極めて低いと考えられる。</p> <p>原子炉容器外 FCI のうち、圧カスパイクの不確かさの要因について、実現象と解析モデルの差に着目し、以下のとおり抽出した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 原子炉下部キャビティ水深 ・ 破損口径 ・ Ricou-Spalding のエントレインメント係数 ・ デブリ粒子の径 <p>これらの項目について感度解析を行い、圧カスパイクへの感度を確認した結果、PWRでは原子炉格納容器体積が大きいことにより、過渡的な圧力上昇が緩和されたことから、いずれについても圧カスパイクに対する感度は小さく、重大事故対策の有効性評価の結果に影響は与えない。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 熔融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">付録1 FARO 実験によるMAAPの圧力スパイクモデル妥当性確認</p> <p>1. FARO 実験の概要 FCIの代表的実験であるFARO 実験は、UO₂/ZrO₂/Zr 熔融混合物を噴出させ、装置下部の冷却材との相互作用を検証する実験である。実験装置、実験条件及び実験結果の概要は3.1章（3）FARO 実験に記載している。</p> <p>2. MAAPコードによるFARO 実験の検証解析 MAAPコードでは、熔融炉心と冷却材の相互作用を計算し、圧力スパイクを取り扱うモデルに関するパラメータのうち、三つのモデルパラメータがFARO 実験のベンチマーク解析によって妥当性を評価されている。熔融炉心のエントレインメント係数、及び粒子径ファクタである。</p> <p>エントレインメント係数は、ジェット速度と密度比から熔融炉心のエントレインメント量を計算する際の係数であり、細粒化モデル(Ricou-Spalding モデル)に使用される。エントレインメント量はプール水への伝熱量に寄与する。また、エントレインメント速度 (m/s) を求める下式からは、プール底部におけるジェット直径、ジェットの粒子化割合が求められる。</p> $m_{ent} = E_o \left(\frac{\rho_w}{\rho_d} \right)^{1/2} u_d$ <p> E_o：エントレインメント係数 u_d：ジェット速度 [m/s] ρ_d：ジェット密度 [kg/m³] ρ_w：水密度 [kg/m³] </p>	<p style="text-align: center;">添付2-1 FARO 実験におけるMAAPの圧力スパイクモデルの妥当性確認</p> <p>(1)FARO 実験の概要 FARO 実験装置は、150kg 程度のウラン酸化物及びジルコニウム酸化物からなる熔融物を水中に落下させる装置であり、そのときのFCI挙動を観察するものである。</p> <p>(2)MAAPコードによるFARO 実験解析 FARO 実験解析を実施する際、MAAPコードにおいてFCIに影響する3つのモデルパラメータを感度係数として選定し、その感度解析結果とFARO 実験結果を比較することによって、圧力スパイクモデルの妥当性を確認する。</p> <p>感度係数として選定したモデルパラメータは以下のとおりである。モデルパラメータの最小値、推奨値、最大値も併せて示している。</p> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 50px; margin-top: 10px;"></div> <p>MAAPコードによる実験解析を実施するにあたって、いくつかの簡略化を行っている。具体的な仮定を以下に記す。</p>	<p>※付録2-1は従来のPWRの公開文献から追加</p>
<p>粒子径ファクタは、ジェット表面からエントレインメントを受けた粒子の直径を計算する際の係数である。計算された粒子径は、粒子の沈降速度やデブリ温度の計算に用いられる。</p> <p>圧力スパイクモデルのベンチマーク解析における仮定を以下に示す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
<div data-bbox="145 193 1043 847" style="border: 2px solid black; height: 410px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="145 885 1043 946">上記の仮定によって、解析結果と実験結果の比較には制限があるが、ピーク圧力の上昇（すなわち、圧力スパイク挙動）と圧力の上昇速度については、比較が可能である。</p> <p data-bbox="145 991 1043 1150">付図 1、付図 2、付図 3、付図 4、付図 5、付図 6、付図 7、付図 8、付図 9、付図 10、付図 11 及び付図 12 に L-06, L-08, L-14, L-11 実験の圧力及びデブリ粒子径及び堆積デブリ質量の実験結果と、MAAP 解析結果の比較図を示す。MAAP 解析結果は、三つのパラメータに対して、最適値、最大値、最小値の組み合わせを用いて評価されている。また、付表 1 に L-06, L-08, L-14, L-11 実験の過熱度を示す。</p> <div data-bbox="607 1334 1016 1409" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> 本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div>	<div data-bbox="1077 193 1957 847" style="border: 2px solid black; height: 410px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="1061 885 1957 946">上記の仮定があるため解析結果と実験結果の比較には制限があるものの、ピーク圧力の上昇と圧力の上昇速度については比較可能である。</p> <p data-bbox="1061 991 1957 1083">以下では、実験 L-06, L-08, L-11, L-14 と解析の比較について、圧力（付図 1-1～付図 1-4）、堆積デブリ質量（付図 1-5～付図 1-8）、及びデブリ粒子径（付図 1-9～付図 1-12）を示す。いずれの実験の圧力挙動も MAAP コードによる解析結果とよく一致した。</p> <div data-bbox="1592 1362 1899 1422" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> 枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由										
<p style="text-align: center;">付表1 FARO 実験における過熱度^[2,4]</p> <table border="1" data-bbox="217 250 969 341"> <thead> <tr> <th>実験ケース</th> <th>L-06</th> <th>L-08</th> <th>L-14</th> <th>L-11</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>過熱度[K]</td> <td>63</td> <td>163</td> <td>263</td> <td>100</td> </tr> </tbody> </table> <p>いずれの実験の圧力挙動も、MAAP解析結果では再現をみた。</p> <p>また、デブリ粒子径及び堆積デブリ質量についても、実験結果のデータは、エントレインメント係数及び粒子径ファクタを変化させた場合のMAAP解析結果の範囲内によく再現されている。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> 本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div>	実験ケース	L-06	L-08	L-14	L-11	過熱度[K]	63	163	263	100		
実験ケース	L-06	L-08	L-14	L-11								
過熱度[K]	63	163	263	100								

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="208 196 985 847" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="338 882 851 911" data-label="Caption"> <p>付図1 L-06 実験結果/解析結果比較（圧カスパイク）^[23]</p> </div> <div data-bbox="607 1329 1016 1406" data-label="Text"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	<div data-bbox="1066 229 1946 847" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1285 882 1724 911" data-label="Caption"> <p>付図1-1 L-06 実験結果と解析結果の比較（圧力）</p> </div> <div data-bbox="1352 919 1671 948" data-label="Text"> <p>出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> </div> <div data-bbox="1626 1358 1928 1425" data-label="Text"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
<div data-bbox="203 196 990 847" style="border: 2px solid black; height: 400px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="342 852 851 877">付図 2 L-08 実験結果/解析結果比較（圧力スパイク）^[23]</p> <div data-bbox="607 1299 1016 1374" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	<div data-bbox="1064 229 1960 813" style="border: 2px solid black; height: 360px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="1285 852 1720 877">付図 1-2 L-08 実験結果と解析結果の比較（圧力）</p> <p data-bbox="1352 887 1671 912">出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1624 1307 1928 1374" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶解炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
	<div data-bbox="1059 229 1955 847" style="border: 2px solid black; height: 387px; width: 399px; margin: 0 auto;"></div> <p data-bbox="1285 884 1720 911" style="text-align: center;">付図 1-3 L-11 実験結果と解析結果の比較（圧力）</p> <p data-bbox="1352 919 1671 946" style="text-align: center;">出典：MAAP4 User' s Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1606 1337 1910 1406" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 20px auto; width: fit-content;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属します ますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶解炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
<div data-bbox="206 197 992 847" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="336 882 853 912" data-label="Caption"> <p>付図 3 L-14 実験結果/解析結果比較（圧カスパイク）^[23]</p> </div> <div data-bbox="577 1321 992 1398" data-label="Text"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	<div data-bbox="1059 264 1957 847" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1276 882 1727 912" data-label="Caption"> <p>付図 1-4 L-14 実験結果と解析結果の比較（圧力）</p> </div> <div data-bbox="1339 917 1673 948" data-label="Text"> <p>出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> </div> <div data-bbox="1630 1337 1939 1409" data-label="Text"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="203 197 987 847" style="border: 2px solid black; height: 400px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="344 884 853 911">付図4 L-11 実験結果/解析結果比較（圧カスパイク）^[23]</p> <div data-bbox="577 1299 987 1374" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
	<div data-bbox="1064 231 1960 845" style="border: 2px solid black; height: 385px; width: 395px; margin: 0 auto;"></div> <p data-bbox="1234 884 1771 911" style="text-align: center;">付図 1-5 L-06 実験結果と解析結果の比較（堆積デブリ質量）</p> <p data-bbox="1350 920 1671 946" style="text-align: center;">出典：MAAP4 User' s Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1585 1321 1892 1393" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 20px auto;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属します ますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div data-bbox="1059 264 1957 847" style="border: 2px solid black; height: 365px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="1234 884 1771 911">付図1-6 L-08 実験結果と解析結果の比較（堆積デブリ質量）</p> <p data-bbox="1352 920 1671 948">出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1615 1289 1917 1358" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: auto; margin-right: auto;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
	<div data-bbox="1059 229 1955 847" style="border: 2px solid black; height: 387px; width: 399px; margin: 0 auto;"></div> <p data-bbox="1234 852 1771 879" style="text-align: center;">付図 1-7 L-11 実験結果と解析結果の比較（堆積デブリ質量）</p> <p data-bbox="1352 887 1671 914" style="text-align: center;">出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1637 1337 1942 1402" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 20px auto; width: fit-content;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付 2 溶融炉心と冷却材の相互作用について)

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
	<div data-bbox="1064 263 1960 845" style="border: 2px solid black; height: 365px; width: 395px; margin: 0 auto;"></div> <p data-bbox="1234 853 1771 879" style="text-align: center;">付図 1-8 L-14 実験結果と解析結果の比較 (堆積デブリ質量)</p> <p data-bbox="1352 887 1671 912" style="text-align: center;">出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1624 1332 1928 1401" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 20px auto; width: fit-content;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="181 196 1003 834" style="border: 2px solid black; height: 400px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="344 850 853 879">付図5 L-06 実験結果/解析結果比較（デブリ粒子径）^[23]</p> <div data-bbox="593 1334 1003 1409" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	<div data-bbox="1059 229 1955 847" style="border: 2px solid black; height: 387px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="1245 850 1762 879">付図1-9 L-06 実験結果と解析結果の比較（デブリ粒子径）</p> <p data-bbox="1352 885 1671 914">出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1615 1361 1921 1425" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="181 199 1012 869" style="border: 2px solid black; height: 420px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="344 884 851 911">付図6 L-08 実験結果/解析結果比較（デブリ粒子径）^[23]</p> <div data-bbox="602 1337 1012 1410" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	<div data-bbox="1061 300 1957 880" style="border: 2px solid black; height: 364px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="1240 884 1769 911">付図1-10 L-08 実験結果と解析結果の比較（デブリ粒子径）</p> <p data-bbox="1352 922 1671 949">出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1615 1326 1921 1393" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
	<div data-bbox="1061 229 1960 847" style="border: 2px solid black; height: 387px; width: 100%;"></div> <p data-bbox="1240 852 1765 879">付図 1-11 L-11 実験結果と解析結果の比較（デブリ粒子径）</p> <p data-bbox="1352 887 1666 914">出典：MAAP4 User' s Manual, EPRI</p> <div data-bbox="1608 1358 1912 1426" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: auto;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属します ますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付 2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
<div data-bbox="206 199 987 863" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="336 882 853 912" data-label="Caption"> <p>付図 7 L-14 実験結果/解析結果比較（デブリ粒子径）^[23]</p> </div> <div data-bbox="607 1334 1016 1406" data-label="Text"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	<div data-bbox="1061 263 1957 845" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1232 849 1771 879" data-label="Caption"> <p>付図 1-12 L-14 実験結果と解析結果の比較（デブリ粒子径）</p> </div> <div data-bbox="1339 884 1675 912" data-label="Text"> <p>出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> </div> <div data-bbox="1599 1334 1910 1401" data-label="Text"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 熔融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="208 196 983 844" style="border: 2px solid black; width: 100%; height: 100%;"></div> <div data-bbox="336 849 851 879" style="text-align: center;"> <p>付図8 L-11 実験結果/解析結果比較（デブリ粒子径）^[23]</p> </div> <div data-bbox="607 1305 1016 1382" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="197 201 999 879" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="324 882 862 912" data-label="Caption"> <p>付図9 L-06 実験結果/解析結果比較（堆積デブリ質量）^[23]</p> </div> <div data-bbox="607 1294 1016 1369" data-label="Text"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="192 196 999 847" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="320 847 866 879" data-label="Caption"> <p>付図10 L-08 実験結果/解析結果比較（堆積デブリ質量）^[23]</p> </div> <div data-bbox="607 1297 1016 1374" data-label="Text"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 熔融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="217 193 976 842" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="320 847 869 879" data-label="Caption"> <p>付図 11 L-14 実験結果/解析結果比較（堆積デブリ質量）^[23]</p> </div> <div data-bbox="607 1326 1016 1398" data-label="Text"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="212 196 974 847" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="320 849 866 879" data-label="Caption"> <p>付図 12 L-11 実験結果/解析結果比較（堆積デブリ質量）^[23]</p> </div> <div data-bbox="607 1334 1016 1409" data-label="Text"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>3. 結論</p> <p>MAAPコードでは、FCIに関わる圧力スパイク挙動はデブリジェットモデルで制御されており、その妥当性確認はFARO実験結果とのベンチマーク解析によって行われている。FARO実験結果の示す圧力スパイク挙動のピーク圧力、圧力上昇及びデブリ粒子径について、MAAPコードはよく再現されており、その妥当性が確認されている。</p>	<p>(3)まとめ</p> <p>MAAPコードでは、FCIに関わる圧力スパイク挙動はデブリジェットモデルで制御されており、その妥当性確認はFARO実験とのベンチマーク解析によって行われている。FARO実験結果の示す圧力スパイク挙動のピーク圧力、圧力上昇及びデブリ粒子径について、MAAPコードはよく再現されており、その妥当性が確認されている。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>参考文献</p> <p>[1] U.S.NRC, Reactor Safety Study, An Assessment of Accident Risks in U.S. Commercial Nuclear Power Plants, WASH-1400, NUREG-75/014, Oct. 1975.</p> <p>[2] N. Yamano, Y. Maruyama, T. Kudo, A. Hidaka, J. Sugimoto, Phenomenological studies on melt-coolant interactions in the ALPHA program, Nucl. Eng. Des. 155 369-389, 1995.</p> <p>[3] I. Huhtiniemi, D. Magallon, H. Hohmann, Results of recent KROTOS FCI tests: aluminum versus corium melts, Nucl. Eng. Des. 189 379-389, 1999.</p> <p>[4] D. Magallon, Characteristics of corium debris bed generated in large-scale fuel-coolant interaction experiments, Nucl. Eng. Des. 236 1998-2009, 2006.</p> <p>[5] H. S. Park, R. Chapman, M. L. Corradini, Vapor Explosions in a One-Dimensional Large-Scale Geometry With Simulant Melts, NUREG/CR-6623, 1999.</p> <p>[6] D. Magallon, et al, Lessons learnt from FARO/TERMOS corium melt quenching experiments, Nucl. Eng. Des. 189 223-238, 1999.</p> <p>[7] M. Kato, H. Nagasaka, COTELS Fuel Coolant Interaction Tests under Ex-Vessel Conditions, JAERI-Conf 2000-015, 2000.</p> <p>[8] V. Tyrpekl, Material effect in the fuel - coolant interaction : structural characterization and solidification mechanism, 2012.</p> <p>[9] J.H.Kim, et al, The Influence of Variations in the Water Depth and Melt Composition on a Spontaneous Steam Explosion in the TROI Experiments, Proceedings of ICAPP' 04.</p> <p>[10] (財)原子力安全研究協会, 「シビアアクシデント対策評価のための格納容器イベントツリーに関する検討」, 平成13年7月</p> <p>[11] K.Moriyama, et al, Steam Explosion Simulation Code JASMINE v.3 User's Guide, JAEA-Data/Code 2008-014, 2008.</p> <p>[12] 片山, 高速衝突と爆発問題を中心とした諸分野における衝撃解析, 「第7回衝撃工学フォーラム(中級者のための衝撃工学入門)」, 日本材料学会, 平成20年11月</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付2 溶融炉心と冷却材の相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
[13] Livermore Software Technology Corporation, LS-DYNA KEYWORD USER' S MANUAL VOLUME I, 2007.		
[14] T.Okkonen, et al, Safety Issues Related to Fuel-Coolant Interactions in BWR' S, NUREG/CP-0127, 1994.		
[15] T.G. Theofanous, et al, Steam Explosions: Fundamentals and Energetic Behavior, NUREG/CR-5960, 1994.		
[16] S. Basu, T. Ginsberg, A Reassessment of the Potential for an Alpha-Mode Containment Failure and a Review of the Current understanding of Broader Fuel-Coolant Interaction (FCI) issues, Report of the Second Steam Explosion Review Group Workshop (SERG-2), NUREG-1524, 1996.		
[17] O. Zuchuat, et al, Steam Explosions-Induced Containment Failure Studies for Swiss Nuclear Power Plants, JAERI-Conf 97-011, 1998.		
[18] M. Kato, et al, Fuel Coolant Interaction Tests using UO2 Corium under Ex-vessel Conditions, JAERI-Conf 99-005, 1999.		
[19] J.H. Song, Fuel Coolant Interaction Experiments in TROI using a UO2/ZrO2 mixture, Nucl. Eng. Des., 222, 1-15, 2003.		
[20] J.H. Kim, Results of the Triggered Steam Explosions from the TROI Experiment, Nucl. Tech., Vol.158 378-395, 2007.		
[21] NUCLEA Nuclear Thermodynamic Database, Version 2005-01.		
[22] NEA/CSNI/R. OECD/SERENA Project Report Summary and Conclusions, 2015.		
[23] Electric Power Research Institute (EPRI), MAAP4, Modular Accident Analysis Program User' s Manual, EPRI Report prepared by Fauske & Associates, Inc.		
[24] D. Magallon, Experimental investigation of 150-kg-scale corium melt jet quenching in water, Nucl. Eng. Des. 177 321-337, 1997.		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉		泊発電所3号炉		相違理由
添付3		添付3		
溶融炉心とコンクリートの相互作用について		溶融炉心とコンクリートの相互作用について		
1.	まえがき	1.	まえがき	
2.	現象の概要	2.	現象の概要	
3.	これまでの知見の整理	3.	知見の整理	記載表現の相違 ・泊では3.に女川の付録1~3相当の内容を記載
4.	評価モデルと不確かさに関する整理	4.	<u>評価モデルと不確かさに関する整理</u>	
5.	感度解析と評価	5.	感度解析と評価	
6.	まとめ	6.	まとめ	
付録1	ドライ条件でのMCCI実験			
付録2	注水を伴ったMCCI実験			
付録3	溶融物の水中落下時の粒子化実験と解析モデル			
付録4	溶融物の拡がり実験	添付3-1	溶融炉心の水中での拡がり評価について	
付録5	粒子状ベッドの冷却性実験と解析モデル	添付3-2	<u>粒子状ベッドの冷却性実験と解析モデル</u>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>1. まえがき</p> <p>溶融炉心-コンクリート相互作用（MCCI）は、炉心溶融が進展し、溶融炉心が原子炉圧力容器底部を溶融貫通し、格納容器下部のペDESTAL床に落下した場合に発生する現象である。MCCIが継続すると、格納容器構造の侵食や非凝縮性ガス（水素ガス等）発生による格納容器過圧により格納容器破損に至る可能性があり、重要な格納容器破損モードと考えられてきており、これまで種々の実験や解析モデルの開発が行われてきている。これまでは、注水がないドライ条件でのMCCI挙動や溶融炉心上に注水した場合（Top Flooding）のMCCI抑制効果を調べる研究が主に行われてきた。</p> <p>MCCIの緩和対策として、溶融炉心落下後に注水する以外に、溶融炉心落下前にペDESTALに事前水張りするマネジメントが効果的とされており^[1]、本有効性評価ではこの対策を前提としている。事前水張りにより、溶融炉心が落下時に水中で粒子化され、溶融炉心が粒子状ベッドとして堆積し、デブリ冷却性の向上が期待されるためである（図1-1参照）。本資料では、国内外で実施された実験等による知見を整理するとともに、解析モデルに関する不確かさの整理を行い、感度解析により有効性評価への影響を確認した。</p> <div data-bbox="347 758 846 1204" data-label="Diagram"> </div> <p>図1-1 ペDESTAL事前水張りによるデブリ粒子化の概念</p>	<p>1. まえがき</p> <p>溶融炉心とコンクリートの相互作用（MCCI：Molten Core Concrete Interaction、以下、「MCCI」という。）に関しては、国内外において現象の解明や評価に関する多くの活動が行われてきているが、現在においても研究段階にあり、また、実機規模での現象についてほとんど経験がなく、有効なデータが得られていないのが現状であり、不確かさが大きい現象であるといえる。</p> <p>そこで、国内外で実施された実験等による知見を整理するとともに、解析モデルに関する不確かさの整理を行い、感度解析により有効性評価への影響を確認した。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>2. 現象の概要</p> <p>MCCIは、溶融炉心が原子炉圧力容器下部を溶融貫通して格納容器床面に落下し、床面のコンクリートと接触した場合に発生し、高温の溶融炉心によりコンクリートが加熱され熱分解し溶融侵食される現象である。侵食が継続した場合、原子炉格納容器バウンダリの破損や格納容器内支持構造の強度低下に至る可能性がある。また、コンクリートの熱分解により発生する水蒸気及び二酸化炭素が溶融炉心内を通過する間に未酸化金属成分と反応して水素、一酸化炭素等の非凝縮性の可燃性ガスが発生し、原子炉格納容器内の過圧や燃焼に至る可能性がある。このような要因により格納容器破損に至る可能性があり、MCCIは重要な格納容器破損モードと考えられている。MCCIを停止するためには、落下した溶融物（コリウム）を冷却することにより、侵食限界に至る前にコリウムと接しているコンクリート温度を溶融温度（約1500K）以下にすることが必要となる。</p> <p>国内BWRでは、原子炉圧力容器破損前にペDESTALへ水張りをを行い、下部ヘッドが破損し溶融炉心が落下した際の溶融炉心の冷却を促進することにより、MCCIを緩和する対策を採っている。ペDESTALに落下した溶融炉心は、水プール中を落下する際に、一部は粒子化して水中にエントレインされ、残りは床面に落下して堆積し溶融プールを形成する。エントレインされたデブリ粒子は、水中を浮遊しながら水へ膜沸騰による熱伝達が行われて冷却され、クエンチし、溶融プール上に堆積し、粒子状ベッドを形成する。</p> <p>ペDESTAL床に堆積した溶融炉心は、崩壊熱や化学反応熱により発熱しているが、水やコンクリートへの伝熱により徐々に冷却され、溶融炉心温度が固化温度を下回ると固化する。溶融炉心の冷却の過程では、中心に溶融プール（液相）、外周部にクラスト（固相）が形成される。溶融炉心上のプール水との伝熱は粒子状ベッドを介して行われるため、冷却効果は、粒子状ベッドの冷却性に依存する。</p> <p>ペDESTALの溶融炉心と接触しているコンクリートは、溶融炉心からの熱伝達により加熱され、その温度が融点を上回ると溶融し侵食される。この際にガス（水蒸気及び二酸化炭素）及びコンクリートスラグが発生し、溶融炉心に混入されて化学反応（未酸化Zrによる還元反応）により、反応熱とともに水素ガスや一酸化炭素が発生する。</p> <p>MCCIによるコンクリート侵食量は、溶融炉心から上部水プール、壁方向及び床方向のコンクリートへの熱分配に支配される。国内BWRのMCCI対策としている事前水張りをしている場合には、溶融炉心上面からの除熱が支配的となるため、相対的にコンクリートへの熱移行は抑えられ、コンクリート侵食量は抑えられる。この場合には、上面熱流束が重要となる。また、万一事前水張りできず、溶融炉心上面からの除熱が十分でない場合は、コンクリートへの熱移行量が増え、コンクリート侵食量は大きくなる。この場合には、コンクリートへの熱伝達が重要となる。</p>	<p>2 現象の概要</p> <p>重大事故時には、溶融炉心と原子炉下部キャビティ床コンクリートの接触によって、コンクリートが侵食され、ベースマツト溶融貫通に至る可能性がある。このような溶融炉心とコンクリートの接触及びそれに伴って引き起こされる現象（コンクリートの侵食及び不揮発性ガスの発生）のことを溶融炉心とコンクリートの相互作用（MCCI）と呼ぶ。</p> <p>国内PWRプラントでは、炉心損傷検知後に、原子炉下部キャビティへの水張りをを行うことにより、溶融炉心が原子炉下部キャビティに落下した際の溶融炉心の冷却を促進することによりMCCIの防止及び緩和を行っている¹。原子炉下部キャビティに落下した溶融炉心は、原子炉下部キャビティ水との接触により、一部は粒子化して水中にエントレインされ、残りは原子炉下部キャビティ床面に落下して堆積し溶融プールを形成する。エントレインされたデブリ粒子は、水と膜沸騰熱伝達し水中を浮遊するが、冷却が進むと膜沸騰状態が解消され、溶融プール上に堆積する。</p> <p>原子炉下部キャビティ底に堆積した溶融炉心は、崩壊熱や化学反応熱により発熱しているが、原子炉下部キャビティ水及びコンクリートとの伝熱により冷却されるにつれて固化し、冷却が不足する場合には、中心に溶融プール（液相）、外面にクラスト（固相）を形成する。</p> <p>コンクリートは、溶融炉心との熱伝達により加熱され、その温度が融点を上回る場合に融解する。このとき、ガス（水蒸気及び二酸化炭素）及びスラグが発生し、溶融炉心に混入され化学反応する。</p> <p>¹ (財)原子力発電技術機構（NUPEC）、「重要構造物安全評価（原子炉格納容器信頼性実証事業）に関する総括報告書」（2003）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>3. これまでの知見の整理</p> <p>本章では、MCC Iに関する実験の概要及びそこで得られた知見に関して整理を行う。</p> <p>MCC Iに関する実験としては、水による冷却を伴わない実験として米国アルゴンヌ国立研究所（ANL）で実施されたACE 実験^{[2][3]}、米国サンディア国立研究所（SNL）で実施されたSURC 実験^[4]（国際標準問題 ISP-24^[5]）及び独カールスルーエ研究所（KfK）で実施されたBETA 実験^[6]がある（付録1参照）。水による冷却を伴う実験（熔融物上に冷却水を注水した実験）としては、SNL で実施されたSWISS 実験^[7]及びWETCOR 実験^[8]、米国電力研究所（EPRI）の主催で実施されたMACE 実験^{[3][9][10]}、我が国の原子力発電技術機構（NUPEC）により実施されたCOTELS 実験^{[1][11]}、OECD プロジェクトとしてANL にて行われたMCC I 実験^{[10][12][13][41]}がある（付録2参照）。</p> <p>また、水中に熔融デブリを落下させ熔融物の粒子化を調べた実験としては、JRC-ISPR A にて実施したKROTOS 実験^[14]やFARO 実験^[14]、NUPEC にて実施したCOTELS-FCI 実験^{[1][16]}、スウェーデン王立工科大学（KTH）で実施されたDEFOR 実験^[16]がある（付録3参照）。</p> <p>ペダスタルでの熔融物の拡がり実験としては、水による冷却を伴わないドライ条件での実験として、国内BWR を対象にBWR 産業界が実施したSPREAD 実験^{[19][20]}や、EPR を対象とした実験が複数実施されており、ウェット条件での実験については実施例が少ないが、前述のSPREAD 実験やKTH のPULiMS 実験^[21]、ANL にて不均質に堆積させたデブリベッドの拡がりを確認したセルフレベリング実験^[22]が行われている。</p> <p>各実験の詳細は付録資料にて示す。以下に、実機評価に関連する知見の概要をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドライ条件でのコンクリート侵食（付録1参照） 熔融炉心に注水が行われない場合の侵食速度は、ACE 実験、SURC 実験及びBETA 実験で確認されている。また、MAAPコードによる実験解析が行われており、解析で得られた侵食速度は実験結果と良く一致している（1時間あたり20cm程度）^{[23][34]}。 ・ウェット条件（Top Flooding）でのコンクリート侵食（付録2参照） SWISS 実験、WETCOR 実験、MACE 実験では、熔融デブリ上面へ注水をした場合（Top Flooding）のコンクリート侵食実験が行われたが、結果として、デブリ上面に安定なハードクラストが形成されてデブリ内への水の浸入を妨げ、コンクリート侵食が継続する結果が得られた。コンクリート侵食が停止しなかった主な原因は、デブリ模擬物上面に形成されたクラストが側壁（側壁に耐火物を採用した一次元侵食実験）あるいは電極と側壁の両者に固着し、クラス 	<p>3 知見の整理</p> <p>本章では、MCCIに関する実験の概要及びそこで得られた知見に関して整理を行う。</p> <p>熔融物によるコンクリート侵食に関する実験としては、水による冷却を伴わない実験として米国アルゴンヌ国立研究所（ANL）で実施されたACE 実験及び米国サンディア国立研究所（SNL）で実施されたSURC 実験（国際標準問題 ISP-24）がある。</p> <p>水による冷却を伴う実験（熔融物上に冷却水を注水した実験）としては、米国サンディア国立研究所（SNL）で実施されたSWISS 実験及びWETCOR 実験、米国電力研究所（EPRI）の主催で実施されたMACE 実験、原子力発電技術機構（NUPEC）により実施されたCOTELS 実験、米国アルゴンヌ国立研究所（ANL）により行われたCCI 実験がある。</p> <p>また、水中に熔融炉心を落下させた実験としては、スウェーデン王立工科大学（KTH）で実施されたDEFOR 実験がある。</p> <p>このように、MCCI 実験としては、水プールに熔融物を落下させた条件での実験結果はDEFOR 実験のみでありサンプルが少ないため、FCIに関する実験的知見も加味して、知見を整理する。</p> <p>一方、原子炉下部キャビティでの熔融物の拡がり実験としては、水による冷却を伴わないドライ条件での実験としては、国内BWR を対象とした実験、EPR を対象とした実験が複数実施されているが、ウェット条件での実験については実施例が少ないが、米国アルゴンヌ国立研究所（ANL）にて不均質に堆積させた粒子ベッドの拡がりを確認したセルフレベリング実験がある。</p> <p>さらに、OECD-MCCI プロジェクトで実施されたクラスト強度試験（SSWICS 試験）結果に基づき、クラストのヤング率と破損応力を解析的に求める研究がJNESによりなされている。</p> <p>以下、各実験及び解析研究について概要を纏めるとともに、知見を整理する。</p>	<p>※BWR とは知見の整理に関する資料構成が異なる。</p> <p>※3.2 に知見の整理を記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>トとその下のデブリ模擬物とが分離したことにより、デブリ模擬物の効果的な除熱がなされなかったためであるとされている。</p> <p>COTELS 実験では、溶融物の落下過程を含めて模擬したMCC I 実験が実施され、結果として、側壁侵食部に水が浸入し、コンクリート侵食が停止する結果が得られた。</p> <p>実機スケールで安定クラストが形成されるか否かを解明するため、OECD/MCCI プロジェクトが行われ、クラスト強度、クラスト浸水、二次元コンクリート侵食挙動等を分離効果的に調べる実験が実施された。その結果、実機スケールでは、安定クラストは形成されず、ハードクラストは割れて水が内部に浸入して冷却が促進されることや、MCC I により発生したガスにより溶融物がクラストの割れ目から噴出する火山型のクラストが形成されるとの結果が得られている。また、CCI 実験結果から玄武岩系コンクリートに侵食の異方性が見られる結果が得られている。</p> <p>これらの知見は、MCC I 評価のためにはデブリから水プールやコンクリートへの熱伝達の扱いが重要であることを示唆している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水張りによる溶融物の粒子化（付録3参照） <p>溶融物ジェットが水中へ落下する場合の粒子化挙動については、FCI 実験等により確認されている。粒子化割合は、主に水深やジェット径に依存し、粒径（質量中央径）は、比較的大きく、実験条件（初期圧力、水深、コリウム落下速度、サブクール度）に対する依存性は低いと報告されている。各U₂ 混合物実験の平均的な粒子径は、溶融物量の多いFARO 実験では2.6～4.8mm[14]、COTELS 実験では6mm 程度^[16]である。また、粒子化割合を評価する解析モデルが提案されている（Ricou-Spalding 相関式^[25]やSaito の相関式^[26]等）。</p> ・溶融物の拡がり（付録4参照） <p>Mark-I 型格納容器のシェルアタックに関する研究^{[17][18][19][20]}により、事前水張りが、溶融物の拡がりを抑制し、シェルアタック防止に有効であることが確認されるとともに、溶融物の拡がりを評価する解析コードが作成されている。溶融物の拡がりには、デブリ落下流量、デブリ成分、デブリ過熱度が主に影響することが示されている。KTH では、水中での溶融物の拡がり挙動と固化性状を調べるPULiMS 実験^[21]が実施され、溶融物の拡がる過程は、流体力学と固化の二つの競合プロセスに支配されるとして、流体力学には重力、慣性力、粘性力及び表面張力が影響し、固化には溶融物から周囲への熱伝達、崩壊熱発生及び溶融物の相変化が影響するとして、実験と実機条件とを関連づけるスケーリング則の提案^{[20][27][28]}が行われている。また、独カールスルーエ研究センター（FZK）においてKATS 実験^{[29][29][30]}が実施され、溶融物の放出速度が比較的高い場合は、冷却材の有無によらず同様な拡がり挙動になることが示されている。溶融物の拡がり挙動の解析のために、種々の解析コードが提案されており、実験データを元に検証が行われている。三次元の拡がり評価も行われており、比較的大いベデスタルをもつABWR（ベデスタル半径約5.3m）の溶融物拡がり評価が実施され、床上に水がある場合でも、床全面に溶融物が拡がること示されている^[40]。</p> 		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>また、ANLでのセルフレベリング実験^[22]により、水プール中に不均質に堆積させた粒子状ベッドにおいて、内部沸騰によって短時間でベッドの厚さが均一化されることが示されている。</p> <p>・粒子状ベッドの冷却性（付録5参照）</p> <p>粒子状ベッドの冷却性については、ドライアウト熱流束が種々の実験で確認されており、主に粒子径に依存するとの結果が得られている。また、ドライアウト熱流束を評価する解析モデルがいくつか提案されているが、Lipinski0-Dモデル^{[24][31][32][33]}が広く使われている。</p>		
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p> <p>(2)ACE 実験（米国ANL）^{[3][23][34]}</p> <p>MCCIにおける熱水力学的及び化学的プロセスを検証し関連コードのデータベースを拡充することを目的に、国際プログラムとしてACE（Advanced Containment Experiments）計画の一部として実施された。Phase-CでMCCI時のFPエアロゾル放出の定量化の目的で実験が実施された。実験装置の概要を付図1-4に示す。実炉組成の約300kgの模擬デブリを使用し、タングステン電極により直接通電により加熱し熔融させている。コンクリート侵食はベースマット中にある熱電対によりモニターされている。実験マトリックスを付表1-1に示すが、実験はコンクリートの種類やデブリの組成を替えて実施された。</p> <p>L2実験のコンクリートの侵食深さのMAAP解析との比較を付図1-5に示すが、MAAP解析結果とよい一致を示している。</p>	<p>3.1 MCCI 実験の概要</p> <p>(1) ACE 実験^{2,3}</p> <p>ACE 実験は、MCCIにおける熱水力学的及び化学的プロセスを検証し関連コードのデータベースを拡充することを目的として、国際的に支援されたACE（Advanced Containment Experiments）プログラムの一部として米国アルゴンヌ国立研究所（ANL）で実施されたものである。</p> <p>² OECD/NEA “Second OECD (NEA) CSNI Specialist Meeting on Molten Core Debris-Concrete Interactions,” NEA/CSNI/R(92)10.</p> <p>³ EPRI, <u>Technical Foundation of Reactor Safety, Revision 1, Knowledge Base for Resolving Severe Accident Issues</u>, 1022186 (2010).</p>	
	<p>実験装置を図3.1-1に示す。4方向の壁（水冷式パネル）で囲まれた中には、コンクリートベースマット、コンクリートメタル挿入物、熔融炉心が入っている。内側表面には25個のタングステン電極を備えた額縁型アセンブリがあり、それらは4つのタングステンコイルで熔融炉心頂部付近に接続されて、熔融炉心を加熱する。設備の大きさは53.0cm×50.2cmである。長方形の2枚式の蓋（水冷式）があり主ガス管につながっている。蓋には、エアロゾル収集並びにガスサンプリング及び排気口用のポートが1つと、熔融炉心監視用ポート（光学温度計とビデオカメラ付き）が3つ付いている。熔融炉心組成はUO₂を含み粉末状で均一にブレンドされた状態である。ACE実験のうち、PWR向けに実施されたケースL2及びL6の熔融炉心組成及びコンクリート成分を表3.1-1に示す。実験中、熔融炉心はタングステンの電極で加熱され熔融プールを形成する。コンクリート侵食はベースマットの中にある熱電対によりモニターされる。なお、本実験は、冷却水の注水を行わない、ドライ条件で行われたものである。</p> <p>ケースL2は、一部分酸化したPWR燃料の熔融炉心とケイ土系コンクリートとの相互作用に関する実験である。実験結果を図3.1-2に示す（本図では、MAAPコードによるベンチマーク解析結果も掲載している）。実験における伝熱量は平均220kW、側壁への熱損失は平均120kWで、これらを境界条件として与えており、約100kWがコンクリートの加熱に寄与しており、垂直方向へのコンクリート侵食率の平均は7.8mm/minであった。侵食開始時の熔融プール温度は2,400Kでその後もその温度を維持している。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p>	<p>ケースL6は、制御棒の材質を含む一部分酸化した溶融炉心とケイ土系コンクリートとの相互作用に関する実験である。実験結果を図3.1-3に示す（本図では、MAAPコードによるベンチマーク解析結果も掲載している）。本ケースでは、実験開始時の侵食率は低めであったが、徐々に上昇し、最終的な侵食深さは40分の時点で13cmに至っており、実験とほぼ同等の侵食深さに到達している。</p>	
<p>(1) SURC 実験（米国 SNL）^{[4][23][34]}</p> <p>MCC I 時の伝熱、化学反応、ガス及びエアロゾルの放出等を調べ、CORCON等の解析コードを検証・改良することを目的にSNLにて4回実験が実施された。そのうち実機と同様の組成のUO₂ デブリを使用した実験は2回実施された（SURC-1, 2。他の2回の実験は模擬デブリとしてSUS304が使用された）。実験装置の概要を付図1-1に示すが、直径40cmのコンクリート試験体（SURC-1実験では石灰岩系（米国で使用されている）、SURC-2実験では玄武岩系のコンクリートを使用）を入れたMgO製の円筒容器に約250kgの模擬デブリ（組成：UO₂ 69%、ZrO₂ 22%、Zr 9%）を誘導加熱して溶融させてコンクリートとの反応を継続させた。SURC-2のコンクリートの侵食深さの変化を付図1-2に示すが、侵食速度は1時間に20cm程度となっている。</p> <p>また、SURC-4は、コード比較のための国際標準問題（ISP-24）^[5]に選定され、実験データと種々の解析の比較が行われている。200kgのステンレス鋼と模擬FP（Te:0.5kg, La₂O₃:1.17kg, CeO₂:1.23kg, BaO:1.1kg）が、コンクリート侵食が開始するまで加熱され、侵食開始後14分経ってから約0.5秒間に追加的に20kgのジルコニウムが溶融物に添加されている。SURC-4のコンクリートの侵食深さの変化を付図1-3に示すが、侵食速度は約55分の時点で24.5～27.5cmで、MAAP解析結果とよい一致を示している。なお、SURC-4実験では外周部のコンクリート侵食深さが大きくなっており、MAAP解析結果と若干相違が見られるが、これは実験では外周部から誘導加熱して溶融物を加熱しているため、外周部の溶融物への入熱量が大きくなるのが原因と考えられる。したがって、MAAPとの相違は、実験固有の原因と考えられるため、ベンチマーク解析の観点からは問題とはならないと考えられる。</p>	<p>(2) SURC-4 実験⁴</p> <p>SURC-4 (Sustained Urania-Concrete Interaction-4) は米国サンディア国立研究所 (SNL) で行われたMCCI実験の1つである。本実験は、コード比較のための国際標準問題 (ISP-24) に選定されている。実験装置の概念図を図3.1-4に示す。円筒状の反応るつぼがアルミの原子炉格納容器内に設置されている。アニュラス部とるつぼの蓋はMgOでできている。るつぼの大きさは、直径60cm×高さ100cm、MgO製アニュラスと蓋の厚さは10cmである。反応るつぼの床は厚さ40cmの玄武岩系コンクリートであり、温度記録用の熱電対が設置されている。200kgのステンレス鋼（約Fe: 73%, Cr: 19%, Ni: 8%）と模擬核分裂生成物 (FP) (Te: 0.5 kg, La203: 1.17 kg, CeO2: 1.23 kg, BaO: 1.1 kg) は、コンクリート侵食が開始するまで加熱される。化学反応とガス放出の影響を観察するため、侵食開始後14分経ってから約0.5秒間に追加的に20kgのジルコニウムを溶融物に添加している。</p> <p>⁴ “International standard problem No 24: ISP-24: SURC-4 experiment on core-concrete interactions,” NEA/CSNI-155, 1988.</p> <p>実験結果を図3.1-5に示す（本図では、MAAPコードによるベンチマーク解析結果も掲載している）。観測されたコンクリート侵食深さは約55分の時点で24.5～27.5cmである。</p>	
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p> <p>(1) SWISS 実験（米国 SNL）^[7]</p> <p>高周波加熱によりステンレスを溶融させ、溶融したステンレスとコンクリートとの反応中に注水し、溶融物の冷却性を調べる実験が2回行われた。実験結果2回とも同様の結果となっており、メルト上面に安定なクラスタが形成されてメルト内部に冷却水が浸入しにくくなり、メルトによりコンクリートの侵食が継続した（付図2-1参照）。ただし、本実験はメルトの発熱が実機で想定される値より1桁程度大きいことや100%ステンレスであるため模擬崩壊熱に加え、水-金属反応の発熱が加わったことも一因と分析されている。またコリウムより上方水プールへの熱流束は約800kW/m²程度であった（付図2-2参照）。</p>	<p>(3) SWISS 実験⁵</p> <p>SWISS 実験は、米国サンディア国立研究所 (SNL) において実施された溶融物とコンクリートの相互作用及び溶融物冷却に関する実験で、MCCI 挙動に及ぼす水プールの影響を調べることを目的として2回実施されている。</p> <p>⁵ “SWISS: Sustained Heated Metallic Melt/Concrete Interactions with Overlying Water Pools,” NUREG/CR-4727, SAND85-1576</p> <p>実験装置を図3.1-6に示す。コンクリートは、直径20cmの石灰岩系コンクリート円板が使用されている。溶融物は46kgのステンレス鋼 (SUS304) で、模擬FPの量は1.75kgである。これらは高周波加熱により加熱される (1.3～1.7W/g)。SWISS-1実験では、コンクリート侵食が準定</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p> <p>(2) WETCOR 実験（米国 SNL）^[6] Al_2O_3 と CaO の酸化物混合熔融物 34kg を用いてコンクリートとの反応中に注水し熔融物の冷却性を調べる実験が行われた（付図 2-3 参照）。SWISS 実験と同様の理由によりコンクリートの侵食が継続した。コンクリート侵食速度は SWISS 実験と比べて約 1/3 に低下している。水プールへの熱流束は熔融時に $520kW/m^2$ 程度、凝固時に $200kW/m^2$ 程度であった。</p>	<p>常となった時点（侵食量 12cm）で熔融物上に注水し、SWISS-2 実験では、熔融物がコンクリートと接触した直後に注水している。</p> <p>SWISS-1 実験及び SWISS-2 実験におけるコンクリート侵食の推移を図 3.1-7 に示す。両実験では、注水タイミングが異なっているが、コンクリートの侵食状況は同等な結果となっている。これは、熔融物の上面（熔融物と水プールの界面）に強固なクラストが形成され熔融物の内部に水が浸入しにくくなっていったことと、熔融物の発熱が実機で想定されるよりも約 1 桁大きかったこと、さらに、100%ステンレス鋼であったため金属-水反応による発熱が加わったことが要因であると分析されている。熔融物から水プールへの熱流束は、SWISS-2 の結果より、約 $0.8MW/m^2$ であり（図 3.1-8 参照）、この値は限界熱流束の計算値よりも小さく、核沸騰による計算値に近いと分析されている。</p> <p>(4) WETCOR 実験⁶ WETCOR 実験は、米国サンディア国立研究所（SNL）で実施された MCCI 実験であり、熔融物として、Al_2O_3、CaO、SiO_2 の混合物を直接通電加熱したものをを用い、直径 0.4m の石灰岩系コンクリートとの反応中に注水し、熔融物の冷却性を調べた実験である。実験装置の概要を図 3.1-9 に示す。</p> <p>⁶ NUREG/CR-5907, "Core-Concrete Interactions with Overlying Water Pools," Sandia National Laboratories, November 1993.</p> <p>WETCOR-1 実験結果では、熔融状態の部分が存在する期間にクラストを通して水へ伝熱した熱流束は $0.52 \pm 0.13MW/m^2$、入熱を停止し全体が固化した以降の熱流束は $0.25 \pm 0.08MW/m^2$ 及び $0.20 \pm 0.08MW/m^2$ であったことが報告されている。これらは表 3.1-2 に示すように、入熱期間の最後に相当する 557 分から 563 分での熱流束が $0.52 \pm 0.13MW/m^2$、582.4 分での熱流束が $0.25 \pm 0.08MW/m^2$、589.0 分での熱流束が $0.20 \pm 0.08MW/m^2$ である。図 3.1-10 に入熱履歴を示すが、入熱終了は正確には 554.9 分である。注水開始は 529.0 分である。</p> <p>コンクリート侵食推移及び温度履歴を図 3.1-11~14 に示す。コンクリートの半径方向の中心部では試験開始後約 470 分から急速に侵食が早まり、注水開始までに 1~3cm 侵食されており、注水後も継続して、入熱終了の 555 分で 5~6cm となっている。中間部では 515 分までは侵食は起きていないが、555 分までは継続した。外周部では局所的には 410 分から侵食が開始し、注水時点で約 2cm になっている。熔融物温度を図 3.1-15 に示す。約 560 分までは約 1800K で一定となっているが、その後は緩やかに低下し、580 分頃には約 1500K まで低下している。</p> <p>実験後の熔融物の固化状態及びコンクリート侵食状態を図 3.1-16 に示す。半径方向には場所により侵食挙動に違いがあるが、最終的には全体的に約 5cm の侵食深さになっている。もとの</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>	<p>コンクリート表面であった位置には空洞が形成されており、その上にはクラストがブリッジ状に形成されている。クラスト厚さは場所により異なるが、外周部では10±1cm、中心部で3.8cmから4.5cmであった。上記熱流束は中心部でのクラスト厚さ平均値として4.2cm±0.4cmとして算出されたものである。クラストにはひび割れは生じていなかったことが報告されている。空洞の形成過程については文献に記載されていないが、注水開始時には激しい沸騰が起き、水プールの出来てから40秒間、メルト球体が水中を浮上し沈降する挙動が観察されている。この現象はクラストのギャップから水が入り、その突沸によりメルトが一時的に噴出したものと推定されている。注水後早期に堅固なクラストが形成され、侵食とともに空洞部が成長したことが推測できる。</p> <p>以上より、水への熱流束0.2MW/m²は、溶融炉心が完全固化し、温度も低下し、コンクリート侵食も進んでいない状態の値である。</p>	
<p>(3) MACE 実験 (米国 ANL) ^{[3][9][10][20]}</p> <p>MACE 実験 (Melt Attack and Coolability Experiment) は、米国電力研究所 (EPRI) が主催する原子炉格納容器内溶融炉心冷却性に関する国際協力計画である。この実験では、溶融炉心がコンクリート床に落下した後に、溶融炉心の上に注水する状況を模擬しており、大規模実験が含まれていることと、実機相当のUO₂及びZrO₂を主成分とする溶融炉心模擬物を用いて、さらに、直接通電加熱により崩壊熱の発生を模擬していることが特徴である。</p> <p>実験装置の概要を付図2-4に示す。MACE 実験では規模の異なるM0、M1b、M3b、M4の4回の実験が実施されており、その主要条件を付表2-1に示す。M0実験のみコンクリートの側壁で、その他はMgOが用いられている。</p> <p>M3bとM4の実験結果を付図2-5及び付図2-6に示す。いずれのケースもコンクリート侵食が継続する結果となっている。実験後の溶融炉心模擬物の固化状況を見ると、メルト上部に安定クラストが形成され側壁に固定化されており、クラスト下部に空洞が見られ、クラストと溶融物とが分離した状態になっている。メルトから冷却水への熱流束を見ると、注水直後の短期間は、大きい熱流束となっているが、安定クラストが形成されクラストと溶融物が分離したと想定される状況では、熱流束は低下している。安定クラストの形成と</p> <p>メルトとの分離によりクラストの下にあるデブリの冷却が阻害される結果となったと分析されている。しかしながら、デブリの長期的な冷却に関与し得るメカニズムとして、クラストに生じる亀裂等への浸水及びコンクリート分解ガスによるクラスト開口部からのデブリの噴出が確認されている。</p>	<p>(5) MACE 実験 ⁷</p> <p>MACE 実験 (Melt Attack and Coolability Experiment) は、米国電力研究所 (EPRI) が主催する原子炉格納容器内溶融炉心冷却性に関する国際協力計画である。MACE 実験装置の概要を図3.1-17に示す。また、MACE 実験では規模の異なるM0、M1b、M3b、M4の4回の実験が実施されており、その主要条件は表3.1-3に示すとおりである。</p> <p>⁷ M.T.Farmer, et al., "Status of Large Scale MACE Core Coolability Experiments," OECD Workshop on Ex-Vessel Debris Coolability, Karlsruhe, 1999.</p> <p>MACE 実験ではUO₂, ZrO₂, Zrといった実炉心模擬物に少量のコンクリート成分を付加した溶融物を使用している。M0実験では30cm×30cmのテスト部に130kgの溶融物、M1b実験では50cm×50cmのテスト部に480kgの溶融物を使っている。M0実験では、テスト部の側壁にコンクリートを用い、横方向への侵食も可能としている。M1b実験はMgO製のつぼを用いており、下方向のみの侵食になる。</p> <p>M0実験での水プールへの熱流束測定結果を図3.1-18に示す。注水は侵食が1.3cmとなった時点、中心部で侵食開始から4分後に開始された。最初の3分間は4MW/m²あり、熱的には全体の融解熱に相当する程度の除熱が行われた。これにより、安定したクラストが形成され、その後30分は約0.7MW/m²で推移し、さらにその後は徐々に低下して最後には0.15MW/m²まで低下した。図3.1-19に示すように、安定化クラストはタングステン電極に固着しており、最初にクラストが形成された高さに留まっていた。クラストと溶融物の間に空間が形成されたのが約30分後と推定されており、これにより30分以降の熱流束が低下したと考察されている。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>	<p>M1b 実験での水プールへの熱流束測定結果を図 3.1-21 に示す。注水は侵食が 5.0cm となった時点、中心部で侵食開始から 14.7 分後に開始された。最初は 4MW/m² あり、30 分間で徐々に約 0.5MW/m² まで低下している。この期間に約 90kg が固化し、クラストを形成したと見積もられている。その後の 30 分間で約 0.4MW/m² に低下し、それ以降は入熱と同等の熱流束となっている。図 3.1-22 に示すように、クラスト厚さは約 6cm であり、熱伝導だけではこれだけの熱流束を得られないため、クラストは透水性があると考察されている。クラストはるつぽ壁に固着し、9cm 高さの空洞が形成されている。空洞の形成は 50 分頃と推定されている。よって、0.5MW/m² より小さい熱流束はクラストが分離した形態での値である。図 3.1-23 に溶融物温度変化を示す。水への熱流束が 0.2MW/m² で推移する期間は、おおむね溶融物温度が 1500K 前後となっている。</p>	
<p>(4) COTELS 実験（日本 NUPEC）^{[1][11]}</p> <p>プール水中に実機組成の UO₂ コリウムを落下させる実験（FCI）とコンクリート上に落下した UO₂ コリウムに注水する実験（MCCI）を実施している。付図 2-7 にコンクリート上の UO₂ コリウムに注水する実験の実験装置を示す。約 60kg の実機組成の UO₂ コリウムを電気炉で加熱溶融させ、玄武岩系のコンクリート床上に落下させ、その後高周波誘導加熱によりコンクリート上のコリウムを加熱して崩壊熱を模擬している。側壁と床面の両方の侵食を考慮しており、コリウムの高さと同径の比を実験パラメータとしている。注水後にコンクリート温度は低下している。また、侵食深さは 2cm 程度であった。また、付図 2-8 に実験後に固化したコリウムの断面を観察した結果を示すが、上部は粒子状になっており、下部はインゴット状になっているのが観察されている。また、インゴット状の部分にはひび割れや流路が見られる。</p> <p>COTELS 実験では、いずれもデブリによるコンクリート侵食が生じているが、先行の SWISS、WETCOR、MACE とは異なり、コンクリート侵食は停止している。これは、以下の理由と分析されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デブリの粒子化と塊状デブリ上への粒子化デブリの堆積 ・デブリとコンクリートとの境界における粗骨材を主体とする多孔質層の形成 ・粗骨材層及び塊状デブリに形成された流路への浸水 <p>溶融物から水プールへの熱流束は水プールへの熱流束は 100～650kW/m² 程度であったが、これらの熱流束は限界熱流束よりも低く、水が更に高い除熱能力を有する可能性があることが示唆されている。</p>	<p>(6) COTELS 実験（テスト B 及び C）⁸</p> <p>COTELS 計画は（財）原子力発電技術機構（NUPEC）が圧力容器外の溶融炉心冷却特性を調べる試験であり、この計画のテスト B 及び C は、溶融物上に注水した際の FCI（テスト B）と MCCI（テスト C）を検討するための実験であり、テスト B と C は引き続き実施された一連の実験である。</p> <p>⁸ Hideo Nagasaka, et al., "COTELS Project (3) : Ex-vessel Debris Cooling Tests," OECD Workshop on Ex-Vessel Debris Coolability, Karlsruhe, 1999.</p> <p>実験装置を図 3.1-24 に、試験条件及び結果の一覧を表 3.1-4 に示す。溶融物の重量は 60kg で UO₂ の融点より高い 3200K まで誘電加熱された。溶融物のタイプ A は TMI 事故の溶融物を模擬した組成、タイプ B は下部プレナムにより多くの金属が含まれることを想定し、金属の割合を増やした組成である。コンクリートトラップの内径は 0.36m あるいは 0.26m である。ここで、0.26m は他の実験（WETCOR、MACE-MO 及び MACE-M1b）との比較のためアスペクト比（高さと同径の比）を 0.5 としたものである。コンクリートは国内プラントのセメント成分を模擬した玄武岩系コンクリートである。コンクリート内部には温度計測用の熱電対が配置されている。落下後の溶融物は、崩壊熱を模擬して誘電加熱され、75kW は崩壊熱の 11 倍に相当する。注水は、室温水を Jet 若しくは Spray で 0.02～0.2kg/s の質量流量で試験開始 6～15 分後に行っている。</p> <p>ケース 5a は、溶融炉心落下後の崩壊熱の模擬（誘電加熱）を行わず、注水も行わなかったケースであるが、約 2 割が粒子化している。これは、コンクリート侵食に伴って発生した気体により溶融炉心の粒子化が生じたと分析されている。粒子の径については、ケース 5a とケース 5 で同等の粒子径分布が確認されており、溶融炉心と水の相互作用ではなく、コンクリート侵食により発生した気体により粒子化が生じたのものであると考えられている。</p> <p>アスペクト比の観点では、図 3.1-25 にケース 5 とケース 9 のコンクリート温度の時間変化を示すが、アスペクト比が大きいケース 5 では、溶融炉心の全体量に対する上面の面積が小さい</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>ため、初期に溶融炉心の熱量がコンクリートに多く伝わっていることを示している。両ケースとも注水後3～4分でコンクリートの温度が低下に転じており、注水による冷却効果が確認でき、特に早めに注水したケース9では効果が高いことが分かる。さらに、注水が遅いケース10においてコンクリート侵食深さが最大となっていることから、水による冷却効果が確認できる。</p> <p>固化した溶融炉心表面から水への熱流束は、SWISS、WETCOR、MACEの結果に近い200～700 kW/m²であった。この結果は容器内圧力がほぼ一定状態の時の値とされている。なお、これらの熱流束は限界熱流束よりも低く、水が更に高い除熱能力を有する可能性があることを示唆している。実験レポートでは0.2MW/m²時における溶融炉心状態についての記述はないが、側壁コンクリートが侵食されてギャップが形成されたことで、溶融炉心冷却が促進され、コンクリート侵食が停止したと説明されている。図3.1-26に固化した溶融炉心の断面図を示す。溶融炉心下面にはコンクリートから分離した砂利がベッド状に堆積しており、溶融炉心底部からの冷却を促進したことが述べられている。また、その他に侵食が停止した要因としてさらに、アスペクト比が小さく水による冷却の効果があつたこと、塊状溶融炉心が侵食により落下する過程で生じたクレパスに水が入り込み冷却されたこと等が要因であると分析されている。</p> <p>COTELS 実験の特徴は、側壁にクラストが固着しなかった点で他実験と比べて実機に近い状況となっており、コンクリート壁と溶融プールの境界に形成されたギャップが冷却を促進した点を実機解析への知見として参照できる。</p>	
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録3から抜粋】</p>		
<p>(1) FARO 実験（イタリア JRC-ISPR）^{[1][4]}</p> <p>主に原子炉圧力容器内で溶融物が炉心から下部プレナムの水プールに落下した場合の水蒸気爆発発生の可能性を調べることを目的とした実験で、当初は高圧での実験を対象としてきたが、後に低圧での実験が3ケース実施された。高圧実験装置の構成は、FARO るつぼと実験容器 TERMOS（内径：710mm、体積：1.5m³）である（付図3-1参照）。低圧実験装置ではFATと呼ばれる実験容器の中にTERMOSと同一内径の円筒容器が置かれ、観測窓が設置された。実験手順は原則的に高圧実験も低圧実験も同様で、FARO るつぼで生成された溶融コリウムは一度リリースベッセルに保持し、その底部にあるフラップ又は弁を開放して溶融物を水プールに落下させる。高圧実験ではリリースベッセルは溶融物落下速度を調整するために加圧可能である。ほとんどの実験は酸化コリウム（80wt%UO₂+20wt%ZrO₂）で実施され、テストL11のみが金属Zrを含むコリウム（77wt%UO₂+19wt%ZrO₂+4wt%Zr）が用いられた。また、多くの実験は高圧・飽和水条件で実施されたが、近年は低圧・サブクール水条件でも3ケース実施されてきている。主な実験パラメータは、初期圧力（0.2～6MPa）、コリウム質量（18～177kg）、水深（87cm～2.05m）、サブクール度（飽和～124K）、コリウム組成（1ケースのみ金属Zrを4.1wt%追加）である（付表3-1参照）</p> <p>実験からの主な知見は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高圧・飽和水実験、低圧・サブクール実験の何れにおいても水蒸気爆発は発生していなかった。 	<p>(7) FARO 実験</p> <p>欧州 JRC（Joint Research Center）のイスプラ研究所における実験であり、圧力容器内を対象に溶融物が水プールに落下した場合の水蒸気爆発の発生を調べることを目的として高圧条件での実験が行われてきたが、圧力容器外を対象とした低圧条件での実験も行われている。実験装置の概要を図3.1-27に示す。実験手順は、高圧条件と低圧条件とで同様であり、るつぼ内でUO₂混合物（80wt%UO₂+20wt%ZrO₂あるいは77wt%UO₂+19wt%ZrO₂+4wt%Zr）を溶融させ、るつぼ底部のフラップを開放することにより、水プールに落下させる。実験条件は、表3.1-5に示すとおりであり、UO₂混合物は18～176kg、水プールの水深は0.87～2.05m、水プールのサブクール度は飽和～124Kの範囲で変動させ複数のケースが行われている。また、高圧条件として2～5.8MPa、低圧条件として0.2～0.5MPaである。</p> <p>溶融物の粒子化量については、水プールの状態によりその割合が変化している。原子炉容器内FCIを模擬したケース（高圧条件かつ低サブクール度）では、水深1mの場合で、溶融物の約半分が粒子化し、残りは溶融ジェットのまま水プール底に到達して堆積する結果となっている。一方、原子炉容器外FCIを想定したケースとして、金属ジルコニウムを含む場合（L-11）や低圧で高サブクール度の場合（L-24～33）、では、ほとんどが粒子化する結果が得られている。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<ul style="list-style-type: none"> いずれの実験においても、コリウムの一部が粒子化し、一部はパンケーキ状としてプール底部に堆積した。プール水中に設置した熱電対の測定結果より、一部のコリウムはジェット状でプール底面に衝突したと推定されている（付図3-2参照）。 粒子化割合は、ほとんどの実験でプール水深に依存し、高圧飽和水実験の水深1m程度で落下コリウムの約50%が粒子化した。コリウムに少量の金属Zr（4.1wt%）を添加した場合と低圧のサブクール水の実験では100%近くが粒子化した（付図3-3参照）。 粒子の質量中央径は比較的大きく、3.2～4.8mmの範囲であり、実験パラメータ（初期圧力、水深、コリウム落下速度、サブクール度）に依存していない。 	<p>また、観測された粒子の径は3.2～4.8mmであり、初期圧力、水深、サブクール度、熔融物落下速度への依存性は低いと報告されている。</p>	
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録3から抜粋】</p>		
<p>(2) COTELS-FCI 実験（日本 NUPEC）^{[1][16]}</p> <p>本実験は、原子炉圧力容器外でのFCI挙動を調べるために実施された。UO₂混合物を熔融物として用い、その成分は原子炉内構造物のみならず、原子炉圧力容器下部ヘッド内の下部構造物も考慮して設定されている。付図3-4にCOTELS-FCI実験装置の概要を示す。実験装置は、UO₂混合物を熔融させる電気炉とその下に熔融物と水との相互作用を調べるメルトレシーバより構成されている。電気炉は、グラファイト製のつぼと高周波誘導加熱コイルにより構成されている。グラファイト製のつぼは最高温度3200Kで、60kgのUO₂混合物を加熱熔融可能である。つぼ下部には、熔融物を落下させるための穴を設けるプラグ破壊装置が設置され、UO₂混合物が熔融後、瞬時に直径5cmの穴が作ることが可能である。メルトレシーバは、高さ約2.5m、外径約90cmで円筒状をしており、メルトレシーバの中には、高さが可変のメルトキャッチャーが設置されており、メルトキャッチャーの高さを変化させることによりプール水深を変化させる実験を実施しており、雰囲気体積は変化させないように考慮されている。メルトキャッチャーの中心部は、実炉の格納容器床面を模擬するために厚さ3cmのコンクリートが設置され、熔融コリウム/水/コンクリート間の相互作用を調べることが可能となっている。なお、コンクリートの成分は日本と同じ玄武岩系である。実験マトリクスと主な結果を付表3-2に示す。</p>	<p>(8) COTELS 実験（テストA）</p> <p>COTELS計画は（財）原子力発電技術機構（NUPEC）が圧力容器外の熔融炉心冷却特性を調べる試験であり、この計画の中で熔融物が水プールに落下したときの水蒸気爆発の発生有無を調べる実験として、カザフスタン国立原子力センター（NNC：National Nuclear Center）の施設を用いた実験が実施されている。</p> <p>実験装置の概要を図3.1-28に、実験条件及び結果の一覧を表3.1-6に示す。この実験では、軽水炉のシビアアクシデント挙動解析結果に基づいて試験条件が設定され、具体的には、軽水炉のシビアアクシデントでは、原子炉容器内圧が低圧で破損するシーケンスが支配的であり、かつ、原子炉容器の破損として貫通部の破損を考慮している。また、LOCAを起因とするシーケンスが支配的であることから、原子炉格納容器床面の水プールは飽和水（サブクール度0～86K）とし、水深は0.4～0.9mである。また、熔融物は、UO₂：55wt%、Zr：25wt%、ZrO₂：5wt%、SS：15wt%の混合物であり、下部プレナム内の構造物も考慮して多くの金属成分を含むよう模擬したものである。この熔融物は、圧力ヘッド計装配管の径に相当する5cm径のジェットで水プールに落下させている。</p> <p>粒子化量に関しては、水深0.4mにおいても、ほとんど（90%以上）が粒子化しており、粒子径は多くのケースで約6mmであったが、落下速度が速い場合には径が小さくなる傾向が確認されている。初期の圧力上昇幅と粒子径には相関があり、初期圧力上昇は粒子化した熔融物からの熱伝達が支配的であると報告されている。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
【参考のため女川の第5部添付3付録4から抜粋】		
<p>(4) 粒子状ベッドの拡がり^[22]</p> <p>ANLでは、水プール中に不均質に堆積させたデブリベッドが、内部の沸騰により均一化する様子を確認するため、水プール中にUO₂、SUS、Cuの0.2～1mm程度の粒子ベッドを非均一の厚さに堆積させ、誘導加熱により崩壊熱発生を模擬させた実験^[22]を行っている。付図4-10に粒子ベッド厚さの均一化の概念図を示す。非均一の厚さに堆積した粒子ベッドは、誘導加熱により粒子ベッド内に沸騰が生じ、粒子が吹き上げられて再堆積する過程で厚さが均一化し、均一化に要した時間は2～3分程度であると報告されている。</p>	<p>(9) セルフレベリング実験⁹</p> <p>⁹ J. D. Gabor, L. Baker, Jr., and J. C. Cassulo, (ANL), "Studies on Heat Removal and Bed Leveling of Induction-heated Materials Simulating Fuel Debris", SAND76-9008</p> <p>この実験は、水プール中に不均質に堆積させた粒子ベッドが、内部の沸騰により拡散する様子を確認した実験である。</p> <p>実験条件の一覧を表3.1-7に示す。実験は、水プール中にUO₂、SUS、Cuの0.2～1mmの粒子ベッドを非均一の厚さに堆積させ、誘導加熱により崩壊熱発生を模擬させたものである。</p> <p>図3.1-29に実験前後の粒子ベッド概念を示す。非均一の厚さに堆積された粒子ベッドは、誘導加熱により粒子ベッド内に沸騰が生じ、粒子が吹き上げられ再堆積する過程でベッドの厚さが均一化されている。ここで、均一化に要した時間は約2～3分であると報告されている。</p>	
【参考のため女川の第5部添付3付録3から抜粋】		
<p>(3) DEFOR 実験（スウェーデン KTH）^[16]</p> <p>水張り時のデブリ冷却性を調べる目的で実施されている。溶融物の粒子化について、水サブクール、水深、メルト成分、過熱度等の影響を調べるために、溶融物の落下実験が実施されている。実験装置を付図3-5に示すが、上から、誘導加熱炉、メルト容器、冷却タンクより成り、冷却タンクはガラス張りで粒子化の観察が可能となっている。溶融物はメルト容器下部のノズルから重力落下により水中に落下する。DEFOR-E 実験の実験マトリックスを付表3-3に示すが、6ケースの溶融物はCaO-B₂O₃（密度2500kg/m³）の酸化物が使用されており、1ケースはより重量の大きいWO₃-CaO（密度5000～8000kg/m³）が使用されている。</p> <p>実験結果より、粒子化挙動は、水サブクールと水深の影響が大きいとしている。実験後のデブリ状態例を付図3-6に示すが、平均ポロシティは0.55～0.7程度と大きい値が得られている。主な結果を付表3-3に併せて示す。</p>	<p>(10) DEFOR-A 実験^{10,11,12}</p> <p>DEFOR (Debris Bed Formation) 計画は、スウェーデン王立工科大学で実施されており、種々の条件で水プールに模擬溶融物が投入された際の、溶融炉心の細粒化試験である。</p> <p>¹⁰ P. Kudinov and M. Davydov "PREDICTION OF MASS FRACTION OF AGGLOMERATED DEBRIS IN A LWR SEVERE ACCIDENT", NURETH14-543</p> <p>¹¹ Pavel Kudinov, et al., "Fraction of Agglomerated Debris as a Function of Water Pool Depth in DEFOR-A Experiments".</p> <p>¹² Pavel Kudinov, et al., "Development of Ex-Vessel Debris Agglomeration Mode Map for a LWR Severe Accident Conditions," ICONE-17, Brussels, 2009.</p> <p>なかでも DEFOR-A 試験は水深に応じた粒子化割合を調べることを目的にしたものである。試験装置を図3.1-30に示す。DEFOR-A 実験では、るつぼ型誘導炉により加熱された模擬溶融物をファンネル及びノズルを通じて大気圧条件の水タンクに注入する。ここでノズル径、すなわちデブリジェット径は可変となっている（以下、実機に対しても、炉心あるいは下部プレナムから落下する溶融炉心の意味で「デブリジェット」を使用する）。水タンクのサイズは、断面が0.5m×0.5m、高さが2mであり、ノズル高さを差し引くと最大でタンクの床から放出口までの高さは1.7mとなっている。</p> <p>次に、試験条件の一覧を表3.1-8に示す。ノズル高さは1.7m（一部のケースは1.62m）に設定され、模擬溶融物は深さ1.5m前後の水プールに注入される。また、溶融炉心キャッチャーの高</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>さが水面から0.6m、0.9m、1.2m、1.5mと4段階に設定され、水面からの落下距離の影響も確認している。その他主要な試験条件として、模擬溶融物の過熱度は78～206K、ジェット径は10～25mmの範囲で設定している。ジェット径が太く、溶融物の過熱度が小さく、定性的にケーキ状溶融炉心が形成されやすいのはA8試験である。</p> <p>次に、試験結果について述べる。A8試験で一番水深が浅いキャッチャー1に形成されたケーキ状溶融炉心の様相を図3.1-31に示す。水深が浅いため、細粒化しても固化する前にキャッチャーに堆積することで、粒子化したものが結合した塊状になっている。水深が深いほど粒子の固化が進むため、図3.1-32に示すとおりケーキ状溶融炉心が少なくなる。ここで、塊状溶融炉心の概念図を図3.1-33に示す。デブリジェットがすべて粒子化及び固化された状態で溶融炉心キャッチャーまで到達した場合が(a)の状態であり、このとき固化した粒子間に空隙があるため、冷却性は阻害されない。(b)の状態は凝集を示しており、固化していないデブリ粒子が堆積することで凝集状態になる。また、(c)の状態はデブリジェットの一部分が直接床に堆積する場合であり、空隙の無い状態で溶融物が堆積した状態である。(b)及び(c)は冷却水が堆積した溶融炉心の内部まで浸透しないため、冷却性が阻害される可能性がある。また、堆積形状として、山状に模擬溶融物が堆積した結果が得られている。試験結果からは、水深が深いほど、凝集物の発生割合は小さく、約1.5mの水深があればほぼすべての模擬溶融物は固化した状態で堆積することが分かる（ケースA9のみ、数%の凝集物が発生している）。水深が1.5mよりも浅い場合に、ケースA7、A9において他のケースよりも高い凝集割合が観測されているのは、ケースA7、A9では模擬溶融物の過熱度が高いためである。結論としては、水深が数mあれば、デブリ粒子をすべて固化できるとしている。</p> <p>また、解析研究により図3.1-34に示すようなケーキ状溶融炉心の生成される条件マップが作成されており、そのモデルを実機スケールのジェット径に展開した場合の、堆積モードマップ（ジェット径対水深の図上での、凝集、固化の領域図）が示されている。実機での破損口径に相当する約200mmのジェット径では、水深が約9mの位置に凝集と固化の分岐点が存在することが分かる。</p> <p>実機条件では、原子炉下部キャビティ水深は1～2m、破損口径は数10cmであり、堆積モードマップに当てはめると、ほぼすべての溶融炉心がケーキ状に堆積する。ケーキ状に堆積した場合、MAAPコードでモデル化している平板状の発熱体とは、水の浸透、表面形状等の点で性質が異なるが、これらの性質の相違は、平板状の発熱体における水-溶融炉心間の熱伝達係数として取り扱うことができる。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>		
<p>③ 長期二次元コンクリート侵食実験（CCI実験）</p> <p>デブリによる長期的な床部及び側壁の侵食挙動を明らかにすることを目的に実施された。実験装置のテスト部の構造を付図2-13に示し、実験条件一覧を付表2-3に示す。テルミット反応により生成したUO₂、ZrO₂及びコンクリート成分を主成分とするデブリ模擬溶融物を直接通電により加熱している。電極がある2面は非侵食性の側壁を採用し、残りの2面をコンクリートにより製作している。使用するコンクリートは実験により種類が変えられている。注水なしの条件で、側壁のコンクリートの最大侵食深さが30cmに達するまで侵食を継続した後注水を行い、注水後、最大侵食深さが35cmに到達した時点で実験を終了している。実験装置に荷重負荷装置を設置し、注水後に形成されるクラストに荷重を与えて、クラストの機械的強度に関するデータを取得している（付図2-14参照）。コンクリート種類を変えて3回実験が行われている。CCI実験のコンクリート組成を付表2-4に示す。CCI実験のデブリ-水間の熱流束を付図2-15に示し、溶融物の平均温度を付図2-16に示す。また、実験後の侵食状態の模式図を付図2-17に示す。石灰岩系コンクリートの場合、床方向と側壁方向の侵食は同程度となっているのに対し、玄武岩系コンクリートの場合、側壁方向の侵食が床方向より大きくなっており、侵食に異方性があることが示されている。付表2-5に示すように、侵食率から側壁方向と床方向の熱流束が推定されている。CCI-2実験（石灰岩系コンクリート）の場合、側壁方向と床方向は同程度と推定されているのに対し、CCI-3実験（玄武岩系コンクリート）の場合、側壁方向の熱流束は、床方向より4倍程度大きいと推定されている。</p>	<p>(11) CCI実験^{13,14,15,16}</p> <p>CCI (Core Concrete Interaction) 実験は、OECD MCCI プロジェクトの一環として米国アルゴンヌ国立研究所 (ANL) にて行われており、コンクリート侵食が進んだ状態で注水した場合の溶融物の挙動の調査を目的としたものである。CCI 実験では、MCCI 進展後後期の注水による溶融炉心冷却性として、現象論的に4つのメカニズムに着目しており、それぞれバルク冷却、クラストのひび及び割れ目からの水浸入、溶融物の噴出、クラストの破損である。</p> <p>¹³ M.T.Farmer, et al., "OECD MCCI Project Final Report," 2006</p> <p>¹⁴ M.T.Farmer, et al., "OECD MCCI Project 2-D Core Concrete Interaction (CCI) Tests: Final Report," 2006</p> <p>¹⁵ Q.Zhou, et al., "Benchmark of MCCI Model in MAAP5.02 against OECD CCI Experiment Series," 2014</p> <p>¹⁶ M.T.Farmer, et al., "OECD MCCI-2 Project Final Report," OECD/MCCI-2010-TR07 (2010).</p> <p>CCI 実験装置を図3.1-35に示す。実験装置中に、断面50cm × 50cm、高さ55cmのつぼがあり、その底部にコンクリートベースマットが敷かれている。ベースマットの上部には、溶融物を直接電気加熱により加熱するタングステン電極があり、溶融物は120kW～150kWで加熱される。また、溶融物の温度を測定するための熱電対がコンクリート中に多数設置されている。その他、溶融物に注水するための給水系、MCCIにより発生したガスの換気系等がある。さらに、実験装置に荷重負荷装置を設置し、注水後に形成されるクラストに荷重を与えて、クラストの機械的強度に関するデータを取得している（図3.1-36参照）。</p> <p>次に、実験条件を表3.1-9に示す。実験はCCI1～3の3回行われている。各実験について、溶融物の加熱後5.5時間が経過した時点、あるいはコンクリート侵食が30cm進んだ時点で注水を開始する。実験ケース間の主要な条件の違いとしては、コンクリート組成（CCI-2が石灰岩系、CCI-1, 3が珪岩質系）、直接電気加熱による加熱量（CCI-1が150kW、CCI-2, 3が120kW）である。CCI 実験のコンクリート組成を表3.1-10に示す。</p> <p>図3.1-37にCCI-1, 2, 3実験での水への熱流束、図3.1-38に溶融物の平均温度を示す。最初の5分間は限界熱流束に近い値となっており、CCI-1, 3で約1MW/m²、CCI-2では3MW/m²近い値になっている。この違いとして、CCI-1, 3では注水時点でクラストが形成されており、CCI-2では注水時点でクラストが形成されておらず、溶融物と水が直接接触（バルク冷却）したためと推測されている。CCI-2も、バルク冷却期間（約5分）の後に安定クラストが形成されている。</p> <p>注水後15-25分はクラストが熱流束を律速する期間であり、平均化した熱流束を表3.1-11に示す。コンクリート分解時にガス発生量が多い石灰岩系コンクリートの場合（CCI-2）には0.65MW/m²、ガス発生量の少ない玄武岩系コンクリートの場合（CCI-1, 3）には0.25MW/m²及び0.5MW/m²となっている。この違いから、クラスト形成段階でコンクリート分解ガスが多いほど、クラストのひび、割れ目及び空隙が大きくなると考察されている。これらの熱流束をクラスト熱</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p> <p>また、CCI実験について、MAAPコードによりベンチマーク解析が行われている^[36]。</p> <p>CCI-2実験（石灰岩系コンクリート）のベンチマーク解析では、固化効果項の影響を除いて対流熱伝達係数のサーベイが可能のように、対流熱伝達係数として床方向と側壁方向ともに300W/m²-K、固化効果項の指数nに0が設定されている。ここで300W/m²-Kは、実際のMCCI時の対流熱伝達係数は、固化割合を考慮すると、完全液相状態の値よりも1桁程度小さい値（付図2-19において固化割合が60%程度の値）になることを考慮して設定されている。また、CCI-2実験では、床方向と側壁方向の熱流束が同程度と推定されていることから、対流熱伝達係数も同じ値が設定されている。この設定を用いた解析により、コリウム温度の変化（付図2-20参照）は、実験データと良く合っている。また、床方向の侵食量は（付図2-21参照）、実験では注水前には25cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では33cm程度の侵食量となっている。側壁方向の侵食量は（付図2-22参照）、実験では注水前には29cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では33cm程度の侵食量となっている。</p> <p>CCI-3実験（玄武岩系コンクリート）のベンチマーク解析では、対流熱伝達係数として床方向に80W/m²-K、側壁方向に300W/m²-K、nに0が設定されている。ここで、80W/m²-Kは、CCI-3実験では、床方向の熱流束が側壁方向の1/4程度と推定されていることから、床方向の対流熱伝達係数を側壁方向の1/4程度として設定されている。この設定により、コリウム温度の変化（付図2-23参照）は、より</p>	<p>伝導だけで伝えるには、クラスト厚さは約3mm～7mmでなければならないが、測定結果ではクラスト厚さは5cm～10cmとなっており一桁厚い。よって、クラストからの水浸入が冷却を支配していること、水浸入パスとなるクラストの空隙はコンクリートからのガス発生が多いほど大きくなることが考察されている。</p> <p>溶融物の噴出については、CCI-2ではみられたが、CCI-1,3ではみられなかった。溶融物の噴出は、コンクリート分解ガスが放出されるときに巻き込まれると考えられており、ガス放出の少ない玄武岩系コンクリートの場合には起きなかったと推測されている。また、CCI-1では注水から10分で入熱が終了したことで、CCI-3では部分的にクラストが壁に固着したことも影響していると考えられている。</p> <p>クラストの破損については、クラスト強度を計測した結果から、クラストは非常に弱いことが判明している。そして、CCI-1実験からクラスト破損時には3MW/m²を超える熱流束が発生している。</p> <p>以上より、CCI実験結果で得られた0.25MW/m²という熱流束は、溶融物上にクラストが形成された状態にあり、かつ、クラストの空隙が小さい場合の値である。</p> <p>最後に、実験後の侵食状態の模式図を図3.1-39に示す。石灰岩系コンクリートの場合、床方向と側壁方向の侵食は同程度となっているのに対し、玄武岩系コンクリートの場合、側壁方向の侵食が床方向より大きくなっており、侵食に異方性があることが示されている。CCI-2実験（石灰岩系コンクリート）の場合、側壁方向と床方向は同程度と推定されているのに対し、CCI-3実験（玄武岩系コンクリート）の場合、側壁方向の熱流束は、床方向より4倍程度大きいと推定されている。CCI-2,3実験に対しては、MAAPコードによりベンチマーク解析が行われている^[3]。</p> <p>CCI-2実験（石灰岩系コンクリート）のベンチマーク解析では、固化効果項の影響を除いて対流熱伝達係数のサーベイが可能のように、対流熱伝達係数として床面方向と壁面方向ともに300W/m²/K、固化効果項の指数nに0が設定されている。ここで300W/m²/Kは、実際のMCCI時の対流熱伝達係数は、固化割合を考慮すると、完全液相状態の値よりも1桁程度小さい値（図3.1-40において固化割合が60%程度の値）になることを考慮して設定されている。また、CCI-2実験では、床面方向と壁面方向の熱流束が同程度と推定されていることから、対流熱伝達係数も同じ値が設定されている。この設定を用いた解析により、コリウム温度の変化（図3.1-41参照）は、実験データと良く合っている。また、床面方向の侵食量は（図3.1-42参照）、実験では注水前には25cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では33cm程度の侵食量となっている。壁面方向の侵食量は（図3.1-43参照）、実験では注水前には29cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では33cm程度の侵食量となっている。</p> <p>CCI-3実験（玄武岩系コンクリート）のベンチマーク解析では、対流熱伝達係数として床面方向に80W/m²/K、壁面方向に300W/m²/K、nに0が設定されている。ここで、80W/m²/Kは、CCI-3実験では、床面方向の熱流束が壁面方向の1/4程度と推定されていることから、床面方向の対流熱伝達係数を壁面方向の1/4程度として設定されている。この設定により、コリウム温度の変化</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>実験データに近くなっている。また、床方向の侵食量は（付図2-24参照）、実験では注水前には5cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では5.7cm程度の侵食量となっている。側壁方向の侵食量は（付図2-25参照）、実験では注水前には29cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では27cm程度の侵食量となっている。</p> <p>CCI実験を対象にしたMAAPベンチマーク解析により、対流熱伝達係数を適切に設定することにより侵食量がおおむね合うことが確認されている。また、侵食の異方性を扱うためには、床方向と側壁方向の対流熱伝達係数の比率の設定が重要であることが示されている。</p>	<p>（図3.1-44参照）は、より実験データに近くなっている。また、床面方向の侵食量は（図3.1-45参照）、実験では注水前には5cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では5.7cm程度の侵食量となっている。壁面方向の侵食量は（図3.1-46）、実験では注水前には29cm程度侵食されているのに対し、MAAP解析では27cm程度の侵食量となっている。</p> <p>CCI実験を対象にしたMAAPベンチマーク解析により、対流熱伝達係数を適切に設定することにより侵食量がおおむね合うことが確認されている。また、壁面方向よりも床面方向では侵食量が低減する侵食の異方性を扱うためには、床面方向と壁面方向の対流熱伝達係数の比率の設定が重要であることが示されている。しかしながら、この侵食の異方性はドライ条件の実験において発生しており、そのメカニズムの詳細は未だ解明されておらず、実機のウェット条件にて、この侵食の異方性が発生するかは不明である。実機における影響の確認のため感度解析が必要と考えられ、CCI-3実験のベンチマーク解析を参考にして、溶融プールから壁面方向と床面方向の対流熱伝達係数を調整して感度解析を実施する（補足説明資料11参照）。</p>	<p>※侵食異方性の感度解析は個別解析であるため補足説明資料11として整理</p>
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>		
<p>① クラスト浸水・強度実験（SSWICS実験）</p> <p>SSWICS実験は、クラスト内への浸水メカニズムと浸水による除熱量、さらにクラスト強度を調べるために実施された。実験装置の構造を付図2-11に示し、実験条件一覧を付表2-2に示す。テスト部内の非侵食性の床面上で、テルミット反応によりUO_2、ZrO_2及びコンクリート成分を主成分とするデブリ模擬溶融物を生成しその上に注水する。崩壊熱とコンクリート分解気体の発生は模擬しない過渡クエンチ実験である。最大除熱量はクラスト上面におけるドライアウト熱流束により評価される。実験結果より、安定なクラストは形成されず、クラスト内に冷却材が浸入することにより、熱伝導律速以上の熱流束を期待することができるとしている。さらに、SSWICS実験で得られたドライアウト熱流束を実機の事故シーケンス解析において直接的に適用できるよう、Lister/Epsteinのドライアウト熱流束モデルへの適応が行われた。実験結果とこれに基づいたLister/Epsteinモデルによる予測の比較を付図2-12に示す。この実験結果及びこれらに基づいた予測値によれば、コンクリートを全く含有しないデブリに対する上面水プールへのドライアウト熱流束は、約400kW/m^2であり、コンクリート含有とともに熱流束は低下し、含有率15%程度以上では約100kW/m^2となっている。</p>	<p>(12) SSWICS試験¹³</p> <p>SSWICS (Small Scale Water Ingression and Crust Strength experiments) 試験は、OECD MCCIプロジェクトの一環として米国アルゴンヌ国立研究所 (ANL) にて行われた試験であり、溶融物に上部より注水した場合の冷却性を調査している。試験装置を図3.1-47に示す。</p> <p>SSWICS試験では、クラストが冷却される過程で内部への浸水性があり除熱量の増加に寄与するものの、溶融物のコンクリート含有率が增加するとドライアウト熱流束が低下すると報告されている。溶融物とコンクリートの混合物のドライアウト熱流束の測定結果と、Lister-Epsteinドライアウト熱流束モデルの比較結果を図3.1-48に示す。試験結果と解析モデルの傾向はよく一致しており、コンクリート含有率が增加するにつれてドライアウト熱流束は減少し、約15%で約125kW/m^2となり、それ以降は概ね一定となる。</p>	
<p>④ クラスト破損実験</p> <p>本実験は上記①③の実験に付随して実施されており、①のSSWICS実験で形成されたクラストの冷却後破損強度を調べる実験と、③の二次元侵食実験の間に高温状態で破損させる実験の2種の実験が行われている。</p> <p>前者の実験では、クラスト浸水実験で形成された直径約30cmのクラストに荷重を加えて、クラストの強度を測定している。低温クラスト破損実験装置の概要を付図2-18に示す。クラスト上面の中央部に集中荷重を与え、クラスト破損時の荷重からクラストの機械的強度（破損時にクラスト</p>	<p>また、SSWICS試験ではクラストの強度試験も行っている。試験装置図を図3.1-49に示す。結果を図3.1-50に示すが、上部水プールにより冷却されたクラストの強度は、溶融物の理論密度と比較して約二桁弱いことが示されている。これは、クエンチの過程で形成されたクラストの亀裂のため、組成から考えられる強度より大幅に小さくなったものである。さらに、試験データから外挿すると、実機スケールではクラストは安定的には存在できないと推測されている。その結</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>に発生する最大の応力)を評価している。クラスト上に堆積する冷却水層及び噴出デブリの荷重に起因してクラスト内に発生する応力と、本実験から得られるクラストの機械的強度を比較することにより、実機規模においては、クラストは破損し下部の溶融物と接触する可能性が高いことが示されている。</p> <p>後者の二次元侵食実験では、注水前の高温状態で突き棒 (lance) によりクラストが破損する荷重を測定し、注水後も再度突き棒によりクラストが破損する荷重を測定している。これにより、現実に近い状態でのクエンチ前後のクラスト強度が確認され、クエンチ後は、クラスト強度が大きく低下することが確認された。</p>	<p>果、クラストの破損が断続的に繰り返され、クラストへの水の浸入及び溶融物の噴出による冷却が溶融物の冷却及びコンクリート侵食の停止に寄与するとされている。</p> <p>(13) クラスト強度の JNES 解析研究¹⁷</p> <p>OECD-MCCI プロジェクトで実施されたクラスト強度試験(SSWICS 試験)結果に基づき、クラストのヤング率と破損応力を解析的に求めており、図 3.1-51, 52 に示す結果が得られている。</p> <p>¹⁷ Hideo Nagasaka, et al., " Failure Strength and Young' s Modulus Evaluation of Solidified Crust based on OECD-MCCI Test," MCCI Seminar 2010, Cadarache, 2010.</p> <p>その値を実機サイズのクラストに適用し、実機スケールでのクラストの荷重を算出し、健全性を評価している。解析モデルは図 3.1-53 に示すものである。軸対象につき片持ち梁体系にて、クラストの直径と厚さはパラメータサーベイしている。熱応力解析では、クラスト内では崩壊熱 1W/cm³、クラスト温度は一樣で、上面と下面で 2000K の温度差を仮定する。</p> <p>その結果、クラスト直径 2m~6m、クラスト厚さ 20cm~30cm、コンクリート含有割合 23.6%及び 41.9%の広い範囲において、クラストは自重と熱応力により、水圧が無くても破損するという結果が得られている。また、以下のように条件に応じた知見が整理されている。</p> <p>①クラストが壁に接着し、下面に空間ができた場合 クラストは自重と熱応力で破損する。</p> <p>②溶融物にクラストが浮いている場合 クラストは熱応力だけで破損する。</p> <p>③クラストが壁に接着し、かつ溶融物上に一部浸っている場合 クラストは浮力と自重が釣り合うことになり、図 3.1-54 に示すようにクラストのアスペクト比に応じた水頭圧により破損する。</p> <p>(14) PULiMS 試験¹⁸</p> <p>スウェーデン王立工科大学 (KTH) では、水中での溶融物拡がり挙動を調べる PULiMS 試験を実施している。この実験は、浅い水プールへ溶融した Bi₂O₃-WO₃ 合金を流入させており、その拡がり挙動を調べている。図 3.1-55 に示すように、水中へ流入した溶融物は、瞬時に固化することなく、床上を拡がる様子が観察されている。</p>	
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>		
<p>また、水中での溶融物拡がり挙動を調べる PULiMS 実験²¹⁾が実施されている。この実験では、浅い水プール（水深 20cm）へ溶融した Bi₂O₃-WO₃ 合金を流入させ、その拡がり挙動が観察された。実験装置を付図 4-7 に示し、実験条件を付表 4-4 に示す。水中へ流入した溶融物の拡がりの様子を付図 4-8 に示す。また、固化したデブリ層の性状を付図 4-9 に示す。固化したデブリ層は 3 層を形成し、デブリ層下面とコンクリートは密着せずギャップが存在しており、水又は蒸気が存在していた可能性がある。3 層の最下層は薄い 1.5-2mm のケーキ（クラスト）層で空隙はなく、中間層は割れ目や細長い孔が含まれている。最上部は不規則な構造で高多孔性である。</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p> <p>(3) BETA 実験（独 KfK）^{[6] [34]}</p> <p>MCCI 解析コードの侵食挙動やエアロゾル生成挙動の検証用のデータベースを拡充することを目的として、独 KfK で実施された。実験装置の概要を付図 1-6 に示す。テルミット反応により金属溶融物（Fe, Cr, Ni, Zr）と酸化物溶融物（Al₂O₃, SiO₂, CaO）を生成させて、玄武岩系コンクリート製のるつぼに落下させて、るつぼ内の溶融物は、誘導加熱により加熱している。ベースマット中にある熱電対により二次元のコンクリート侵食挙動が確認できるようになっている。溶融物として Zr を多く含む溶融物を用いた実験シリーズの実験マトリックス（V5.1～V5.3）を付表 1-2 に示す。</p> <p>実験後のコンクリート侵食状況を示す模式図を、付図 1-7 に示す。壁方向よりは、床方向の侵食量が大きくなっている。溶融物に含まれる Zr によりコンクリート成分の SiO₂ が還元され、Si や SiO の生成が確認されている。V5.1 実験と V5.2 実験のコンクリートの侵食深さの MAAP 解析との比較^[34]を付図 1-8 及び付図 1-9 に示すが、MAAP 解析結果とよい一致を示している。この MAAP のベンチマーク解析により、二次元侵食に関わるパラメータ設定の妥当性が判断されている。</p>	<p>¹⁸ A. Konovalenko, et al., " Experimental Results on Pouring and Underwater Liquid Melt Spreading and Energetic Melt-coolant Interaction," NUTHOS-9, Kaohsiung, Taiwan, 2012.</p> <p>(15) BETA 試験^{19,20}</p> <p><u>BETA 試験は、MCCI 解析コードの侵食挙動やエアロゾル生成挙動の検証用のデータベースを拡充することを目的として、独 KfK で実施された。実験装置の概要を図 3.1-56 に示す。テルミット反応により金属溶融物（Fe, Cr, Ni, Zr）と酸化物溶融物（Al₂O₃, SiO₂, CaO）を生成させて、玄武岩系コンクリート製のるつぼに落下させて、るつぼ内の溶融物は、誘導加熱により加熱している。ベースマット中にある熱電対により二次元のコンクリート侵食挙動が確認できるようになっている。溶融物として Zr を多く含む溶融物を用いた実験シリーズの実験マトリックス（V5.1～V5.3）を表 3.1-12 に示す。</u></p> <p><u>実験後のコンクリート侵食状況を示す模式図を図 3.1-57 に示す。壁方向よりは、床方向の侵食量が大きくなっている。溶融物に含まれる Zr によりコンクリート成分の SiO₂ が還元され、Si や SiO の生成が確認されている。V5.1 実験と V5.2 実験のコンクリートの侵食深さの MAAP 解析との比較を図 3.1-58 及び図 3.1-59 に示すが、MAAP 解析結果とよい一致を示している。この MAAP のベンチマーク解析により、二次元侵食に関わるパラメータ設定の妥当性が判断されている。</u></p> <p>¹⁹ H. Alsmeyer, et al., " BETA experiments on Zirconium Oxidation and Aerosol Release during Melt-Concrete interaction," Proceedings of the Second OECD(NEA) CSNI Specialist Meeting on Molten Core Debris-Concrete Interactions, NEA/CSNI/R(92)10, Karlsruhe, Germany (1992).</p> <p>²⁰ Electric Power Research Institute, MAAP4 User' s Manual Volume 1-3 (1994).</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来の PWR の公開文献から追加した内容

泊発電所 3 号炉 有効性評価 比較表

付録 3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付 3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について)

女川原子力発電所 2 号炉	泊発電所 3 号炉	相違理由
<p data-bbox="515 172 672 194">【参考のため再掲】</p> <p data-bbox="183 207 963 229">各実験の詳細は付録資料にて示す。以下に、実機評価に関連する知見の概要をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="174 309 618 331">・ドライ条件でのコンクリート侵食（付録 1 参照） <p data-bbox="183 341 1039 434">熔融炉心に注水が行われない場合の侵食速度は、ACE 実験、SURC 実験及び BETA 実験で確認されている。また、MAAP コードによる実験解析が行われており、解析で得られた侵食速度は実験結果と良く一致している（1 時間あたり 20cm 程度）^{[23][94]}。</p> <li data-bbox="174 478 797 501">・ウェット条件（Top Flooding）でのコンクリート侵食（付録 2 参照） <p data-bbox="183 510 1039 740">SWISS 実験、WETCOR 実験、MACE 実験では、熔融デブリ上面へ注水をした場合（Top Flooding）のコンクリート侵食実験が行われたが、結果として、デブリ上面に安定なハードクラストが形成されてデブリ内への水の浸入を妨げ、コンクリート侵食が継続する結果が得られた。コンクリート侵食が停止しなかった主な原因は、デブリ模擬物上面に形成されたクラストが側壁（側壁に耐火物を採用した一次元侵食実験）あるいは電極と側壁の両者に固着し、クラストとその下のデブリ模擬物とが分離したことにより、デブリ模擬物の効果的な除熱がなされなかったためであるとされている。</p> <p data-bbox="183 750 1039 807">COTELS 実験では、熔融物の落下過程を含めて模擬した MCC I 実験が実施され、結果として、側壁侵食部に水が浸入し、コンクリート侵食が停止する結果が得られた。</p> <p data-bbox="183 817 1039 1015">実機スケールで安定クラストが形成されるか否かを解明するため、OECD/MCCI プロジェクトが行われ、クラスト強度、クラスト浸水、二次元コンクリート侵食挙動等を分離効果的に調べる実験が実施された。その結果、実機スケールでは、安定クラストは形成されず、ハードクラストは割れて水が内部に浸入して冷却が促進されることや、MCC I により発生したガスにより熔融物がクラストの割れ目から噴出する火山型のクラストが形成されるとの結果が得られている。また、CCI 実験結果から玄武岩系コンクリートに侵食の異方性が見られる結果が得られている。</p> <p data-bbox="183 1024 1039 1082">これらの知見は、MCC I 評価のためにはデブリから水プールやコンクリートへの熱伝達の扱いが重要であることを示唆している。</p> <li data-bbox="174 1126 568 1149">・水張りによる熔融物の粒子化（付録 3 参照） <p data-bbox="183 1158 1039 1356">熔融物ジェットが水中へ落下する場合の粒子化挙動については、FCI 実験等により確認されている。粒子化割合は、主に水深やジェット径に依存し、粒径（質量中央径）は、比較的大きく、実験条件（初期圧力、水深、コリウム落下速度、サブクール度）に対する依存性は低いと報告されている。各 UO₂ 混合物実験の平均的な粒子径は、熔融物量の多い FARO 実験では 2.6～4.8mm^[14]、COTELS 実験では 6mm 程度^[15]である。また、粒子化割合を評価する解析モデルが提案されている（Ricou-Spalding 相関式^[25]や Saito の相関式^[26]等）。</p> 	<p data-bbox="1061 172 1303 194">3.2 MCCI 実験の知見の整理</p> <p data-bbox="1115 207 1832 229">本項では、前項に示した国内外の MCCI 実験で得られた知見に関する整理を行う。</p> <p data-bbox="1115 239 1626 261">PWR プラントでの MCCI 現象については、次の 3 つの段階、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li data-bbox="1137 271 1594 293">① 熔融炉心の原子炉下部キャビティへの堆積過程 <li data-bbox="1137 303 1357 325">② 熔融炉心の冷却過程 <li data-bbox="1137 335 1397 357">③ コンクリートの侵食過程 <p data-bbox="1079 367 1720 389">で現象が進展していくことから、それぞれの段階ごとに知見を整理する。</p> <p data-bbox="1079 443 1514 466">① 熔融炉心の原子炉下部キャビティへの堆積過程</p> <p data-bbox="1079 475 1957 568">MCCI 実験としては、水プールに熔融物を落下させた条件での実験は DEFOR 実験のみでありサンプルが少ないため、FCI に関する実験的知見も加味して、熔融炉心の原子炉下部キャビティへの堆積過程に関してまとめる。</p> <p data-bbox="1097 612 1957 740">○ 熔融炉心が冠水した原子炉下部キャビティに落下するとき、次の 3 通りの状態、すなわち、熔融炉心がすべて細粒化及び固化されて床面に達する場合、液滴状の粒子が堆積して凝集物を形成する場合、熔融炉心がジェット状のまま床面に到達し、空隙なく熔融炉心が堆積する場合は考えられる。</p> <p data-bbox="1097 785 1957 1184">○ これらの現象について、DEFOR-A 実験では、水深が 1.5m の場合、1 ケースを除いて細粒化及び固化する結果が得られている（残りの 1 ケースも液滴のまま凝集する割合は数%）。また、FCI 実験（FARO 及び COTELS）においては、FARO 実験では水深 1～2m の場合に熔融物のほとんどが細粒化、COTELS 実験では水深 0.4m の場合に熔融物の 90%以上が細粒化したという、DEFOR 実験と類似した結果が得られている。したがって、実験条件では、熔融炉心の水プール内の堆積過程においては、原子炉下部キャビティの水深が 1～2m 確保されていれば、大部分が細粒化及び固化した熔融炉心として堆積すると考えられる。一方、実機条件では、原子炉容器破損モードは計装用案内管溶接部破損が支配的であり、その後、熔融炉心が破損口を侵食し、デブリジェット径は数十 cm に達する（例として 3 ループプラントの例を図 3.2-1 に示す）ため、水深が数 m 確保されていても細粒化する熔融炉心はわずかであり、相当量の熔融炉心が連続層として原子炉下部キャビティ床に堆積する。したがって、実機解析においては、エントレイン量、水深、デブリジェット径に関する不確かさを考慮して、評価する必要がある。</p> <p data-bbox="1097 1228 1957 1388">○ 一方、原子炉下部キャビティ床面での熔融炉心の拡がりに関しては、凝集した熔融炉心あるいは塊状の熔融炉心が水中で拡がる状況に関する知見は得られていないものの、上記のように熔融炉心の大部分が細粒化及び固化する場合、セルフレベルリング実験の結果が適用でき、細粒化した熔融炉心が不均一に堆積する場合でも、崩壊熱により粒子ベッド内に沸騰が生じ、粒子が吹き上げられ再堆積する過程で粒子ベッドの厚さが均一化される。</p>	<p data-bbox="1975 172 2114 194">※知見の整理の仕方が異なる</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>・溶融物の拡がり（付録4参照）</p> <p>Mark-I型格納容器のシェルアタックに関する研究^{[17][18][19][20]}により、事前水張りが、溶融物の拡がりを抑制し、シェルアタック防止に有効であることが確認されるとともに、溶融物の拡がりを評価する解析コードが作成されている。溶融物の拡がりには、デブリ落下流量、デブリ成分、デブリ過熱度が主に影響することが示されている。KTHでは、水中での溶融物の拡がり挙動と固化性状を調べるPULiMS実験^[21]が実施され、溶融物の拡がる過程は、流体力学と固化の二つの競合プロセスに支配されるとして、流体力学には重力、慣性力、粘性力及び表面張力が影響し、固化には溶融物から周囲への熱伝達、崩壊熱発生及び溶融物の相変化が影響するとして、実験と実機条件とを関連づけるスケーリング則の提案^{[20][27][28]}が行われている。また、独カールスルーエ研究センター（FZK）においてKATS実験^{[29][30]}が実施され、溶融物の放出速度が比較的高い場合は、冷却材の有無によらず同様な拡がり挙動になることが示されている。溶融物の拡がり挙動の解析のために、種々の解析コードが提案されており、実験データを元に検証が行われている。三次元の拡がり評価も行われており、比較的広いペDESTALをもつABWR（ペDESTAL半径約5.3m）の溶融物拡がり評価が実施され、床上に水がある場合でも、床全面に溶融物が拡がること示されている^[40]。</p> <p>また、ANLでのセルフレベリング実験^[22]により、水プール中に不均質に堆積させた粒子状ベッドにおいて、内部沸騰によって短時間でベッドの厚さが均一化されることが示されている。</p> <p>・粒子状ベッドの冷却性（付録5参照）</p> <p>粒子状ベッドの冷却性については、ドライアウト熱流束が種々の実験で確認されており、主に粒子径に依存するとの結果が得られている。また、ドライアウト熱流束を評価する解析モデルがいくつか提案されているが、Lipinski0-Dモデル^{[24][31][32][33]}が広く使われている。</p>	<p>○溶融物組成、質量、温度等の点で実機条件とは異なるものの、PULiMS試験より、水中へ流入した溶融物は瞬時に固化することなく、床上を拡がる様子が観察されている。</p> <p>②溶融炉心の冷却過程</p> <p>○SWISS、MACE、WETCORの各実験において、溶融物上に注水した結果、溶融物の上面に強固なクラストが形成され、これが、実験装置の壁面や電極等により固定されることにより、水による溶融物の冷却効果を阻害し、溶融物が十分に冷却されない状態となった。これに対し、COTELS実験では、上面クラストが壁に固定されることなく、注水後約3～4分で、コンクリート温度が抑制でき、水による冷却効果が高いことが示された。</p> <p>○溶融物から上面の水プールへの熱流束は、各実験で評価されており、その評価値は200～800kW/m²であった。この値は、限界熱流束よりも低い値であり、COTELS実験では、水が更に高い除熱能力を有する可能性があることと結論付けている。また、MACE実験では、注水初期に限られるが、1000kW/m²を超える高い熱流束が観測されている。なお、WETCOR実験、MACE実験より、水への熱流束が約0.2MW/m²となるのは、溶融炉心が完全固化し、温度も低下し概ね約1,500Kとなった時点である。</p> <p>○CCI実験では、注水初期には約1MW/m²の限界熱流束に近い除熱が得られている。また、クラストが無い状態での冷却では3MW/m²の熱流束が観測された。ただし、それらの高い熱流束は初期に限定され、それ以降は250～650kW/m²の熱流束となっている。なお、約250kW/m²の熱流束となるのは、溶融物上にクラストが形成された状態にあり、かつ、クラストの空隙が小さい場合の値である。</p> <p>○DEFOR実験より、堆積過程において粒子の凝集物、あるいは空隙の無い溶融物として堆積した場合、冷却性が悪化する可能性がある。また、堆積形状として山状に堆積した場合は、水との接触面積が減少することにより冷却性能が悪化する可能性がある。</p> <p>○SSWICS試験より、コンクリート侵食が進み、溶融炉心中のコンクリート含有率が増加した場合、ドライアウト熱流束が低下する可能性がある。</p> <p>○JNES解析研究より、実機スケールでは溶融物上面に安定なクラストが形成されることはないという結論が得られている。</p> <p>③コンクリートの侵食過程</p> <p>○水による冷却を伴わない場合のコンクリート侵食速度は、ACE実験（ケイ土系コンクリート）で17～20cm/h、SURC実験（玄武岩系コンクリート）で26～30cm/hであった。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>○SWISS, MACE, WETCORの各実験において、溶融物の上面に強固なクラストが形成され、これが実験装置の壁面や電極等により固定されることにより、水による溶融物の冷却効果を阻害したことから、コンクリートの侵食が継続する結果となっている。</p> <p>○これに対しCOTELS実験では、上記実験のような上面クラストの固定は起こらず、注水後約3～4分で、コンクリート温度が抑制された。この要因として、粒子化した溶融炉心への浸水、側面コンクリートと溶融炉心の間への浸水、塊状溶融炉心に生じたクレパスへの浸水等により冷却が促進されたこと、コンクリート侵食により生じた砂礫が、溶融物とコンクリートの間に溜まり、これが熱抵抗となり、コンクリートへの伝熱を抑制したことによると分析されている。また、早期の注水によりコンクリート侵食深さが小さくなっている。</p> <p>○また、COTELS実験では、コンクリート分解に伴って発生する気体により、溶融炉心が細粒化し、塊状溶融炉心の上に堆積する現象が確認されている。</p> <p>○DEFOR実験より、堆積過程において粒子の凝集物、あるいは空隙の無い溶融物として堆積した場合、水による冷却性が悪化し、よりコンクリートへの伝熱が増加する可能性がある。また、堆積形状として山状に堆積した場合は、コンクリートとの接触面積が減少することにより侵食量が増加する可能性がある。</p> <p><u>○BETA実験、CCI実験より、玄武岩系コンクリートでは、侵食の床面方向と壁面方向に差異が発生することが確認された。BETA実験では壁面方向への侵食はある時間で抑制され、CCI実験では床面方向の侵食が抑制される結果となっている。</u></p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>3.3 実機への適用性</p> <p>小規模実験と実機では、スケールの違いによる安定化クラストの形成に違いがあると考えられているため、実験結果の実機への適用性について考察する。</p> <p>熔融炉心の細粒化の挙動は水深とジェット径に依存するが、スウェーデン王立工科大学 (KTH) で得られた粒子化マップを参考にすると、実機条件では、ジェット径に比べて水深が浅いため、ほとんど細粒化されずに熔融状態で床に到達すると考えられる。</p> <p>また、小規模実験では熔融物上面に堅固なクラストが形成されると考えられている。さらに、クラストががるつばに接着して熔融物の間に空間が形成されるため、熔融物からクラストへの直接的な対流伝熱もしくは熱伝導が低下する現象も観測されている。</p> <p>実機スケールにおけるクラスト強度について JNES にて解析研究が実施されており（3.2 参照）、実機では熔融物上面に上記のような安定なクラストが形成されることはないという結論が得られている。</p> <p>よって、実機では熔融炉心が熔融状態で拡がり、一方、上面にできるクラストは安定化しないため、熔融物と原子炉下部キャビティ水の直接接触により除熱されると考えられる。以上を踏まえ、実機での熔融炉心の堆積、冷却過程は以下のとおりになると考えられる。また、MCCI 実験での挙動、実機で想定される挙動の概念図を図 3.3-1 及び図 3.3-2 に示す。</p> <p>【熔融炉心落下時】</p> <p>熔融炉心は完全には粒子化せず、床上を熔融炉心が拡がり、床面との間にケーキが形成される。ジェットの一部は粒子化して熔融炉心上に降下する。クラストが形成されるまでは水-熔融炉心間において比較的高い熱流束が維持される。（MACE 実験、CCI 実験より）</p> <p>【熔融炉心落下後短期】</p> <p>熔融炉心上面からクラストが形成されるが、自重あるいは熱応力によって破碎していく（JNES 解析研究より）ため、熔融物から水へ限界熱流束に近い伝熱となる。この時の現象は、小規模実験で熔融物へ注水を開始した時点と同等と考えられ、MACE 実験、CCI 実験では 1MW/m² 以上の値が観測されている。</p> <p>【長期冷却時】</p> <p>時間の経過とともに亀裂の入ったクラストが成長し、熔融炉心全体が固化する。下部のケーキの部分を除いて浸水性があり、その際の限界熱流束は、CCI 実験より約 0.5MW/m² であると考えられる。熔融炉心全体が固化した後の挙動においては、熔融炉心固化物の熱伝導が律速となるが、ひび割れによる伝熱面積の増大と内部への水浸入により除熱が促進される。また、コンクリート</p>	<p>※PWR では得られた知見の中でスケールの違いに影響を受けると考える安定化クラストの形成に関する不確かさについて定性的な考察を行い、上面のクラストは安定していない事を確認している。</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>と熔融炉心の境界にギャップが発生し、水がギャップへ浸入することで冷却が促進される。 (COTELS 実験より)</p> <p>熔融炉心が固化し安定化クラストが形成され、熔融炉心温度が約 1500K まで下がった場合の熱流束は約 0.2MW/m²と考えられる (WETCOR 試験, MACE 試験より)。</p>	

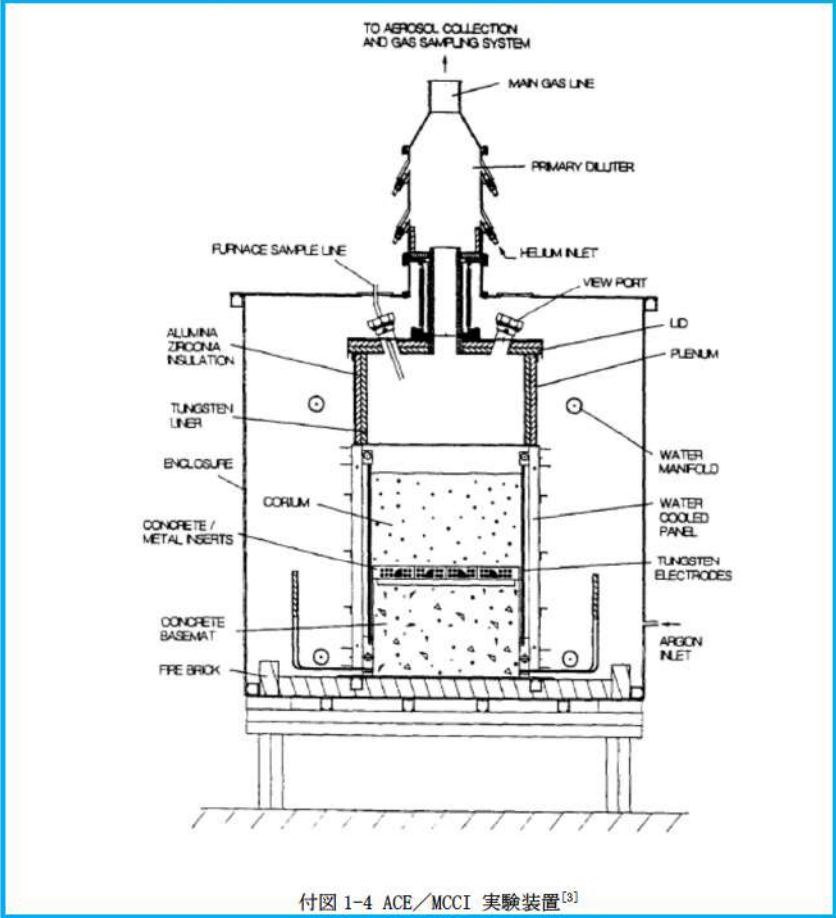
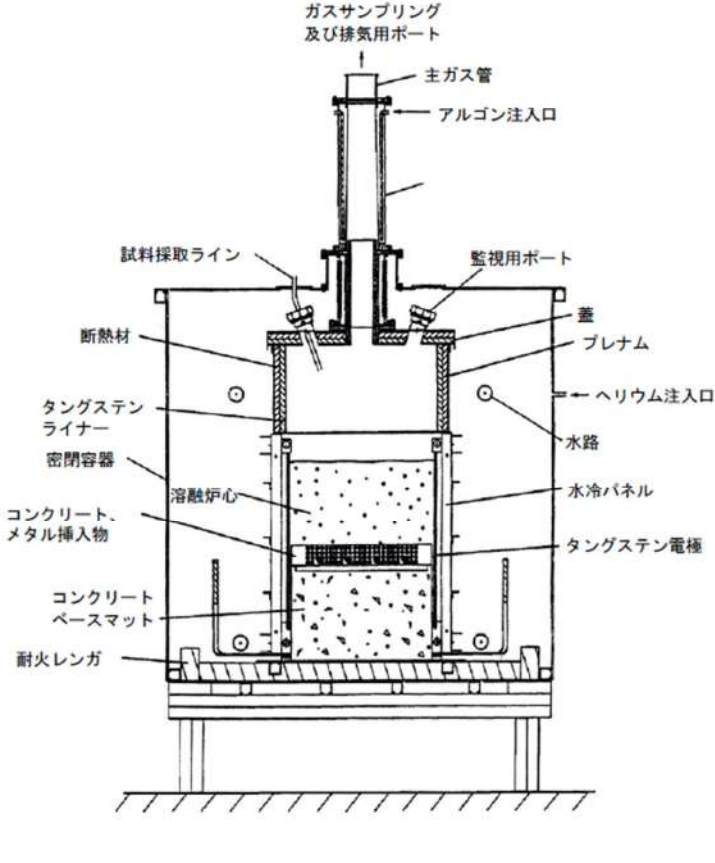
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

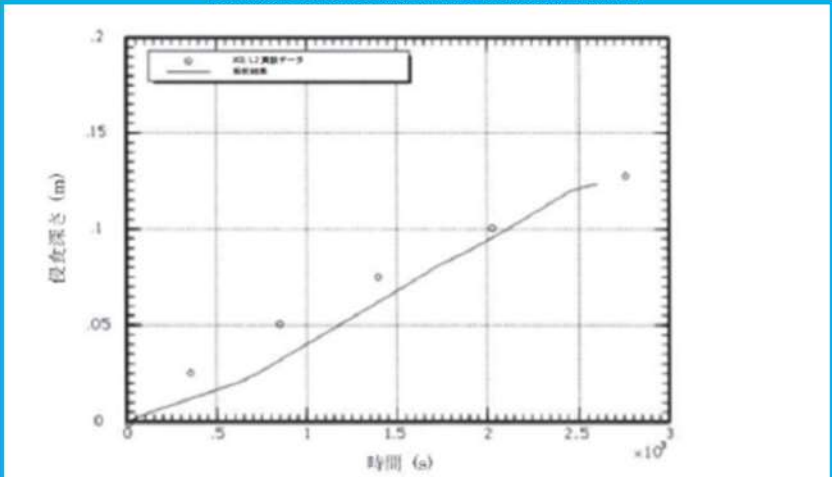
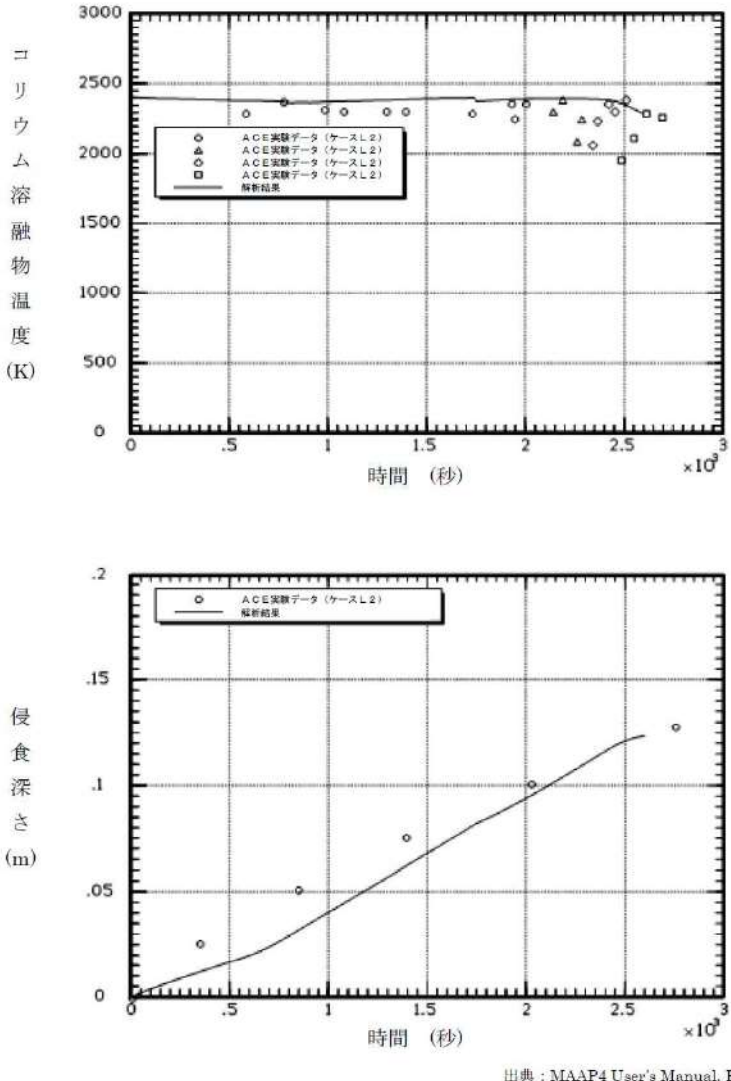
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由																																																																																																																																																																					
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p> <p style="text-align: center;">付表 1-1 ACE/MCCI 実験マトリックス^[23]</p> <table border="1" data-bbox="291 271 907 622"> <thead> <tr> <th>Test</th> <th>Concrete Type^a</th> <th>Decay Heat Generation W/kg of UO₂</th> <th>Corium Mixture</th> <th>Initial Zr Oxidation %</th> <th>Absorber Material</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>L5</td> <td>L/S</td> <td>325</td> <td>PWR</td> <td>100</td> <td>none</td> </tr> <tr> <td>L2</td> <td>S</td> <td>450</td> <td>PWR</td> <td>70</td> <td>none</td> </tr> <tr> <td>L1</td> <td>L/S</td> <td>350</td> <td>PWR</td> <td>70</td> <td>none</td> </tr> <tr> <td>L6</td> <td>S</td> <td>350</td> <td>PWR</td> <td>30</td> <td>Ag, In</td> </tr> <tr> <td>L4</td> <td>Serp/S^b</td> <td>250</td> <td>BWR</td> <td>50</td> <td>B₄C</td> </tr> <tr> <td>L7</td> <td>L/S</td> <td>250</td> <td>BWR</td> <td>70</td> <td>B₄C</td> </tr> <tr> <td>L8</td> <td>L/L</td> <td>350/150^c</td> <td>PWR</td> <td>70</td> <td>Ag, In</td> </tr> </tbody> </table> <p>a. Concrete type: L/S: limestone/common sand S: siliceous L/L: limestone/limestone</p>	Test	Concrete Type ^a	Decay Heat Generation W/kg of UO ₂	Corium Mixture	Initial Zr Oxidation %	Absorber Material	L5	L/S	325	PWR	100	none	L2	S	450	PWR	70	none	L1	L/S	350	PWR	70	none	L6	S	350	PWR	30	Ag, In	L4	Serp/S ^b	250	BWR	50	B ₄ C	L7	L/S	250	BWR	70	B ₄ C	L8	L/L	350/150 ^c	PWR	70	Ag, In	<p style="text-align: center;">表 3.1-1 ACE 実験：熔融炉心組成及びコンクリート組成</p> <table border="1" data-bbox="1108 279 1478 1021"> <thead> <tr> <th>Constituent (kg)</th> <th>L2</th> <th>L6</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>UO₂</td><td>216</td><td>219</td></tr> <tr><td>ZrO₂</td><td>42.5</td><td>18.5</td></tr> <tr><td>Zr</td><td>13.4</td><td>21.1</td></tr> <tr><td>Zirc-4</td><td>-</td><td>1.8</td></tr> <tr><td>Fe₂O₃</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>NiO</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>Cr₂O₃</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>SS-304</td><td>-</td><td>9.1</td></tr> <tr><td>CaO</td><td>3.0</td><td>7.3</td></tr> <tr><td>MgO</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>SiO₂</td><td>20.9</td><td>16.9</td></tr> <tr><td>BaO</td><td>0.8</td><td>0.79</td></tr> <tr><td>La₂O₃</td><td>0.6</td><td>0.6</td></tr> <tr><td>SrO</td><td>0.5</td><td>0.5</td></tr> <tr><td>CeO₂</td><td>1.3</td><td>1.3</td></tr> <tr><td>MoO₂</td><td>0.9</td><td>0.94</td></tr> <tr><td>SnTe</td><td>0.2</td><td>-</td></tr> <tr><td>ZrTe₂</td><td>-</td><td>0.2</td></tr> <tr><td>Ru</td><td>-</td><td>0.38</td></tr> <tr><td>B₄C</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>Ag</td><td>-</td><td>1.19</td></tr> <tr><td>In</td><td>-</td><td>0.22</td></tr> </tbody> </table> <table border="1" data-bbox="1534 279 1904 805"> <thead> <tr> <th>Constituent (kg)</th> <th>L2</th> <th>L6</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>SiO₂</td><td>69</td><td>69</td></tr> <tr><td>CaO</td><td>13.5</td><td>13.5</td></tr> <tr><td>Al₂O₃</td><td>4</td><td>4</td></tr> <tr><td>K₂O</td><td>1.4</td><td>1.4</td></tr> <tr><td>Fe₂O₃</td><td>1.0</td><td>1.0</td></tr> <tr><td>TiO₂</td><td>0.8</td><td>0.8</td></tr> <tr><td>MgO</td><td>0.7</td><td>0.7</td></tr> <tr><td>Na₂O</td><td>0.7</td><td>0.7</td></tr> <tr><td>MnO</td><td>0.03</td><td>0.03</td></tr> <tr><td>BaO</td><td>0.02</td><td>0.02</td></tr> <tr><td>SrO</td><td>0.02</td><td>0.02</td></tr> <tr><td>Cr₂O₃</td><td>0.01</td><td>0.01</td></tr> <tr><td>H₂O + CO₂</td><td>7.9</td><td>7.9</td></tr> <tr> <td>Concrete Type</td> <td>S¹</td> <td>S¹</td> </tr> <tr> <td>TOTALS</td> <td>99.1</td> <td>99.08</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">※ コンクリートタイプ S¹ : ケイ土系</p>	Constituent (kg)	L2	L6	UO ₂	216	219	ZrO ₂	42.5	18.5	Zr	13.4	21.1	Zirc-4	-	1.8	Fe ₂ O ₃	-	-	NiO	-	-	Cr ₂ O ₃	-	-	SS-304	-	9.1	CaO	3.0	7.3	MgO	-	-	SiO ₂	20.9	16.9	BaO	0.8	0.79	La ₂ O ₃	0.6	0.6	SrO	0.5	0.5	CeO ₂	1.3	1.3	MoO ₂	0.9	0.94	SnTe	0.2	-	ZrTe ₂	-	0.2	Ru	-	0.38	B ₄ C	-	-	Ag	-	1.19	In	-	0.22	Constituent (kg)	L2	L6	SiO ₂	69	69	CaO	13.5	13.5	Al ₂ O ₃	4	4	K ₂ O	1.4	1.4	Fe ₂ O ₃	1.0	1.0	TiO ₂	0.8	0.8	MgO	0.7	0.7	Na ₂ O	0.7	0.7	MnO	0.03	0.03	BaO	0.02	0.02	SrO	0.02	0.02	Cr ₂ O ₃	0.01	0.01	H ₂ O + CO ₂	7.9	7.9	Concrete Type	S ¹	S ¹	TOTALS	99.1	99.08	
Test	Concrete Type ^a	Decay Heat Generation W/kg of UO ₂	Corium Mixture	Initial Zr Oxidation %	Absorber Material																																																																																																																																																																		
L5	L/S	325	PWR	100	none																																																																																																																																																																		
L2	S	450	PWR	70	none																																																																																																																																																																		
L1	L/S	350	PWR	70	none																																																																																																																																																																		
L6	S	350	PWR	30	Ag, In																																																																																																																																																																		
L4	Serp/S ^b	250	BWR	50	B ₄ C																																																																																																																																																																		
L7	L/S	250	BWR	70	B ₄ C																																																																																																																																																																		
L8	L/L	350/150 ^c	PWR	70	Ag, In																																																																																																																																																																		
Constituent (kg)	L2	L6																																																																																																																																																																					
UO ₂	216	219																																																																																																																																																																					
ZrO ₂	42.5	18.5																																																																																																																																																																					
Zr	13.4	21.1																																																																																																																																																																					
Zirc-4	-	1.8																																																																																																																																																																					
Fe ₂ O ₃	-	-																																																																																																																																																																					
NiO	-	-																																																																																																																																																																					
Cr ₂ O ₃	-	-																																																																																																																																																																					
SS-304	-	9.1																																																																																																																																																																					
CaO	3.0	7.3																																																																																																																																																																					
MgO	-	-																																																																																																																																																																					
SiO ₂	20.9	16.9																																																																																																																																																																					
BaO	0.8	0.79																																																																																																																																																																					
La ₂ O ₃	0.6	0.6																																																																																																																																																																					
SrO	0.5	0.5																																																																																																																																																																					
CeO ₂	1.3	1.3																																																																																																																																																																					
MoO ₂	0.9	0.94																																																																																																																																																																					
SnTe	0.2	-																																																																																																																																																																					
ZrTe ₂	-	0.2																																																																																																																																																																					
Ru	-	0.38																																																																																																																																																																					
B ₄ C	-	-																																																																																																																																																																					
Ag	-	1.19																																																																																																																																																																					
In	-	0.22																																																																																																																																																																					
Constituent (kg)	L2	L6																																																																																																																																																																					
SiO ₂	69	69																																																																																																																																																																					
CaO	13.5	13.5																																																																																																																																																																					
Al ₂ O ₃	4	4																																																																																																																																																																					
K ₂ O	1.4	1.4																																																																																																																																																																					
Fe ₂ O ₃	1.0	1.0																																																																																																																																																																					
TiO ₂	0.8	0.8																																																																																																																																																																					
MgO	0.7	0.7																																																																																																																																																																					
Na ₂ O	0.7	0.7																																																																																																																																																																					
MnO	0.03	0.03																																																																																																																																																																					
BaO	0.02	0.02																																																																																																																																																																					
SrO	0.02	0.02																																																																																																																																																																					
Cr ₂ O ₃	0.01	0.01																																																																																																																																																																					
H ₂ O + CO ₂	7.9	7.9																																																																																																																																																																					
Concrete Type	S ¹	S ¹																																																																																																																																																																					
TOTALS	99.1	99.08																																																																																																																																																																					

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p>  <p style="text-align: center;">付図 1-4 ACE/MCCI 実験装置^[3]</p>	 <p style="text-align: center;">図 3.1-1 ACE 実験装置</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p>  <p>出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <p>付図 1-5 ACE-L2 実験とMAAP解析の侵食深さの比較^[34]</p>	 <p>図3.1-2 ACE実験 (ケースL2) 溶融炉心：PWR溶融物 (部分酸化) コンクリート：ケイ土系コンクリート</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

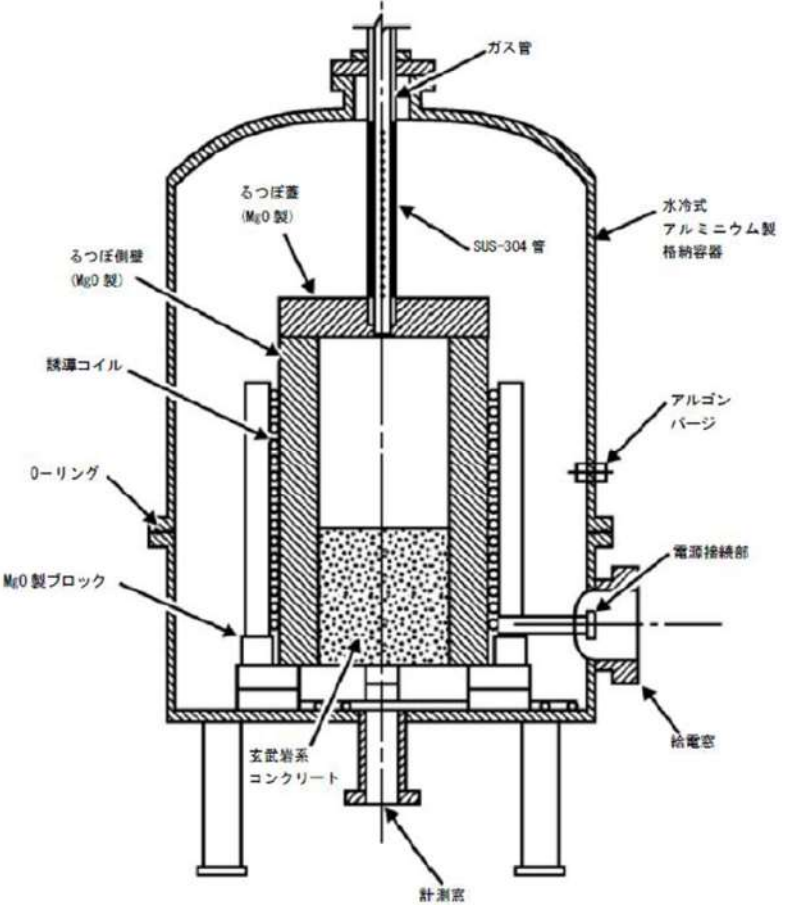
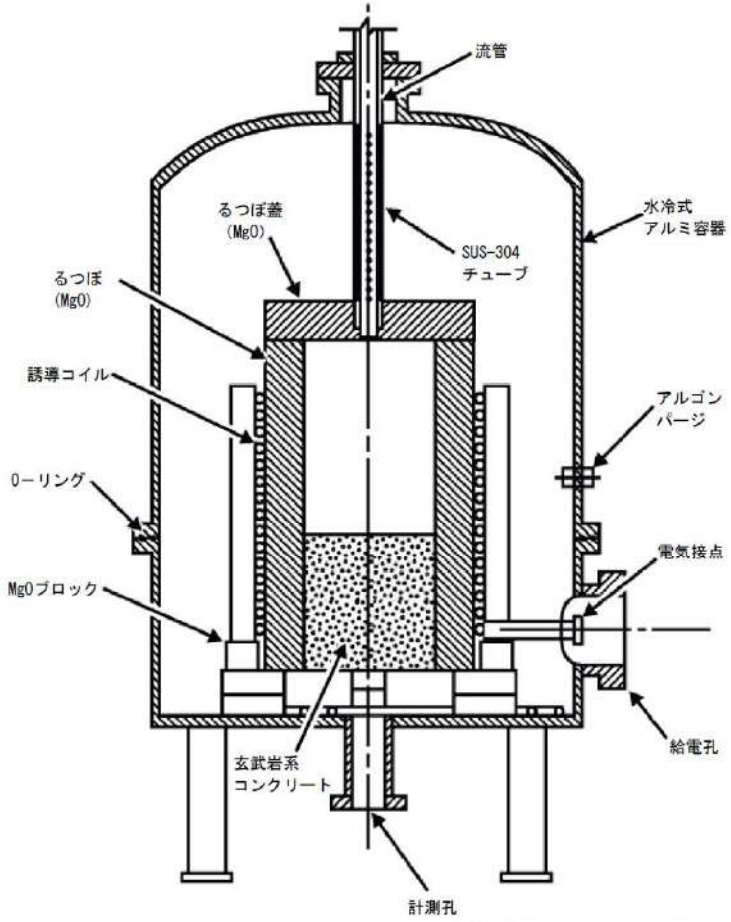
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div data-bbox="1131 247 1848 726" data-label="Figure"> </div> <div data-bbox="1131 790 1848 1268" data-label="Figure"> </div> <div data-bbox="1646 1276 1915 1300" data-label="Text"> <p>出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> </div> <div data-bbox="1254 1324 1747 1428" data-label="Caption"> <p>図3.1-3 ACE実験（ケースL6） 溶融炉心：PWR溶融物（部分酸化，制御棒材質を含む） コンクリート：ケイ土系コンクリート</p> </div>	

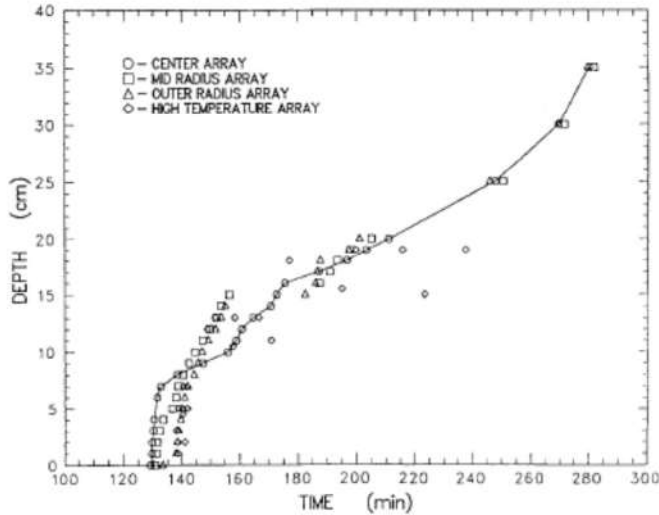
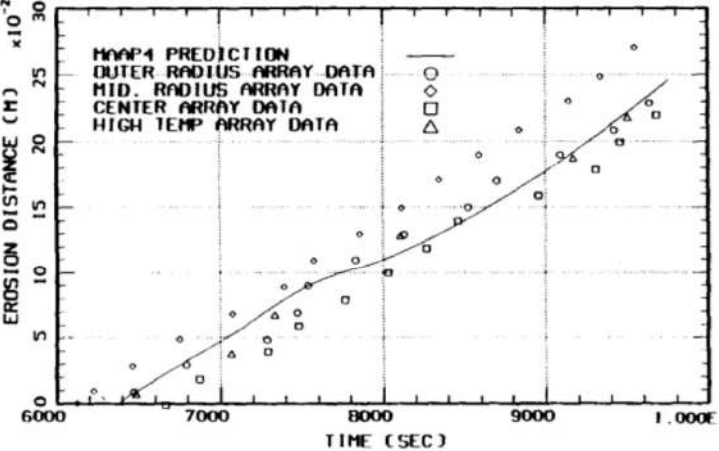
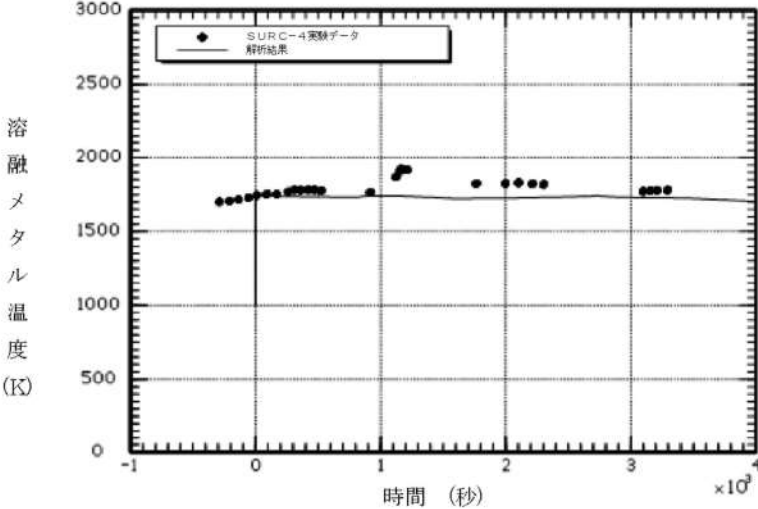
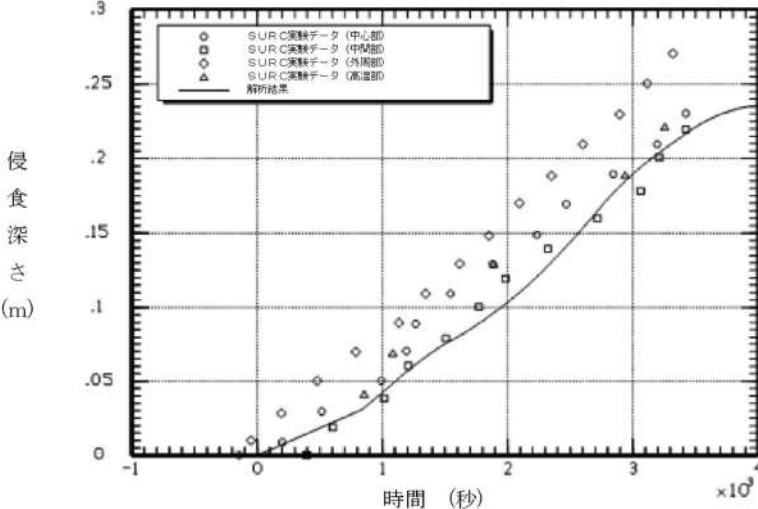
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p>  <p>付図 1-1 SURC 実験装置^[29]</p>	 <p>出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <p>図 3.1-4 SURC-4 実験：実験装置</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 204 815 228">【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p>  <p data-bbox="434 815 757 839">付図1-2 SURC-2 実験の侵食深さ^[23]</p>  <p data-bbox="324 1398 864 1422">付図1-3 SURC-4 実験の侵食深さとMAAP解析との比較^[23]</p>	  <p data-bbox="1668 1353 1951 1377">出典：MAAP4 User's Manual, EPRI</p> <p data-bbox="1422 1398 1615 1422">図3.1-5 SURC-4 実験</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

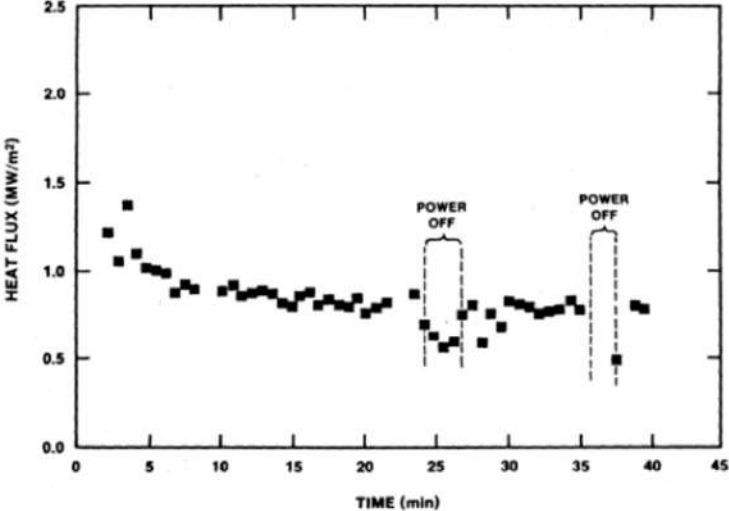
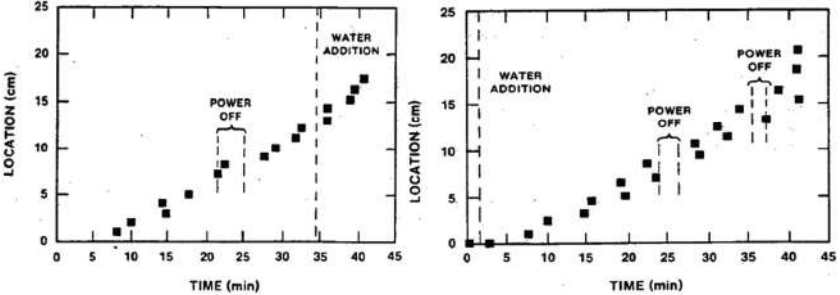
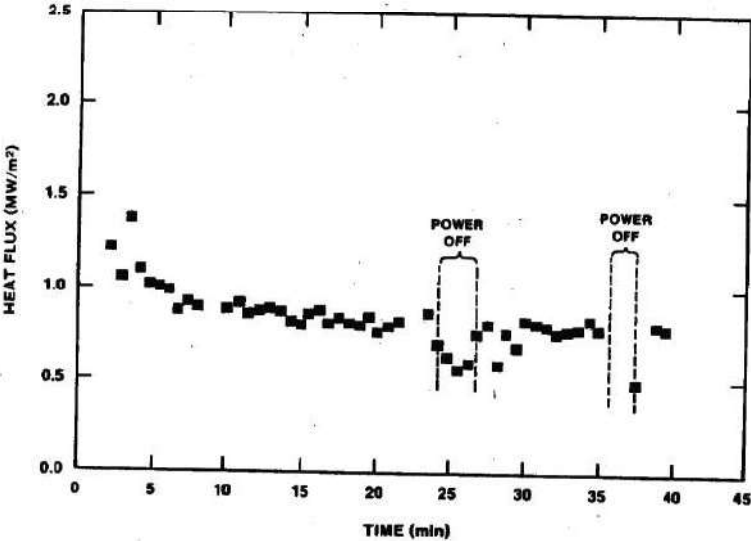
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p> <p>実験条件：45kgのSUSを内径21.6cmのコンクリート上に溶融させた状態で落下して注水を実施。比出力1.6kW/kg SUS</p> <p>実験装置の概要 (SWISS実験)</p> <p>実験結果および解析結果の比較 (SWISS実験、MAAP)</p> <p>付図 2-1 SWISS 実験の実験装置とコンクリート侵食深さの実験と解析 (MAAP) の比較^[7]</p>	<p>図 3.1-6 SWISS 実験装置概要</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 204 815 228">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>  <p data-bbox="392 882 817 906">付図2-2 SWISS-2 実験の水プールへの熱流束^[7]</p>	 <p data-bbox="1317 614 1706 670">図3.1-7 SWISS-1及びSWISS-2 実験結果 (コンクリート温度が1600Kに到達した位置)</p>  <p data-bbox="1232 1401 1774 1425">図3.1-8 SWISS-2 実験結果 (溶融物から水プールへの熱流束)</p>	

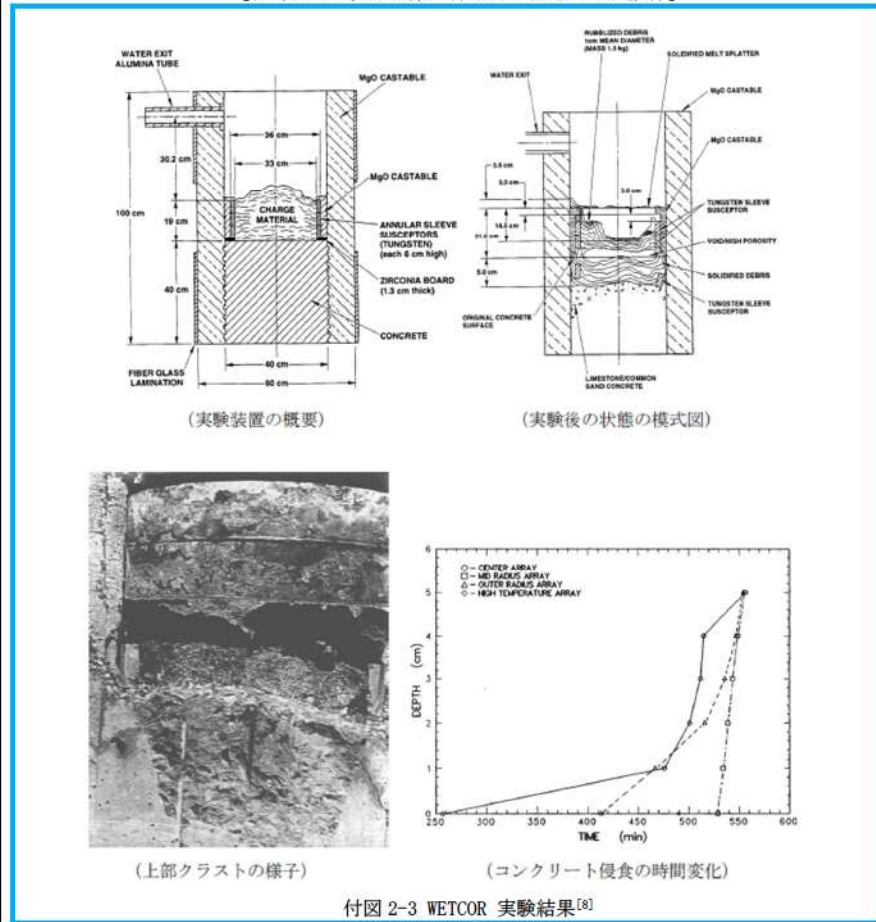
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

女川原子力発電所2号炉

【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】



付図2-3 WETCOR 実験結果^[8]

泊発電所3号炉

相違理由

表 3.1-2 WETCOR 実験 クラストから水への熱流束

Table 6.4 Heat fluxes to water through the thin portion of the crust

t (min)	Heat Transfer Rate (W)	Heat Flux Corrected for Varying Crust Thickness (MW/m ²)
557 to 563	22735 ± 4940	0.52 ± 0.13
582.4	10900 ± 3100	0.25 ± 0.08
589.0	8600 ± 3200	0.20 ± 0.08

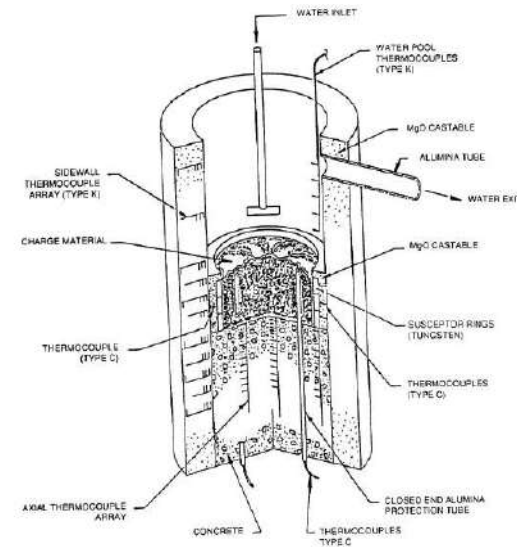
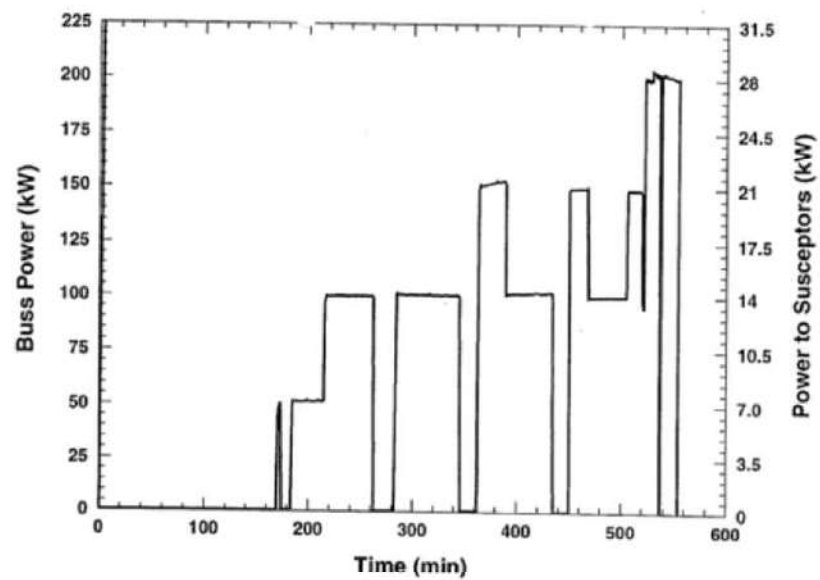


図 3.1-9 WETCOR 実験装置

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

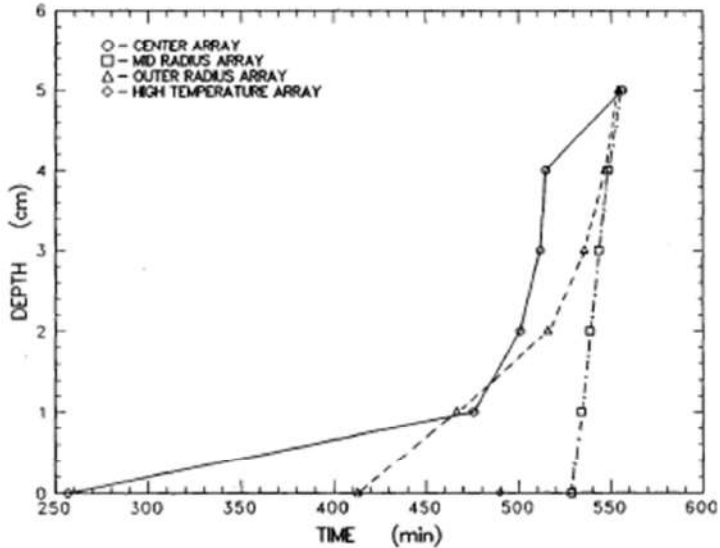
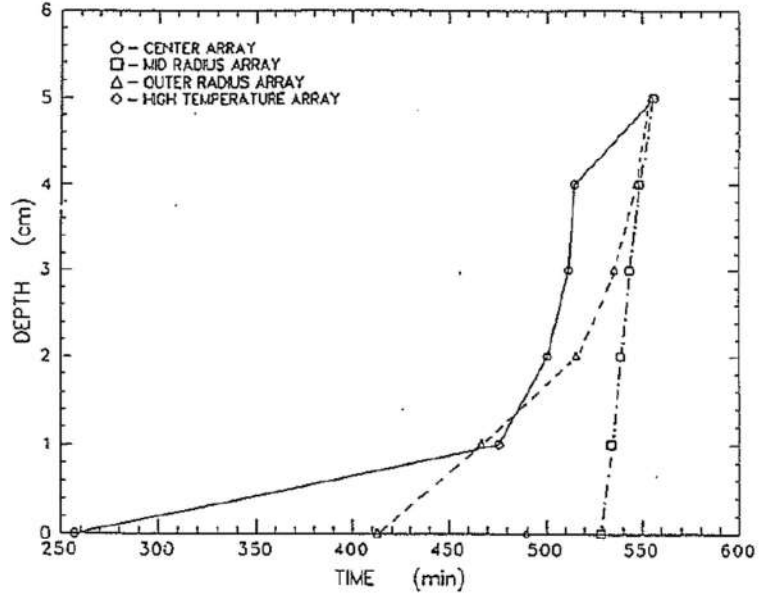
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1332 845 1702 877">図 3.1-10 WETCOR 実験 メルト加熱履歴</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 172 815 196">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>  <p data-bbox="376 917 815 949">(コンクリート侵食の時間変化)</p> <p data-bbox="481 981 728 1013">付図2-3 WETCOR 実験結果^[8]</p>	 <p data-bbox="1265 885 1736 909">図3.1-11 WETCOR 実験結果（コンクリート侵食推移）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

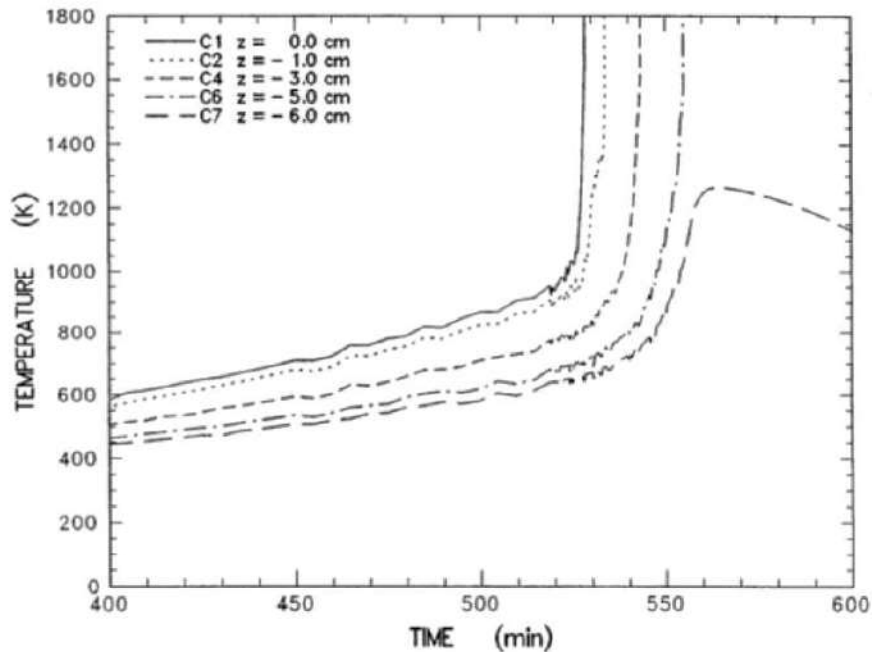
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶解炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 3.1-12 WETCOR 実験 コンクリート温度変化（半径方向中心 r=0cm）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p>図 3.1-13 WETCOR 実験 コンクリート温度変化（半径方向中間部 r=10cm）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由

図 3.1-14 WETCOR 実験 コンクリート温度変化（外周部 r=15cm）

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

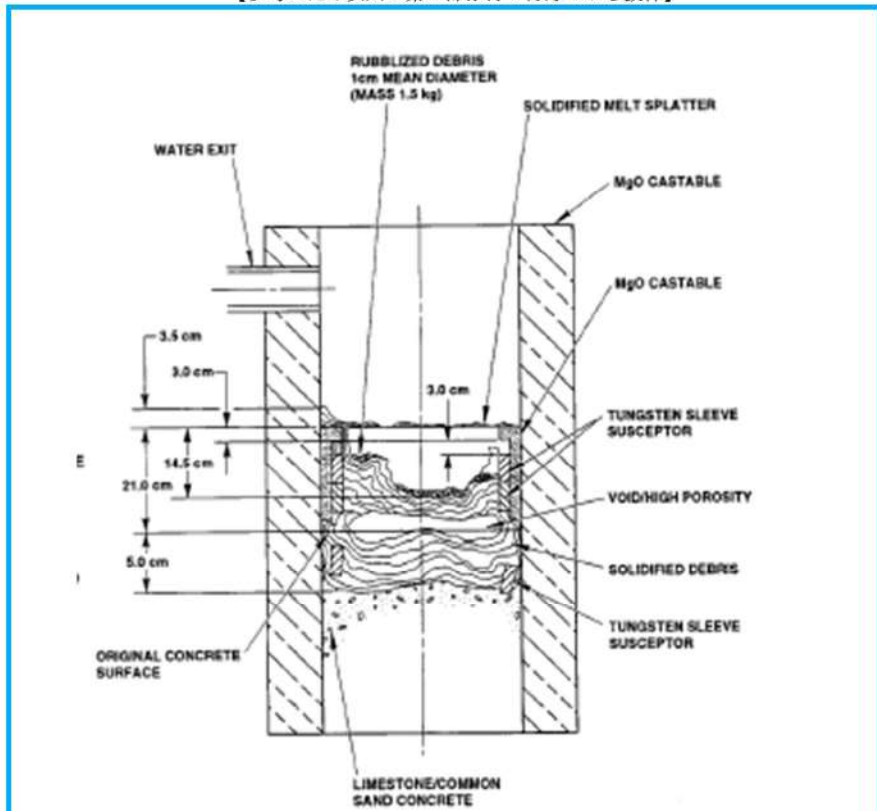
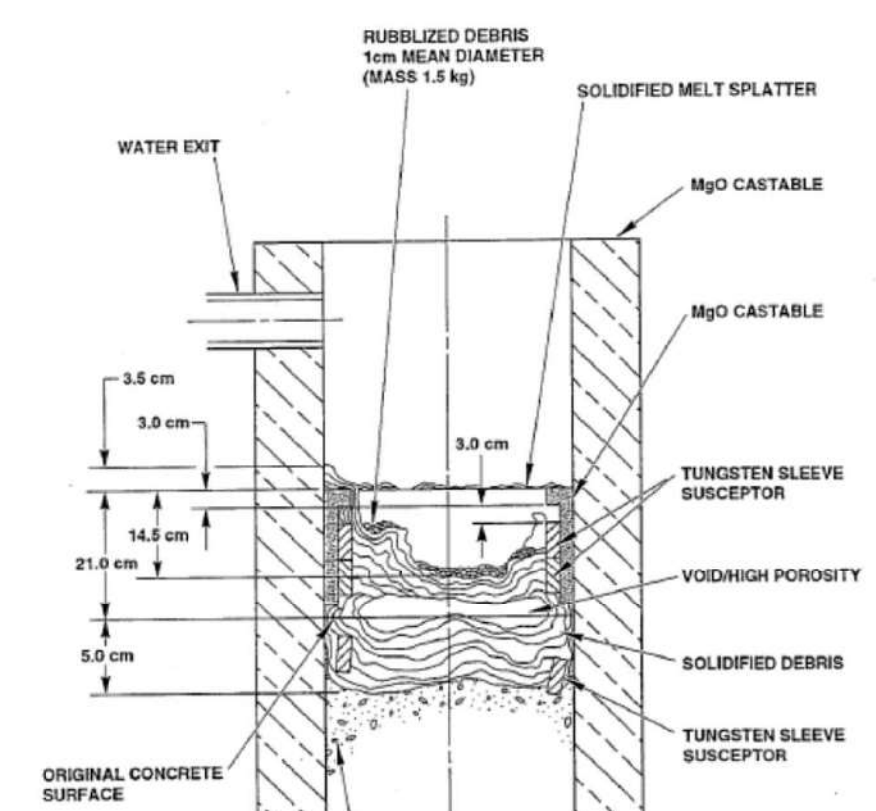
女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由

図 3.1-15 WETCOR 実験 メルト温度履歴

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 167 817 199">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>  <p data-bbox="358 1037 761 1085">(実験後の状態の模式図)</p> <p data-bbox="470 1085 739 1117">付図 2-3 WETCOR 実験結果^[8]</p>	 <p data-bbox="1299 1220 1702 1252">図 3.1-16 WETCOR 実験 試験後テスト部状態</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

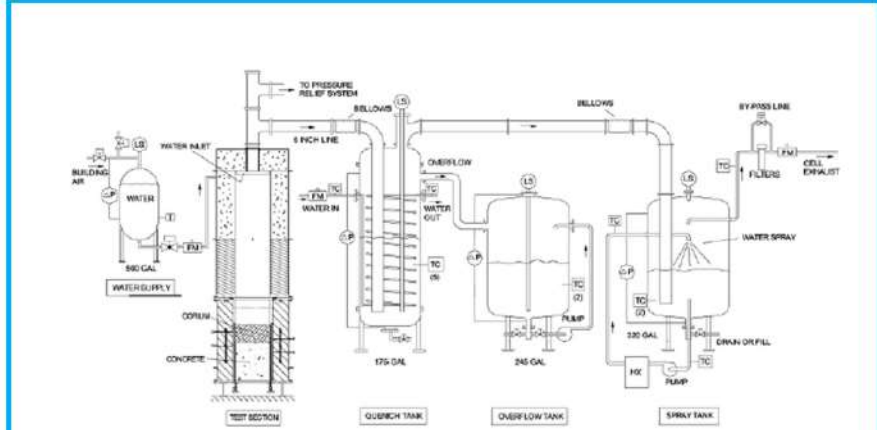
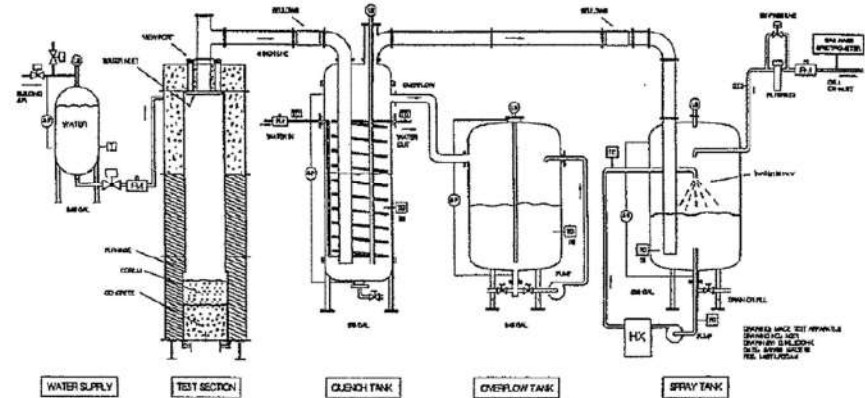
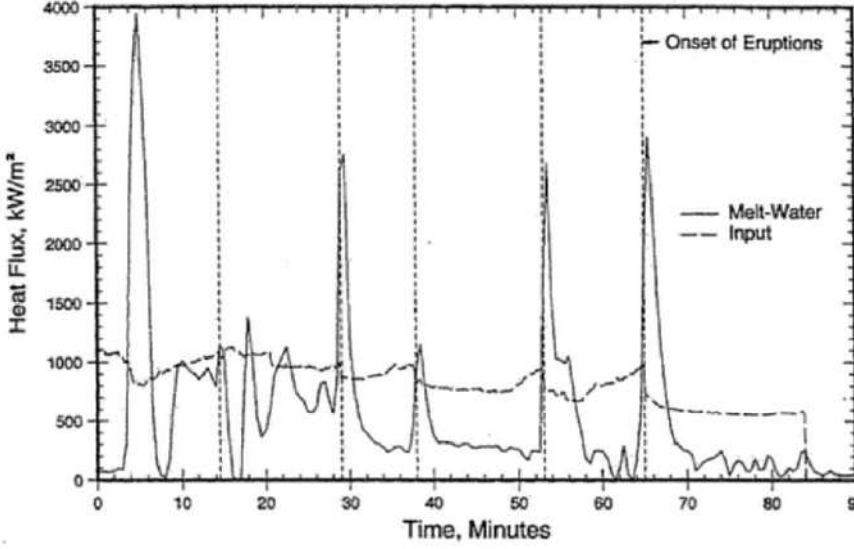
赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由																																																																																																																																				
<p style="text-align: center;">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p> <p style="text-align: center;">付表 2-1 MACE 実験の主要条件^[20]</p> <table border="1" data-bbox="244 288 969 722"> <thead> <tr> <th></th> <th>M0</th> <th>M1b</th> <th>M3</th> <th>M4</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>溶融炉心模擬物重量 (kg)</td> <td>130</td> <td>480</td> <td>1800</td> <td>480</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">コンクリート床 浸食開始時溶融炉心 模擬物組成(%)</td> <td>UO₂</td> <td>56</td> <td>65</td> <td>57</td> <td>57</td> </tr> <tr> <td>ZrO₂</td> <td>11</td> <td>13</td> <td>29</td> <td>29</td> </tr> <tr> <td>Zr</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>その他 (コンクリート 成分等)</td> <td>29</td> <td>19</td> <td>14</td> <td>14</td> </tr> <tr> <td>溶融炉心模擬物深さ (m)</td> <td>0.15</td> <td>0.25</td> <td>0.2</td> <td>0.3</td> </tr> <tr> <td>溶融炉心模擬物初期温度 (K)</td> <td>2000</td> <td>2350</td> <td>2250</td> <td>2280</td> </tr> <tr> <td>溶融炉心模擬物初期発熱量 (kW)</td> <td>100</td> <td>130</td> <td>300</td> <td>130</td> </tr> <tr> <td>コンクリートの種類</td> <td>石灰岩系</td> <td>石灰岩系</td> <td>石灰岩系</td> <td>ケイ酸系</td> </tr> <tr> <td>コンクリート床面積 (m²)</td> <td>0.3×0.3</td> <td>0.5×0.5</td> <td>1.2×1.2</td> <td>0.5×0.5</td> </tr> <tr> <td>コンクリート床の深さ (m)</td> <td>0.35</td> <td>0.55</td> <td>0.55</td> <td>0.55</td> </tr> <tr> <td>水位 (m)</td> <td>0.5</td> <td>0.5</td> <td>0.5</td> <td>0.5</td> </tr> </tbody> </table>		M0	M1b	M3	M4	溶融炉心模擬物重量 (kg)	130	480	1800	480	コンクリート床 浸食開始時溶融炉心 模擬物組成(%)	UO ₂	56	65	57	57	ZrO ₂	11	13	29	29	Zr	4	3	-	-	その他 (コンクリート 成分等)	29	19	14	14	溶融炉心模擬物深さ (m)	0.15	0.25	0.2	0.3	溶融炉心模擬物初期温度 (K)	2000	2350	2250	2280	溶融炉心模擬物初期発熱量 (kW)	100	130	300	130	コンクリートの種類	石灰岩系	石灰岩系	石灰岩系	ケイ酸系	コンクリート床面積 (m ²)	0.3×0.3	0.5×0.5	1.2×1.2	0.5×0.5	コンクリート床の深さ (m)	0.35	0.55	0.55	0.55	水位 (m)	0.5	0.5	0.5	0.5	<p style="text-align: center;">表 3.1-3 MACE 実験条件一覧</p> <table border="1" data-bbox="1084 293 1930 810"> <thead> <tr> <th></th> <th>M0</th> <th>M1b</th> <th>M3</th> <th>M4</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>溶融炉心模擬物重量 (kg)</td> <td>130</td> <td>480</td> <td>1800</td> <td>480</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">コンクリート床 浸食開始時溶融炉心 模擬物組成(%)</td> <td>UO₂</td> <td>56</td> <td>65</td> <td>57</td> <td>57</td> </tr> <tr> <td>ZrO₂</td> <td>11</td> <td>13</td> <td>29</td> <td>29</td> </tr> <tr> <td>Zr</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>その他 (コンクリート 成分等)</td> <td>29</td> <td>19</td> <td>14</td> <td>14</td> </tr> <tr> <td>溶融炉心模擬物深さ (m)</td> <td>0.15</td> <td>0.25</td> <td>0.2</td> <td>0.3</td> </tr> <tr> <td>溶融炉心模擬物初期温度 (K)</td> <td>2000</td> <td>2350</td> <td>2250</td> <td>2280</td> </tr> <tr> <td>溶融炉心模擬物初期発熱量 (kW)</td> <td>100</td> <td>130</td> <td>300</td> <td>130</td> </tr> <tr> <td>コンクリートの種類</td> <td>石灰岩系</td> <td>石灰岩系</td> <td>石灰岩系</td> <td>ケイ酸系</td> </tr> <tr> <td>コンクリート床面積 (m²)</td> <td>0.3×0.3</td> <td>0.5×0.5</td> <td>1.2×1.2</td> <td>0.5×0.5</td> </tr> <tr> <td>コンクリート床の深さ (m)</td> <td>0.35</td> <td>0.55</td> <td>0.55</td> <td>0.55</td> </tr> <tr> <td>水位 (m)</td> <td>0.5</td> <td>0.5</td> <td>0.5</td> <td>0.5</td> </tr> </tbody> </table>		M0	M1b	M3	M4	溶融炉心模擬物重量 (kg)	130	480	1800	480	コンクリート床 浸食開始時溶融炉心 模擬物組成(%)	UO ₂	56	65	57	57	ZrO ₂	11	13	29	29	Zr	4	3	-	-	その他 (コンクリート 成分等)	29	19	14	14	溶融炉心模擬物深さ (m)	0.15	0.25	0.2	0.3	溶融炉心模擬物初期温度 (K)	2000	2350	2250	2280	溶融炉心模擬物初期発熱量 (kW)	100	130	300	130	コンクリートの種類	石灰岩系	石灰岩系	石灰岩系	ケイ酸系	コンクリート床面積 (m ²)	0.3×0.3	0.5×0.5	1.2×1.2	0.5×0.5	コンクリート床の深さ (m)	0.35	0.55	0.55	0.55	水位 (m)	0.5	0.5	0.5	0.5	
	M0	M1b	M3	M4																																																																																																																																		
溶融炉心模擬物重量 (kg)	130	480	1800	480																																																																																																																																		
コンクリート床 浸食開始時溶融炉心 模擬物組成(%)	UO ₂	56	65	57	57																																																																																																																																	
	ZrO ₂	11	13	29	29																																																																																																																																	
	Zr	4	3	-	-																																																																																																																																	
	その他 (コンクリート 成分等)	29	19	14	14																																																																																																																																	
溶融炉心模擬物深さ (m)	0.15	0.25	0.2	0.3																																																																																																																																		
溶融炉心模擬物初期温度 (K)	2000	2350	2250	2280																																																																																																																																		
溶融炉心模擬物初期発熱量 (kW)	100	130	300	130																																																																																																																																		
コンクリートの種類	石灰岩系	石灰岩系	石灰岩系	ケイ酸系																																																																																																																																		
コンクリート床面積 (m ²)	0.3×0.3	0.5×0.5	1.2×1.2	0.5×0.5																																																																																																																																		
コンクリート床の深さ (m)	0.35	0.55	0.55	0.55																																																																																																																																		
水位 (m)	0.5	0.5	0.5	0.5																																																																																																																																		
	M0	M1b	M3	M4																																																																																																																																		
溶融炉心模擬物重量 (kg)	130	480	1800	480																																																																																																																																		
コンクリート床 浸食開始時溶融炉心 模擬物組成(%)	UO ₂	56	65	57	57																																																																																																																																	
	ZrO ₂	11	13	29	29																																																																																																																																	
	Zr	4	3	-	-																																																																																																																																	
	その他 (コンクリート 成分等)	29	19	14	14																																																																																																																																	
溶融炉心模擬物深さ (m)	0.15	0.25	0.2	0.3																																																																																																																																		
溶融炉心模擬物初期温度 (K)	2000	2350	2250	2280																																																																																																																																		
溶融炉心模擬物初期発熱量 (kW)	100	130	300	130																																																																																																																																		
コンクリートの種類	石灰岩系	石灰岩系	石灰岩系	ケイ酸系																																																																																																																																		
コンクリート床面積 (m ²)	0.3×0.3	0.5×0.5	1.2×1.2	0.5×0.5																																																																																																																																		
コンクリート床の深さ (m)	0.35	0.55	0.55	0.55																																																																																																																																		
水位 (m)	0.5	0.5	0.5	0.5																																																																																																																																		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

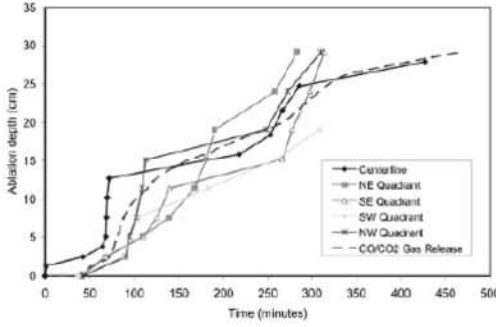
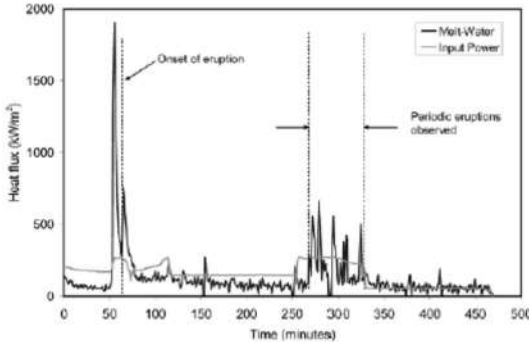
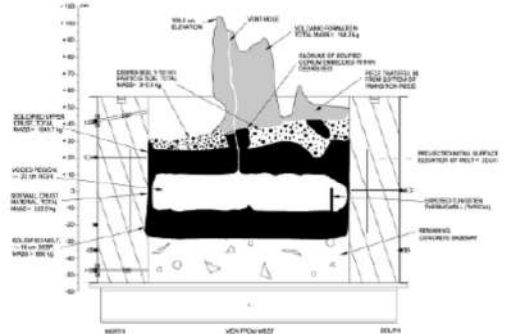
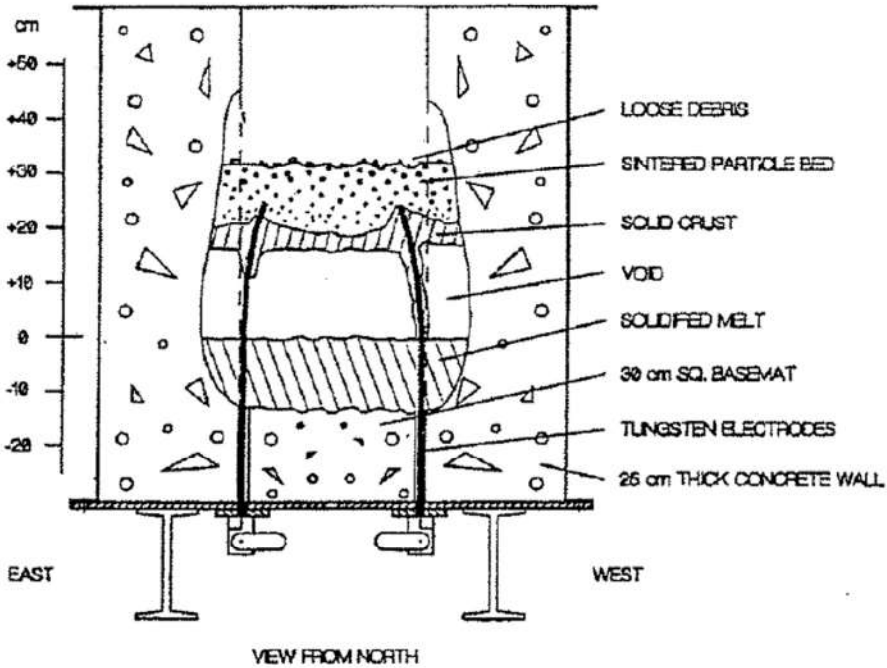
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>  <p>付図 2-4 MACE 及び OECD/MCCI 実験装置^[9]</p>	 <p>図 3.1-17 MACE 実験装置</p>	
	 <p>図 3.1-18 MACE-M0 実験での水への熱流束</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 172 810 196">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>  <p data-bbox="515 566 694 590">(軸方向侵食データ)</p>  <p data-bbox="504 957 750 981">(メルトから水への熱流束)</p>  <p data-bbox="504 1348 694 1372">(実験後状態の模式)</p> <p data-bbox="459 1396 750 1420">付図2-5 MACE-M3b 実験結果^[10]</p>	 <p data-bbox="1310 861 1489 885">VIEW FROM NORTH</p> <p data-bbox="1288 957 1747 981">図3.1-19 MACE-M0 実験後の溶融炉心模擬物の状況</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

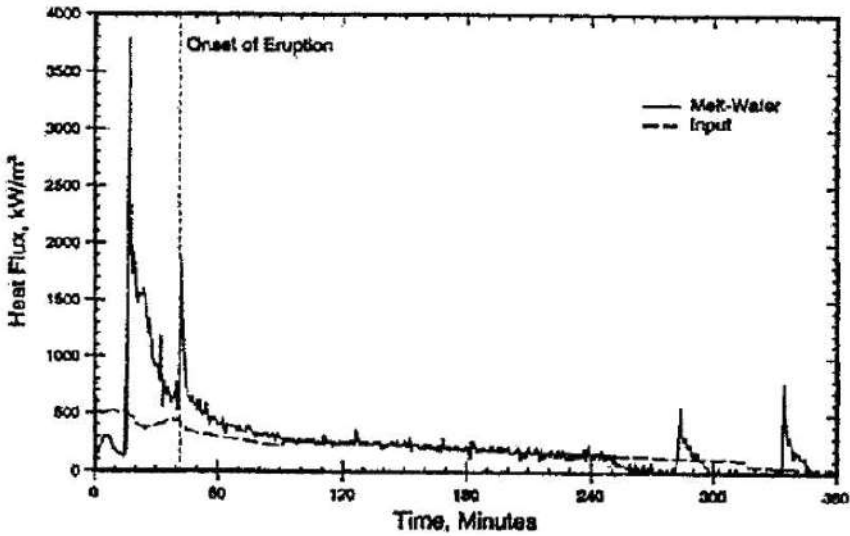
女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>Temperature, K</p> <p>Time, Minutes</p> <p>Junction Elevation: — 0.0 cm - - - 0.1 cm . . . 2.0 cm - . - . 0.0 cm - - - - 10.0 cm</p>	

図 3.1-20 MACE-M0 実験での溶融物温度変化

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1182 783 1839 807">図 3.1-21 MACE-M1b 実験における溶融炉心模擬物から水プールへの熱流束</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

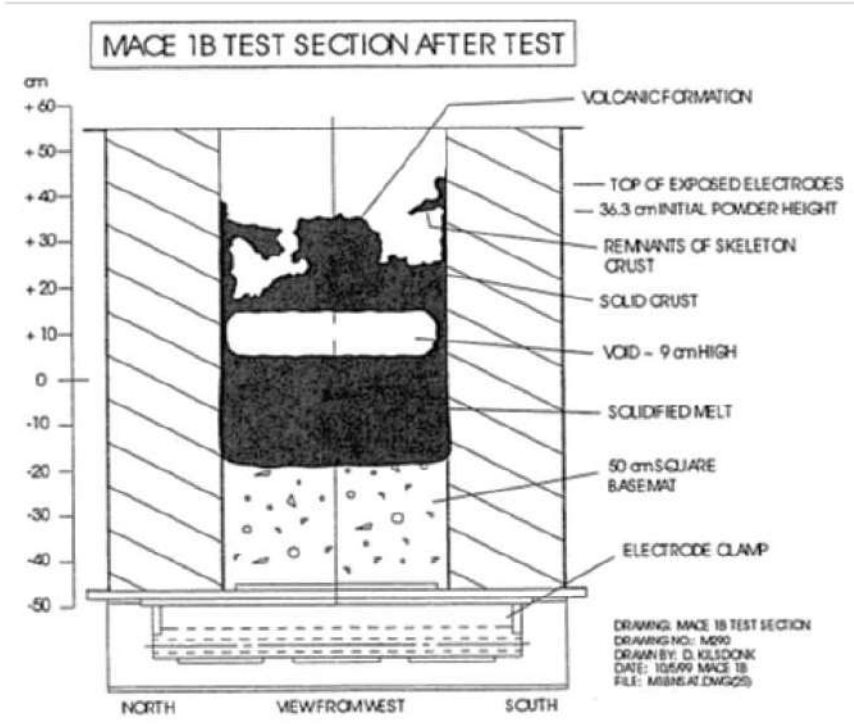
女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p>The diagram, titled 'MACE 1B TEST SECTION AFTER TEST', shows a vertical cross-section of a molten core. A vertical scale on the left indicates height in centimeters, ranging from -50 to +60. The core structure includes a 'VOLCANIC FORMATION' at the top, followed by 'TOP OF EXPOSED ELECTRODES' and a '36.3 cm INITIAL POWDER HEIGHT'. Below these are 'REMNANTS OF SKELETON CRUST' and 'SOLID CRUST'. A 'VOID - 9 cm HIGH' is present in the center. The lower part of the core is 'SOLIDIFIED MELT' above a '50 cm SQUARE BASEMAT'. An 'ELECTRODE CLAMP' is at the bottom. The diagram is labeled 'VIEW FROM WEST' and includes a north-south orientation. A small text box at the bottom right of the diagram contains: 'DRAWING: MACE 1B TEST SECTION', 'DRAWING NO.: M290', 'DRAWN BY: D. KILSDONK', 'DATE: 10/5/99 MACE 1B', 'FILE: M18N1AT.DWG(25)'.</p>	

図 3. 1-22 MACE-M1b 実験での実験後の溶融炉心の状態

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 3.1-23 MACE-M1b 実験での熔融物温度変化</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

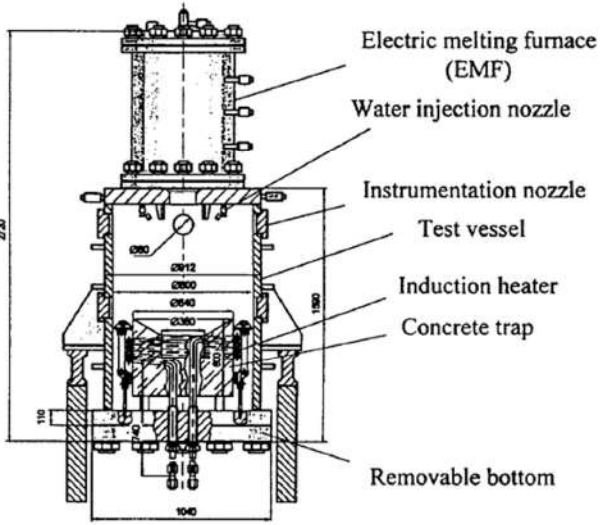
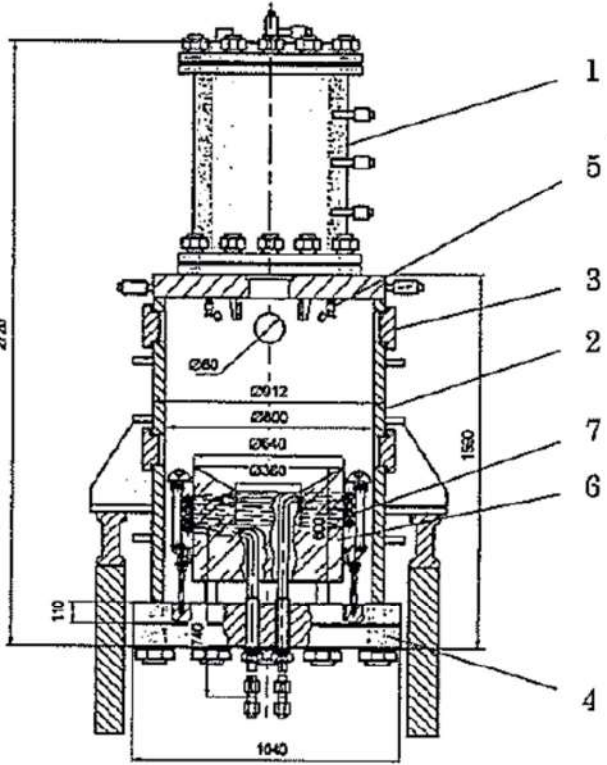
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉											相違理由																																																																																																																										
表 3.1-4 COTELS (B及びC) 実験条件一覧																																																																																																																																						
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 10%;">ケース (B及びC)</th> <th style="width: 5%;">5a</th> <th style="width: 5%;">5</th> <th style="width: 5%;">4</th> <th style="width: 5%;">2</th> <th style="width: 5%;">3</th> <th style="width: 5%;">10</th> <th style="width: 5%;">6</th> <th style="width: 5%;">7</th> <th style="width: 5%;">8</th> <th style="width: 5%;">9</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>溶融物タイプ</td> <td colspan="3" style="text-align: center;">B</td> <td colspan="2" style="text-align: center;">A</td> <td colspan="5" style="text-align: center;">B</td> </tr> <tr> <td>溶融物重量 (kg)</td> <td>47</td> <td>56</td> <td>53</td> <td>45</td> <td>46</td> <td>58</td> <td>56</td> <td>52</td> <td>42</td> <td>51</td> </tr> <tr> <td>溶融物出力 (kW)</td> <td>0</td> <td>150</td> <td>170</td> <td>155</td> <td>150</td> <td>150</td> <td>150</td> <td>150</td> <td>110-140</td> <td>150</td> </tr> <tr> <td>コンクリートトラップ径(m)</td> <td colspan="3" style="text-align: center;">0.26</td> <td colspan="7" style="text-align: center;">0.36</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">注水条件</td> <td>方式</td> <td>—</td> <td>Jet</td> <td>Jet</td> <td>Jet</td> <td>Jet</td> <td>Jet</td> <td>Jet</td> <td>Jet</td> <td>Spray</td> </tr> <tr> <td>質量流量 (kg/s)</td> <td>—</td> <td>0.02</td> <td>0.04</td> <td>0.03</td> <td>0.03</td> <td>0.03</td> <td>0.04</td> <td>0.03</td> <td>0.04</td> </tr> <tr> <td>開始時刻 (min)</td> <td>—</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>15</td> <td>9</td> <td>10</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td colspan="12"> 実験後の溶融物状態 デブリ粒子重量 (kg) (粒子化割合) 粒子径 16mm 以上 (kg) 粒子径 16mm 以下 (kg) 平均粒子径 (mm) 溶融炉心重量 (kg) </td> </tr> <tr> <td colspan="12"> 実験後のコンクリート状態 侵食量 (底面) (mm) 侵食量 (側面) (mm) 砂鏝深さ (mm) 変色深さ (mm) </td> </tr> <tr> <td colspan="12" style="text-align: center;"> 溶融物タイプ： A : UO₂-78wt%, SUS-5wt%, ZrO₂-17wt%, Zr-0wt% B : UO₂-55wt%, SUS-15wt%, ZrO₂-5wt%, Zr-25wt% </td> </tr> </tbody> </table>												ケース (B及びC)	5a	5	4	2	3	10	6	7	8	9	溶融物タイプ	B			A		B					溶融物重量 (kg)	47	56	53	45	46	58	56	52	42	51	溶融物出力 (kW)	0	150	170	155	150	150	150	150	110-140	150	コンクリートトラップ径(m)	0.26			0.36							注水条件	方式	—	Jet	Jet	Jet	Jet	Jet	Jet	Jet	Spray	質量流量 (kg/s)	—	0.02	0.04	0.03	0.03	0.03	0.04	0.03	0.04	開始時刻 (min)	—	8	8	8	8	15	9	10	10	実験後の溶融物状態 デブリ粒子重量 (kg) (粒子化割合) 粒子径 16mm 以上 (kg) 粒子径 16mm 以下 (kg) 平均粒子径 (mm) 溶融炉心重量 (kg)												実験後のコンクリート状態 侵食量 (底面) (mm) 侵食量 (側面) (mm) 砂鏝深さ (mm) 変色深さ (mm)												溶融物タイプ： A : UO ₂ -78wt%, SUS-5wt%, ZrO ₂ -17wt%, Zr-0wt% B : UO ₂ -55wt%, SUS-15wt%, ZrO ₂ -5wt%, Zr-25wt%												
ケース (B及びC)	5a	5	4	2	3	10	6	7	8	9																																																																																																																												
溶融物タイプ	B			A		B																																																																																																																																
溶融物重量 (kg)	47	56	53	45	46	58	56	52	42	51																																																																																																																												
溶融物出力 (kW)	0	150	170	155	150	150	150	150	110-140	150																																																																																																																												
コンクリートトラップ径(m)	0.26			0.36																																																																																																																																		
注水条件	方式	—	Jet	Jet	Jet	Jet	Jet	Jet	Jet	Spray																																																																																																																												
	質量流量 (kg/s)	—	0.02	0.04	0.03	0.03	0.03	0.04	0.03	0.04																																																																																																																												
	開始時刻 (min)	—	8	8	8	8	15	9	10	10																																																																																																																												
実験後の溶融物状態 デブリ粒子重量 (kg) (粒子化割合) 粒子径 16mm 以上 (kg) 粒子径 16mm 以下 (kg) 平均粒子径 (mm) 溶融炉心重量 (kg)																																																																																																																																						
実験後のコンクリート状態 侵食量 (底面) (mm) 侵食量 (側面) (mm) 砂鏝深さ (mm) 変色深さ (mm)																																																																																																																																						
溶融物タイプ： A : UO ₂ -78wt%, SUS-5wt%, ZrO ₂ -17wt%, Zr-0wt% B : UO ₂ -55wt%, SUS-15wt%, ZrO ₂ -5wt%, Zr-25wt%																																																																																																																																						

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

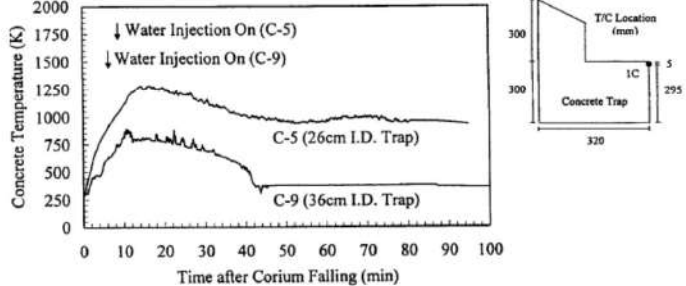
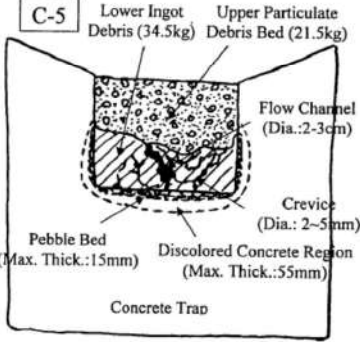
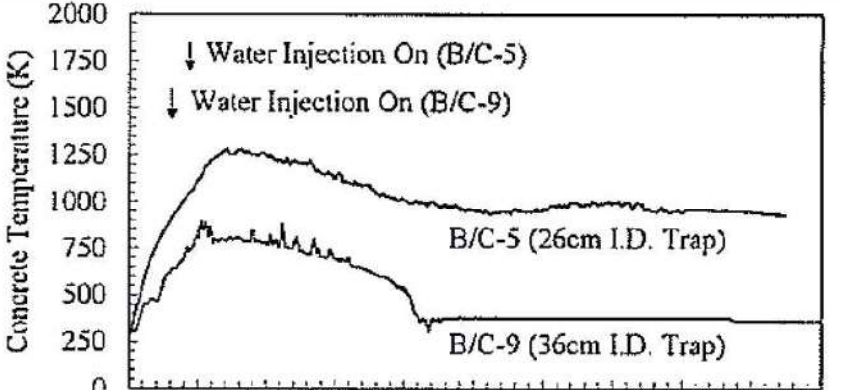
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 172 815 196">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>  <p data-bbox="241 783 965 807">付図2-7 COTELS 実験装置（コンクリート上のUO2 コリウムに注水する実験）^[11]</p>	 <p data-bbox="1211 975 1839 1070">1:EMF, 2:Test vessel, 3:Instrumentation nozzle, 4:Removable bottom, 5:Water injection nozzle, 6:Concrete trap, 7:Induction heater</p> <p data-bbox="1339 1161 1682 1185">図3.1-24 COTELS (B及びC) 実験装置</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 204 813 228">【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p>  <p data-bbox="465 595 678 619">(コンクリート床温度変化)</p>  <p data-bbox="488 1066 745 1090">(実験後のコリウム断面の模式図)</p> <p data-bbox="443 1121 768 1145">付図 2-8 COTELS C-5 実験の結果^[11]</p>	 <p data-bbox="1193 587 1742 611">Time after Corium Falling (min)</p> <p data-bbox="1227 754 1821 778">図 3.1-25 COTELS (B及びC) 実験におけるコンクリート温度挙動</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>Case (1a) : B/C-5</p> <p>Case (1b) : B/C-4</p> <p>Case (2) : B/C-3</p> <p>Case (3) : B/C-9</p>	

図 3.1-26 COTELS 実験での溶融物固化状態

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉												泊発電所3号炉									相違理由																																																																																																																					
【参考のため女川の第5部添付3付録3から抜粋】																																																																																																																																										
付表3-1 FARO 実験マトリックス ^[14]												表 3.1-5 FARO 実験条件及び結果一覧																																																																																																																														
FARO LWR test series—main experimental conditions and debris data																																																																																																																																										
Test:	L-06	L-08	L-11	L-14	L-19	L-20	L-24	L-27	L-28	L-29	L-31	L-33																																																																																																																														
Experimental conditions																																																																																																																																										
Corium composition ^a	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A																																																																																																																													
Melt mass ^b (kg)	18	44	151	125	157	96	177	117	175	39	92	100 ^c																																																																																																																														
Melt temperature (K)	2923	3023	2823	3123	3073	3173	3023	3023	3052	3070	2990	3070																																																																																																																														
Melt release diameter ^d (mm)	100	100	100	100	100	100	100	100	50	50	50	50																																																																																																																														
Melt fall height in gas (m)	1.83	1.53	1.09	1.04	1.99	1.12	1.07	0.73	0.89	0.74	0.77	0.77																																																																																																																														
System pressure (MPa)	5	5.8	5	5	5	2	0.5	0.5	0.5	0.2	0.2	0.4																																																																																																																														
Gas phase	Steam/Ar	Steam/Ar	Steam/Ar	Steam/Ar	Steam ^e	Steam ^e	Steam ^e	Steam ^e	Steam ^e	Argon	Argon	Argon																																																																																																																														
Water depth (m)	0.87	1.00	2.00	2.05	1.10	1.97	2.02	1.47	1.44	1.48	1.45	1.60																																																																																																																														
Water temperature (K)	530	536	535	537	536	486	425	424	424	297	291	293																																																																																																																														
Water subcooling (K)	0	12	2	0	1	0	0	1	1	97	104	124																																																																																																																														
Water Mass (kg)	120	255	608	623	330	660	719	536	517	492	481	625																																																																																																																														
Debris bed data ^f																																																																																																																																										
Hard debris, cake (kg, %)	6.33	14.32	0.0	20.16	77.49	21.22	27.16	26.23	77.48	39,100	0.0	8.8																																																																																																																														
Loose debris (kg, %)	12.67	30.68	146.100	105.84	80.51	73.78	141.94	70.77	84.52	0.0	83.100	89.92																																																																																																																														
Mean loose debris size (mm)	4.5	3.8	3.5	4.8	3.7	4.4	2.6	Na ^g	3.0	-	3.4	2.6 ^h																																																																																																																														
* A: 80 wt.% UO ₂ -20 wt.% ZrO ₂ ; B: 77 wt.% UO ₂ -19 wt.% ZrO ₂ -4 wt.% Zr.																																																																																																																																										
												<table border="1"> <thead> <tr> <th>実験 ID</th> <th>UO₂ 質量割合※</th> <th>溶融物質量 kg</th> <th>溶融物温度 K</th> <th>溶融物落下径 mm</th> <th>雰囲気圧力 MPa</th> <th>水深 m</th> <th>サブクール度 K</th> <th>水蒸気 爆発</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>L-06</td><td>0.8</td><td>18</td><td>2,923</td><td>100</td><td>5</td><td>0.87</td><td>0</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-08</td><td>0.8</td><td>44</td><td>3,023</td><td>100</td><td>5.8</td><td>1.00</td><td>12</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-11</td><td>0.77</td><td>151</td><td>2,823</td><td>100</td><td>5</td><td>2.00</td><td>2</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-14</td><td>0.8</td><td>125</td><td>3,123</td><td>100</td><td>5</td><td>2.05</td><td>0</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-19</td><td>0.8</td><td>157</td><td>3,073</td><td>100</td><td>5</td><td>1.10</td><td>1</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-20</td><td>0.8</td><td>96</td><td>3,173</td><td>100</td><td>2</td><td>1.97</td><td>0</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-24</td><td>0.8</td><td>176</td><td>3,023</td><td>100</td><td>0.5</td><td>2.02</td><td>0</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-27</td><td>0.8</td><td>129</td><td>3,023</td><td>100</td><td>0.5</td><td>1.47</td><td>1</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-28</td><td>0.8</td><td>175</td><td>3,052</td><td>50</td><td>0.5</td><td>1.44</td><td>1</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-29</td><td>0.8</td><td>39</td><td>3,070</td><td>50</td><td>0.2</td><td>1.48</td><td>97</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-31</td><td>0.8</td><td>92</td><td>2,990</td><td>50</td><td>0.2</td><td>1.45</td><td>104</td><td>なし</td></tr> <tr><td>L-33</td><td>0.8</td><td>100</td><td>3,070</td><td>50</td><td>0.2</td><td>1.60</td><td>124</td><td>なし</td></tr> </tbody> </table> <p>※ 0.8 の場合の組成は 80%UO₂+20%ZrO₂、0.77 の場合の組成は 77%UO₂+19%ZrO₂+4%Zr。</p>									実験 ID	UO ₂ 質量割合※	溶融物質量 kg	溶融物温度 K	溶融物落下径 mm	雰囲気圧力 MPa	水深 m	サブクール度 K	水蒸気 爆発	L-06	0.8	18	2,923	100	5	0.87	0	なし	L-08	0.8	44	3,023	100	5.8	1.00	12	なし	L-11	0.77	151	2,823	100	5	2.00	2	なし	L-14	0.8	125	3,123	100	5	2.05	0	なし	L-19	0.8	157	3,073	100	5	1.10	1	なし	L-20	0.8	96	3,173	100	2	1.97	0	なし	L-24	0.8	176	3,023	100	0.5	2.02	0	なし	L-27	0.8	129	3,023	100	0.5	1.47	1	なし	L-28	0.8	175	3,052	50	0.5	1.44	1	なし	L-29	0.8	39	3,070	50	0.2	1.48	97	なし	L-31	0.8	92	2,990	50	0.2	1.45	104	なし	L-33	0.8	100	3,070	50	0.2	1.60	124	なし	
実験 ID	UO ₂ 質量割合※	溶融物質量 kg	溶融物温度 K	溶融物落下径 mm	雰囲気圧力 MPa	水深 m	サブクール度 K	水蒸気 爆発																																																																																																																																		
L-06	0.8	18	2,923	100	5	0.87	0	なし																																																																																																																																		
L-08	0.8	44	3,023	100	5.8	1.00	12	なし																																																																																																																																		
L-11	0.77	151	2,823	100	5	2.00	2	なし																																																																																																																																		
L-14	0.8	125	3,123	100	5	2.05	0	なし																																																																																																																																		
L-19	0.8	157	3,073	100	5	1.10	1	なし																																																																																																																																		
L-20	0.8	96	3,173	100	2	1.97	0	なし																																																																																																																																		
L-24	0.8	176	3,023	100	0.5	2.02	0	なし																																																																																																																																		
L-27	0.8	129	3,023	100	0.5	1.47	1	なし																																																																																																																																		
L-28	0.8	175	3,052	50	0.5	1.44	1	なし																																																																																																																																		
L-29	0.8	39	3,070	50	0.2	1.48	97	なし																																																																																																																																		
L-31	0.8	92	2,990	50	0.2	1.45	104	なし																																																																																																																																		
L-33	0.8	100	3,070	50	0.2	1.60	124	なし																																																																																																																																		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p> <p>付図 3-1 FARO 実験装置 (L-27 実験) [14]</p>	<p>図 3.1-27 FARO 実験装置</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

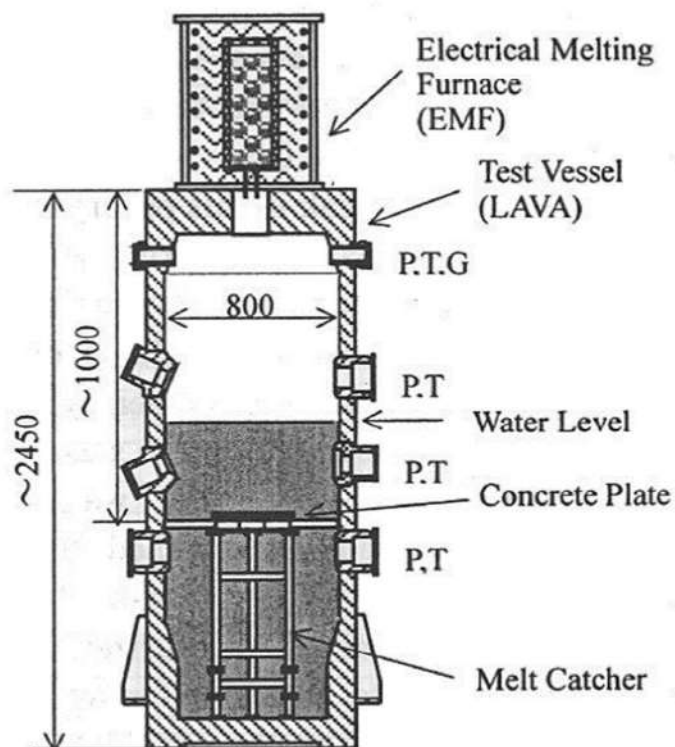
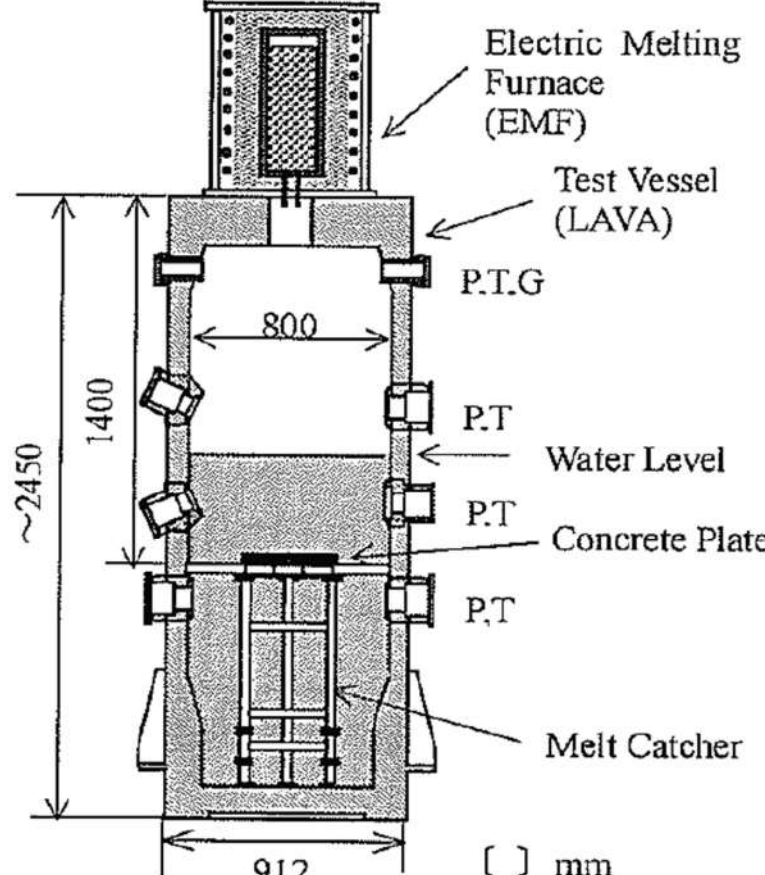
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉										泊発電所3号炉								相違理由
【参考のため女川の第5部添付3付録3から抜粋】																		
付表3-2 COTELS-FCI 実験マトリックス ^[1]										表3.1-6 COTELS (A) 実験条件及び結果一覧								
Run No.	A1	A4	A5	A6	A7	A8	A9	A10	A11	実験ID	UO ₂ 割合※	溶融物質量kg	溶融物温度K	雰囲気圧力MPa	水深m	サブクール度K	水蒸気爆発	
コリウム組成(*1)	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A-1	0.55	56.30	3,050	0.20	0.4	0	—	
落下コリウム量, kg	56.3	27.0	55.4	53.1	24.9	47.7	57.1	55.0	53	A-4	0.55	27.00	3,050	0.30	0.4	8	—	
プール水深, m	0.4	0.4	0.4	0.4	1.0	0.4	0.9	0.4	0.8	A-5	0.55	55.40	3,050	0.25	0.4	12	—	
水サブクール度, K	0	8	12	21	0	21	0	21	86	A-6	0.55	53.10	3,050	0.21	0.4	21	—	
初気圧, MPa	0.20	0.30	0.25	0.21	0.18	0.45	0.21	0.47	0.27	A-8	0.55	47.70	3,050	0.45	0.4	24	—	
雰囲気ガス組成	Steam	Steam	Steam N ₂ 20%	Steam	Steam	Steam	Steam	Steam	Ar	A-9	0.55	57.10	3,050	0.21	0.9	0	—	
差圧, MPa (*2)	0.03	0.03	0.01	-0	-0	0.67(*3)	0.02	0.14	0.13	A-10	0.55	55.00	3,050	0.47	0.4	21	—	
ピーク圧力, MPa	1.34	1.04	0.62	0.88	(*4)	1.83	0.92	3.85	1.08	A-11	0.55	53.00	3,050	0.27	0.8	86	—	
インコトコリウム, kg	5	2.5	4.2	6.5	0	0	3.8	0	4									
質量中央径, mm	6.7	6.2	7.5	7.2	8.2	5.2	7.0	0.38	4.8									
*1)コリウム組成 B: UO ₂ :55wt%+Zr:25%+ZrO ₂ :5%+SS:15%										※ いずれも UO ₂ : 55wt%、Zr: 25wt%、ZrO ₂ : 5wt%、SS: 15wt%の混合物								

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

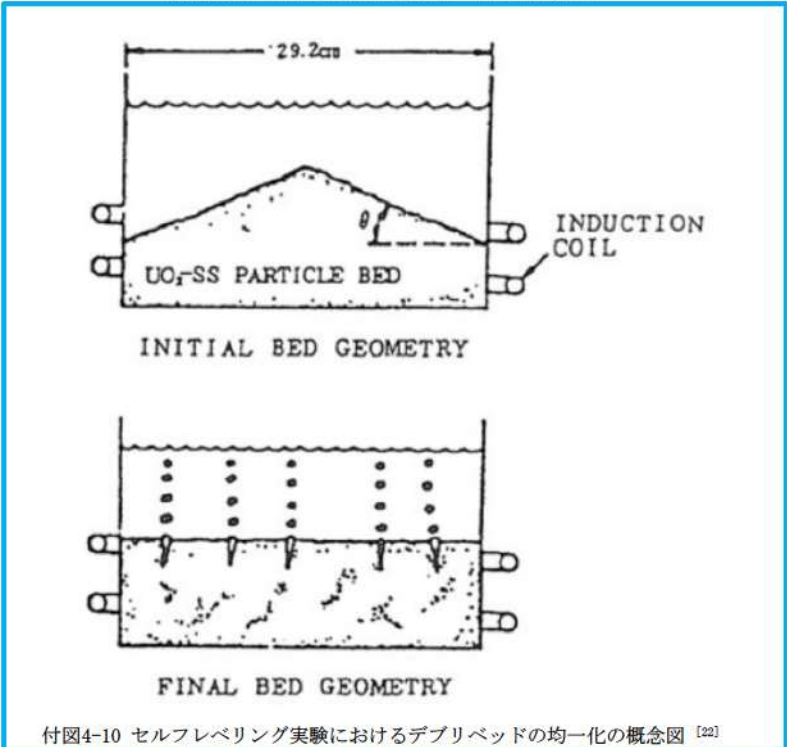
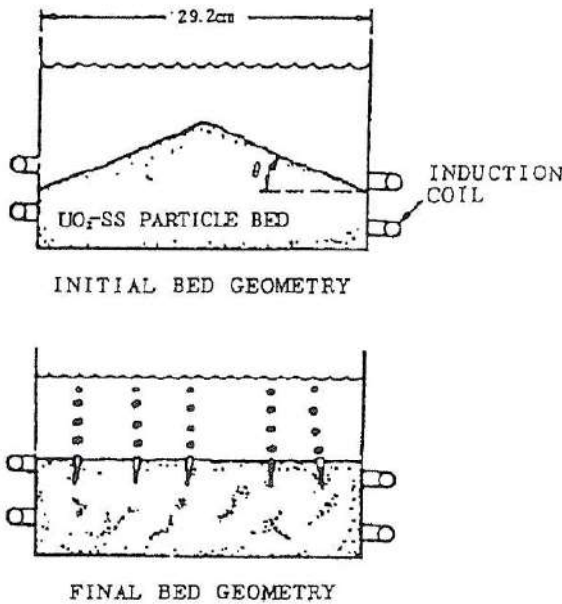
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録3から抜粋】</p>  <p>〔 〕 mm P: Pressure, T: Temperature, G: Gas sampling line</p> <p>付図 3-4 COTELS-FCI 実験装置^[16]</p>	 <p>〔 〕 mm P: Pressure, T: Temperature, G: Gas sampling line</p> <p>図 3.1-28 COTELS (A) 実験装置</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

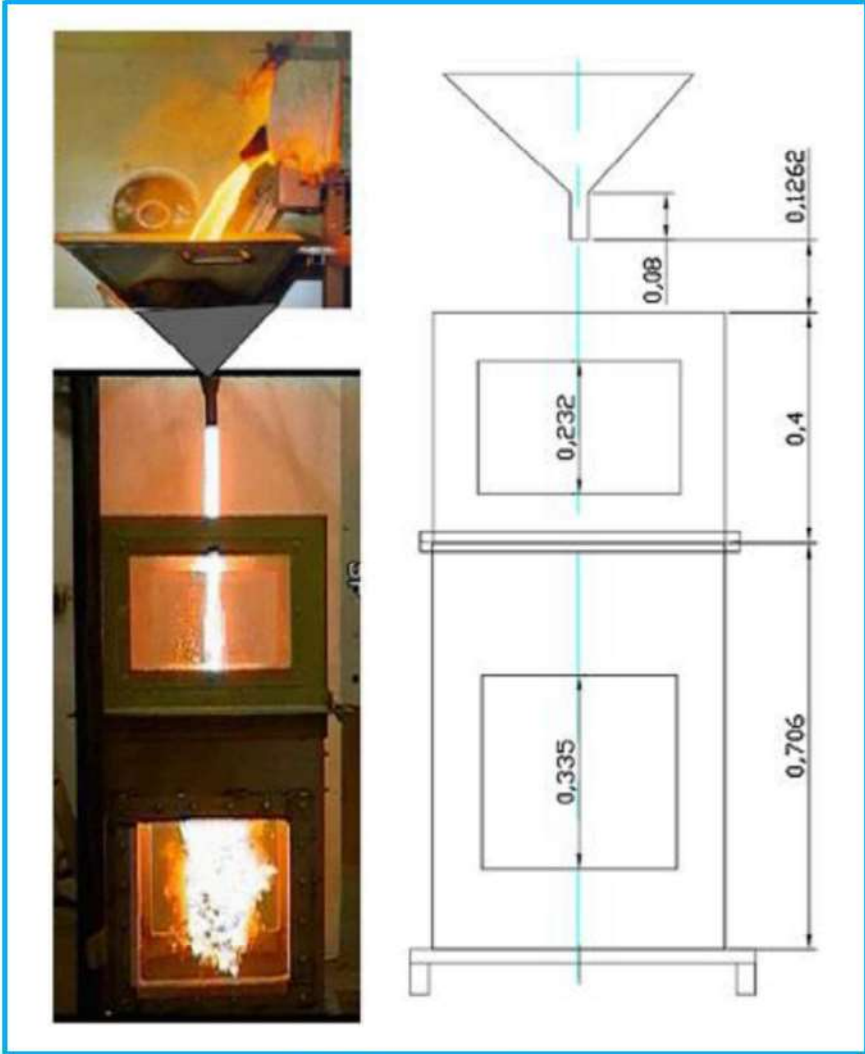
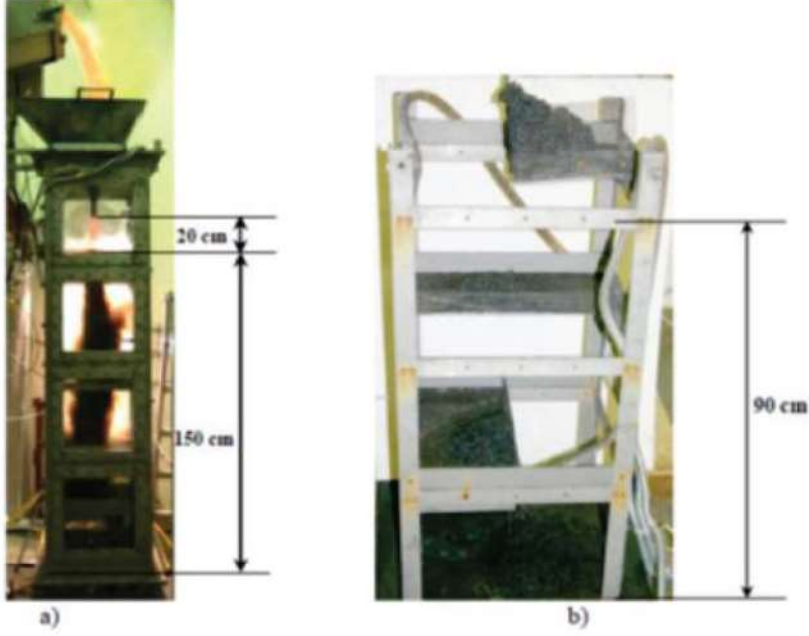
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由																																																																								
<p data-bbox="481 135 705 159">女川原子力発電所2号炉</p> <p data-bbox="376 614 817 638">【参考のため女川の第5部添付3付録4から抜粋】</p>  <p data-bbox="257 1364 936 1388">付図4-10 セルフレベリング実験におけるデブリベッドの均一化の概念図 [22]</p>	<p data-bbox="1321 167 1691 191">表 3.1-7 セルフレベリング実験条件一覧</p> <table border="1" data-bbox="1070 215 1921 502"> <thead> <tr> <th>Run</th> <th>Container ID, cm</th> <th>Bed Material</th> <th>Generator, kw</th> <th>Initial Height at Center, cm</th> <th>Initial Height at Wall, cm</th> <th>Final Height at Center, cm</th> <th>Final Height at Wall, cm</th> <th>Boiling Heat Flux, cal/sec·cm²</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>11.4</td> <td>590-840 μ SS</td> <td>15</td> <td>6.4</td> <td>3.8</td> <td>5.1</td> <td>4.4</td> <td>...</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>11.4</td> <td>210-1000 + μ Cu</td> <td>15</td> <td>7.6</td> <td>4.4</td> <td>6.0</td> <td>5.7</td> <td>...</td> </tr> <tr> <td>3*</td> <td>11.4</td> <td>50-50 vol.% UO₂-SS</td> <td>15</td> <td>7.6</td> <td>5.1</td> <td>6.0</td> <td>6.0</td> <td>0.55</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>16.2</td> <td>210-1000 + μ Cu</td> <td>15</td> <td>9.2</td> <td>6.0</td> <td>7.6</td> <td>7.4</td> <td>...</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>29.2</td> <td>210-1000 + μ Cu</td> <td>100</td> <td>12.1</td> <td>3.2</td> <td>7.6</td> <td>5.7</td> <td>0.79</td> </tr> <tr> <td>6**</td> <td>29.2</td> <td>50-50 vol.% UO₂-SS</td> <td>100</td> <td>8.9</td> <td>3.8</td> <td>6.4</td> <td>6.2</td> <td>1.20</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="1120 518 1680 598"> [註] 傾斜角の変化（初期） (2~3分後) <table border="1" data-bbox="1456 518 1680 598"> <thead> <tr> <th></th> <th>Run 3^(*)</th> <th>Run 5^(**)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>傾斜角の変化（初期）</td> <td>23.7°</td> <td>19.3°</td> </tr> <tr> <td>(2~3分後)</td> <td>0.0°</td> <td>0.8°</td> </tr> </tbody> </table> </p>  <p data-bbox="1265 1364 1780 1388">図 3.1-29 セルフレベリング実験における粒子ベッド概念</p>	Run	Container ID, cm	Bed Material	Generator, kw	Initial Height at Center, cm	Initial Height at Wall, cm	Final Height at Center, cm	Final Height at Wall, cm	Boiling Heat Flux, cal/sec·cm ²	1	11.4	590-840 μ SS	15	6.4	3.8	5.1	4.4	...	2	11.4	210-1000 + μ Cu	15	7.6	4.4	6.0	5.7	...	3*	11.4	50-50 vol.% UO ₂ -SS	15	7.6	5.1	6.0	6.0	0.55	4	16.2	210-1000 + μ Cu	15	9.2	6.0	7.6	7.4	...	5	29.2	210-1000 + μ Cu	100	12.1	3.2	7.6	5.7	0.79	6**	29.2	50-50 vol.% UO ₂ -SS	100	8.9	3.8	6.4	6.2	1.20		Run 3 ^(*)	Run 5 ^(**)	傾斜角の変化（初期）	23.7°	19.3°	(2~3分後)	0.0°	0.8°	
Run	Container ID, cm	Bed Material	Generator, kw	Initial Height at Center, cm	Initial Height at Wall, cm	Final Height at Center, cm	Final Height at Wall, cm	Boiling Heat Flux, cal/sec·cm ²																																																																		
1	11.4	590-840 μ SS	15	6.4	3.8	5.1	4.4	...																																																																		
2	11.4	210-1000 + μ Cu	15	7.6	4.4	6.0	5.7	...																																																																		
3*	11.4	50-50 vol.% UO ₂ -SS	15	7.6	5.1	6.0	6.0	0.55																																																																		
4	16.2	210-1000 + μ Cu	15	9.2	6.0	7.6	7.4	...																																																																		
5	29.2	210-1000 + μ Cu	100	12.1	3.2	7.6	5.7	0.79																																																																		
6**	29.2	50-50 vol.% UO ₂ -SS	100	8.9	3.8	6.4	6.2	1.20																																																																		
	Run 3 ^(*)	Run 5 ^(**)																																																																								
傾斜角の変化（初期）	23.7°	19.3°																																																																								
(2~3分後)	0.0°	0.8°																																																																								

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表




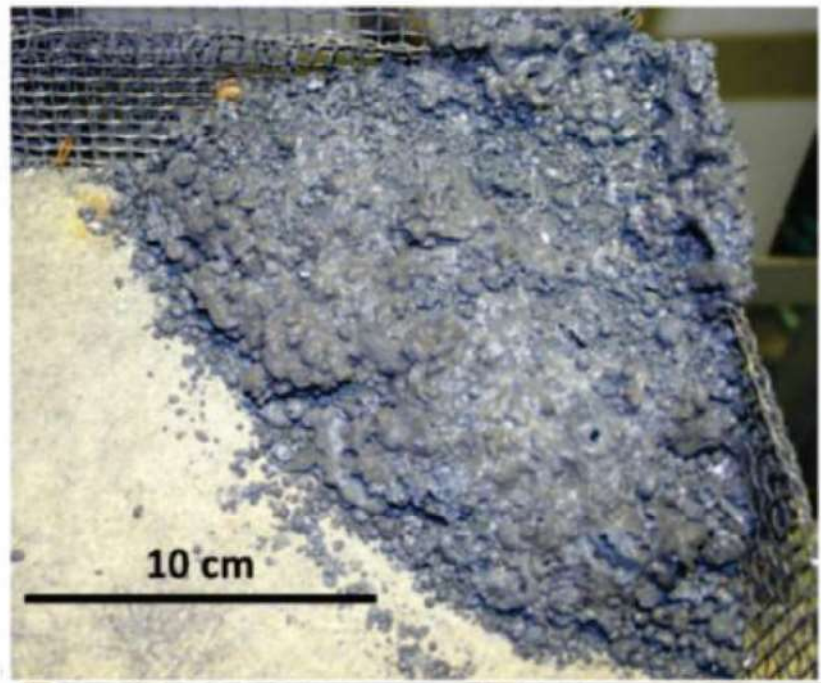
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 204 815 231">【参考のため女川の第5部添付3付録4から抜粋】</p>  <p data-bbox="459 1292 728 1316">付図 3-5 DEFOR-E 実験装置^[16]</p>	 <p data-bbox="1254 917 1758 941">図 3.1-30 DEFOR 試験装置全体及び溶融炉心キャッチャー</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由																																																																																																																																																																			
【参考のため女川の第5部添付3付録4から抜粋】																																																																																																																																																																					
付表 3-3 DEFOR-E 実験マトリックス ^[16]	表 3.1-8 DEFOR-A 実験の実験条件																																																																																																																																																																				
<p>Experimental conditions and the measured porosity in the DEFOR-E tests.</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">Parameter/property</th> <th colspan="7">No.</th> </tr> <tr> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>5</th> <th>6</th> <th>7</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Melt volume, l</td> <td>3.5</td> <td>7.0</td> <td>3.5</td> <td>3.5</td> <td>3.5</td> <td>3.5</td> <td>2.5</td> </tr> <tr> <td>Melt initial temp., °C</td> <td>1200</td> <td>1300</td> <td>1350</td> <td>1350</td> <td>1200</td> <td>1250</td> <td>1280</td> </tr> <tr> <td>Coolant volume, l</td> <td>163</td> <td>163</td> <td>163</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>163</td> <td>163</td> </tr> <tr> <td>Coolant initial temp., °C</td> <td>13</td> <td>11</td> <td>85</td> <td>15</td> <td>83</td> <td>88</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>Water pool depth, cm</td> <td>65</td> <td>65</td> <td>65</td> <td>40</td> <td>40</td> <td>65</td> <td>65</td> </tr> <tr> <td>Measured porosity, %</td> <td>60</td> <td>77</td> <td>74</td> <td>56</td> <td>50</td> <td>68</td> <td>65</td> </tr> </tbody> </table>	Parameter/property	No.							1	2	3	4	5	6	7	Melt volume, l	3.5	7.0	3.5	3.5	3.5	3.5	2.5	Melt initial temp., °C	1200	1300	1350	1350	1200	1250	1280	Coolant volume, l	163	163	163	100	100	163	163	Coolant initial temp., °C	13	11	85	15	83	88	7	Water pool depth, cm	65	65	65	40	40	65	65	Measured porosity, %	60	77	74	56	50	68	65	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>単位</th> <th>A1</th> <th>A2</th> <th>A4</th> <th>A5</th> <th>A6</th> <th>A7</th> <th>A8</th> <th>A9</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>溶融物温度</td> <td>K</td> <td>1,253</td> <td>1,246</td> <td>1,221</td> <td>1,245</td> <td>1,279</td> <td>1,349</td> <td>1,255</td> <td>1,343</td> </tr> <tr> <td>溶融物過熱度</td> <td>K</td> <td>110</td> <td>103</td> <td>78</td> <td>102</td> <td>136</td> <td>206</td> <td>112</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td>ジェット初期径</td> <td>mm</td> <td>10</td> <td>20</td> <td>20</td> <td>10</td> <td>12</td> <td>25</td> <td>25</td> <td>20</td> </tr> <tr> <td>溶融物の注入時間</td> <td>s</td> <td>38</td> <td>11</td> <td>11</td> <td>38</td> <td>20</td> <td>10</td> <td>10</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>溶融物注入高さ</td> <td>m</td> <td>1.7</td> <td>1.7</td> <td>1.7</td> <td>1.7</td> <td>1.7</td> <td>1.62</td> <td>1.62</td> <td>1.7</td> </tr> <tr> <td>水面までの距離</td> <td>m</td> <td>0.18</td> <td>0.18</td> <td>0.2</td> <td>0.18</td> <td>0.18</td> <td>0.2</td> <td>0.2</td> <td>0.18</td> </tr> <tr> <td>水プール深さ</td> <td>m</td> <td>1.52</td> <td>1.52</td> <td>1.5</td> <td>1.52</td> <td>1.52</td> <td>1.42</td> <td>1.42</td> <td>1.52</td> </tr> <tr> <td>水プール初期温度</td> <td>K</td> <td>346</td> <td>367</td> <td>346</td> <td>364</td> <td>346</td> <td>356</td> <td>355</td> <td>355</td> </tr> <tr> <td>水プールサブクール度</td> <td>K</td> <td>27</td> <td>7</td> <td>27</td> <td>9</td> <td>27</td> <td>17</td> <td>18</td> <td>18</td> </tr> </tbody> </table>		単位	A1	A2	A4	A5	A6	A7	A8	A9	溶融物温度	K	1,253	1,246	1,221	1,245	1,279	1,349	1,255	1,343	溶融物過熱度	K	110	103	78	102	136	206	112	200	ジェット初期径	mm	10	20	20	10	12	25	25	20	溶融物の注入時間	s	38	11	11	38	20	10	10	11	溶融物注入高さ	m	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.62	1.62	1.7	水面までの距離	m	0.18	0.18	0.2	0.18	0.18	0.2	0.2	0.18	水プール深さ	m	1.52	1.52	1.5	1.52	1.52	1.42	1.42	1.52	水プール初期温度	K	346	367	346	364	346	356	355	355	水プールサブクール度	K	27	7	27	9	27	17	18	18	
Parameter/property		No.																																																																																																																																																																			
	1	2	3	4	5	6	7																																																																																																																																																														
Melt volume, l	3.5	7.0	3.5	3.5	3.5	3.5	2.5																																																																																																																																																														
Melt initial temp., °C	1200	1300	1350	1350	1200	1250	1280																																																																																																																																																														
Coolant volume, l	163	163	163	100	100	163	163																																																																																																																																																														
Coolant initial temp., °C	13	11	85	15	83	88	7																																																																																																																																																														
Water pool depth, cm	65	65	65	40	40	65	65																																																																																																																																																														
Measured porosity, %	60	77	74	56	50	68	65																																																																																																																																																														
	単位	A1	A2	A4	A5	A6	A7	A8	A9																																																																																																																																																												
溶融物温度	K	1,253	1,246	1,221	1,245	1,279	1,349	1,255	1,343																																																																																																																																																												
溶融物過熱度	K	110	103	78	102	136	206	112	200																																																																																																																																																												
ジェット初期径	mm	10	20	20	10	12	25	25	20																																																																																																																																																												
溶融物の注入時間	s	38	11	11	38	20	10	10	11																																																																																																																																																												
溶融物注入高さ	m	1.7	1.7	1.7	1.7	1.7	1.62	1.62	1.7																																																																																																																																																												
水面までの距離	m	0.18	0.18	0.2	0.18	0.18	0.2	0.2	0.18																																																																																																																																																												
水プール深さ	m	1.52	1.52	1.5	1.52	1.52	1.42	1.42	1.52																																																																																																																																																												
水プール初期温度	K	346	367	346	364	346	356	355	355																																																																																																																																																												
水プールサブクール度	K	27	7	27	9	27	17	18	18																																																																																																																																																												
 <p>DEFOR- E1</p>  <p>DEFOR- E4</p>  <p>DEFOR- E7</p> <p>付図 3-6 DEFOR-E 実験後のデブリ状態^[16]</p>	 <p>10 cm</p>																																																																																																																																																																				
	図 3.1-31 DEFOR-A8 キャッチャー1のケーキ状溶融炉心																																																																																																																																																																				

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

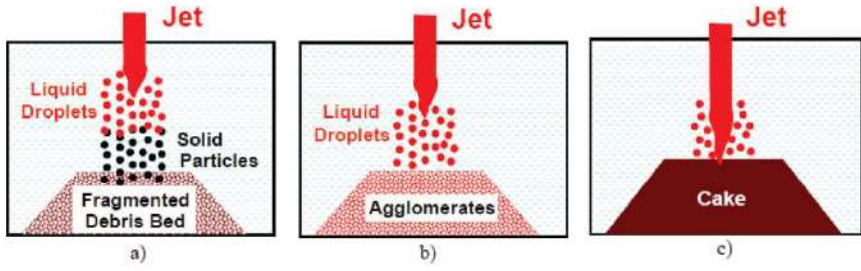
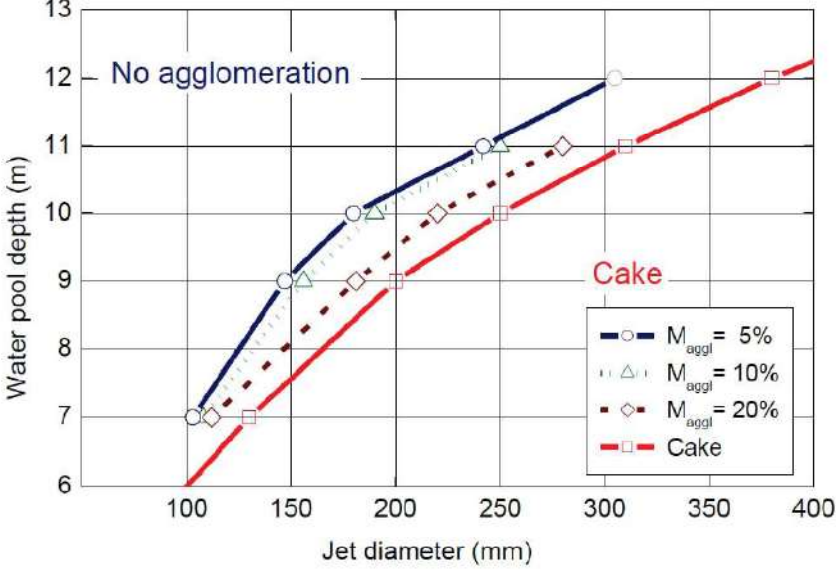
泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由

図 3.1-32 DEFOR-A 実験結果

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1294 513 1742 539">図 3. 1-33 DEFOR 実験における溶融物凝集の概念図</p>  <p data-bbox="1209 1264 1832 1289">図 3. 1-34 スウェーデン王立工科大学 (KTH) による凝集モードマップ</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉

泊発電所3号炉

相違理由

【参考のため掲載順を入替え】

付表2-3 CCI実験（二次元コンクリート侵食実験）条件一覧^[12]

表3.1-9 CCI実験の主要実験条件

Parameter	Specification for Test:		
	CCI-1	CCI-2	CCI-3
Corium	PWR + 8 wt% SIL	PWR + 8 wt% LCS	PWR + 15 wt% SIL
Concrete type*	SIL (US-type)	LCS	SIL (EU-type)
Basemat cross-section	50 cm x 50 cm	50 cm x 50 cm	50 cm x 50 cm
Initial melt mass (depth)	400 kg (25 cm)	400 kg (25 cm)	375 kg (25 cm)
Test section sidewall construction	Nonelectrode walls: concrete Electrode walls: Inert	Nonelectrode walls: concrete Electrode walls: Inert	Nonelectrode walls: concrete Electrode walls: Inert
Lateral/Axial ablation limit	35/35 cm	35/35 cm	35/35 cm
System pressure	Atmospheric	Atmospheric	Atmospheric
Melt formation tech.	Chemical reaction (~30 s)	Chemical reaction (~30 s)	Chemical reaction (~30 s)
Initial melt temperature	1950 °C	1880 °C	1950 °C
Melt heating technique	DEH	DEH	DEH
Power supply operation prior to water addition	Constant @ 150 kW	Constant @ 120 kW	Constant @ 120 kW
Criteria for water addition	1) 5.5 hours of operation with DEH input, or 2) lateral/axial ablation reaches 30 cm	1) 5.5 hours of operation with DEH input, or 2) lateral/axial ablation reaches 30 cm	1) 5.5 hours of operation with DEH input, or 2) lateral/axial ablation reaches 30 cm
Inlet water flowrate/temp.	2 lps/20 °C	2 lps/20 °C	2 lps/20 °C
Water depth over melt	50 ± 5 cm	50 ± 5 cm	50 ± 5 cm
Power supply operation after water addition	Constant voltage	Constant voltage	Constant voltage
Test termination criteria	1) Melt temperature falls below concrete solidus, 2) ablation is arrested, or 3) 35 cm ablation limit is reached.	1) Melt temperature falls below concrete solidus, 2) ablation is arrested, or 3) 35 cm ablation limit is reached.	1) Melt temperature falls below concrete solidus, 2) ablation is arrested, or 3) 35 cm ablation limit is reached.
Operational Summary	Successful: non-symmetrical ablation behavior	Successful: symmetrical ablation behavior	Successful: symmetrical ablation behavior

	CCI-1	CCI-2	CCI-3
溶融物	PWR+8% concrete	同左	PWR+15% concrete
コンクリートタイプ	珪岩質系	石灰岩系	珪岩質系
溶融物重量	400kg	同左	375kg
圧力	大気圧	同左	同左
初期溶融物温度	1,950°C	1,880°C	1,950°C
直接電気加熱量	150kW	120kW	120kW
注水条件	加熱後 5.5 時間ある いは 30cm 侵食	同左	同左
注水量、温度	2 liters/秒、20°C	同左	同左
注水停止条件	50cm ± 5cm	同左	同左

*SIL denotes siliceous concrete, LCS denotes Limestone/Common Sand concrete.

付表2-4 CCI 実験に使用されたコンクリートの組成^[12]

表3.1-10 CCI実験に使用されたコンクリートの組成

Oxide	CCI-1 Wt%	CCI-2 Wt%	CCI-3 Wt%
Al ₂ O ₃	0.77	2.49	3.53
CaO	8.54	25.88	16.79
Fe ₂ O ₃	0.79	1.39	1.49
MgO	0.60	11.47	0.85
MnO	0.00	0.03	0.04
K ₂ O	0.12	0.55	0.81
SiO ₂	82.48	21.61	59.91
Na ₂ O	0.00	0.31	0.66
SrO	0.00	0.00	0.04
TiO ₂	0.051	0.135	0.155
SO ₃	0.514	0.505	0.434
CO ₂	0.901	29.71	9.80
H ₂ O, Free	1.808	3.255	2.293
H ₂ O, Bound	1.92	1.11	1.40
Total	98.48	98.47	98.19

Oxide	CCI-1 Wt%	CCI-2 Wt%	CCI-3 Wt%
Al ₂ O ₃	0.77	2.49	3.53
CaO	8.54	25.88	16.79
Fe ₂ O ₃	0.79	1.39	1.49
MgO	0.60	11.47	0.85
MnO	0.00	0.03	0.04
K ₂ O	0.12	0.55	0.81
SiO ₂	82.48	21.61	59.91
Na ₂ O	0.00	0.31	0.66
SrO	0.00	0.00	0.04
TiO ₂	0.051	0.135	0.155
SO ₃	0.514	0.505	0.434
CO ₂	0.901	29.71	9.80
H ₂ O, Free	1.808	3.255	2.293
H ₂ O, Bound	1.92	1.11	1.40
Total	98.48	98.47	98.19

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

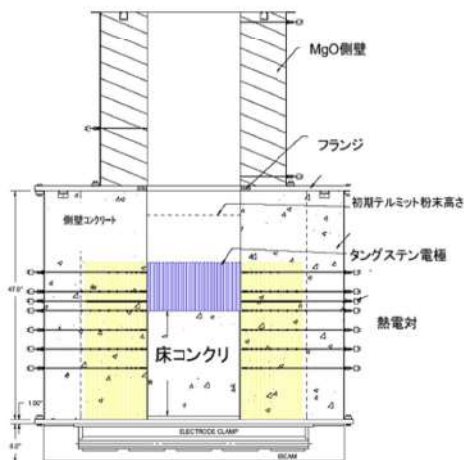
女川原子力発電所2号炉

【参考のため掲載順を入替え】

付表 2-5 C C I 実験の側壁方向/床方向の侵食率と熱流束の推定値^[12]

Test	Concr. Type	Lateral Ablation		Axial Ablation		Lateral -Axial Heat Flux Ratio	Data Points Utilized for Ablation Rate Estimates
		Ablation Rate (cm/hr)	Heat Flux (kW/m ²)	Ablation Rate (cm/hr)	Heat Flux (kW/m ²)		
CCI-1	SIL (US)	N: 39.1	395	26.1	265	- ^a	N Lateral: (19.1 cm, 51 min) (29.2 cm, 66 min) S Lateral: (7.6 cm, 54 min) (5.1 cm, 35 min) Axial: (7.6 cm, 53 min) (1.3 cm, 39 min)
		S: 8.4	86				
CCI-2	LCS	4.0	58	4.0	59	1.0	Lateral: (19.1 cm, 148 min) (29.2 cm, 302 min) Axial: (15.2 cm, 107 min) (24.1 cm, 240 min)
CCI-3	SIL (EU)	10.0	97	2.5	25	4.0	Lateral: (19.1 cm, 47 min) (29.2 cm, 107 min) Axial: (2.5 cm, 117 min) (5.1 cm, 178 min)

^aHeat flux ratio not evaluated for this test due to large asymmetry in lateral cavity erosion.



付図 2-13 C C I 実験のテスト部^[12]

泊発電所3号炉

表 3. 1-11 CCI 実験の 15-25 分における水への熱流束

Table 3-7. Debris-Water Heat Fluxes for CCI Tests Averaged Over the Time Interval 15-25 Minutes after Cavity Flooding.

Test	Concrete Type	Heat Flux (kW/m ²)	Concrete Gas Content (Wt %)	Crust Concrete Content (Wt %)	Note(s)
CCI-1	SIL (US)	250	4.6	22.3	Assumed heat transfer surface area: 0.25 m ² (PTE indicates that water did not penetrate sidewall crusts to cool the top surface of the corium interacting with the sidewalls).
CCI-2	LCS	650	34.1	69.4	Assumed surface heat transfer area: 0.50 m ² (PTE indicates that water was able to contact the entire melt upper surface area). Water ingress at the interface between the corium and concrete walls also contributed to cooling, but this effect has not been separated from the overall heat flux estimate.
CCI-3	SIL (EU)	500	13.5	47.8	See Note for Test CCI-1.

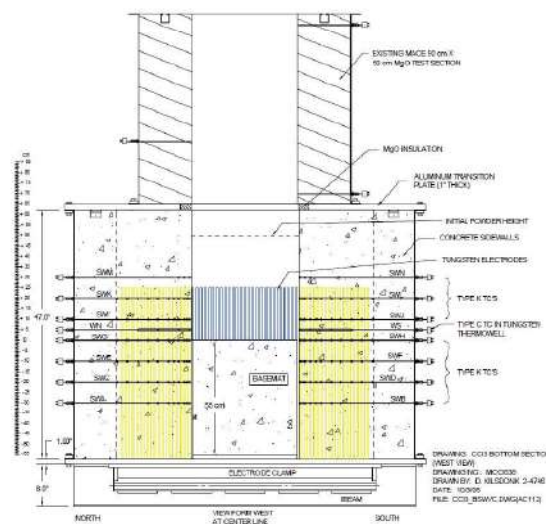
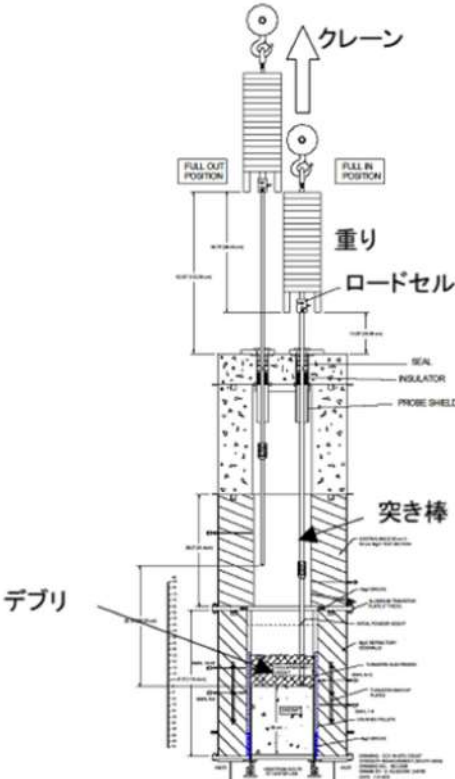
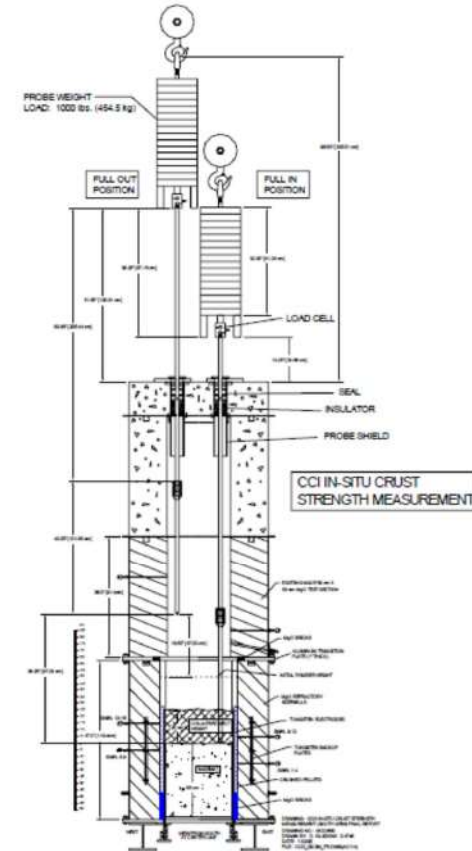


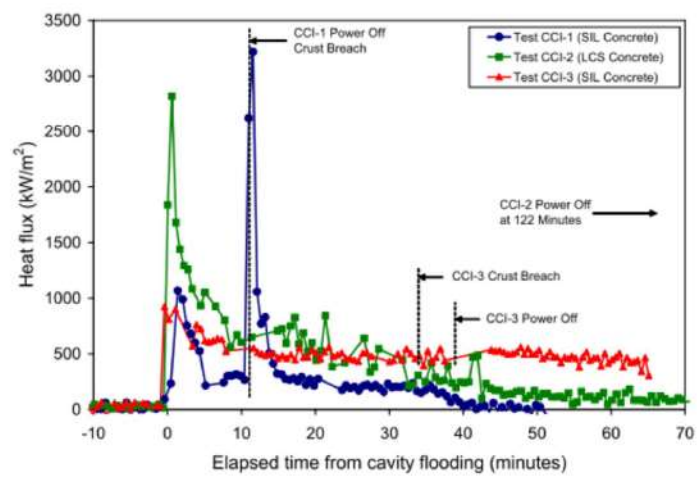
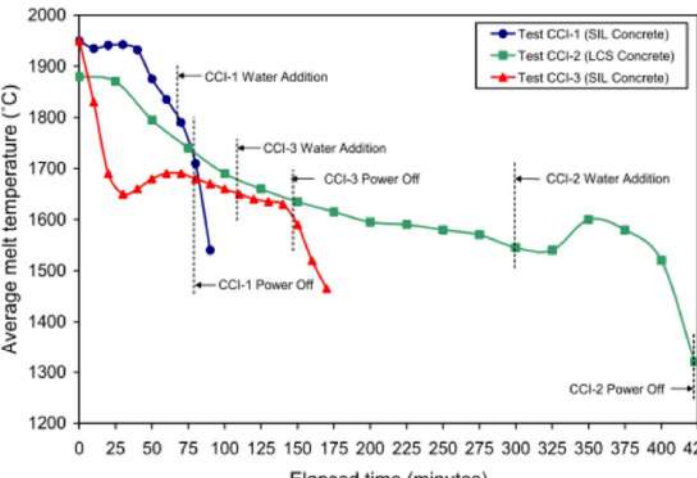
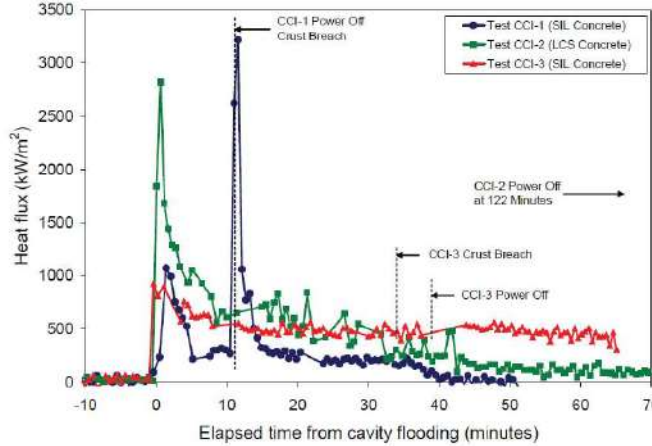
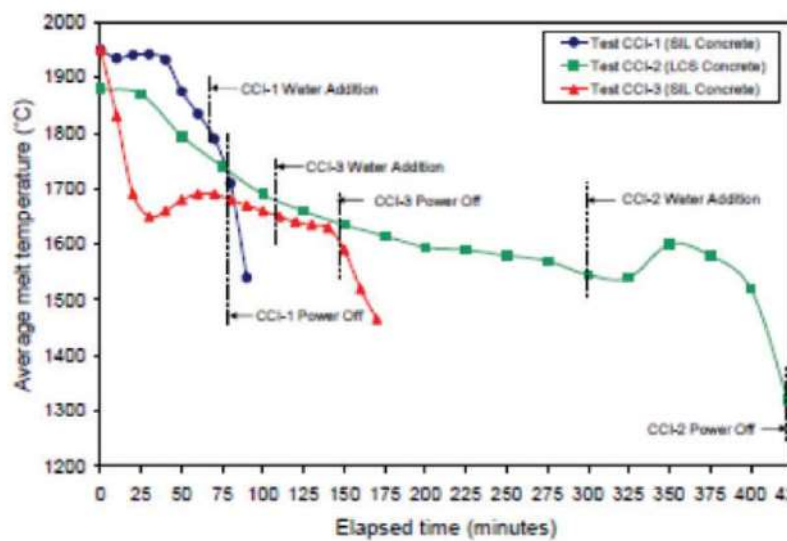
図 3. 1-35 CCI 実験装置

相違理由

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="477 204 734 228">【参考のため掲載順を入替え】</p>  <p data-bbox="280 1125 913 1149">付図 2-14 長期二次元侵食実験におけるクラスト破壊/強度測定装置^[41]</p>	 <p data-bbox="1265 1125 1780 1149">図 3.1-36 CCI 実験におけるクラスト破壊/強度測定装置</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため掲載順を入替え】</p>  <p>付図 2-15 C C I 実験におけるデブリー水間の熱流束 [12]</p>  <p>付図 2-16 C C I 実験における溶融物平均温度 [12]</p>	 <p>図 3.1-37 CCI 実験における水-溶融炉心間の熱流束</p>  <p>図 3.1-38 CCI 実験の溶融物平均温度変化</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため掲載順を入替え】</p> <p>付図 2-17 CCI 実験における侵食状態の模式図 [12] (a) CCI-1, (b) CCI-2, (c) CCI-3</p>	<p>図 3.1-39 CCI 実験における侵食状態の模式図</p>	

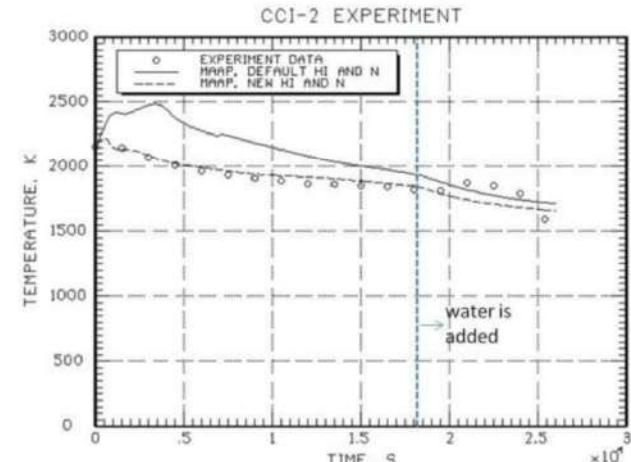
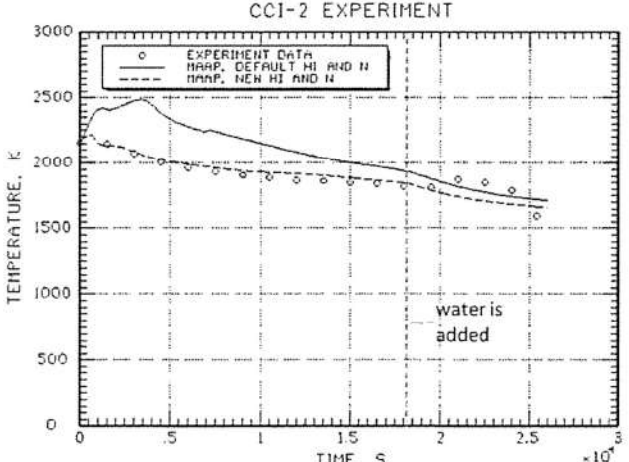
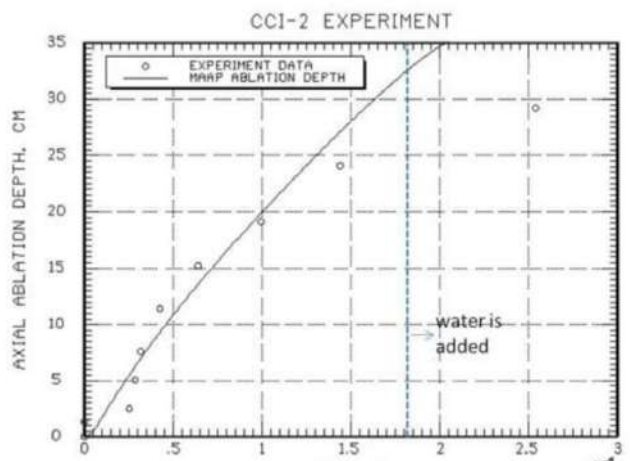
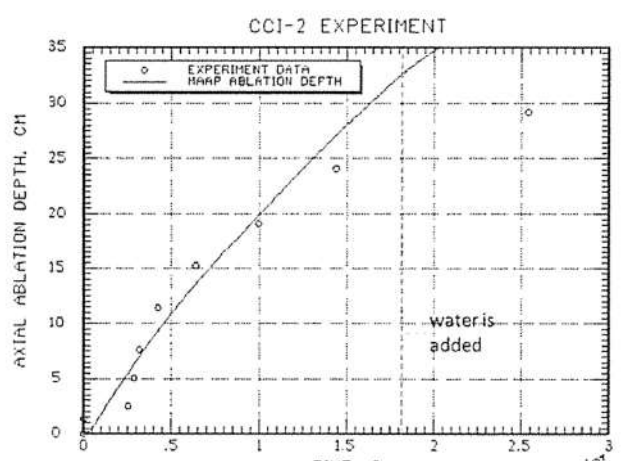
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

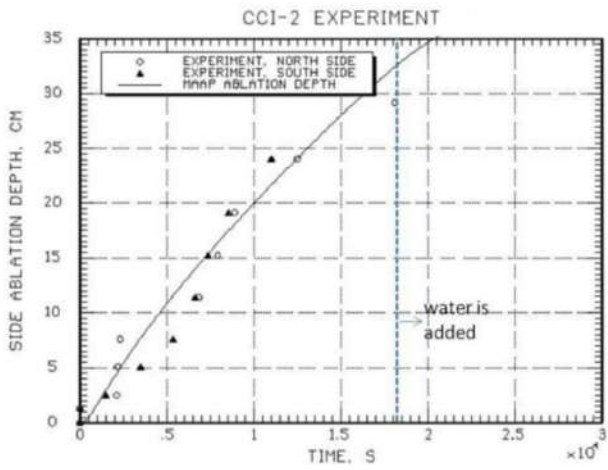
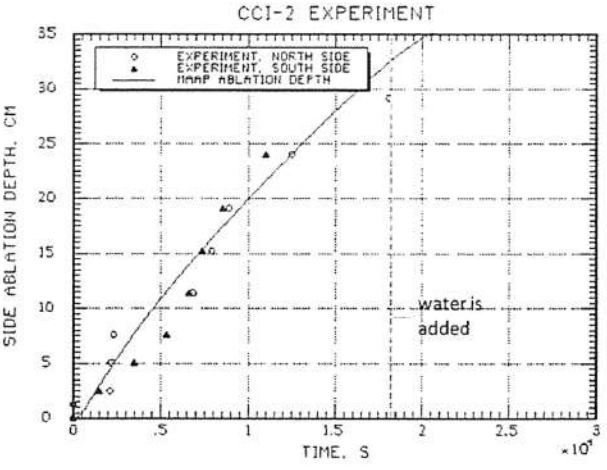
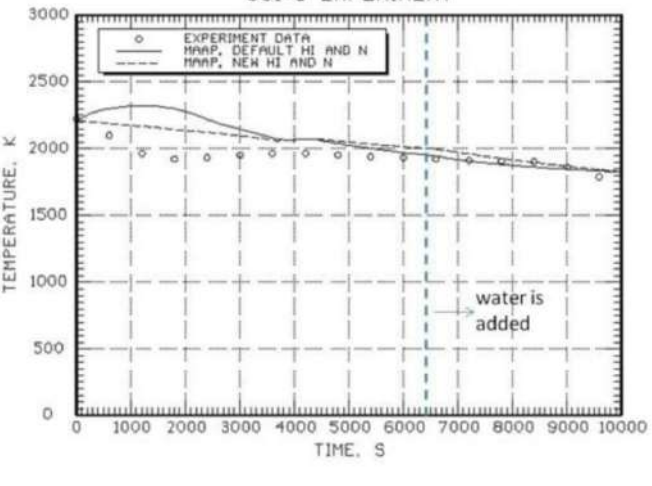
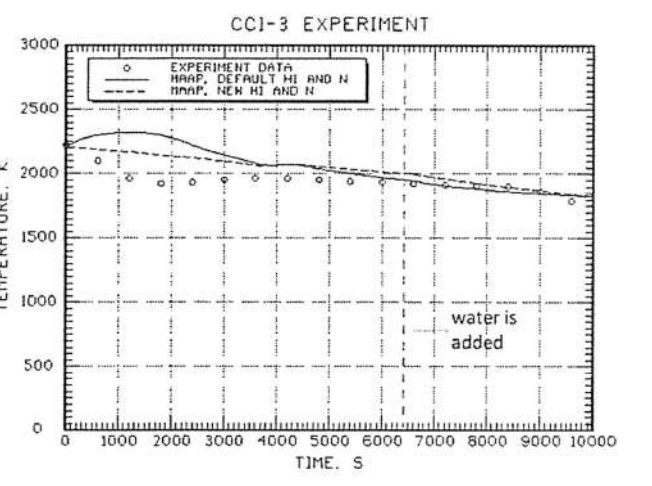
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため掲載順を入替え】</p> <div data-bbox="159 212 562 300" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div> <div data-bbox="181 316 1025 933" style="border: 2px solid black; height: 387px; margin: 10px 0;"></div> <p>付図 2-19 熔融プールからクラストへの対流熱伝達係数</p>	<div data-bbox="1099 355 1912 997" style="border: 2px solid black; height: 402px; margin: 10px 0;"></div> <p>図 3.1-40 熔融プールからクラストへの対流熱伝達係数</p> <div data-bbox="1615 1374 1917 1437" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

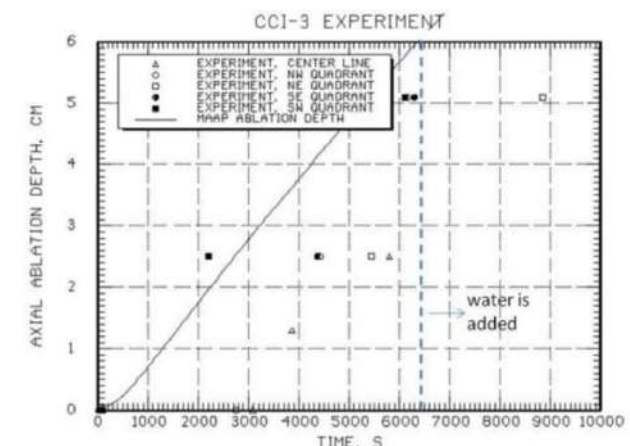
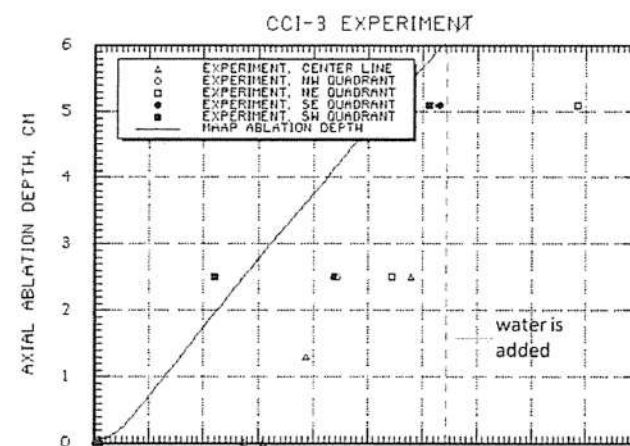
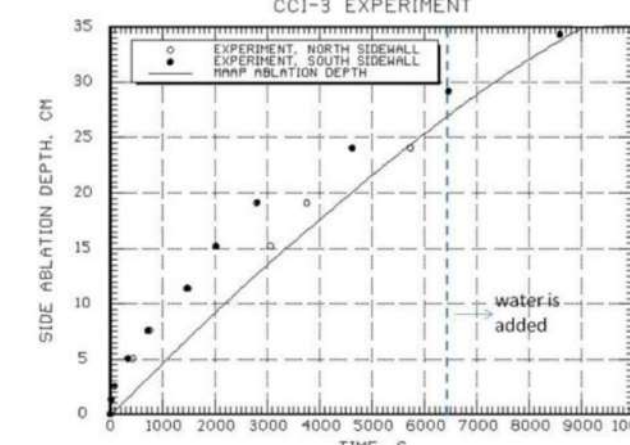
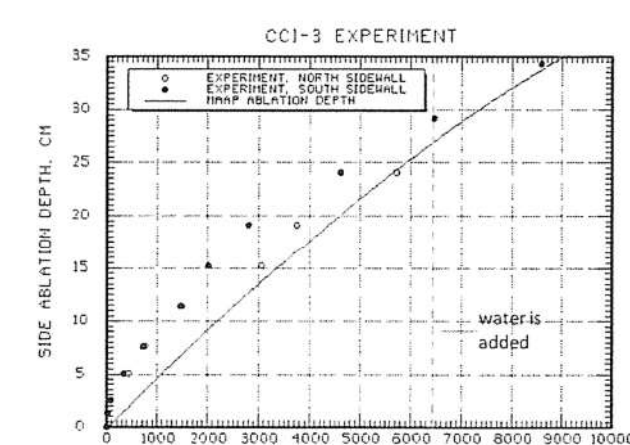
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため掲載順を入替え】</p>		
		
<p>付図 2-20 CCI-2 実験のコリウム温度の実験データとMAAP 解析結果の比較^[36]</p>	<p>図 3.1-41 CCI-2 実験のコリウム温度の実験データとMAAP 解析結果の比較</p>	
<p>(MAAP New 熱伝達係数 (破線) : 床方向 300W/m²-K, 側壁方向 300W/m²-K, n=0)</p>	<p>MAAP New 熱伝達係数 (破線) : 床面方向 300W/m²/K, 側面方向 300W/m²/K, n=0)</p>	
		
<p>付図 2-21 CCI-2 実験の床方向侵食の実験データとMAAP 解析結果の比較^[36]</p>	<p>図 3.1-42 CCI-2 実験の床面方向侵食の実験データとMAAP 解析結果の比較</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため掲載順を入替え】</p> 		
<p>付図 2-22 CCI-2 実験の側壁方向侵食の実験データとMAAP解析結果の比較^[35]</p>	<p>図 3.1-43 CCI-2 実験の壁面方向侵食の実験データと MAAP 解析結果の比較</p>	
		
<p>付図 2-23 CCI-3 実験のコリウム温度の実験データとMAAP解析結果の比較^[35] (MAAP New 熱伝達係数 (破線) : 床方向 80W/m²-K, 側壁方向 300W/m²-K, n=0)</p>	<p>図 3.1-44 CCI-3 実験のコリウム温度の実験データと MAAP 解析結果の比較 (MAAP New 熱伝達係数 (破線) : 床面方向 80W/m²/K, 壁面方向 300W/m²/K, n=0)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
		
<p>付図 2-24 CCI-3 実験の床方向侵食の実験データとMAAP解析結果の比較^[36]</p>	<p>図 3.1-45 CCI-3 実験の床面方向侵食の実験データとMAAP解析結果の比較</p>	
		
<p>付図 2-25 CCI-3 実験の側壁方向侵食の実験データとMAAP解析結果の比較^[36]</p>	<p>図 3.1-46 CCI-3 実験の壁面方向侵食の実験データとMAAP解析結果の比較</p>	

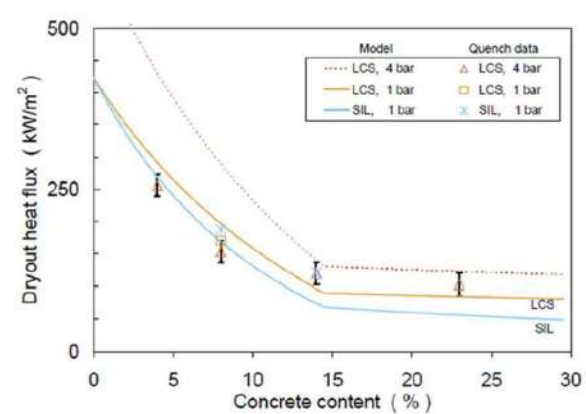
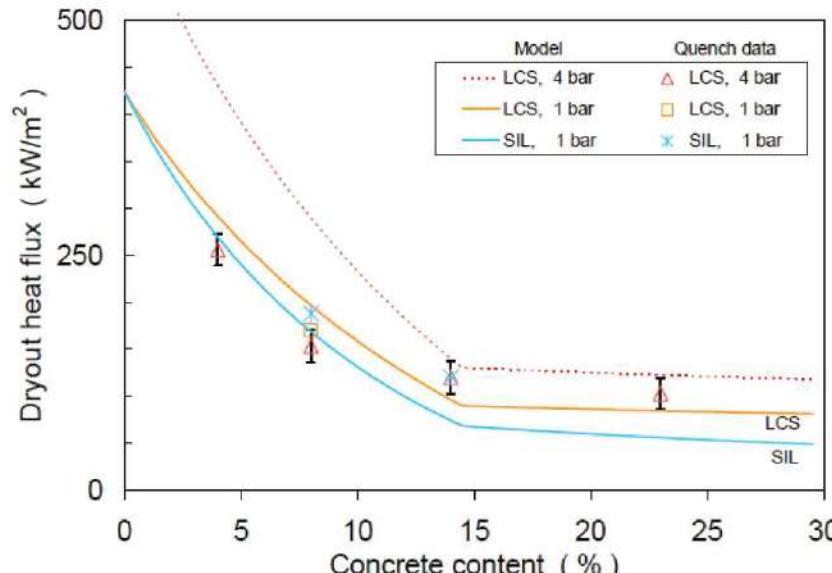
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">【参考のため掲載順を入替え】</p> <p style="text-align: center;">付図 2-11 小規模浸水・クラスト強度実験 (SSWICS) 装置^[12]</p>	<p style="text-align: center;">図 3.1-47 SSWICS 試験装置</p>	

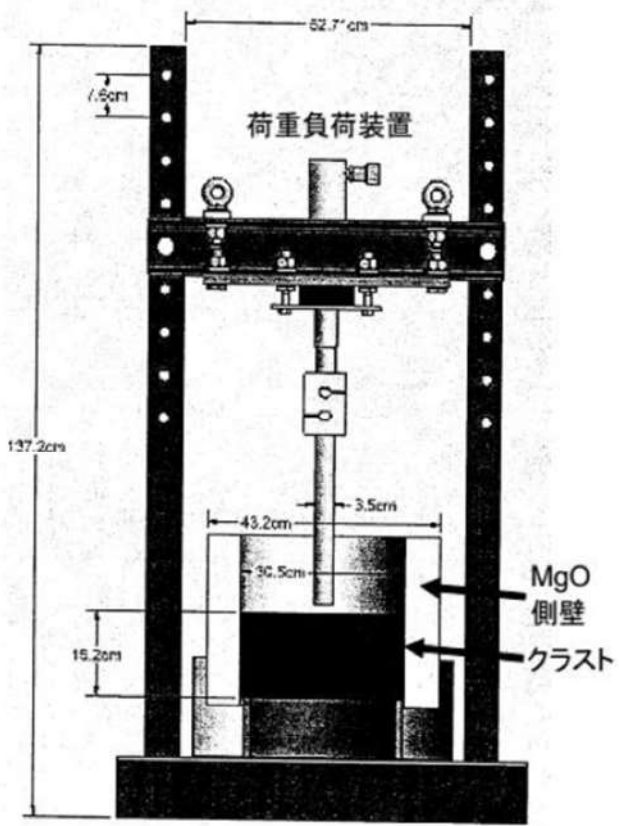
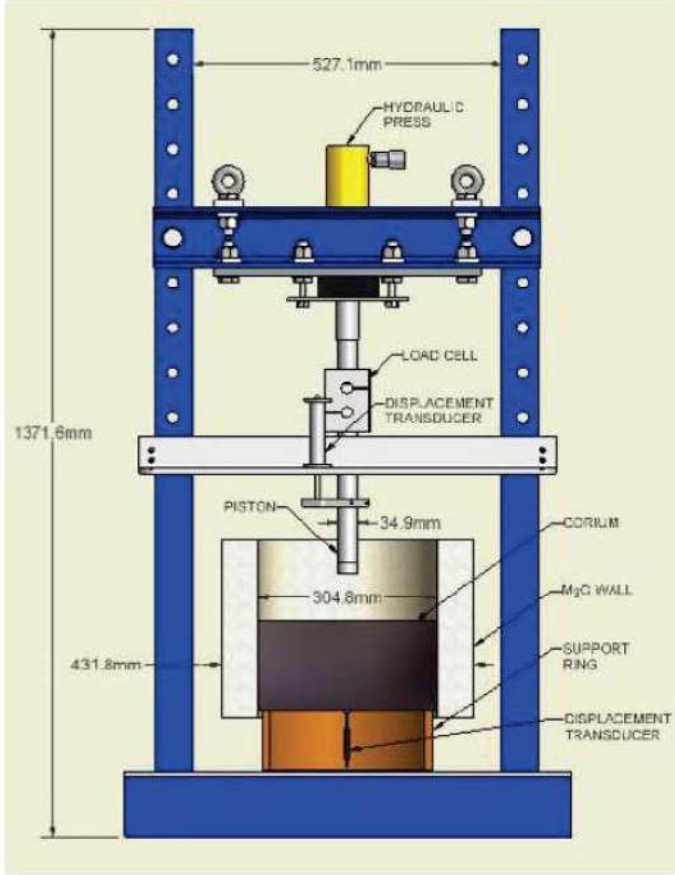
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="470 199 739 231">【参考のため掲載順を入替え】</p>  <p data-bbox="201 742 985 774">付図 2-12 SSWICS 実験データと Lister/Epstein モデルのドライアウト熱流束の比較^[12]</p>	 <p data-bbox="1276 813 1747 845">図 3.1-48 SSWICS 試験 ドライアウト熱流束の比較</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため掲載順を入替え】</p>  <p>付図2-18 クラスト浸水実験の実験後の低温クラスト強度測定装置^[38]</p>	 <p>図3.1-49 SSWICS試験 強度試験の装置図</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

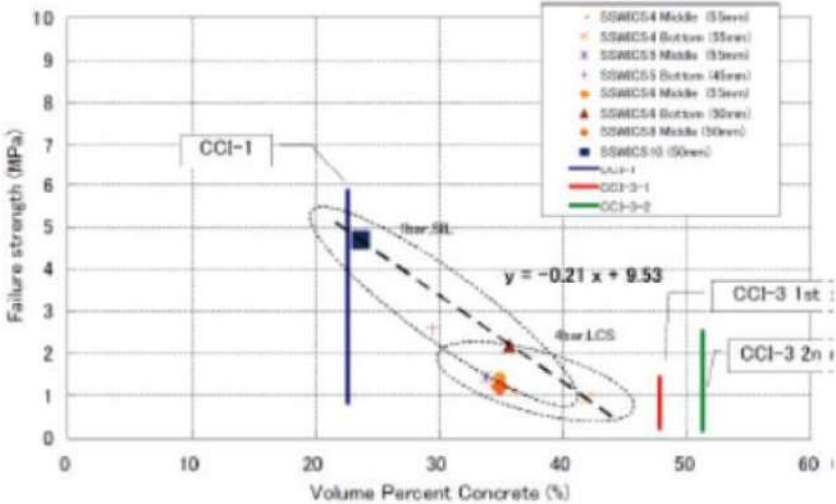
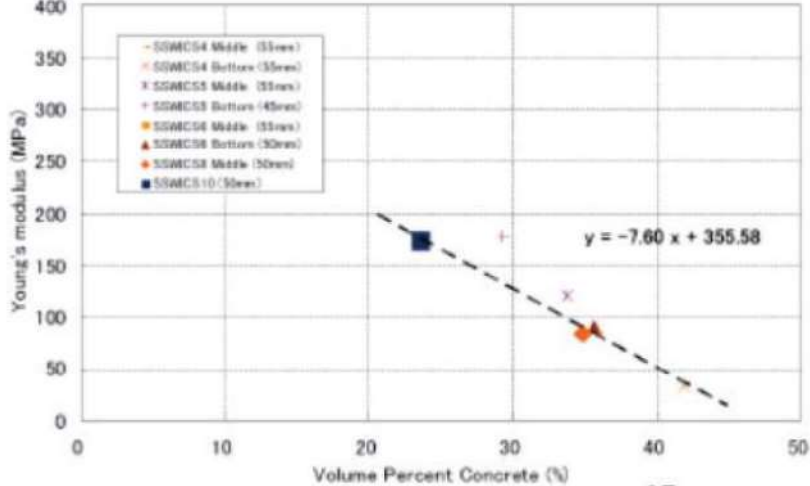
泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

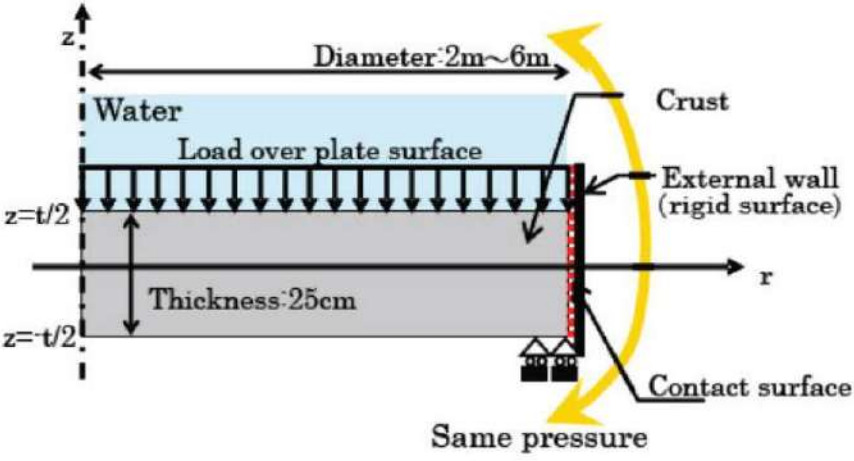
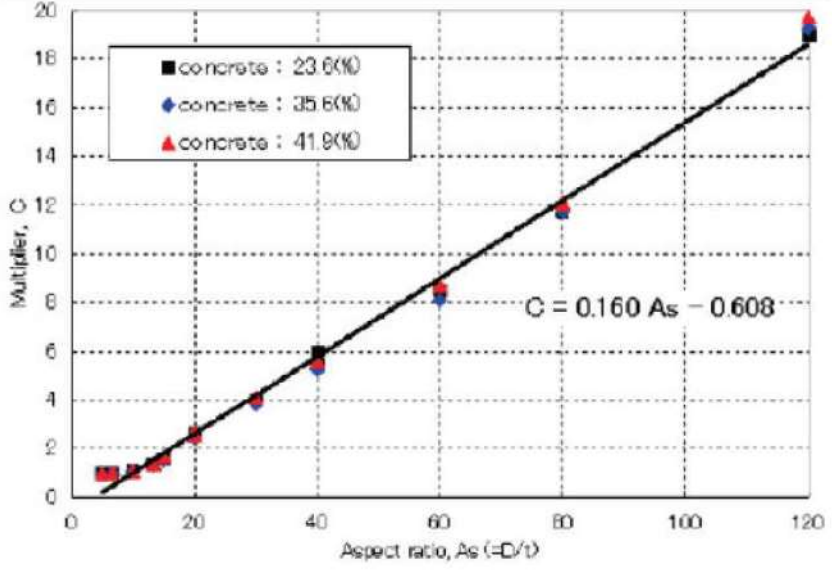
女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>Figure 3.1-50 SSWICS test strength test results. The graph plots Tensile strength (MPa) on a logarithmic scale (1 to 1000) against Concrete content (%) on a linear scale (0 to 25). Two horizontal lines represent LCS concrete (blue dashed) and Siliceous concrete (red solid), both around 100 MPa. Data points (red diamonds) are labeled 1&2, 3, 4, and 5&6, showing peak stress at fracture for various concrete samples.</p>	

図 3.1-50 SSWICS 試験 強度試験結果

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p>Figure 3.1-51 shows the relationship between Failure strength (MPa) and Volume Percent Concrete (%). The regression equation is $y = -0.21x + 9.53$. The graph includes data points for various SSWCCS conditions and labels for CCI-1, fiber SL, fiber LCS, CCI-3 1st, and CCI-3 2nd.</p>	
<p>図 3.1-51 破損応力算出結果</p>	<p>図 3.1-52 ヤング率算出結果</p>	
 <p>Figure 3.1-52 shows the relationship between Young's modulus (MPa) and Volume Percent Concrete (%). The regression equation is $y = -7.60x + 355.58$. The graph includes data points for various SSWCCS conditions.</p>		
<p>図 3.1-52 ヤング率算出結果</p>		


赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p style="text-align: center;">図 3.1-53 実機スケールのクラスト解析モデル</p>  <p style="text-align: center;">図 3.1-54 クラストの自重による応力分布</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1294 547 1727 571">図 3.1-55 PULiMS-E4 試験での溶融物拡がり挙動</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>【参考のため女川の第5部添付3付録2から抜粋】</p> <p>Periphery Systems Thermite Mass Gauges</p> <p>Molten Pool Material Sampling and Thermocouples Movie and TV Cameras Infrared Pyrometer</p> <p>Exhaust Gas Thermocouples Pressure Transducers Mass Spectroscopy</p> <p>Stainless Steel Fiber Filter (Optional)</p> <p>Input Power</p> <p>Multiple Aerosol Filter Probes</p> <p>Concrete Crucible Thermocouples (Melt Front Propagation) Thermocouples (ANL Type for Pool Temperature) Water Filled Annulus</p> <p>Water Control and Measurement System for Crucibles with Water Jacket</p> <p>(1) Melt (2) Concrete Crucible (3) Induction Coil</p> <p>(4) Hood and Offgas System (5) Thermite Reaction Tank (6) Tank for Measurement Probes</p> <p>付図 1-6 BETA 実験装置^[34]</p>	<p>Periphery Systems Thermite Mass Gauges</p> <p>Molten Pool Material Sampling and Thermocouples Movie and TV Cameras Infrared Pyrometer</p> <p>Exhaust Gas Thermocouples Pressure Transducers Mass Spectroscopy</p> <p>Stainless Steel Fiber Filter (Optional)</p> <p>Input Power</p> <p>Multiple Aerosol Filter Probes</p> <p>Concrete Crucible Thermocouples (Melt Front Propagation) Thermocouples (ANL Type for Pool Temperature) Water Filled Annulus</p> <p>Water Control and Measurement System for Crucibles with Water Jacket</p> <p>(1) Melt (2) Concrete Crucible (3) Induction Coil</p> <p>(4) Hood and Offgas System (5) Thermite Reaction Tank (6) Tank for Measurement Probes</p> <p>図 3.1-56 BETA 試験 実験装置</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

女川原子力発電所2号炉		泊発電所3号炉		相違理由
【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】		表 3.1-12 BETA 試験 実験マトリックス ^[6]		
付表 1-2 BETA 実験マトリックス ^[6]		表 3.1-12 BETA 試験 実験マトリックス ^[6]		
BETA Test	Initial Melt, ~ 2200 K	Fission Product Mock-ups and Additives	Planned Heating Power	Main Objectives
V 5.1	300 kg Fe + Cr + Ni 80 kg Zry-4 50 kg Al ₂ O ₃ + SiO ₂ + CaO	none	400 kW	PWR: Zr chemistry, consequences on erosion and aerosol release
V 5.2	as V 5.1	1 kg Mo, 0.5 kg ZrTe ₂ , 1.5 kg CeO ₂ , 1 kg BaO, 0.5 kg La ₂ O ₃ , 0.5 kg SrO, 6 kg B ₄ C in steel containers	200 kW	BWR with B ₄ C absorber, low power: Zr chemistry and related processes
V 5.3	as V 5.1	1 kg Mo, 1 kg CeO ₂ , 1 kg BaO, 0.5 kg La ₂ O ₃ , 0.5 kg SrO, 6 kg B ₄ C in steel containers	800 kW	BWR with B ₄ C absorber, high power: Zr chemistry and related processes

V 5.1 V 5.2 V 5.3

V 5.1 V 5.2 V 5.3

付図 1-7 BETA 実験後のコンクリート侵食状況を示す模式図^[6]

図 3.1-57 BETA 試験 実験後のコンクリート侵食状況を示す模式図

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

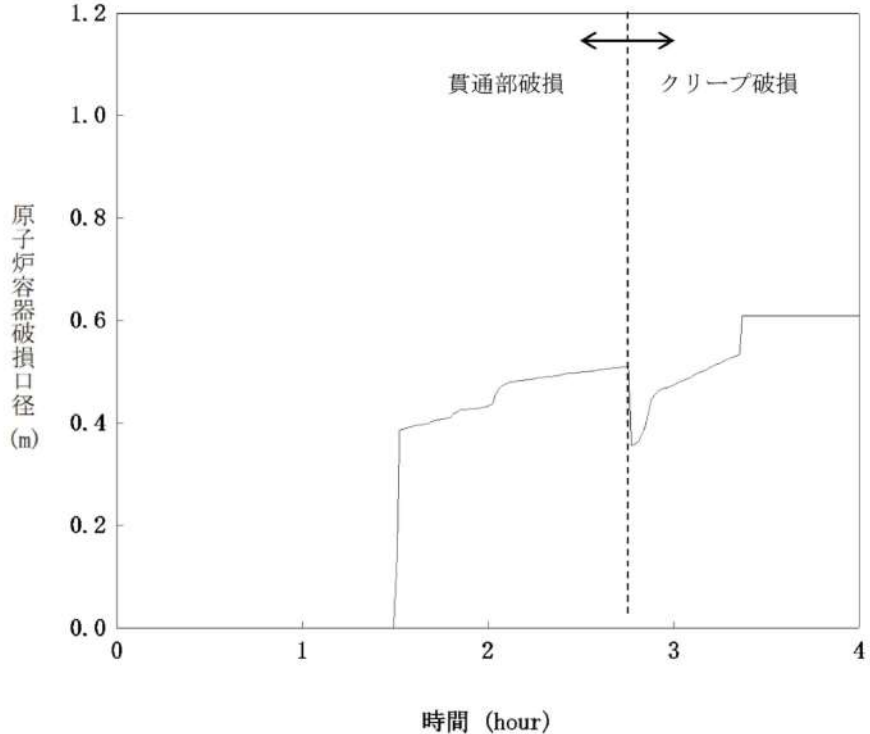
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="376 169 815 196">【参考のため女川の第5部添付3付録1から抜粋】</p> <div data-bbox="165 213 893 264" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div> <div data-bbox="228 280 974 794" style="border: 1px solid black; height: 322px; margin: 10px 0;"></div> <p data-bbox="315 815 875 842">付図1-8 BETA-V5.1 実験とMAAP解析の侵食深さの比較^[34]</p> <div data-bbox="224 842 969 1340" style="border: 1px solid black; height: 312px; margin: 10px 0;"></div> <p data-bbox="315 1361 875 1388">付図1-9 BETA-V5.2 実験とMAAP解析の侵食深さの比較^[34]</p>	<div data-bbox="1117 201 1917 743" style="border: 1px solid black; height: 340px; margin: 10px 0;"></div> <p data-bbox="1211 751 1800 778">図3.1-58 BETA試験 V5.1試験とMAAP解析結果の侵食深さの比較</p> <div data-bbox="1117 807 1917 1350" style="border: 1px solid black; height: 340px; margin: 10px 0;"></div> <p data-bbox="1211 1361 1800 1388">図3.1-59 BETA試験 V5.2試験とMAAP解析結果の侵食深さの比較</p> <div data-bbox="1417 1394 1951 1437" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

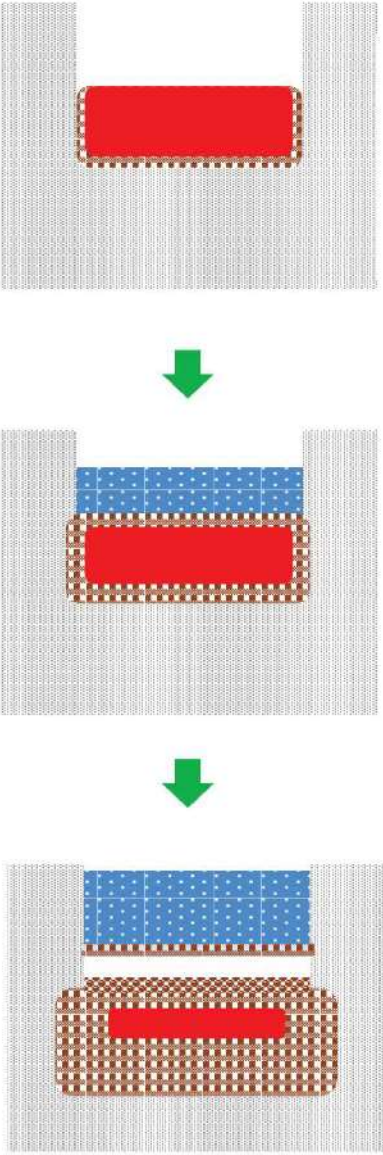
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1220 1093 1780 1117">図 3.2-1 原子炉容器破損口径の拡がり（3 ループプラントの例）</p> <div data-bbox="1182 1169 1832 1340" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>注) 約 1.5 時間の時点で貫通部破損，約 2.8 時間の時点でクリープ破損が生じており，クリープ破損以前は貫通部破損口径をクリープ破損後はクリープ破損口径をプロットしている。</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div style="text-align: center;">  </div> <p>注水前： 溶融物とコンクリートの間にクラストの形成が始まる。クラストにはコンクリート分解ガスが通過することで空隙が出来ている。</p> <p>注水後短期： 溶融物上面から水への激しい伝熱が起き、上面に厚いクラストが形成される。この期間の熱流束は最大約3MW/m²となり、その後急速に低下し約1MW/m²となる。</p> <p>注水後長期： 溶融物上面のクラストが側壁に固着し、溶融物との間に空間が生じる。水への熱流束は約0.2MW/m²まで徐々に低下していく。クラストにはコンクリート分解ガスが通過することで空隙が出来、水やガスがある程度透過する。</p> <p style="text-align: center;">図 3. 3-1 MCCI 実験での挙動</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

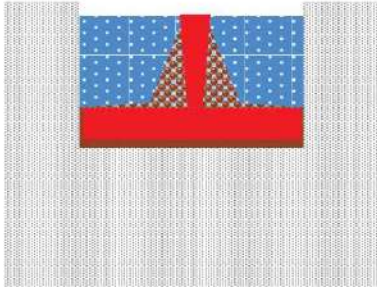

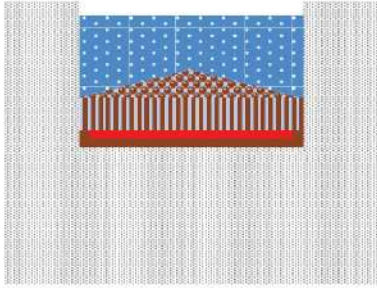

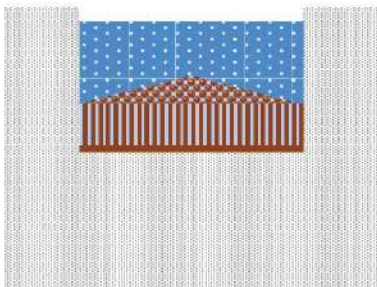
女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;">  <p data-bbox="1541 213 1892 395">溶融炉心落下時： 溶融炉心は完全には粒子化せず、床上を溶融炉心が拡がり、床面との間にケーキが形成される。ジェットの一部は粒子化して溶融炉心上に降下する。クラストが形成されるまでは比較的高い熱流束が維持される。</p> <p data-bbox="1541 400 1668 501">< 3層状態 > ・粒子ベッド ・溶融炉心 ・ケーキ</p>   <p data-bbox="1541 649 1906 783">落下後短期： 溶融炉心上面からクラストが形成されるが、自重あるいは熱応力によって破碎していく。このため溶融炉心は急激に冷却されていく。</p> <p data-bbox="1541 788 1727 906">< 4層状態 > ・粒子ベッド ・破碎クラスト ・溶融炉心 ・ケーキ</p>   <p data-bbox="1541 1064 1906 1224">長期冷却時： 溶融物は破碎クラストとなって固化し、上下に粒子ベッドとケーキが存在する。破碎クラストは浸水性があることから、長期的にも冷却を維持できる。</p> <p data-bbox="1541 1228 1727 1331">< 3層状態 > ・粒子ベッド ・破碎クラスト ・ケーキ</p> </div>	

図 3.3-2 実機で想定される挙動

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>4. 評価モデルと不確かさに関する整理</p> <p>本章では、MCC I 評価に使用している解析モデルと想定される不確かさについて整理する。</p>	<p>4. 評価モデルと不確かさに関する整理</p> <p>本章では、MCCI 評価に使用している解析モデルと想定される不確かさについて整理する。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>4.1 MCC I 評価モデル</p> <p>MCC I 評価には、MCC I 現象を扱え、溶融炉心落下や注水によるデブリ冷却効果を評価できるMAAPコード^[34]を使用している。以下に、MCC I 伝熱モデルの概要を示す（図4-1参照）。</p> <p>コリウムの構成</p> <ul style="list-style-type: none"> 均質に溶融したプールを形成すると仮定。 上部、下部及び側面にクラスト層を仮定。 <p>クラストの生成</p> <ul style="list-style-type: none"> クラストのエネルギーバランス（溶融プールからの伝熱、水プール・コンクリートへの伝熱）によりクラスト厚さの変化率を計算。 <p>コンクリートの侵食</p> <ul style="list-style-type: none"> コンクリート表面から侵食深さ方向に一次元熱伝導を解き温度分布を計算。 コンクリート溶融温度（入力値：1500K）以上で侵食開始。 溶融炉心からの伝熱量と分解/溶融潜熱により侵食量を評価。 コンクリート分解による自由水・結合水・CO₂の発生を考慮し、溶融コリウム中での化学熱力学平衡計算により金属との反応、H₂及びCO発生を評価。反応熱は、溶融炉心の崩壊熱に加算される。 <p>伝熱モデル</p> <ul style="list-style-type: none"> 溶融炉心-コンクリート間の熱伝達：溶融プールからクラスト層への対流熱伝達量とクラスト内崩壊熱の和で熱流束が与えられる。溶融プールからクラスト層への対流熱伝達は、粘性に影響されるため、固化割合に応じて補正されている。溶融炉心から床方向及び側面方向のコンクリートへの熱流束を以下に示す。 	<p>4.1 MCC I 評価モデル</p> <p>以下に、MCCI 伝熱モデルの概要を示す。</p> <p>①溶融プールモデル</p> <ul style="list-style-type: none"> 原子炉下部キャビティ床上に落下した溶融炉心（連続体及び粒子状）の質量とエネルギーは溶融プールに加算され瞬時に均質化すると仮定 溶融プールは平板を仮定 上部、下部及び側部クラストを考慮し、下方及び側方への侵食を考慮 内部の溶融プールの温度は1点で模擬 クラスト内の温度分布は崩壊熱を考慮して2次式で近似 侵食したコンクリートと炉心溶融物との混合割合から液化及び固化温度を評価 炉心材及びコンクリートの化学組成の化学平衡計算に基づき非凝縮性ガス（水素、一酸化炭素、二酸化炭素）の発生を評価 溶融炉心内部の発生ガスによる溶融プールの伝熱挙動への影響は模擬しない <p>②溶融プール伝熱モデル</p> <ul style="list-style-type: none"> 上部クラストから上部水プールへは Kutateladze の熱伝達相関式を考慮 水がない場合は上部クラストから対流及び輻射熱伝達を考慮 内部の溶融物から上部、下部及び側部クラストへは対流熱伝達を考慮 <p>③コンクリート侵食モデル</p> <ul style="list-style-type: none"> コンクリートへは熱伝導で伝熱し、コンクリートの分解エネルギーを考慮 コンクリート内部の温度分布を考慮 <p>なお、溶融炉心から床方向及び側面方向のコンクリートへの熱流束を以下に示す。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="168 183 571 263" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div> <p>床方向の熱流束 $q_d = h_d (T_f - T_{F,m}) + q_v \cdot X_{cd}$ $h_d = h_{d0}(1 - f_s)^n$</p> <p>壁方向の熱流束 $q_s = h_s (T_f - T_{F,m}) + q_v \cdot X_{cs}$ $h_s = h_{s0}(1 - f_s)^n$</p> <p>ここで、 q_d, q_s：床方向及び側面方向の熱流束 [W/m²] h_d, h_s：溶融プールからクラスト層への対流熱伝達係数 [W/m²-K] h_{d0}, h_{s0}：溶融プールが完全な液相の場合の対流熱伝達係数 [W/m²-K] f_s：固化割合 [-] n：固化効果項の指数 [-] T_f：溶融プールの温度 [K] $T_{F,m}$：デブリ融点 [K] q_v：体積発熱率 [W/m³] X_{cd}, X_{cs}：床面及び壁面のクラスト厚さ [m]</p> <p>対流熱伝達係数h_{d0}及びh_{s0}は、BETA実験（二次元侵食実験）のベンチマーク解析^{[23][34]}を元に、それぞれ [] と [] が、固化効果項の指数 nは、 [] が推奨されている。</p> <p>・クラストの伝熱と厚さ：クラストのエネルギーバランス（溶融プールからの伝熱、水プール・コンクリートへの伝熱）によりクラスト厚さの変化率が計算されている。側面方向及び床方向の溶融プールからの対流熱伝達係数が異なるため、下部クラストと側面クラストの厚さも異なる。内部発熱を考慮し、下部クラスト、側面クラスト、上部クラストは放物線状の温度分布が仮定されている。クラスト成長の結果、溶融プールからの熱とクラスト内発生熱をコンクリートへ伝達できなくなると、クラスト内側で溶融が生じ、クラストは薄くなる。逆に、クラストが十分に薄く、溶融プールからの熱とクラスト内発生熱以上を伝達できれば、凝固が生じ、クラストは厚くなる。</p>	<p>床面方向の熱流束 $q_d = h_d (T_f - T_{F,m}) + q_v \cdot X_{cd}$ $h_d = h_{d0}(1 - f_s)^n$</p> <p>壁面方向の熱流束 $q_s = h_s (T_f - T_{F,m}) + q_v \cdot X_{cs}$ $h_s = h_{s0}(1 - f_s)^n$</p> <p>ここで、 q_d, q_s：床面方向及び壁面方向の熱流束 [W/m²] h_d, h_s：溶融プールからクラストへの対流熱伝達係数 [W/m²/K] h_{d0}, h_{s0}：溶融プールが完全な液相の場合の対流熱伝達係数 [W/m²/K] f_s：固化割合 [-]n：固化効果項の指数 [-] T_f：溶融プールの温度 [K] $T_{F,m}$：デブリ融点 [K] q_v：体積発熱率 [W/m³] X_{cd}, X_{cs}：床面及び壁面のクラスト厚さ [m]</p> <p>である。</p> <p>対流熱伝達係数h_{d0}及びh_{s0}は、BETA 実験のベンチマーク解析を元に、それぞれ [] と [] が、固化効果項の指数nは、 [] が推奨されている。</p> <p>また、クラストの厚さについては、クラストのエネルギーバランス（溶融プールからの伝熱、水プール・コンクリートへの伝熱）により変化率が計算されている。側面方向及び床方向の溶融プールからの対流熱伝達係数が異なるため、下部クラストと側面クラストの厚さも異なる。</p> <div data-bbox="1646 1372 1960 1436" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>・上部クラスト-水プール間の熱伝達：デブリが冠水されて表面温度が十分低下すると、上部クラストはクエンチ層として扱われ、以下の Kutateladze 型の水平平板限界熱流束相関式が適用される。このクエンチ熱流束は、デブリ平均温度が水の飽和温度以上である場合に適用される。</p> $q_{chf} = F_{chf} h_{fg} \rho_g^{0.5} \left\{ \sigma g (\rho_l - \rho_g) \right\}^{0.25}$ <p>ここで、</p> <p>q_{chf}：熱流束 [W/m²] F_{chf}：係数 [-]（ユーザー入力） h_{fg}：蒸発潜熱 [J/kg] ρ_g：蒸気の密度 [kg/m³] ρ_l：水の密度 [kg/m³] σ：表面張力 [N/m] g：重力加速度 [m/s²]</p> <p>係数 F_{chf} として、SNLで実施されたSWISS実験において報告されている溶融物から水プールへの熱流束800kW/m²に相当する値である0.1がデフォルトとして設定されており、係数 F_{chf} を変更することにより粒子状ベッドから水プールへの熱流束を想定した解析が実施できる。係数 F_{chf} と熱流束 q_{chf} の関係を図4-2に示す。係数 F_{chf} のデフォルトは0.1が使われており、この場合熱流束 q_{chf} は大気圧状態で800kW/m²程度となる。</p> <p>デブリ平均温度が水の飽和温度と等しくなると(デブリクエンチ)、水プールへの熱流束は、デブリの崩壊熱が全て水プールへ伝達されるとして計算され、上記限界熱流束相関式は適用されない。デブリクエンチ後は、デブリからコンクリートへの熱伝達は発生しなくなるため、デブリと接しているコンクリート温度が侵食温度以下となり、コンクリートの侵食は停止する。</p>		<p>※熔融炉心と原子炉下部キャビティ水の伝熱については、後述の『4.2 不確かさの整理』に記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="152 226 1032 703" data-label="Diagram"> </div> <div data-bbox="376 715 824 742" data-label="Caption"> <p>図4-1 MAAPコードのMCCI伝熱モデル概要</p> </div> <div data-bbox="152 837 1032 1364" data-label="Figure"> </div> <div data-bbox="313 1369 884 1444" data-label="Caption"> <p>図4-2 MAAPコードのデブリ上面の熱流束を与える F_{chf}入力と限界熱流束の関係</p> </div>	<div data-bbox="1971 167 2116 263" data-label="Text"> <p>※第3部 MAAP本文で 記載</p> </div> <div data-bbox="1971 853 2116 1013" data-label="Text"> <p>※添付資料 7.2.4.11別紙 にてC_Rと限界 熱流束の関係を 記載</p> </div>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

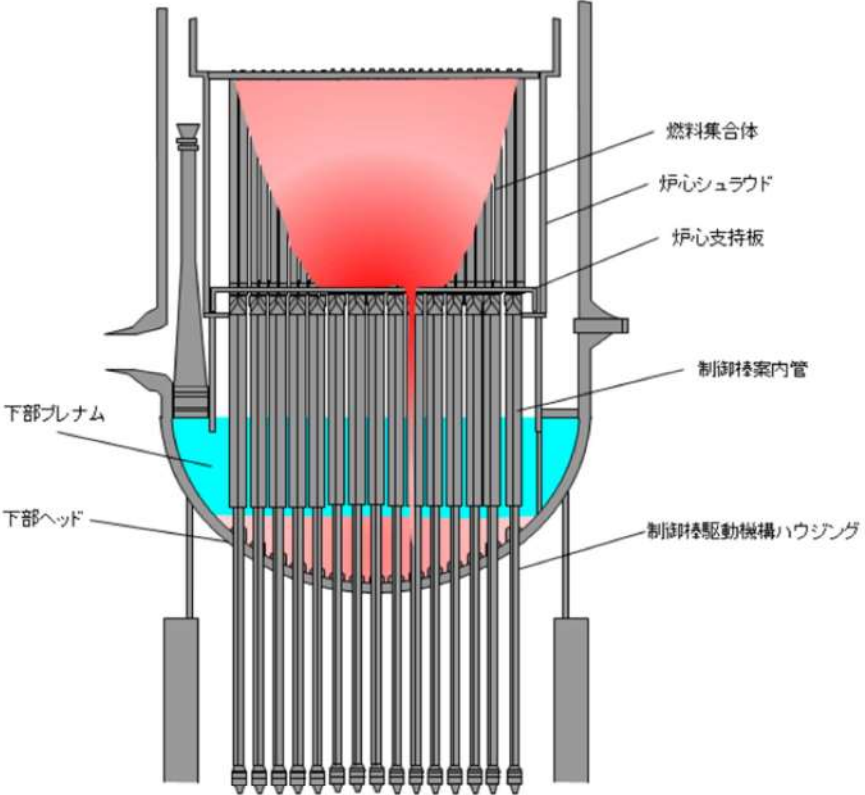
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>4.2 MCC I 評価における不確かさの整理</p> <p>MCC I の過程ごとに不確かさ要因を整理する。MCC I は以下の過程で段階的に進展する。</p> <p>(1) 原子炉圧力容器下部ヘッド破損過程</p> <p>(2) 熔融物の落下・堆積過程</p> <p>(3) MCC I 進行と注水によるデブリ冷却過程</p> <p>各過程での物理現象及び解析モデルに関し、不確かさ要因を整理し、感度解析が必要なパラメータを確認する。</p> <p>(1) 原子炉圧力容器下部ヘッド破損過程</p> <p>この過程の不確かさは、下部ヘッドの破損面積や熔融炉心の流出量となる。それぞれについて、評価モデルと評価条件の考え方を示す。</p> <p>下部ヘッド破損面積</p> <p>評価モデル：MAAPコードでは、制御棒駆動機構ハウジング溶接部の破損、下部ヘッドクリップ破損等の種々の下部ヘッド破損モードがモデル化されており、最も早く破損条件に至った破損モードにより破損が生じる。破損面積は、熔融物流出に伴う破損口の径方向侵食による拡大も考慮されている。</p> <p>評価条件：MAAP解析結果から、制御棒駆動機構ハウジング溶接部の破損による制御棒駆動機構ハウジングの逸出が最も早く発生する。これにより約15cm径の破断口が下部ヘッドに開き、下部プレナム内の熔融炉心がペDESTALに落下することになる。他の下部ヘッド貫通部が破損してもこれ以上の破損サイズにはならないことから、制御棒駆動機構ハウジングの逸出が最も厳しい条件となっている。なお、制御棒駆動機構ハウジング溶接部が破損しても外部サポートが設置されている場合には、制御棒駆動機構ハウジングの逸出は起きにくいと考えられるため、この扱いは保守的である。</p> <p>熔融炉心の落下量</p> <p>評価モデル：熔融炉心流出量は駆動差圧として原子炉圧力容器内とペDESTALとの圧力差に水及び熔融炉心の水頭圧を考慮して計算されている。</p> <p>評価条件：MAAP解析結果から、下部ヘッド破損前には全炉心相当の熔融炉心が下部プレナム内に堆積した状態になっている。この状態に至る前には、以下の過程が起こる。即ち、熔融炉心が下部プレナムへ落下を開始すると、下部プレナム水により熔融炉心が冷却される。また、制御棒案内管内にも水が溜まっており、熔融炉心の冷却のヒートシンクになる（図4-3参照）。下部プレナムや制御棒案内管内の水が蒸発して喪失すると、制御棒案内管の温度が上昇し熔融に至る。制御棒案内管は炉心重量を支持しているために、制御棒案内管の熔融が起こると、炉心の支持機能が喪失し、全炉心が下部プレナムへ落下する。</p>	<p>4.2 不確かさの整理</p> <p>炉心熔融後、原子炉容器内の冷却水がドライアウトすることにより、原子炉容器下部プレナムに堆積している熔融炉心を冷却できない状態が継続すると、原子炉容器壁は熔融炉心からの伝熱によって温度が上昇し、計装案内管の溶接部が破損する。その後、破損口より下部に残存している熔融炉心からの伝熱によって、原子炉容器底部がクリープ破損に至る。破損口から熔融炉心が流出する過程では、破損口が熔融拡大することによりデブリジェット径が拡大する。また、デブリジェットは落下過程でエントレインされ部分的に粒子化する。</p> <p>MCCI は、原子炉下部キャビティ底に堆積した熔融炉心が周囲のコンクリートや原子炉下部キャビティ水と伝熱する過程でコンクリートが加熱され侵食を引き起こす現象である。国内PWRプラントでは、コンクリート侵食を防止するために、炉心損傷検知後速やかに原子炉下部キャビティに水を張り、高温の熔融炉心を水中に落下させることによって細粒化及び固化を促進させる方策を採っている。図4-1に熔融炉心伝熱の想定される現象と解析上の取扱いとの比較概念図を示す。</p> <p>コンクリート侵食に至る過程は、</p> <p>① 熔融炉心の原子炉下部キャビティへの堆積過程</p> <p>② 熔融炉心の冷却過程</p> <p>③ コンクリートの侵食過程</p> <p>のように段階的に進展する。</p> <p>以下、各過程での物理現象及び解析モデルに関し、不確かさの観点で整理する。また、表4-1にMCCIの不確かさに関する整理結果を図4-2に以下について整理した流れ図を示す。</p>	<p>・泊は「不確かさの整理」で章のタイトル名を統一※炉型や整理された知見差により、不確かさの整理に相違がある。</p> <p>※泊でも貫通部（計装案内管）の飛び出し（逸出）を想定。計装案内管が唯一の貫通部であり、最大口径。また、破損面積は、熔融物流出に伴う破損口径の径方向侵食による拡大も考慮。</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>その後、制御棒駆動機構ハウジング溶接部の破損が起り、溶融炉心の放出が開始する。以上のような過程の結果、下部ヘッド破損時に、下部プレナム内に堆積している全炉心相当の溶融炉心が流出することになり、溶融炉心の落下流量としては、最も厳しい条件となっている。</p> <p>以上に示したように、下部ヘッドの破損面積や溶融炉心の流出量について、いずれも最も厳しい条件が使用されているため、特に感度解析を行う必要はない。</p>  <p>図4-3 炉心部から下部プレナム内への溶融炉心の移行状態を示す模式図</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>(2) 溶融物の落下・堆積過程</p> <p>この過程では、下部ヘッドが破損し、溶融炉心が事前水張りされたベドスタルへ落下するため、溶融炉心が水中で粒子化することが想定され、粒子化されない溶融炉心はベドスタル床に溶融プールとして堆積する。この過程では、溶融炉心の水中での粒子化に不確かさが想定される。</p> <p>溶融炉心の粒子化</p> <p>評価モデル：MAAPコードでは、粒子化割合は、Ricou-Spalding モデル^[25]で計算される。Ricou-Spalding モデルは、エントレインメント量（粒子化量）を流入流体の速度（ジェット速度）と両流体の密度比に関連させたモデルであり、液液混合問題において広く利用されている関連式である。落下する溶融炉心は円柱ジェットで冷却水中に突入することを想定し、円柱ジェット外周部の侵食として粒子化割合を評価している。</p> <p>円柱ジェットのエントレインメント速度 m_{ent} (m/s) は、次式で与えている。</p> $m_{ent} = E_o \left(\frac{\rho_w}{\rho_d} \right)^{1/2} u_{dj} \quad (1)$ <p>ここで、E_o：エントレインメント係数 u_{dj}：ジェット速度 [m/s] ρ_d：ジェット密度 [kg/m³] ρ_w：水密度 [kg/m³]</p> <p>水中でのジェット速度を一定と仮定し、水面から垂直方向に積分すると、プール底部（水深：ΔH_{pool}）におけるジェット直径が(2)式のように得られる。</p> $d_{di} = d_{d,o} - 2E_o \left(\frac{\rho_w}{\rho_d} \right)^{1/2} \Delta H_{pool} \quad (2)$ <p>(2)式を用いて、溶融ジェット断面の減少分が粒子化割合であるため、次式のように計算される。</p> $\Phi_{ent} = \frac{d_{d,o}^2 - d_{di}^2}{d_{d,o}^2} \quad (3)$ <p>ここで、d_{dj}：プール底部におけるジェット径 [m] $d_{d,o}$：プール水面におけるジェット径 [m] Φ_{ent}：水中における粒子化割合 [-]</p>	<p>(1) 溶融炉心の原子炉下部キャビティへの堆積過程</p> <p>原子炉容器が破損し、溶融炉心が原子炉下部キャビティへ落下し、原子炉下部キャビティ底に堆積するが、堆積のプロセスとしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エントレインされない溶融炉心が原子炉下部キャビティ底に堆積（溶融プール） ・エントレインされたデブリ粒子が冷却されたのち溶融プール上に堆積 <p>がある。これらの過程に関して不確かさを整理する。</p> <p>エントレイン量（溶融炉心の細粒化量）</p> <p>エントレインされたデブリ粒子は、水中に拡散しており、かつ、水との接触面積が大きいことから、塊状の溶融炉心に比べ、冷却が促進された状態であり、MCCI 現象においてコンクリートの侵食を促進する観点からは、エントレイン量が少ない方が、厳しいといえるが、溶融プール上に堆積した状態では、溶融プール上面の伝熱を低下させる要因となる。</p> <p>一方、原子炉下部キャビティ水量に関しては、水深が浅い方が、溶融炉心の細粒化量が小さくなる傾向がある。MAAP コードの解析モデルでは、原子炉格納容器内の流動は、ノード-ジャンクションモデルによって、ブローダウン水、スプレー水等の原子炉下部キャビティへの流入量を計算し、原子炉下部キャビティの幾何形状に基づき、水位（水深）を計算している。すなわち、原子炉格納容器形状とスプレー開始のタイミング（事故シーケンス）で決まる。原子炉格納容器形状に関してはプラント設計データにより設定されることから不確かさは小さい。一方で、溶融炉心の落下時にも原子炉下部キャビティへの注水が継続した状態であることから、原子炉下部キャビティへの注水や溶融炉心の落下のタイミングによっては、原子炉下部キャビティ水深が変化し得ることから、事故シーケンスに基づく不確かさは存在すると考えられる。原子炉下部キャビティ水深が浅い場合には、細粒化量が少なくなる傾向になり、原子炉下部キャビティ床に堆積する溶融炉心のうち、十分に冷却されないまま液滴が凝集するかあるいは連続層として堆積する割合が増大する。水深が深い場合には、細粒化及び固化する量が多くなり、粒子ベッドとして堆積する割合が増大する。定性的には、前者の状態では、溶融炉心は冷却されにくくなるといえる。また、溶融炉心が段階的に原子炉下部キャビティに落下する場合、溶融炉心が落下するたびに、一部が細粒化し、残りが連続層として原子炉下部キャビティ床に堆積し、原子炉下部キャビティ内の水が蒸発して原子炉下部キャビティ水深が浅くなることを繰り返す。溶融炉心が段階的に原子炉下部キャビティに落下することによる原子炉下部キャビティ水深の減少は、溶融炉心冷却の観点で厳しくなる。このように、原子炉下部キャビティ水深については不確かさが存在するため、代替格納容器スプレーの作動タイミングの感度を確認することによって、水深の不確かさの影響を把握する。</p> <p>また、エントレイン量について、MAAP コードでは、Ricou-Spalding の式に基づき細粒化量を計算している。Ricou-Spalding モデルは、エントレインメント量（細粒化量）を流入流体の速度（ジェット速度）と両流体の密度比に関連させたモデルであり、液液混合問題において広く利用されている関連式である。Ricou-Spalding のエントレインメント則は、</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="152 183 555 263">本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> <p data-bbox="179 303 1048 399">以上の評価式において、デブリ粒子化割合に影響するパラメータは、エントレインメント係数、溶融ジェット径及びプール水深であり、このうちモデルパラメータとしてエントレインメント係数と溶融物ジェット径に不確かさが想定される。</p> <p data-bbox="179 406 1048 670">エントレインメント係数については、MAAPでは代表的なFCIの大規模実験であるFARO実験に対するベンチマーク解析^[34]によって範囲を設定しており、不確かさ範囲は、□～□となっている。FARO実験条件^[4]は、水プールの水深は0.87～2.05m、水プールのサブクール度は0（飽和）～124K、雰囲気圧力条件は2～5.8MPa（高圧条件）、0.2～0.5MPa（低圧条件）の範囲で行われており、一方、実機条件では、水深は2～4m程度、水プールサブクール度は飽和～90K程度、雰囲気圧力は0.2MPa[abs]程度であることを考慮すると、実験条件は有効性評価の特徴的な条件を包括しており、ベンチマーク解析で検討されたエントレインメント係数の範囲内で感度を確認すれば十分といえる。</p> <p data-bbox="179 678 1048 742">評価条件：MAAP解析ではエントレインメント係数のデフォルト値として□が使用されており、これは実験解析により確認された不確かさ範囲の代表値となっている。</p> <p data-bbox="179 750 1048 805">溶融物ジェット径は、下部ヘッド破損口径により決まることから、前述のように大きい値としている。これは、粒子化割合を小さめにする扱いをしていることになる。</p> <p data-bbox="179 813 1048 869">因みに、Ricou-Spalding 相関式を使用して、実機で想定される水張り水深2m、溶融物ジェット径0.15mの条件の場合で63%程度が粒子化される（図4-4参照）。^[33]</p> <p data-bbox="179 877 1048 973">以上のことから、エントレインメント係数については、不確かさ範囲が設定されており、溶融炉心が水中に落下した際の粒子化割合とその過程での蒸気発生やデブリ粒子の酸化による水素ガス発生に影響することから、不確かさ範囲内で感度解析を実施する。</p>	$m_{ent} = E_0 \cdot u_{jet} \cdot \sqrt{\frac{\rho_w}{\rho_{jet}}}$ <p data-bbox="1086 271 1960 367">で表され、m_{ent}はエントレインメント速度、E_0はエントレインメント係数、u_{jet}はジェット速度、ρ_wは静止側の流体密度、ρ_{jet}は噴出側の流体密度である。上記エントレインメント則に示すように融体がエントレインする速度は、エントレインメント係数と落下速度に比例する。</p> <p data-bbox="1086 375 1960 502">エントレインメント係数E_0について、MAAPコードではFCIの大規模実験に対するベンチマーク解析によって、その範囲を設定しており、有効性評価の解析ではその中間的な値（最確値）を設定している。ここで、エントレインメント係数の最小値は最確値よりも約□割小さく設定されているため、不確かさとしては約□割を見込む。</p> <p data-bbox="1086 510 1960 710">一方、溶融炉心落下速度は、原子炉容器内外圧力差と溶融炉心の水頭から計算される。大破断LOCAシーケンスでは、原子炉容器内外圧力差は大きくなく、不確かさも小さいと考えられるが、溶融炉心水頭については、原子炉容器の破損位置により不確かさがある。原子炉容器の破損位置は、原子炉容器下部プレナムのノード代表点で表されるため、溶融炉心上面から破損口までの高さとして0.8m～1.2m、すなわち約3割の不確かさ幅がある。溶融炉心落下速度は溶融炉心水頭の平方根に比例することから、落下速度の不確かさ幅は約2割となる。</p> <div data-bbox="1646 742 1960 805" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div> <p data-bbox="1086 853 1960 1284">次に、デブリジェット径は、Ricou-Spaldingのエントレインメント則で使用されるパラメータではないものの、後述のとおり実機スケールではデブリジェット全体が細粒化するわけではなく、ジェット径の増加はエントレインメント割合の減少と等価であることから、エントレイン量の不確かさの一部として取り扱う。デブリジェット径は原子炉容器の破損口径と等価として扱われており、溶融炉心が破損口を通過する際に原子炉容器壁が侵食されて破損口が拡大するとデブリジェット径も大きくなる。デブリジェット径と細粒化量との関係を図4-3に示す。デブリジェットが円柱状態で水中に落下すると、水面下でデブリジェットの細粒化が進み、デブリジェットの先端が逆円錐の形状となる。デブリジェット径が相対的に小さく、デブリジェットの先端が床に達しない状況では、すべての溶融炉心が細粒化される（図4-3(a)）。一方、実機においては原子炉容器の破損口が侵食によって拡大するため、デブリジェット径が相対的に大きく、すべての溶融炉心が細粒化されるわけではなく、デブリジェットの先端が床に達する（図4-3(b)）。実機では、最終的な破損口径は、初期径及び侵食の拡大幅によって決まり、侵食の拡大幅は破損口を通過する溶融炉心の量に依存する。</p> <p data-bbox="1086 1292 1960 1428">まず、初期径の不確かさとして、「重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（第3部 MAAPコード）添付2 溶融炉心と冷却水の相互作用について」の「5. 感度解析と評価」において約3倍の不確かさを想定した場合、侵食後の原子炉容器貫通部の破損口径は、ベースケースと比較して約1%拡大している。また、侵食の拡大幅の不確かさとして、「重</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="159 188 557 256">本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> <div data-bbox="159 293 1028 807" style="border: 2px solid black; height: 322px; width: 388px;"></div> <p data-bbox="147 852 566 877">(3) MCC I 進行と注水によるデブリ冷却過程</p> <p data-bbox="188 885 1048 944">この過程では、溶融炉心の拡がり、デブリベッドの冷却性、コンクリート侵食に不確かさが想定される。</p> <p data-bbox="183 989 344 1013">溶融炉心の拡がり</p> <p data-bbox="188 1023 1048 1082">評価モデル：MAAPコードでは、落下した溶融炉心はペDESTAL床面に均一に拡がると仮定している。</p> <p data-bbox="183 1091 1048 1252">評価条件：事前水張りされたペDESTALのプール水中に落下する溶融炉心は、前節の溶融物の落下・堆積過程で示したように、一部が粒子化した後に固化し、残りが溶融状態のまま床面に到達して床面上を拡がり、固化したデブリ粒子が床上の連続層の上に堆積して粒子状ベッドを形成するものと想定される（図1-1参照）。このような溶融炉心の拡がりにおいて、溶融物の拡がり距離と粒子状ベッドの堆積形状に不確かさが想定される。</p> <p data-bbox="183 1262 1048 1423">まず、溶融物の拡がり距離の不確かさについて考察する。Mark-I型格納容器のシェルアタックに関する研究^{[17][18][19][20]}によれば、水張りがないと溶融炉心は格納容器シェル壁（拡がり距離7m程度）まで到達するが、水張りがあれば溶融炉心の拡がりは抑えられ、拡がり距離は落下量等にも依存するが5m程度となる結果が得られている。有効性評価で想定している制御棒駆動機構ハウジングの逸出を想定すると、ABWR（ペDESTAL半径約5.3m）で床上に水がある場合でも、落下</p>	<p data-bbox="1095 170 1966 264">重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（第3部 MAAP コード）の「4.3.5 リロケーション」の結果から、リロケーションが早く進むことを想定した場合、原子炉容器貫通部の破損口径は、ベースケースと比較して約3割増加している。</p> <p data-bbox="1095 274 1966 435">以上より、エントレインメント係数、破損口径及び落下速度の不確かさはエントレインメント量の不確かさとしてまとめて考えることができ、不確かさの大きいエントレインメント係数を代表して感度を確認する。また、エントレインメント係数、落下速度、破損口径の不確かさを重畳させると、不確かさ幅は約5割となり、これについては「5.感度解析と評価（2）Ricou-Spaldingのエントレインメント係数」にて考察する。</p> <p data-bbox="1095 445 1966 675">一方、堆積した状態のデブリ粒子に関しては、物理現象としては溶融プールとデブリ粒子が成層化した状態となるが、MAAPコードの解析モデルでは、原子炉下部キャビティ底の溶融炉心は均一に混合する仮定であり、溶融プールとデブリ粒子が成層化した状態としては取り扱っておらず、クラストと溶融プールから構成される平板状の発熱体として模擬しており、そのモデルの不確かさについては「溶融炉心の冷却過程」で取り扱う。溶融プールとデブリ粒子が成層化した状態では、溶融プールから原子炉下部キャビティ水への伝熱の点で影響があり、不確かさが存在する（感度解析に関しては、後述の「溶融炉心と原子炉下部キャビティ水の伝熱」にて整理する）。</p> <p data-bbox="1095 989 1536 1013">溶融炉心の原子炉下部キャビティ床面への拡がり</p> <p data-bbox="1095 1023 1966 1252">溶融炉心の原子炉下部キャビティ床面への拡がりについては、水がないドライ状態では、溶融させたステンレス鋼により溶融炉心を模擬した実験より均一に拡がるという知見が得られている。国内PWRプラントでは、炉心損傷検知後に、原子炉下部キャビティへの水張りを行うことから、溶融炉心は冷却され表面にクラストを形成しつつ拡がることとなる。クラストは、溶融炉心の相変化時（固化時）の収縮によりクラックが生じ、溶融炉心の自重によってクラストは崩壊して、拡がっていくが、ドライの状態に比べて、拡がりが抑制されることも報告されており、今後、知見の拡充が必要である。</p> <p data-bbox="1095 1262 1966 1423">MAAPコードの解析モデルでは、原子炉下部キャビティ底に落下した溶融炉心は均一に混合された状態を仮定し、原子炉下部キャビティ床面への拡がりについては、拡がり面積を入力条件として与えている。重大事故の緩和策の有効性評価では、原子炉下部キャビティ床全面に均一に拡がることを前提として評価している。これは、米国の新設炉に対する電力要求では炉心出力から原子炉下部キャビティ床面積を求める要求があり、そこでは溶融炉心が床全面に均一に拡がることを前提</p>	<p data-bbox="1973 683 2116 777">※第3部 MAAP添付2 3.2(2)で記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>位置に依らず床全面に溶融物が拡がること、三次元溶融物拡がり解析により示されている^[40]（付録4(5)a参照）。また、PULIMS 実験では、水中での溶融物の拡がり挙動が観察され、高温の溶融物は、水張りがあつたとしても落下直後は膜沸騰が維持された状態で拡がり、その後拡がり停止することが確認されている。また、実験結果を元に、水中での溶融物の拡がり距離を求めるスケーリング則が提案されている。このスケーリング則に、BWRの溶融炉心落下条件を適用して、水中での溶融物の拡がり距離を評価すると、約18mとなる（付録4(5)b参照）。ペDESTAL半径が、ABWRが約5.3m、Mark-I改良型格納容器が約3.2mであることを考慮すると、水張りをしている場合でも溶融炉心は、落下位置に依らず床全面に拡がる可能性が高いと考えられる。これは、溶融物の拡がりに影響する因子のうち、主に溶融炉心落下流量が大きい（全炉心相当の溶融炉心が1分程度で落下することを想定）ことによるものと考えられる。溶融物の拡がり距離については、不確かさを考慮しても床全面に拡がるものと想定される。</p> <p>次に、粒子状ベットの堆積形状の不確かさについて考察する。落下直後の初期段階では、DEFOR実験^[16]で確認されたように不均一に堆積することが想定されるが、崩壊熱を発生するデブリ粒子では、粒子状ベッド内の継続的沸騰による粒子の攪拌によるセルフベリング効果により、時間とともに堆積厚さが均一化することが想定される（付録4(4)参照）。ただし、溶融炉心がペDESTALの中心からずれた位置に落下する場合を想定すると、セルフベリング効果により均一化に向かっているが、偏った堆積形状でMCCIが進行する可能性も考えられる。堆積形状の相違により、溶融炉心から水やコンクリートへの伝熱面積が異なってくる。これにより、溶融炉心から水及びコンクリートへの熱配分が異なってくる。MAAPコードでは、均一堆積形状（円柱）として扱うため、不均一な堆積形状は、正確には模擬できない。図4-1に示す溶融炉心からの伝熱のうち、溶融炉心から水への伝熱が、溶融炉心の冷却に支配的であり、MCCIの結果に大きく影響することを考慮して、均一堆積形状（円柱）と種々の不均一な堆積形状について、水への伝熱面積を比較した。1100MWe BWR 5 Mark-I改相当の比較結果を図4-5に示すが、MAAPコードで想定している均一堆積形状（円柱）が、最も水への伝熱面積が小さくなる。偏った堆積形状を代表する斜切円柱の場合でも、均一堆積形状（円柱）より水への伝熱面積は大きくなっている。円柱状の部分拡がりの場合でも、上面の伝熱面積は減少するが、側面の伝熱面積が加わることにより、均一堆積形状（円柱）より水への伝熱面積は大きくなっている。以上から、堆積形状の不確かさについては、均一堆積形状（円柱）の扱いが、溶融炉心から水への伝熱を小さくし、結果的にコンクリートへの伝熱を大きくしているため、MCCI評価の観点から保守的な扱いとなっていると考えられる。以上の考察より、溶融炉心の拡がりについて、粒子状ベットの堆積形状の不確かさが想定され、溶融炉心から水への伝熱に影響する可能性も考えられることから、拡がりを抑制した場合の感度解析の実施が必要と考えられる。ただし、溶融炉心の拡がりについては、ペDESTALの形状や事前水張りの深さによるところが大きいので、個別プラントにおけるこれらの状況を踏まえて感度解析等の取り扱いを行うことが適切と考えられる。</p>	<p>にした考え方が採用されており、本有効性評価においても同様の考え方に則っている。しかしながら、上述のとおり、ウェットな状態での溶融炉心の原子炉下部キャビティ床面への拡がり面積については、DEFOR実験において堆積形状が山状になるという結果が得られているものの拡がりの観点で詳細に研究がなされているものではなく、知見の拡充が必要であり、現象として不確かさがある。よって、原子炉下部キャビティ床面への拡がりについての感度を確認する。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由														
<div data-bbox="190 204 1010 611"> </div> <div data-bbox="190 638 1010 1173"> <table border="1"> <caption>水への伝熱面積(A) (均一堆積(円柱)の伝熱面積を1とした比率)</caption> <thead> <tr> <th>形状</th> <th>伝熱面積比 [-]</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 (円柱) (有効性評価)</td> <td>1.0</td> </tr> <tr> <td>2 (円錐)</td> <td>1.45</td> </tr> <tr> <td>3 (円錐台)</td> <td>1.4</td> </tr> <tr> <td>4 (部分球)</td> <td>1.35</td> </tr> <tr> <td>5 (斜切円柱)</td> <td>1.35</td> </tr> <tr> <td>6 (円柱(拡がり面積半分))</td> <td>1.5</td> </tr> </tbody> </table> </div> <p data-bbox="286 1225 907 1252">図4-5 溶融炉心の堆積形状のバリエーションと水への伝熱面積の比較</p>	形状	伝熱面積比 [-]	1 (円柱) (有効性評価)	1.0	2 (円錐)	1.45	3 (円錐台)	1.4	4 (部分球)	1.35	5 (斜切円柱)	1.35	6 (円柱(拡がり面積半分))	1.5		
形状	伝熱面積比 [-]															
1 (円柱) (有効性評価)	1.0															
2 (円錐)	1.45															
3 (円錐台)	1.4															
4 (部分球)	1.35															
5 (斜切円柱)	1.35															
6 (円柱(拡がり面積半分))	1.5															

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

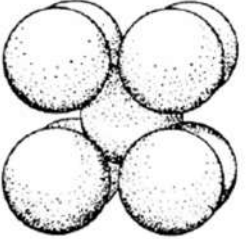
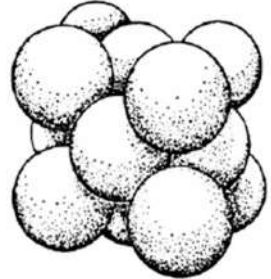
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>デブリから水への熱伝達</p> <p>デブリベッドから水への熱流束は、熔融炉心上面の性状により大きく影響されるため、大きな不確かさが想定される。</p> <p>評価モデル： 熔融炉心上面から水への熱流束は、上部クラスト-水プール間の熱伝達モデルである Kutateladze 型の水平平板限界熱流束相関式（Kutateladze 式）で与えられるが、係数 F_{chf} を調整することにより、熔融炉心上面の性状に応じた熱流束を設定することが可能である。これは、上面の性状に応じて水への熱流束が内部で計算されるモデルではなく、Kutateladze 式による限界熱流束で与えるモデルとなっているためである。</p> <p>評価条件： 事前水張り対策により熔融炉心の一部は粒子化して、デブリ上部に粒子状ベッドを形成し、下部には粒子化しなかった熔融炉心が熔融プールを形成すると想定される。これは、水中に熔融炉心を落下させた実験的知見^{[14][15][16]}（付録3参照）から、安定クラストは形成されず、粒子状ベッドが形成されていることから妥当と考えられる。なお、SSWICS 実験では、コンクリートがデブリに含有されると上面熱流束が低下する結果が得られているが、これは火山型クラストが形成された場合の知見であり、粒子状ベッドに対する知見ではないと判断される。</p> <p>デブリ上面に粒子状ベッドが形成されることを想定し、粒子状ベッドから水への熱流束の不確かさを評価する。ここでは、Lipinski 0-D モデル^[24]を使用し、主なパラメータである粒子径、ポロシティ、堆積高さ、圧力を変えた場合の粒子状ベッドのドライアウト熱流束の不確かさを評価した。以下のように各パラメータを想定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 粒子径は、これまでの実験等の知見により3～7mmと報告されているため^[33]、この範囲を不確かさの範囲と想定する。 ポロシティは、おおむね0.3以上が報告されているが^[33]、粒子の充填状態の幅を考慮して、0.26（面心立方格子、最稠密）、0.32（体心立方格子）、0.4（MAAP標準値）、0.48（単純立方格子）の範囲を想定する（図4-6参照）。 粒子状ベッドの堆積高さは、全炉心相当が落下した場合の堆積高さは1m以上となるが、破損口径の拡大を考慮しても33%以上の粒子化が想定されるため、0.3m以上とする。 圧力は、MCC Iが発生する時間では格納容器圧力は0.4MPa[abs]以上となっているため（図4-7a及び図4-7b参照）、0.4MPa[abs]以上とする。 <p>Lipinski 0-D モデルによる評価結果を以下に示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 図4-8aにドライアウト熱流束の圧力依存性を示す。上記のパラメータの範囲から、粒子径3mm、ポロシティ0.32の熱流束特性が、現実的な範囲内で保守側の特性と想定され、そのとき 	<p>(2) 熔融炉心の冷却過程</p> <p>原子炉下部キャビティ底に堆積した熔融炉心は、高温かつ崩壊熱による発熱状態であるが、周囲のコンクリート及び原子炉下部キャビティ水との伝熱により冷却される。前述のとおり、熔融炉心は一部が細粒化し、残りは連続層として原子炉下部キャビティ床に堆積するが、MAAPコードでは、原子炉下部キャビティに堆積した熔融炉心は、クラストと熔融プールから構成される平板状の発熱体として模擬される。</p> <p>熔融炉心と原子炉下部キャビティ水の伝熱</p> <p>熔融炉心から原子炉下部キャビティ水への伝熱は、熔融プールの表面に形成されるクラストに、原子炉下部キャビティ水によって亀裂が入り、その中に原子炉下部キャビティ水が浸入することによって行われる。</p> <p>MAAPコードの解析モデルでは、クラストから水への伝熱は沸騰熱伝達として扱っており、その熱流束はKutateladzeの式を用いて計算される。Kutateladzeの式は、水平面から飽和水へのプール沸騰（自然対流条件下の沸騰）における限界熱流束に関する整理式で、熔融炉心により加熱されることにより発生する水蒸気の上昇速度とプール水の落下速度のつり合う伝熱量を限界熱流束とする式である。Kutateladzeの式は、</p> $\frac{q}{L\rho_V} = C_K \left[\frac{\sigma g (\rho_L - \rho_V)}{\rho_V^2} \right]^{\frac{1}{4}}$ <p>で表される。qは熱流束、Lは蒸発の潜熱、σは表面張力、gは重力加速度、ρ_L及びρ_Vは液体及び蒸気の密度である。ここで、C_Kは係数であり、Kutateladzeは0.16をZuberは0.12～0.16の範囲、あるいは、$\pi/24$ (=0.131)を与えている。係数C_Kについては、経験的に決定する必要があることから、有効性評価の解析では、米国サンディア国立研究所（SNL）で実施された熔融物とコンクリートの相互作用及び熔融物冷却に関する実験であるSWISS実験において報告されている熔融体から水プールへの熱流束が0.8MW/m²であることに基づき$C_K = 0.1$としている。また、実機条件においては、強度評価によってクラストは破損すると評価されており、上面水プールと熔融炉心が直接接触することによって、高い熱流束が維持されるといえる。</p> <p>Kutateladzeの式を原子炉下部キャビティ床に堆積した熔融炉心に対する限界熱流束の式として用いる場合、本来平板に適用する相関式を山状に堆積するクラストや粒子ベッドに適用することになるため、MAAPコードモデルには不確かさが存在する。クラストと水の界面は、諸外国での実験で示されているように、クラストに亀裂を生じており、そこに水が浸水することが考えられ、解析モデル上はその影響を考慮していないことから、不確かさを有するといえるが、その場合、クラストと水の接触面が大きくなり、熔融炉心の冷却は促進されることから、クラストの亀裂に関しては、不確かさの観点では問題とならない。また、クラストの表面形状に凹凸が生じる可能性については、伝熱面積が大きくなるから、不確かさの観点では問題とならない。また、上面クラストの温度低下については、熔融炉心が冷却される方向であり、これについても不確かさの観点では問題</p>	<p>※粒子状ベッドの形成を想定した感度解析は7.2.4.11にて記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>の熱流束は、大気圧状態で800kW/m²程度となる。また、圧力が0.4MPa[abs]以上での下限値としては、ポロシティの最も小さい0.26のケースで800kW/m²程度のドライアウト熱流束となっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図4-8bにドライアウト熱流束の粒子径依存性を示す。粒子径が3mm以上での下限値としては、ポロシティの最も小さい0.26のケースで800kW/m²程度のドライアウト熱流束となっている。 ・図4-8cにドライアウト熱流束の粒子ベッド高さ依存性を示す。粒子ベッド高さが、0.3m以上ではドライアウト熱流束はほとんど変化がなく、下限値としては、ポロシティの最も小さい0.26のケースで800kW/m²程度のドライアウト熱流束となっている。 <p>以上の粒子状ベッドから水への熱流束の不確かさ評価結果より、有効性評価条件として、大気圧状態で800kW/m²で圧力依存性を考慮した上面熱流束を使用することは、妥当と判断される。これは、MAAPコードのKutateladze式の係数F_{chf}をデフォルトの0.1に設定することに相当する。また、デブリ上面熱流束の不確かさの下限値は、800kW/m²程度と考えられるため、粒子径、ポロシティ等の不確かさによる上面熱流束の不確かさの影響を確認するため、800kW/m²一定を仮定した感度解析を実施する。</p> <p>なお、MAAPコードのF_{chf}のデフォルト値0.1は、安定クラストが形成されたSWISS実験の知見を元に設定されたものであるが、SSWICS実験の知見より実機では溶融物上面に安定なハードクラストは形成されず、クラストに生じる亀裂から冷却水が内部に浸入することで、デブリの冷却は促進されるものと考えられる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>体心立方格子 (ポロシティ 0.32)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>面心立方格子（最稠密） (ポロシティ 0.26)</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">図4-6 粒子の格子配列とポロシティ</p>	<p>とならない。一方、前述のとおり、溶融プール上にデブリ粒子が堆積することにより、クラストと水の接触が阻害され、溶融炉心の冷却が悪くなることも考えられる。解析モデルでは、このプロセスは模擬されず、熱伝達が悪化することから、不確かさが存在する。これらの不確かさとは、溶融炉心の冷却の悪化（熱伝達係数の低下）であるから、熱伝達係数の感度を確認する。</p> <p>また、細粒化時の熱伝達については、デブリ粒子の顕熱及び潜熱から水プールへの伝達が計算され、その伝熱量は膜沸騰及び輻射熱伝達によって計算される。デブリ粒子からの熱量は水蒸気生成と水の温度上昇に変換される。デブリ粒子から水への熱伝達については、細粒化割合と相関があることから、この不確かさについては「エントレインメント係数」の中で整理する。</p>	

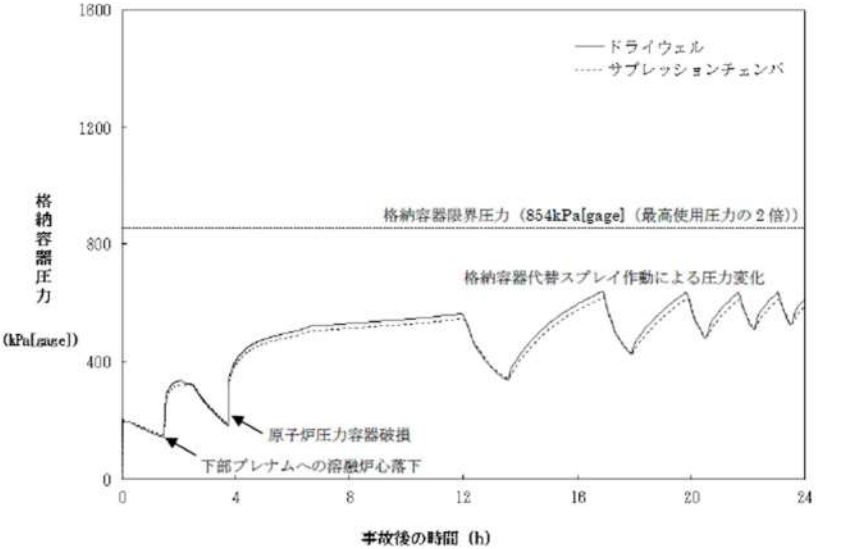
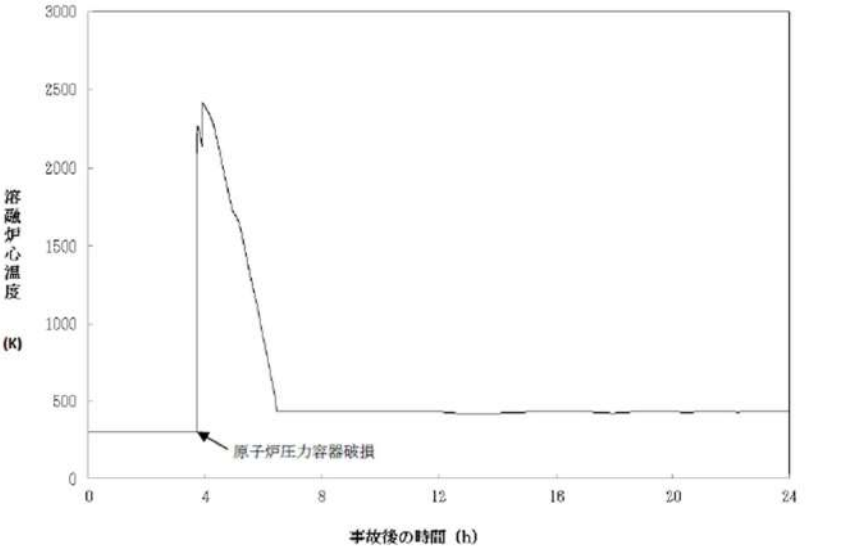
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>溶融炉心とコンクリートの伝熱</p> <p>原子炉下部キャビティ底に堆積した溶融炉心は、下側のコンクリート床と側面のコンクリート壁と伝熱する。溶融炉心からコンクリートへの伝熱は、溶融プールからクラストへの伝熱とコンクリートへの伝熱に分けられる。</p> <p>溶融プールとクラストとの間は、対流熱伝達によって伝熱される。対流熱伝達は、溶融プールのバルク温度と融点温度の差及び溶融プールと炉心クラストとの間の熱伝達係数から計算される。また、クラスト内の温度分布は、溶融プールとクラストの境界からコンクリート表面への熱流束を用いて、準定常の1次元熱伝導方程式を解くことで計算される。溶融炉心からコンクリート床及び側壁に対する熱流束は、溶融プールから下部及び側部クラストへの伝熱と、クラスト内での発熱によるものである。</p> <p>溶融プールとクラストとの間の熱伝達については、溶融プール内の状態（固化燃料の割合）に関する不確かさや対流の不確かさが存在する。溶融プールとクラストとの間の熱伝達が大きい場合には、クラストが溶融し、コンクリートへの伝熱量が増大するため、コンクリート侵食がしやすくなる傾向となる。ただし、有効性評価の状態、すなわち、原子炉下部キャビティへ注水した状態においては、溶融炉心からの除熱は、溶融炉心と温度差が大きい、冷却水側（上面）が支配的になることから、不確かさは存在するものの、影響としては小さいものとする。</p> <p>クラストとコンクリートの間の熱伝達については、ACE 実験及び SURC 実験に対するベンチマーク解析の結果から実験データと同等の侵食深さが MAAP コードにより模擬できていることから、溶融炉心からコンクリートへの伝熱は、適切に模擬できていると判断する。しかしながら、溶融炉心とコンクリートの接触に関しては MAAP コードでは、理想的な平板で密着した状態で取り扱っていることから、接触面積に不確かさが存在する。接触面積が小さいとコンクリートへの伝熱量が小さくなることが考えられ、解析モデル上はその影響を考慮していないことから、不確かさを有するといえるが、その場合、クラストとコンクリートの接触面が小さくなり、コンクリート侵食が抑制されることから、接触面積に関しては、不確かさの観点で問題とならない。</p>	

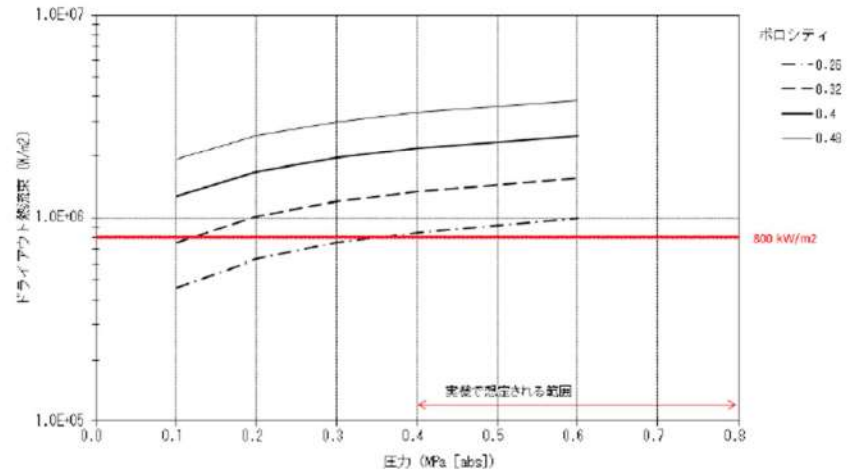
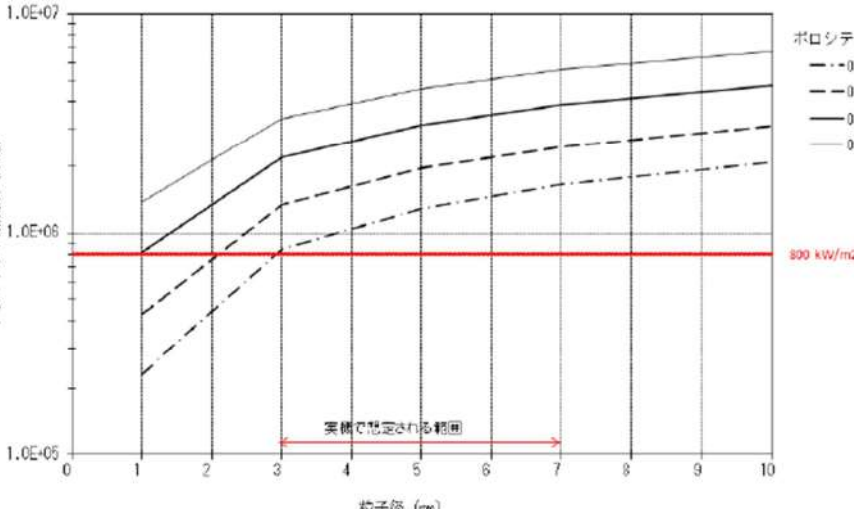
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p>図 4-7a MCCI 評価時の格納容器圧力</p>  <p>図 4-7b MCCI 評価時の溶融炉心温度</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

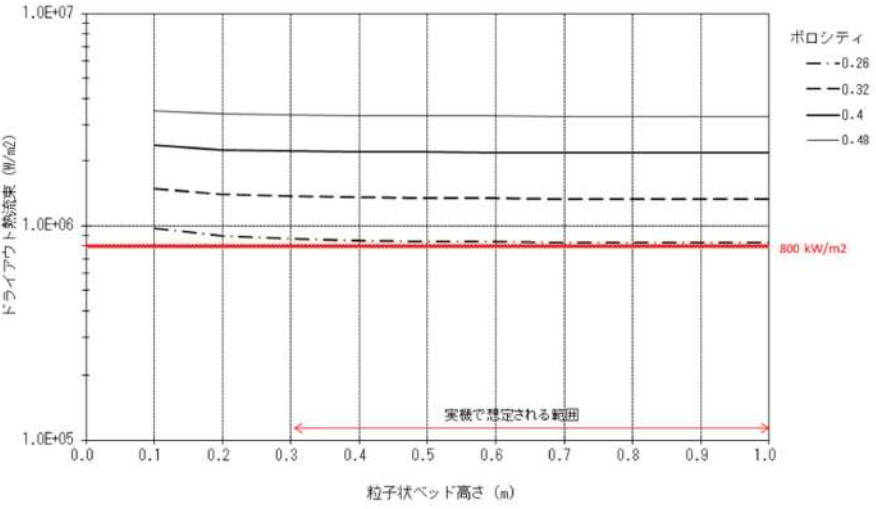
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p data-bbox="403 191 817 215">Lipinski 0-D モデル, 粒子径: 3mm, 粒子状ベッド高さ: 0.5m</p>  <p data-bbox="403 710 817 774">図 4-8a 圧力とドライアウト熱流束の関係 (Lipinski 0-D モデル)</p> <p data-bbox="403 782 907 805">Lipinski 0-D モデル, 圧力: 0.4 MPa(abs), 粒子状ベッド高さ: 0.5m</p>  <p data-bbox="403 1356 817 1420">図 4-8b 粒子径とドライアウト熱流束の関係 (Lipinski 0-D モデル)</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">Lipinski 0-D モデル, 圧力: 0.4 MPa(abs), 粒子径: 3 mm</p>  <p style="text-align: center;">図 4-8c 粒子状ベッド高さ とドライアウト熱流束の関係 (Lipinski 0-D モデル)</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>コンクリート侵食</p> <p>コンクリートの種類（玄武岩系や石灰岩系）により、侵食挙動やガス発生挙動が異なる。また、玄武岩系コンクリートに関しては、壁方向と床方向の侵食量に相違が見られる知見が出ている。床方向に大きく侵食する結果（付録1(3)BETA 実験参照）と壁方向に大きく侵食する結果（付録2(5)OECD/MCCI 実験のCCI-1/3 実験参照）があり、この侵食の異方性は、いまだ十分な理解が得られておらず、現状モデルでも扱われていない。また、実験ではドライ条件において侵食の異方性が確認されており（CCI-1/3 実験では、最初ドライ条件で侵食させている）、実機のウェット条件でもこの侵食の異方性が発生するかは不明であるが、念のためモデルパラメータの感度解析により、この侵食異方性の影響を検討する。</p> <p>評価モデル：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンクリート表面から深さ方向に一次元熱伝導を解き温度分布を計算している。 ・クラスト-コンクリート界面の温度がコンクリート融点以上である場合にコンクリート侵食が計算される。 ・コリウムからの伝熱量と分解/溶融潜熱により侵食量を評価する。 ・コンクリート分解による自由水・結合水・CO₂の発生を考慮し、溶融コリウム中での化学熱力学平衡計算による未酸化金属との反応により H₂ 及び CO 発生が計算される。反応熱は、溶融炉心の崩壊熱に加算される。 <p>評価条件：コンクリートの種類には、玄武岩系や石灰岩系があり、プラントに使用されているコンクリートの種類により組成や物性値を使い分けている。表 4-1 にコンクリートの物性値、表 4-2 にコンクリートの組成例を示しており、これらをMAAPの入力としている。融点は石灰岩系コンクリートの方が高いが、比熱は石灰岩系コンクリートの方が小さい。コンクリート成分は骨材（aggregate）の種類に影響され、玄武岩系コンクリート（Basaltic）の成分はSiO₂が主体であるが、石灰岩系コンクリート（Limestone）では、CaCO₃が主体である。</p> <p>コンクリートの侵食モデルは、主にSURC 実験やACE/MCCI 実験の一次元侵食の実験や、BETA 実験の二次元侵食のドライ実験に対して検証されている（付録1参照）。なお、コンクリート侵食モデルは、コンクリート表面から侵食深さ方向に一樣に侵食する扱いをしているのに対し、実験で得られた侵食深さは、一般的に侵食面で一樣ではない。このため、コンクリート侵食モデルの検証では、実験の平均的な侵食深さと比較して侵食速度が良く一致していることが確認されている。</p> <p>侵食面での侵食の不均一性とMAAPコードの一樣侵食との関係を見るため、SURC-4 実験（一次元侵食）に対するMAAPコードのベンチマーク解析で得られた侵食深さに対して、実験で得られた侵食深さがどの程度の幅にあるかを確認した結果を図 4-9 に示すが、実験で得られた侵食深さは、MAAPコードによる予測侵食量に対しておおむね±20%程度の範囲にある。同様にBETA-V5.1 実験（二次元侵食）に対して確認した結果を同図に示すが、この場合もおおむね±</p>	<p>(3) コンクリートの侵食過程</p> <p>前項で述べたとおり、溶融炉心の冷却過程において、溶融プールからクラストへの伝熱があり、クラスト内部の1次元の熱伝導方程式を解き、コンクリート表面温度を計算している。コンクリートへの熱流束が十分大きく、コンクリート温度が融解温度を上回る場合に侵食が発生する。コンクリートが融解すると、ガス（水蒸気及び二酸化炭素）が発生し、溶融プールに侵入して金属との化学反応が発生し、反応熱が発生するとともに、生成された非凝縮性ガスが原子炉格納容器内に放出され、原子炉格納容器内を加圧する要因となる。また、コンクリートのスラグも溶融プールに侵入し、ウラン及びジルコニウム等との混合物となる。スラグが混入することにより、溶融炉心の融点が低下する傾向となる。</p> <p>コンクリートの組成</p> <p>コンクリートには主に玄武岩系のコンクリートと石灰岩系のコンクリートがある。コンクリート組成が異なると、コンクリート侵食挙動にも違いが生じる。玄武岩系のコンクリートの特徴はSiの含有量が多い。一方、石灰岩系のコンクリートの特徴はCa、CO₂が比較的多く含まれていることである。しかしながら、コンクリート組成については、物性値が把握できており、不確かさに対する感度解析は不要である。</p>	<p>※コンクリート組成に関する感度解析は基本的考え方の6.5.9に記載</p> <p>※異方性の影響は“添付資料7.2.5.3 コンクリート侵食の侵食異方性について”に記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>20%程度の範囲にある。従って、実験における侵食面での侵食深さは、MAAPコードによる予測侵食量のおおむね±20%程度の範囲にあると考えられる。</p> <p>また、壁方向と床方向の二次元侵食を調べる OECD/MCCI プロジェクトのCCI実験では、石灰岩系コンクリート（CCI-2 実験）と玄武岩系コンクリート（CCI-1 実験、CCI-3 実験）の侵食挙動が調べられている。</p> <p>石灰岩系コンクリート（CCI-2 実験）では、壁方向と床方向に等方的に侵食している。一方、玄武岩系コンクリート（CCI-3 実験）では、壁方向と床方向の侵食の異方性が確認されており（付録2参照）、玄武岩系コンクリートの壁方向と床方向の侵食速度の相違から、壁方向の熱流束が、床方向の熱流束の約4倍程度大きいと推定されている。なお、同様に玄武岩系コンクリートが使われたCCI-1 実験では、加熱条件が他の実験と異なり高く設定されていたため、代表性があるとは見なされず、侵食挙動の分析やベンチマーク解析には、CCI-3 実験の結果の方が使われている。玄武岩系コンクリートの壁方向と床方向の侵食の異方性のメカニズムに関しては、明確な理解は得られていないが、CCI-3 実験に対するMAAPコードのベンチマーク解析^[35]において、壁方向への熱流束が床方向の4倍程度大きくなるように溶融プールからの対流熱伝達係数を設定することにより、実験の侵食挙動と良く一致する解析結果が得られている。この場合も、実験の侵食深さは、MAAPコードの予測侵食量に対して、上記のSURC-4 実験及びBETA-V5.1 実験のベンチマーク解析で設定した20%以内の侵食深さに収まっている（図4-10参照）。以上のMAAPコードのベンチマーク解析の分析から、コンクリート侵食の不確かさについて、以下のことが言える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・侵食面における侵食深さのばらつき範囲は、MAAPコードの予測侵食量の20%以内に入っている。 ・玄武岩系コンクリートの壁方向と床方向の侵食の異方性は、MAAPコードにおいて溶融プールからの対流熱伝達係数を変更することにより予測可能である。その場合も侵食のばらつき範囲は、MAAPコードの予測侵食量の20%以内に入っている。 <p>以上のことから、コンクリート侵食の不確かさに関して、侵食面における侵食深さの不均一性については、おおむねMAAPコードによる予測侵食量の20%の範囲内であることがわかった。一方、玄武岩系コンクリートの壁方向と床方向の侵食の異方性については、実機における影響の確認のため感度解析が必要と考えられ、CCI-3 実験のベンチマーク解析を参考にして、溶融プールから壁方向と床方向の対流熱伝達係数を調整して感度解析を実施する。壁方向の熱配分の最大ケースとして、床方向の4倍として感度解析を行い、コンクリート侵食の壁方向と床方向の異方性の影響を確認する。</p> <p>以上の各過程での、MCCI現象の影響因子と感度解析パラメータの関係を図4-11に示し、不確かさ要因、有効性評価の扱い及び感度解析の要否を表4-3に整理する。また、溶融炉心とコンクリートの相互作用における実機で想定される現象と解析上の取り扱いの比較を図4-12に示す。</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉			泊発電所3号炉	相違理由
表 4-1 コンクリートの物性比較 (MAAP入力)				
項目	玄武岩系コンクリート	石灰岩系コンクリート		
コンクリート組成	SiO ₂ が主体	CaCO ₃ が主体		
液相線温度 (K)				
固相線温度 (K)				
比熱 (J/kg-K)				
溶融潜熱 (J/kg)				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。 </div>				
表 4-2 代表的なコンクリートの組成例 (重量%) ^[37]				
成分	玄武岩系コンクリート	石灰岩系コンクリート		
SiO ₂	54.84	3.60		
TiO ₂ , MnO, MgO	7.21	5.80		
CaO	8.82	45.40		
Na ₂ O	1.80	0.0078		
K ₂ O	5.39	0.68		
Fe ₂ O ₃	6.26	1.20		
Al ₂ O ₃	8.32	1.60		
Cr ₂ O ₃	0.00	0.004		
CO ₂	1.50	35.698		
H ₂ O (自由水, 結合水)	5.86	5.94		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="152 177 555 252" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div> <div data-bbox="215 272 922 1265" style="border: 2px solid black; height: 600px; margin-top: 20px;"> </div> <div data-bbox="271 1294 920 1321" style="margin-top: 10px;"> <p>図 4-9 SURC-4 と BETA-V5.1 実験と MAAP4 コード予測の侵食量の比較^[23]</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="152 204 555 272" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div> <div data-bbox="255 344 920 869" style="border: 2px solid black; height: 300px; margin: 20px 0;"> </div> <div data-bbox="331 884 869 911" style="text-align: center;"> <p>図 4-10 CCI-3 実験（玄武岩系コンクリート）の侵食深さ^[12]</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉				泊発電所3号炉				相違理由
<p>本資料のうち、枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p>								
<p>表 4-3 MCCI 評価の不確かさに関する整理結果</p>								
MCCI現象への影響因子	不確かさ要因	有効性評価の根拠	感度解析の要否					
下部ヘッド破損モード	破損部位 破損口侵食拡大	下部ヘッド貫通部の中で最も大口径の別個体運動機構ハウジングの瞬時破損を想定し、破損口径の拡大を考慮	下部ヘッド貫通部の中で最も大口径の貫通部の破損を想定し、破損口径の拡大も考慮しているため、感度解析不要。					
溶融炉心落下量	原子炉圧力容器内溶融進展	全炉心相当を想定	全炉心相当の最も厳しい落下量を想定しているため、感度解析不要。					
溶融炉心の粒子化	プール水深	ベジスタルの注水開始条件及び注水流量について、手順書規定に準じた操作を想定	解析モデルのパラメータではないため、感度解析不要。					
	エントレインメント係数	実験解析を元に、粒子化割合を少ない側に評価する値を使用	エントレインメント係数に不確かさがあるため、MAAPコードの不確かさ範囲内 (FARO 実験解析に基づく) で感度解析を実施。					
溶融炉心の拡がり	溶融炉心ジェット径	破損口径に対応した径を考慮	最も大きい径を想定して、粒子化割合を小さくし、水に落下した際のデブリクエントレインメント係数を小さくして最も厳しい例の扱いをしているため、感度解析不要。					
	水による拡がり抑制	拡がりの知見から、全面に拡がることを想定し、均一堆積モデルを使用	溶融炉心の拡がりを抑制した場合を想定し、水張り感さ等の個別プラントの状況を踏まえた感度解析等の取り扱いは行うことが必要。					
デブリから水への熱伝達	デブリ上面の性状	粒子体ベットの熱伝達として、現実的な範囲内で保守側の想定をして、大気圧状態で80%W/m ² として圧力依存性を考慮	粒径やボロン濃度の不確かさを考慮して、下限の熱伝達率に対して感度解析を実施。					
コンクリート種類 (玄武岩系コンクリートの侵食の異方性)	壁方向と床方向の熱分配	溶融プールが完全な液相の場合の対流運動を考慮して、床方向クラスタスへの壁方向クラスタスへは使用	床方向と壁方向の侵食の影響を見るため、CCI-3実験で確認された熱分配比率を想定した感度解析を実施。					
	影響因子	実機での実現象	解析上の取扱い	感度解析条件				
原子炉下部キャビティへの注入量	ブローダウン水、スプレイ水等が原子炉下部キャビティに回り込み、原子炉下部キャビティ水深が決まる。	ノード-ジヤングシヨシヨシモデルに従い、原子炉下部キャビティに流れ込む水量が評価される。	原子炉下部キャビティ水深 (5. (1) にて感度解析実施)					
エントレインメント量	デブリジェット径が大きいため、水中に落下する溶融炉心の内、エントレインメント部分はジェットの表面近傍に限られると想定される。	逆円錐型のデブリジェットに対して、Ricou-Spalding 相関式によって評価される。	エントレインメント係数 (5. (2) にて感度解析実施)					
デブリジェット径	破損口を侵食しながらデブリジェットが流出すると想定される。	ジェット径は初期破損口径から破損口の侵食を考慮して評価される。	エントレインメント係数 (5. (2) にて感度解析実施)					
溶融炉心落下速度	破損口径、原子炉容器内外圧力差、重力から決まると想定される。	落下速度は、破損口径、原子炉容器内外圧力差、重力から評価される。	エントレインメント係数 (5. (2) にて感度解析実施)					
堆積したデブリ粒子	連積層として原子炉下部キャビティ床面に堆積した溶融炉心の上に粒子状ベットの層が堆積すると想定される。あるいは、連積層の溶融炉心の中に巻き込まれると想定される。	連積層の溶融炉心と区別なく、平板状の凝熱体として評価される。	水-溶融炉心間の熱伝達係数 (5. (4) にて感度解析実施)					
	溶融炉心の拡がり及び堆積形状	溶融炉心が過熱度を持ち断続的に原子炉下部キャビティ床に落下すること等から、原子炉下部キャビティ床面積相当に拡がると想定される。	床面積全面に一律に拡がるとして、原子炉下部キャビティ床面積設計値を入力する。	溶融炉心の拡がり面積 (5. (3) にて感度解析実施)				

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

u003c/divu003e

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
表4-1 MCCIの不確かさに関する整理結果 (2/2)		
表機での実現象		
影響因子	実機での実現象	感度解析条件
水と溶融炉心の伝熱	実機スケールでは、溶融炉心の上面に形成されるクラスタには亀裂が生じ、溶融プールと水が直接接触することによって冷却が促進すると想定される。	水-溶融炉心間の熱伝達係数(5.(4)にて感度解析実施)
上面クラスタの亀裂、表面形状及び温度低下	実機スケールでは、溶融炉心の上面に形成されるクラスタには亀裂が生じ、クラスタ温度が低下すると想定される。クラスタ表面で凹凸も生じると想定される。	MCCIを促進する取扱いのため、感度解析不要
溶融プールと下面及び側面クラスタ間の伝熱	溶融プール内の対流によって下面及び側面クラスタへ伝熱すると想定される。	原子炉下部キャビティ注水あり条件ではMCCIへの影響が小さいため、感度解析不要
下面クラスタとコンクリートの接触面積	下面クラスタ内の熱伝導によってコンクリートへ伝熱すると想定される。	MCCIを促進する取扱いのため、感度解析不要
コンクリート組成	コンクリートが分解温度に達すると吸熱量に応じて侵食を開始し、その過程で組成に応じて非凝縮性ガスが放出されると想定される。	物性値が把握できており、感度解析不要
解析上の取扱い		
平板状の発熱体に対して、Kutateladzeの相関式によって評価される。		
平板状の発熱体に対して、Kutateladzeの相関式によって評価される。		
対流熱伝達相関式によって評価される。		
境界温度と熱伝導方程式によって評価される。		
コンクリートが分解温度に達すると吸熱量に応じて侵食を開始し、その過程で組成に応じて非凝縮性ガスが放出されるとして評価される。		

MCCI-107

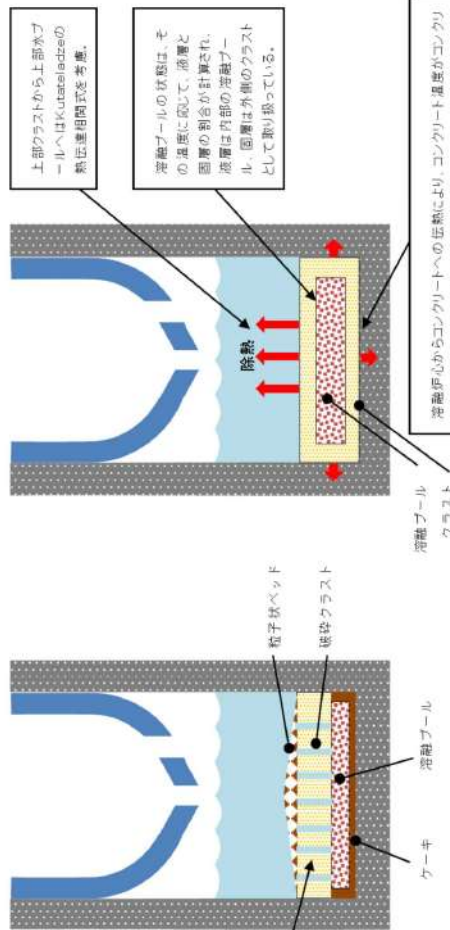
赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉 【参考のため掲載順を入替え】	泊発電所3号炉	相違理由
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="width: 45%;"> <p>実機で想定される現象</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>解析上の取り扱い</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">図 4-12 溶融炉心とコンクリートの相互作用における実機で想定される現象と解析上の取り扱いの比較</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="width: 45%;"> <p>実機で想定される現象</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>計算モデルの扱い</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">図 4-1 溶融炉心伝熱の想定される現象と解析上の取り扱いとの比較概念図 (1/2) 原子炉下部キャビティでの溶融炉心挙動</p>	<p>相違理由</p>

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="1142 949 1176 1173" style="writing-mode: vertical-rl;"> <p>実機で想定される現象</p> </div> <div data-bbox="1142 550 1176 726" style="writing-mode: vertical-rl;"> <p>計算モデルの扱い</p> </div> </div>  <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="1388 1220 1635 1412" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>溶融炉心上面からクラストが形成されるが、自重あるいは熱応力によって破砕していく。このため溶融炉心は急激に冷却されていく。</p> <p>その後、溶融物は破砕クラストとなって固り、上に粒子ベッドとケーキが存在する。</p> </div> <div data-bbox="1254 255 1702 758" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>上部クラストから上部水プールへはKutateladzeの熱伝達相関式を考慮。</p> <p>溶融プールの状態は、その温度に応じて、液層と固層の割合が計算され、液層は内部の溶融プール、固層は外層のクラストとして取り扱っている。</p> <p>溶融炉心からコンクリートへの伝熱により、コンクリート温度がコンクリート融解温度を越えると蒸気が開始する。</p> <p>クラストからコンクリート内部の熱伝達が、コンクリート内部の熱伝達を上回る場合にコンクリート温度は上昇する。また、溶融炉心の冷却が進み、コンクリート温度の方が高くなる場合には、コンクリートから溶融炉心への伝熱も発生している。</p> </div> </div>	<p>相違理由</p> <p>図 4-1 溶融炉心伝熱の想定される現象と解析上の取扱いとの比較概念図 (2/2) 溶融炉心と冷却水及びコンクリートとの相互作用</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p style="text-align: center;">【参考のため掲載順を入替え】</p> <p style="text-align: center;">図 4-11 MCCI における不確かさに関する流れ図</p>	<p style="text-align: center;">図 4-2 MCCI における不確かさに関する流れ図</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

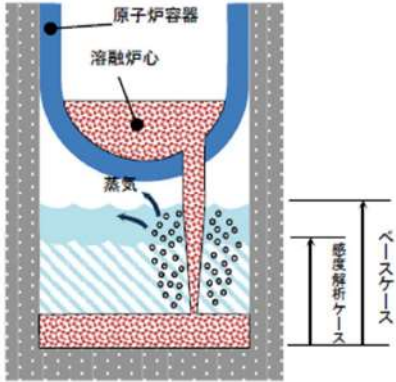
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div data-bbox="1317 233 1783 758" data-label="Figure"> <p>(a)デブリジェット径が小さい場合</p> <p>(b)デブリジェット径が大きい場合</p> <p>水中に落下したデブリジェットは細粒化し、逆円錐状となる。ジェット径が大きい場合、細粒化されずに床に到達する割合が増大する。一方、ジェット径が小さい場合、ジェットは床に到達するまでに全量が細粒化する。</p> </div> <p data-bbox="1317 783 1704 807">図4-3 デブリジェット径と細粒化量の関係</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由									
<p>5. 感度解析と評価</p> <p>ベDESTAL床上の熔融炉心の堆積高さが高い方が、熔融炉心の冷却性が悪くなり、MCCIの影響が厳しくなる。国内BWRでは、全炉心が落下した場合には、熔融炉心の堆積高さは Mark-I 改や Mark-II で約1m 程度であり、ABWRでは約0.5m 程度である。このため、ここでは、熔融炉心の堆積高さの高いBWR 5 Mark-I 改プラントを対象に感度解析を行う。前節の検討を踏まえ、BWR 5 Mark-I 改プラントの大LOCAシーケンスを対象に抽出されたパラメータの感度解析を実施した。</p> <p>また、ガスの発生の影響を見るために参考解析として石灰岩系コンクリートを想定した解析も実施した。</p>	<p>5 感度解析と評価</p> <p>前章において抽出したパラメータに関して感度解析によりその影響程度を把握した。感度解析のベースケースは、3ループプラントの「大破断 LOCA+ECCS 注入失敗+CV スプレイ注入失敗」である。</p> <p>(1) 原子炉下部キャビティ水深</p> <p>解析条件</p> <p>ベースケースでは、炉心損傷検知後30分で代替格納容器スプレイを実施することとしている。感度解析ケースでは、代替格納容器スプレイ作動のタイミングがベースケースよりも30分遅くなることを想定する。この場合、原子炉下部キャビティへの注水も遅れ、原子炉下部キャビティ内での熔融炉心冷却に影響を与える可能性がある。</p> <table border="1" data-bbox="1070 746 1944 911"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>代替格納容器スプレイ作動</th> <th>設定根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ベースケース</td> <td>炉心熔融後 30分</td> <td>運転員等操作余裕時間として設定</td> </tr> <tr> <td>感度解析ケース</td> <td>ベースケース+30分</td> <td>ベースケースより更に 30分遅くなることを想定</td> </tr> </tbody> </table> 	項目	代替格納容器スプレイ作動	設定根拠	ベースケース	炉心熔融後 30分	運転員等操作余裕時間として設定	感度解析ケース	ベースケース+30分	ベースケースより更に 30分遅くなることを想定	<p>※PWRでは事前に水張りを実施することから感度解析が必要となるため記載</p>
項目	代替格納容器スプレイ作動	設定根拠									
ベースケース	炉心熔融後 30分	運転員等操作余裕時間として設定									
感度解析ケース	ベースケース+30分	ベースケースより更に 30分遅くなることを想定									

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>解析結果</p> <p>図5-1-1～5-1-9に、原子炉下部キャビティ水深の感度解析結果を示す。</p> <p>ベースケースと感度解析ケースで、本パラメータの影響は炉心熔融後30分以降に現れる。代替格納容器スプレィ作動のタイミングがベースケースに比べて30分遅くなったことにより、原子炉容器破損時点の原子炉下部キャビティ水深がベースケースに比べて約半分に減少する。しかしながら、原子炉容器が破損し、熔融炉心が原子炉下部キャビティに落下して以降は、ベースケースと感度解析ケースで大きな違いはなく、コンクリート侵食深さはベースケースが約3mm、感度解析ケースが約4mmとなった。</p> <p>デブリジェット径は原子炉容器破損口径に相当し、原子炉容器破損後に熔融炉心が原子炉下部キャビティに落下するのに対応して、原子炉容器下部ヘッドが侵食して破損口径が拡大していく。事故発生後約2.8時間には原子炉容器の2回目の破損が生じ、その破損口から熔融炉心が原子炉下部キャビティに落下し、破損口径が拡大していく。この現象については、ベースケースと感度解析ケースで大きな違いはない。破損口径は、熔融炉心による侵食により40～60cmまで早期に拡大する。また、原子炉下部キャビティ水位は、原子炉容器破損以降、0.5～2mの範囲にある。この水位及びジェット径をDEFOR実験の知見（図3.1-34）に適用する。原子炉下部キャビティ水位が図の範囲外であるものの、外挿すると、実機ではデブリジェットはほぼケーキ状に堆積することが分かる。</p> <p>評価</p> <p>原子炉下部キャビティ水深のコンクリート侵食に対する感度は小さく、その不確かさが有効性評価の結果に与える影響は小さいといえる。</p>	

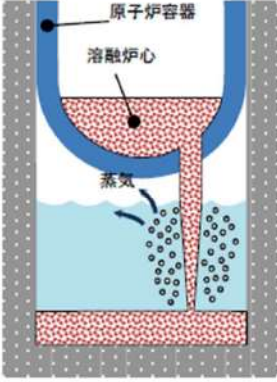
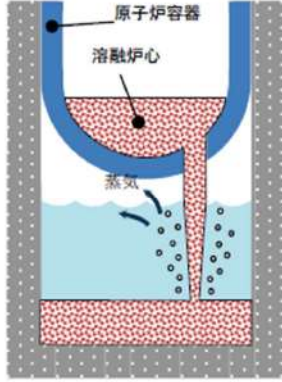
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由																	
<p>(1) エントレインメント係数の感度解析</p> <p>エントレインメント係数は、ベースケースでは [] を設定しているが、感度解析ケースでは、MAAPコードのFARO 実験解析を元に設定されている当該変数の不確かさ範囲のうち、最小値である [] と最大値である [] の感度解析を実施する。感度解析ケースを表5-1 に示す。解析結果を図5-1-1a, 図5-1-1b, 図5-1-2a, 図5-1-2b 及び表5-5 に示す。</p> <p>エントレインメント係数が小さいと粒子化割合が減り、落下時のクエンチによる除熱量が減るため、床に堆積する熔融炉心の温度はベースケースより高めに推移し、コンクリートへの伝熱量も増加するため、侵食量は若干増えている。エントレインメント係数が大きいと粒子化割合が増えて逆のことが起こり、侵食量は若干減少している。</p> <p>エントレインメント係数の不確かさ幅の範囲では、コンクリート侵食量への影響は小さい。</p> <p style="text-align: center;">表5-1 エントレインメント係数のベースケースと感度解析ケース</p> <table border="1" data-bbox="145 1037 1041 1244"> <thead> <tr> <th>パラメータ</th> <th>ベースケース (有効性評価)</th> <th>感度解析ケース</th> <th>根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① エントレインメント係数</td> <td>[]</td> <td>(1) [] (小) (2) [] (大)</td> <td>(1)MAAP 不確かさ範囲*の最小値 (2)MAAP 不確かさ範囲*の最大値 *FARO 実験解析を元に設定</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">本資料のうち枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p>	パラメータ	ベースケース (有効性評価)	感度解析ケース	根拠	① エントレインメント係数	[]	(1) [] (小) (2) [] (大)	(1)MAAP 不確かさ範囲*の最小値 (2)MAAP 不確かさ範囲*の最大値 *FARO 実験解析を元に設定	<p>(2) Ricou-Spalding のエントレインメント係数</p> <p>解析条件</p> <p>エントレインメント係数はベースケースでは [] を設定しているが、感度解析ケースでは、原子炉下部キャビティ底に直接落下する塊状の熔融炉心を多くして、コンクリートが加熱されやすくなるよう、MAAP コードの当該変数の推奨範囲 [] ([]) のうち最も小さい値、すなわち、細粒化割合が小さく評価される値である [] を設定する。なお、推奨範囲とは、FCI の大規模実験に対するベンチマーク解析において検討された範囲のことである。FCI の大規模実験の条件として、水プールの水深は0.87~2.05m、水プールのサブクール度は飽和~124K、雰囲気圧力条件は2~5.8MPa（高圧条件）、0.2~0.5MPa（低圧条件）を考慮している。一方、熔融炉心が原子炉下部キャビティへ落下する時点の特徴的な条件では、原子炉下部キャビティの水位は1~2m、原子炉下部キャビティ内の冷却水のサブクール度は数十℃、雰囲気圧力は0.2~0.3MPa（abs）であり、実験条件は有効性解析の特徴的な条件を包絡する。したがって、実験で検討された範囲に対して感度を確認すれば十分といえる。なお、デブリジェット径については、実験条件と実機条件に差があり、実機条件の方が、径が大きい。このため、実機条件では細粒化される熔融炉心は一部であり、残りの大部分は連続層のまま原子炉下部キャビティ床に堆積すると考えられる。実験ではジェット径に対して水深が深いため、ジェットの先端が床に到達せず、ほとんどすべての熔融炉心が細粒化されており、この条件に対してエントレインメント係数の幅が評価されている。したがって、実機条件のように、ジェット径に対する水深が浅い場合には、エントレインメント係数はより小さく評価されると考えられるが、デブリジェット径が大きいこととエントレインメント係数が小さいことは等価といえるため、デブリジェット径の不確かさはエントレインメント係数の不確かさとして評価する。また、熔融炉心の過熱度が大きい場合には、冷却されずに原子炉下部キャビティ床に堆積し、凝集状態になるが、このような状況についてもエントレインメント係数が小さい場合に相当し、熔融炉心の過熱度の不確かさもエントレインメント係数の不確かさとして評価することができる。</p> <table border="1" data-bbox="1064 1037 1948 1165"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>エントレインメント係数</th> <th>設定根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ベースケース</td> <td>[]</td> <td>当該変数推奨範囲の最確値</td> </tr> <tr> <td>感度解析ケース</td> <td>[]</td> <td>当該変数推奨範囲の最小値</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p>	項目	エントレインメント係数	設定根拠	ベースケース	[]	当該変数推奨範囲の最確値	感度解析ケース	[]	当該変数推奨範囲の最小値	
パラメータ	ベースケース (有効性評価)	感度解析ケース	根拠																
① エントレインメント係数	[]	(1) [] (小) (2) [] (大)	(1)MAAP 不確かさ範囲*の最小値 (2)MAAP 不確かさ範囲*の最大値 *FARO 実験解析を元に設定																
項目	エントレインメント係数	設定根拠																	
ベースケース	[]	当該変数推奨範囲の最確値																	
感度解析ケース	[]	当該変数推奨範囲の最小値																	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>ベースケース</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>感度解析ケース</p> </div> </div> <p>エントレインメント係数を小さく設定し、原子炉下部キャビティ底に直接落下する塊状の溶融炉心を多くする。</p> <p>解析結果</p> <p>図5-2-1～5-2-10に、エントレインメント係数の感度解析結果を示す。</p> <p>ベースケースと感度解析ケースで、本パラメータの影響は原子炉容器破損以降に現れる。溶融炉心が原子炉下部キャビティに落下する時点（1.5時間）での原子炉格納容器圧力の上昇は、感度解析ケースの方がわずかに小さいことから、溶融炉心の細粒化量が少なく、塊状のまま原子炉下部キャビティに落下する溶融炉心の量が増加していることが分かる。溶融炉心のエントレインメント割合を比較すると、ベースケースでは約0.2であるのに対して、感度解析ケースでは、約0.1となっている。したがって、溶融炉心のうち、大半は連続層として原子炉下部キャビティ床に堆積し、落下中に細粒化する溶融炉心は一部であるといえる。また、図5-2-10に表示しているエントレインメント割合は溶融炉心の落下中の値であり、床面に堆積する粒子状ベッドの割合は、DEFOR試験の結果から、更に小さくなると考えられる。なお、MAAPコードでは、細粒化された溶融炉心は連続層の溶融炉心と混合された状態で原子炉下部キャビティ床に堆積し、溶融炉心とクラストからなる平板上の発熱体として模擬している。</p> <p>溶融炉心と水の熱流束を比較すると、約1.5時間以降は、ベースケースと感度解析ケースとでピーク値は同等であるが、感度解析ケースでは、高い熱流束の継続時間がわずかに長く、溶融炉心の冷却に時間を要している結果となっている。次のピークについては、ベースケースと感度解析ケースとで大きく異なり、感度解析ケースにおいて高いピークが表れているが、これは、エントレインメント係数を小さくすることで、細粒化されずに塊状のまま原子炉下部キャビティ床に到達した溶融炉心が多くなっていることによる。以下、同様の傾向となっている。なお、水と溶融炉心間の熱流束が約1.3MW/m²の時間帯と約0.5MW/m²の時間帯に分かれているのは、時間帯によって原子炉下部キャビティに落下した溶融炉心の保有熱が異なるためである。熱流束が大きい（約1.3MW/m²）時間帯は、溶融炉心が多量に落下した後であり、その時間帯では、溶融</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>炉心の保有熱は大きく、限界熱流束相当の熱流束が発生する。その後、溶融炉心が冷却、固化したクラストの状態になると、温度が周辺の水プールと同程度まで低下するため、除熱量は崩壊熱に制限され、熱流束は約0.5MW/m²まで小さくなる。MAAPコードの解析モデルでは、クラストから水への伝熱は沸騰熱伝達として扱っており、熱流束は Kutateladze の式を用いて計算され、その係数として0.1を使用している。溶融炉心と水との間の熱伝達の不確かさ、あるいは熱伝達相関式の不確かさが存在し、熱伝達が悪化する場合には、大きい保有熱を持つ溶融炉心は冷却されにくくなり、コンクリート温度が高く維持されることが予想される。熱伝達の不確かさについては、「(4) 水-溶融炉心間の熱伝達係数」において考察する。</p> <p>一方、溶融炉心とコンクリートの熱流束についても、水との熱伝達の場合と同様であり、溶融炉心の冷却に時間を要することから、コンクリートへの熱流束がわずかに大きい、長時間継続することはないため、コンクリートの侵食深さへの影響はわずかであり、継続的なコンクリート侵食が発生する状況ではない。コンクリート侵食深さはベースケースが約3mm、感度解析ケースが約4mmとなった。なお、溶融炉心とコンクリートとの間の熱伝達については、基本的には溶融炉心側からコンクリート側に熱が流れるが、熱が逆向きに流れることもある。これは、コンクリート表面温度は溶融炉心が落下した後に急激に上昇し、その後、溶融炉心が上面の水に冷却されるためコンクリート表面温度も低下するが、その際一時的にコンクリート表面温度と溶融炉心の温度が逆転する場合があります、そのときに溶融炉心とコンクリートとの熱流束が負の値となるためである。MAAPコードの解析モデルでは、溶融プールとクラストの界面は対流熱伝達を仮定する。クラスト内部は2次関数の温度勾配を持つと仮定し、クラストとコンクリートの界面がコンクリート表面温度となる。コンクリート内では、深さ方向に1次元の熱伝導方程式により温度分布を持つ仮定としている。溶融炉心とコンクリートとの間の熱伝達には不確かさが存在するが、接触面積が小さくなる場合には、コンクリートへの伝熱量が小さくなり、コンクリート侵食は抑制される方向となるため、不確かさの観点では問題とならない。</p> <p>また、ジェット径及び落下速度の不確かさについては、「4. 不確かさに関する整理」に記載したとおり、エントレインメント係数の不確かさと重畳させると約5割の不確かさがあり結果を厳しくする方向である。これについて、約□割の不確かさ幅で感度を確認した結果、溶融炉心のエントレインメント割合については感度が出ているものの、他のパラメータについては、水-溶融炉心間の限界熱流束の継続時間が若干長くなっている以外は、感度はほとんど現れない。これは、本事故シーケンスでは、溶融炉心に対するエントレイン割合が比較的小さいことにより、粒子状の溶融炉心からの除熱量が小さくなるためである。したがって、水-溶融炉心間の限界熱流束の感度としてはわずかであることから考察すると、約5割の不確かさを考慮した場合にも、その不確かさが有効性評価に与える影響は小さいといえる。</p> <p><u>評価</u></p> <p>エントレインメント割合のコンクリート侵食に対する感度は小さく、その不確かさが有効性評価の結果に与える影響は小さいといえる。</p>	

枠囲みの内容は商業機密に属します
 ますので公開できません。

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由								
<p>(2) 上面熱流束の感度解析</p> <p>感度解析ケースを表5-2 に示す。上面熱流束の不確かさを考慮した下限値として、Lipinski 0-D モデルにより評価される粒子状ベッドのドライアウト熱流束において、想定される範囲でドライアウト熱流束を小さくする条件の値を選定することとし、圧力0.4MPa[abs]、粒子径3mm、及びポロシティ0.26 を条件とした場合の熱流束である800kW/m²（一定）を選定した。解析結果を図5-2a、図5-2b及び表5-5に示す。</p> <p>上面熱流束が小さいと水への熱伝達量が減少するため、熔融炉心の温度はベースケースより高めに推移し、コンクリートへの伝熱量も増加するため、侵食量は増えている。</p> <p>上面熱流束の不確かさ幅の範囲では、コンクリート侵食量への影響は大きい。</p> <p style="text-align: center;">表5-2 上面熱流束係数のベースケースと感度解析ケース</p> <table border="1" data-bbox="147 627 1043 829"> <thead> <tr> <th>パラメータ</th> <th>ベースケース (有効性評価)</th> <th>感度解析ケース</th> <th>根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>②上面熱流束係数 (F_{chr})</td> <td>F_{chr}=0.1 (default) 圧力依存性あり (大気圧状態[で約800kW/m²])</td> <td>800kW/m² 一定</td> <td>Lipinski 0-D モデルによる評価において、圧力0.4MPa[abs]、粒子径3mm、ポロシティ0.26のドライアウト熱流束</td> </tr> </tbody> </table>	パラメータ	ベースケース (有効性評価)	感度解析ケース	根拠	②上面熱流束係数 (F _{chr})	F _{chr} =0.1 (default) 圧力依存性あり (大気圧状態[で約800kW/m ²])	800kW/m ² 一定	Lipinski 0-D モデルによる評価において、圧力0.4MPa[abs]、粒子径3mm、ポロシティ0.26のドライアウト熱流束	<p>(3) 熔融炉心の拡がり面積解析条件</p> <p>熔融炉心の拡がり面積には不確かさがあり、拡がり面積が小さい場合にコンクリートへの熱流束が大きくなる。熔融炉心の落下過程において、冷却が進むと、拡がり面積が小さくなり、冷却されないと拡がり面積が大きくなる傾向となる（添付3-1）。</p> <p>したがって、拡がりの形態として、以下の2ケースを考える。</p> <p>ただし、水中での熔融物の拡がりの挙動については、これまで実験による知見も少なく、複雑であることから、以下の2ケースについては、実現象の不確かさを網羅するという観点で条件を設定した。したがって、本ケースの条件設定は、極端な条件として設定したものであり、現実的に起こりうるものではないと考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・落下時に冷却されず高温のまま床に到達するケース ・落下時に細粒化等により冷却が進むケース <p>まず、落下時に冷却されずに高温のまま床に到達するケースでは、評価上、最初の原子炉容器破損による熔融炉心の落下により、原子炉下部キャビティ床面に約47 m²の広さで拡がり、原子炉下部キャビティ床面積とほぼ同等となる。その後、断続的に熔融炉心が落下するため、熔融炉</p>	<p>※粒子状ベッドの形成を想定した感度解析は7.2.4.11に記載</p> <p>※泊も女川同様に7.2.5.5で個別解析を実施</p>
パラメータ	ベースケース (有効性評価)	感度解析ケース	根拠							
②上面熱流束係数 (F _{chr})	F _{chr} =0.1 (default) 圧力依存性あり (大気圧状態[で約800kW/m ²])	800kW/m ² 一定	Lipinski 0-D モデルによる評価において、圧力0.4MPa[abs]、粒子径3mm、ポロシティ0.26のドライアウト熱流束							

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

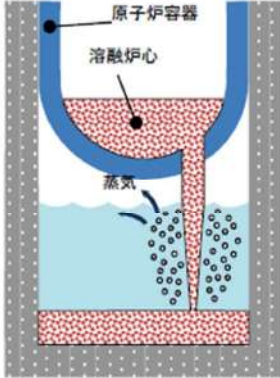
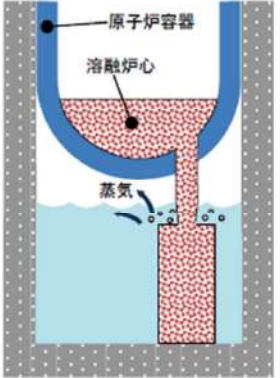
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>心は床全面を超えて拡がると考えられるが、実際は原子炉下部キャビティ壁により拡がり制限されるため、溶融炉心の拡がり面積としては原子炉下部キャビティ床一面を設定する。これは、ベースケースの設定と同等である。溶融炉心が床全面に拡がる場合、溶融炉心は原子炉下部キャビティ側面と接触する。溶融炉心は外周部にクラストを形成し、内部に溶融プールが存在する形態として扱う。溶融プールから側面クラスト内面へは対流熱伝達により伝熱し、側面クラスト内部では厚さ方向に2次関数の温度勾配を持つものとし、側面クラスト外面にてコンクリートへ熱伝導により伝熱する。コンクリート内部でも側面深さ方向に1次元の熱伝導方程式による温度分布を持つ。そして、コンクリート表面温度がコンクリートの融点を超えると侵食が開始する。</p> <p>一方、落下時に細粒化等により冷却が進むケースでは、溶融炉心は原子炉下部キャビティ床全面に拡がらずに、局部的に堆積する結果が得られている。このケースでは、落下過程において溶融炉心が冷却されやすくなるよう設定しており、固化による流動抵抗の増加によって、拡がりが小さくなっている。</p> <p>本ケースは以下の点から極端な条件で局部的に溶融炉心が堆積するよう想定しており、実機条件よりも厳しい条件を与えるものである。</p> <p>デブリジェットが原子炉下部キャビティ床に到達するまでの落下過程において、溶融炉心と原子炉下部キャビティ水との接触により、溶融炉心から原子炉下部キャビティ水への伝熱が発生する。本ケースにおいては、溶融炉心の過熱度分がすべて伝熱されると仮定し、溶融炉心の融点まで冷却するよう条件を与えているが、実際は、溶融ジェット径が約0.5mと大きいため、落下過程で冷却されずに過熱度を保ったまま原子炉下部キャビティ床に到達する溶融ジェットの割合が大きいと考えられる。</p> <p>落下時に細粒化等により冷却が進むケースにおいては、落下時に冷却されずに高温のまま床に到達するケースと同様、溶融炉心の質量を約50t（MAAPコードにおける1回目の原子炉容器破損による溶融炉心落下量相当）で、拡がり面積を算出しており、原子炉下部キャビティ床上に落下した溶融炉心は、この拡がり面積で堆積するよう仮定している。しかし、実際は原子炉容器破損以降、溶融炉心は断続的に原子炉下部キャビティへ落下することから、拡がりに寄与する溶融炉心量は更に大きくなり、拡がり面積は大きくなると考えられる。なお、本ケースでは溶融炉心の堆積高さが原子炉下部キャビティ水面より高くなった場合は、原子炉下部キャビティ水面より高い部分については、原子炉下部キャビティ水による冷却がないことから溶融状態のままであり、固化しないと考えられることから、溶融炉心の堆積の高さとしては原子炉下部キャビティ水深までとし、それ以降の堆積は横に拡がる設定とし、具体的には、溶融炉心の拡がり面積の初期値として、原子炉下部キャビティ床面積の約1/10を与えた。</p> <p>MAAPコードでは、水-溶融炉心間の伝熱は溶融炉心の上面のみ計算する。しかし、溶融炉心が局部的に堆積する場合には、その側面も水と接触するため、側面からの除熱にも期待できる。そこで、上面に加えて側面からの除熱効果を考慮するため、溶融炉心形状として円柱を想定し、側面を伝熱面積に加える。計算上の取扱いとしては、局部的に堆積した床面積を水への伝熱計算</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由									
	<p>に使われる上面の面積とし、溶融炉心の落下量に応じて側面分の伝熱面積が増える分を上面の伝熱量の増分として考慮する。すなわち、上面に側面を加算した面積に相当する比率を上面から水への伝熱量の比率として設定する。</p> <table border="1" data-bbox="1122 336 1883 512"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>溶融炉心の拡がり面積</th> <th>設定根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ベースケース</td> <td>原子炉下部キャビティ床面積の1/1</td> <td>原子炉下部キャビティ区画床全面とする</td> </tr> <tr> <td>感度解析ケース</td> <td>原子炉下部キャビティ床面積の約1/10から落下量に応じて拡大</td> <td>落下時に細粒化等により冷却が進む</td> </tr> </tbody> </table> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>ベースケース</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>感度解析ケース</p> </div> </div> <p>解析結果</p> <p>図5-3-1～5-3-9に、溶融炉心の拡がり面積の感度解析結果を示す。</p> <p>ベースケースと感度解析ケースで、本パラメータの影響は原子炉容器破損以降に現れる。溶融炉心と水の熱流束については、感度解析ケースの方が、$1\text{MW}/\text{m}^2$を超える*高い値が継続する結果となっている。これは、溶融炉心の拡がり面積を制限したことで、溶融炉心と水の接触面積が小さくなり、その結果溶融炉心の単位時間当たりの除熱量が小さくなったことで、溶融炉心の冷却に時間を要しているためである。</p>	項目	溶融炉心の拡がり面積	設定根拠	ベースケース	原子炉下部キャビティ床面積の1/1	原子炉下部キャビティ区画床全面とする	感度解析ケース	原子炉下部キャビティ床面積の約1/10から落下量に応じて拡大	落下時に細粒化等により冷却が進む	
項目	溶融炉心の拡がり面積	設定根拠									
ベースケース	原子炉下部キャビティ床面積の1/1	原子炉下部キャビティ区画床全面とする									
感度解析ケース	原子炉下部キャビティ床面積の約1/10から落下量に応じて拡大	落下時に細粒化等により冷却が進む									

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>(3) 熔融プール-クラスト間の熱伝達係数の感度解析</p> <p>感度解析ケースを表5-3に示す。熱伝達係数の不確かさ幅の中で、床方向への熱伝達を大きくしたケースと壁方向への熱伝達を大きくしたケースの解析結果を図5-3-1a、図5-3-1b、図5-3-2a、図5-3-2b及び表5-5に示す。</p> <p>床方向への熱伝達を大きくすると、床方向へ侵食量は増えており、壁方向の侵食は若干減少している。壁方向への熱伝達を大きくすると、壁方向へ侵食量は増えており、床方向の侵食はあまり変わらない。</p> <p>熔融プールの熱伝達係数の不確かさ幅の範囲では、コンクリート侵食量への影響は小さい。</p>	<p>また、感度解析ケースの方が、熔融炉心の冷却が遅くなっていることから、熔融炉心とコンクリートの熱流束については、高い値が継続しているため、コンクリート侵食が進み、コンクリート侵食深さはベースケースが約3mmであるのに対して、感度解析ケースでは約18cmとなった。</p> <p><u>評価</u></p> <p>熔融炉心の拡がり面積が制限された場合の解析を実施し、コンクリート侵食に対する感度を確認した。熔融炉心の拡がり面積が制限された場合、コンクリート侵食が約18cmとなった。ただし、本感度解析は、極端な条件で局所的に熔融炉心が堆積するよう設定しており、実機条件よりも厳しい条件を与えるものである。</p> <p>※水-熔融炉心間の熱流束の上限値として設定している0.8MW/m²は大気圧下での条件であり、原子炉格納容器圧力は大気圧より大きいことから、熱流束も大きくなる。</p> <p>(4) 水-熔融炉心間の熱伝達係数</p> <p>解析条件</p> <p>水と熔融炉心の熱伝達には、Kutateladze 相関式型の限界熱流束モデルを使用しており、ベースケースでは、水による冷却を伴った熔融炉心とコンクリートの相互作用に関する実験に基づき大気圧条件で0.8MW/m²に相当する値を使用している。</p> <p>なお、熔融炉心が原子炉下部キャビティ水に落下する際は、熔融炉心と原子炉下部キャビティ水の間で熱伝達が行われ、それにより熔融炉心が冷却されるとともに、原子炉下部キャビティ床に堆積する際に熔融炉心表面にクラストが形成されると考えられている。したがって、熔融炉心落下直後は熱流束が比較的高い状態が持続され、この間に熔融炉心の保有する熱は原子炉下部キャビティ水によって除熱される。その後、熔融炉心表面にクラストが形成された状態になると、熱流束は低下してくる。</p> <p>また、CCI実験においても、熔融物への注水直後は高い熱流束が確認され、その後クラストが冷却されて熱流束も低下する結果が得られているとともに、クラストが自重及び原子炉下部キャビティ水の水頭等による破損により、原子炉下部キャビティ水と直接接触することで再び高い熱流束が得られている。さらに、実機スケールの現象ではクラストにひび割れが生じることが文献²¹で示されており、高温の熔融炉心と上面水プールが再度直接接触して、高い熱流束が生じる現象が継続的に発生すると判断できる。</p> <p>²¹ M. T. Farmer et al., "Status of the Melt Coolability and Concrete Interaction (MCCI) Program at Argonne National Laboratory", Proc. of ICAPP' 05, Korea, (2005)</p> <p>本パラメータについては、実験で観測された最大の熱流束を考慮したケース、実験で観測されたクラスト形成時の熱流束を考慮したケース、バルク冷却時、クラスト全体固化時、コンクリート</p>	<p>※異方性の影響は“添付資料7.2.5.3 コンクリート侵食の侵食異方性について”に記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>ト混入時の各フェーズを考慮したケース、実験で観測された安定クラスト形成後に更に温度が低下した時点を検討した実機条件としては仮想的なケースの4ケースの感度解析を実施する。</p> <p>感度解析ケース1では、CCI実験において観測されている初期のバルク冷却期間中の熱流束である $3\text{MW}/\text{m}^2$ を適用する。なお、常に高い熱流束が維持されるのではなく、熔融炉心の温度が低下した場合には、熱流束は崩壊熱を除去できる熱流束に制限される。</p> <p>感度解析ケース2では、上記の原子炉下部キャビティへの落下直後の高い熱流束やクラストの破損による内部の熔融炉心と原子炉下部キャビティ水との直接接触を考慮せず、CCI-2及びCCI-3実験において初期のピークを除外した熱流束である $0.5\text{MW}/\text{m}^2$ を選定する。</p> <p>ここで、以下の理由によりCCI-1実験については、感度解析の条件設定の際の検討対象から除外することとした。</p> <p>CCI実験では、コンクリート侵食開始後に注水しており、クラストと熔融物の間に空洞が形成されている。これは、実験のような小スケールでは壁と壁の間でクラストが強固につながり、クラストブリッジが形成され、その下でコンクリート侵食により熔融物の液位が低下するためである。一方、実機スケールではクラストの自重及び水の水頭によりクラストが破損し、本実験のような空洞は生じないと考えられる。CCI-1実験はクラストの形成後、約10分の時点でクラスト破損が生じ、熱流束が約 $3\text{MW}/\text{m}^2$ まで再上昇しているが、これはクラストと熔融物の間に形成された空洞の影響が大きく現れたケースであり、クラストが破損するまでは空洞の形成により熱流束が小さく、クラストが破損した後に破損箇所から水が流入し、高温の熔融物と水が直接接触することによって熱流束が大きくなったものである。実機スケールでは、このような空洞は形成されないと考えられるため、感度解析の条件設定の際の検討対象から除外することとした。</p> <p>感度解析ケース3では、次のように熱流束を設定する。</p> <p>まず、熔融炉心内部が熔融状態の場合、クラストは破損、浸水を繰り返し、安定したクラストは形成されないと考えられる。したがって、部分的にも熔融炉心から水へ、高い熱流束での伝熱となると考えられる。この時の現象は、小規模実験で熔融物へ注水を開始した時点と同等と考えられ、MACE実験、CCI実験では $1\text{MW}/\text{m}^2$ 以上の値が観測されている。熔融炉心の落下直後は、高温の熔融炉心と原子炉下部キャビティ水の直接接触により、更に高い熱流束が得られると考えられるが、本感度解析では、内部に熔融部が存在する間の熱流束として、一律に $0.8\text{MW}/\text{m}^2$ を適用する。</p> <p>次に、熔融炉心全体が固化した後の挙動においては、原子炉下部キャビティへの落下直後の高い熱流束やクラストの破損による内部の熔融炉心と原子炉下部キャビティ水との直接接触を考慮せず、CCI-2及びCCI-3実験において初期のピークを除外した熱流束である $0.5\text{MW}/\text{m}^2$ を選定する。</p> <p>次に、コンクリート混入がある場合のドライアウト熱流束については、SSWICS実験において確認されており、コンクリートの混入割合が約15%に達した場合にドライアウト熱流束は約 $0.125\text{MW}/\text{m}^2$ となっている。15%までの間は、ドライアウト熱流束はほぼ直線的に低下しており、コンクリート混入割合が約15%以上の場合には、ドライアウト熱流束はほぼ一定となっている。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

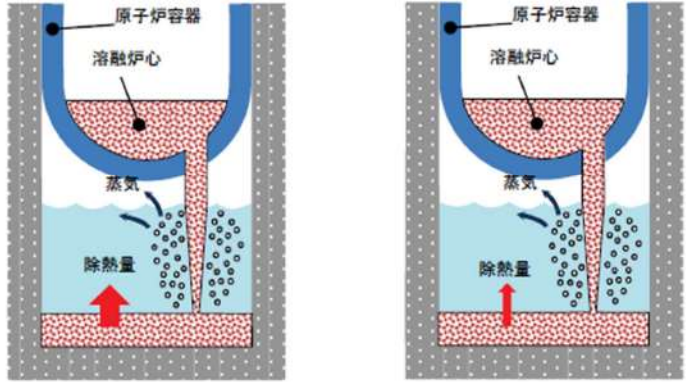
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由																										
<p>表5-3 溶融プールークラスト間の熱伝達係数のベースケースと感度解析ケース</p> <table border="1" data-bbox="147 550 1043 837"> <thead> <tr> <th>パラメータ</th> <th>ベースケース (有効性評価)</th> <th>感度解析ケース</th> <th>根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>③ 溶融プールークラスト間の熱伝達係数</td> <td>溶融プールが完全な液相の場合の対流熱伝達係数として 床方向：<input type="text"/> 壁方向：<input type="text"/></td> <td>(1) 床：<input type="text"/> 壁：<input type="text"/> (2) 床：<input type="text"/> 壁：<input type="text"/></td> <td>(1) 床：壁の1/4 (CCI-3 実験反映) 壁：推奨入力値 (2) 床：推奨入力値 壁：床の1/4 (（1）の逆とした。)</td> </tr> </tbody> </table> <div data-bbox="607 879 1008 940" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>本資料のうち枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	パラメータ	ベースケース (有効性評価)	感度解析ケース	根拠	③ 溶融プールークラスト間の熱伝達係数	溶融プールが完全な液相の場合の対流熱伝達係数として 床方向： <input type="text"/> 壁方向： <input type="text"/>	(1) 床： <input type="text"/> 壁： <input type="text"/> (2) 床： <input type="text"/> 壁： <input type="text"/>	(1) 床：壁の1/4 (CCI-3 実験反映) 壁：推奨入力値 (2) 床：推奨入力値 壁：床の1/4 (（1）の逆とした。)	<p>本感度解析では、コンクリート侵食量に応じて、上記のSSWICS実験において確認された熱流束を使用する。</p> <p>感度解析ケース4では、WETCOR, MACE, CCI実験においてクラスト全体が固化して温度が低下した状態の熱流束である0.2MW/m²を適用する。これについて、溶融炉心は、溶融状態で原子炉下部キャビティ水と直接接触するため、溶融炉心落下直後は高い熱流束が得られると考えられるが、本感度解析は溶融炉心落下直後から、安定化クラスト形成後の熱流束を仮定しているという点で、仮想的なケースであるといえる。</p> <table border="1" data-bbox="1081 534 1944 1265"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>Kutateladze 係数</th> <th>設定根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ベースケース</td> <td>0.1 (0.8 MW/m²相当 (注))</td> <td>水による冷却を伴った溶融炉心とコンクリートの相互作用に関する実験に基づく値</td> </tr> <tr> <td>感度解析ケース1</td> <td>0.375 (3MW/m²相当 (注))</td> <td>CCI-2 実験で初期ピークを模擬した熱流束値</td> </tr> <tr> <td>感度解析ケース2</td> <td>0.0625 (0.5 MW/m²相当 (注))</td> <td>CCI-2,3 実験で初期ピーク値を除外した熱流束値</td> </tr> <tr> <td>感度解析ケース3</td> <td>溶融物存在時 0.1 (0.8 MW/m²相当 (注)) 全体固化時 0.0625 (0.5 MW/m²相当 (注)) コンクリート15%混入時 0.015625 (0.125 MW/m²相当 (注))</td> <td>溶融物存在時はベースケースと同様。全体固化時は感度解析ケース2と同様。コンクリート混入時はSSWICS実験での熱流束値</td> </tr> <tr> <td>感度解析ケース4</td> <td>0.025 (0.2 MW/m²相当 (注))</td> <td>WETCOR, MACE, CCI実験においてクラスト全体が固化して温度が低下した状態の熱流束値</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 大気圧条件</p>	項目	Kutateladze 係数	設定根拠	ベースケース	0.1 (0.8 MW/m ² 相当 (注))	水による冷却を伴った溶融炉心とコンクリートの相互作用に関する実験に基づく値	感度解析ケース1	0.375 (3MW/m ² 相当 (注))	CCI-2 実験で初期ピークを模擬した熱流束値	感度解析ケース2	0.0625 (0.5 MW/m ² 相当 (注))	CCI-2,3 実験で初期ピーク値を除外した熱流束値	感度解析ケース3	溶融物存在時 0.1 (0.8 MW/m ² 相当 (注)) 全体固化時 0.0625 (0.5 MW/m ² 相当 (注)) コンクリート15%混入時 0.015625 (0.125 MW/m ² 相当 (注))	溶融物存在時はベースケースと同様。全体固化時は感度解析ケース2と同様。コンクリート混入時はSSWICS実験での熱流束値	感度解析ケース4	0.025 (0.2 MW/m ² 相当 (注))	WETCOR, MACE, CCI実験においてクラスト全体が固化して温度が低下した状態の熱流束値	
パラメータ	ベースケース (有効性評価)	感度解析ケース	根拠																									
③ 溶融プールークラスト間の熱伝達係数	溶融プールが完全な液相の場合の対流熱伝達係数として 床方向： <input type="text"/> 壁方向： <input type="text"/>	(1) 床： <input type="text"/> 壁： <input type="text"/> (2) 床： <input type="text"/> 壁： <input type="text"/>	(1) 床：壁の1/4 (CCI-3 実験反映) 壁：推奨入力値 (2) 床：推奨入力値 壁：床の1/4 (（1）の逆とした。)																									
項目	Kutateladze 係数	設定根拠																										
ベースケース	0.1 (0.8 MW/m ² 相当 (注))	水による冷却を伴った溶融炉心とコンクリートの相互作用に関する実験に基づく値																										
感度解析ケース1	0.375 (3MW/m ² 相当 (注))	CCI-2 実験で初期ピークを模擬した熱流束値																										
感度解析ケース2	0.0625 (0.5 MW/m ² 相当 (注))	CCI-2,3 実験で初期ピーク値を除外した熱流束値																										
感度解析ケース3	溶融物存在時 0.1 (0.8 MW/m ² 相当 (注)) 全体固化時 0.0625 (0.5 MW/m ² 相当 (注)) コンクリート15%混入時 0.015625 (0.125 MW/m ² 相当 (注))	溶融物存在時はベースケースと同様。全体固化時は感度解析ケース2と同様。コンクリート混入時はSSWICS実験での熱流束値																										
感度解析ケース4	0.025 (0.2 MW/m ² 相当 (注))	WETCOR, MACE, CCI実験においてクラスト全体が固化して温度が低下した状態の熱流束値																										

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<div style="text-align: center;">  <p>ベースケース 感度解析ケース</p> </div> <p>解析結果</p> <p>図5-4-1～5-4-10に、水-溶融炉心間の熱伝達係数の感度解析結果を示す。</p> <p>ベースケースと感度解析ケースで、本パラメータの影響は原子炉容器破損以降に現れる。</p> <p>まず感度解析ケース1について考察する。感度解析ケース1では、溶融炉心と水の熱流束について、瞬間的に2MW/m²以上となる場合があり、ベースケースの限界熱流束（約1.3MW/m²）に比べて高く、限界熱流束の継続時間はベースケースよりも短くなっている。感度解析ケースでは、溶融炉心落下時の高い熱流束を考慮しているため、溶融炉心温度の低下が顕著であり、コンクリートの侵食深さは0mmとなった。</p> <p>感度解析ケース2では、溶融炉心と水の熱流束について、感度解析ケースでは限界熱流束の値は約0.8MW/m²（大気圧で0.5MW/m²相当）とベースケースより低く、限界熱流束の持続時間はベースケースより若干長く、約20分となっている。感度解析ケースでは、溶融炉心落下直後の高い熱流束を考慮していないことから、溶融炉心温度の低下が緩やかになっており、コンクリートと溶融炉心間の熱伝達もより長時間継続したため、コンクリートの侵食深さはベースケースに比べて増加したものの有意ではなく、約7mmとなった。</p> <p>感度解析ケース3では、溶融炉心と水の熱流束について、初期はベースケースと同様であるが、全体固化後は約0.8MW/m²（大気圧で0.5MW/m²相当）とベースケースより低く、限界熱流束の持続時間はベースケースより長くなっている。感度解析ケースでは、溶融炉心落下直後の高い熱流束を考慮していないことから、溶融炉心温度の低下が緩やかになっており、コンクリートと溶融炉心間の熱伝達もより長時間継続したため、コンクリートの侵食深さはベースケースに比べて若干増加したものの有意ではなく、約3mmとなった。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由								
<p>(4) 石灰岩系コンクリートを想定した参考解析</p> <p>解析条件を表5-4に示す。コンクリートの組成や物性は、表4-1及び表4-2に示す値を使用している。石灰岩系コンクリートを想定した場合の解析結果を図5-4a、図5-4b、図5-4c、図5-4d及び表5-5に示す。石灰岩系コンクリートの場合、床方向及び壁方向の侵食量は若干増加しているが、感度は小さい。また、原子炉格納容器内のガスモル分率もベースケースと同様な結果となる。このケースのようにコンクリート侵食量が小さい場合は、石灰岩系コンクリートの影響は小さい。</p> <p style="text-align: center;">表5-4 コンクリート種類を変えた参考解析条件</p> <table border="1" data-bbox="147 1061 1039 1177"> <thead> <tr> <th>パラメータ</th> <th>ベースケース (有効性評価)</th> <th>参考解析ケース</th> <th>根拠</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>コンクリート種類</td> <td>玄武岩系</td> <td>石灰岩系</td> <td>ガス発生の影響を確認する。</td> </tr> </tbody> </table>	パラメータ	ベースケース (有効性評価)	参考解析ケース	根拠	コンクリート種類	玄武岩系	石灰岩系	ガス発生の影響を確認する。	<p>感度解析ケース4では、熔融炉心と水の熱流束について、約0.3MW/m²で推移しており、ベースケースの限界熱流束（約1.3MW/m²）に比べて低い値となっている。これは、Kutateladze係数を小さくしたことで、熔融炉心から水への熱流束が小さく評価された結果であり、感度解析ケースでは概ね一定の熱流束が継続している。熔融炉心とコンクリートの熱流束については、最初のピーク値が最も高く、この時点で最もコンクリートが熱せられており、感度解析ケースでは、0.1MW/m²前後の熱流束が継続している。その結果、コンクリートの侵食深さはベースケースの解析結果である約3mmに比べて増加し、約20cmとなった。崩壊熱は時間の経過に伴い減衰し、水による除熱量は前述のとおり概ね一定の値が維持されるため、その結果、約8時間の時点でコンクリート表面温度は融点を下回りコンクリート侵食は停止する。</p> <p>評価</p> <p>水-熔融炉心間の熱流束に対する感度解析を実施し、コンクリート侵食に対する感度を確認した。感度解析ケース1, 2, 3においては、有意なコンクリート侵食には至らず、その不確かさが有効性評価の結果へ与える影響は小さい。一方、熔融炉心落下直後から、安定化クラスト形成後の熱流束を仮定した条件のケース4では、コンクリート侵食が有意に進む結果となった。ただし、本ケースは、前述のとおり、熔融炉心落下直後の高い熱流束の状態を無視した仮想的なケースであり、現実的に起こり得るものではないと考える。</p> <p>(5) 感度解析パラメータの組合せ</p> <p>MCCIは、原子炉下部キャビティ底に堆積した熔融炉心が周囲のコンクリートや原子炉下部キャビティ水と伝熱する過程でさまざまなパターンの不確かさが考えられること、また直接的な実験例が少なく知見が不十分であることから「4. 不確かさに関する整理」にて抽出したパラメータの組合せを考慮し、感度解析を実施する。</p> <p><u>解析条件</u></p>	<p>※コンクリート組成に関する感度解析は基本的考え方の6.5.9に記載</p> <p>※BWRは個々の感度解析のみ実施しているが、PWRでは個々の感度を持つパラメータを組み合わせ、</p>
パラメータ	ベースケース (有効性評価)	参考解析ケース	根拠							
コンクリート種類	玄武岩系	石灰岩系	ガス発生の影響を確認する。							

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>解析条件の設定に当たっては、「5.感度解析と評価（3）溶融炉心の拡がり面積」において設定した条件に則り、溶融炉心の拡がりの形態に着目し、拡がりのケースとして以下の2ケースとなるよう各パラメータを組み合わせた感度解析を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 落下時に冷却されず高温のまま床に到達するケース ・ 落下時に細粒化等により冷却が進むケース <p>感度解析の組合せとして、「落下時に冷却されず高温のまま床に到達するケース」では、細粒化が進みにくくなるよう設定するため、エントレインメント係数を推奨範囲の最小値とし、溶融炉心の拡がり面積としては、原子炉下部キャビティ床面積を設定した。</p> <p>一方、「落下時に細粒化等により冷却が進むケース」では、細粒化が進みやすくなるよう設定するため、エントレインメント係数は推奨範囲の最大値とし、溶融炉心の拡がり面積としては、「5.感度解析と評価（3）溶融炉心の拡がり面積」で設定した面積とした。</p> <p>なお、水深については不確かさの範囲では結果への影響が小さいため、ベースケースの値を使用する。また、水-溶融炉心間の熱流束については、両ケースとも不確かさとして重畳させることとし、現実的な不確かさの幅を確認する観点から、「5.感度解析と評価（4）水-溶融炉心間の熱伝達係数」の感度解析ケース3の熱流束を使用する。</p> <p>以上から、パラメータの組合せとして次表の2ケースを考える。</p>	<p>最も厳しい影響を確認している</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉			泊発電所3号炉				相違理由
表5-5 MCCI 感度解析結果の一覧			項目	パラメータ	設定値	設定根拠	
有効性評価 (ベースケース)	ケース	パラメータ設定	コンクリート侵食量	ベース ケース	代替格納容器 スプレイ作動	炉心溶融後 30 分	運転員等操作余裕時間として 設定
		・エントレインメント係数： <input type="text"/>	床面： 2.4cm 壁面： 2.3cm		エントレイン メント係数	<input type="text"/>	当該変数推奨範囲の最確値
		・上面熱流束：約 800kW/m ² @ 1ata (F _{CHF} =0.1 デフォルト) 圧力依存性考慮			溶融炉心の 拡がり面積	原子炉下部キャビティ 床面積の 1/1	原子炉下部キャビティ区画床 全面とする
		・溶融プールからクラストへの熱伝達 係数			Kutateladze 係数	0.1 (0.8 MW/m ² 相当 ^(注))	水による冷却を伴った溶融炉 心とコンクリートの相互作用 に関する実験に基づく値
		床： <input type="text"/>					
		壁： <input type="text"/>					
		・コンクリート組成及び物性値： 玄武岩系					
①-1 エントレインメン ト係数 小	エントレインメント係数： <input type="text"/>	床面： 3.6cm 壁面： 3.5cm	感度解析 ケース1	代替格納容器 スプレイ作動	炉心溶融後 30 分	運転員等操作余裕時間として 設定	
①-2 エントレインメン ト係数 大	エントレインメント係数： <input type="text"/>	床面： 1.7cm 壁面： 1.7cm			エントレイン メント係数	<input type="text"/>	当該変数推奨範囲の最小値
② 上面熱流束 下限	800kW/m ² 一定	床面： 22.5cm 壁面： 21.6cm			溶融炉心の 拡がり面積	原子炉下部キャビティ 床面積の 1/1 溶融物存在時	原子炉下部キャビティ区画床 全面とする
③-1 溶融プール熱伝達 床方向大	溶融プール熱伝達係数 床： <input type="text"/> 壁： <input type="text"/>	床面： 2.4cm 壁面： 2.2cm		Kutateladze 係数	0.1 (0.8 MW/m ² 相当 ^(注)) 全体固化時 0.0625 (0.5 MW/m ² 相当 ^(注)) コンクリート 15%混入時 0.015625 (0.125 MW/m ² 相当 ^(注))	CCI 実験、SSWICS 実験に基づ く熱流束を設定	
③-2 溶融プール熱伝達 壁方向大	溶融プール熱伝達係数 床： <input type="text"/> 壁： <input type="text"/>	床面： 2.1cm 壁面： 2.4cm	感度解析 ケース2	代替格納容器 スプレイ作動	炉心溶融後 30 分	運転員等操作余裕時間として 設定	
(参考解析) 石灰岩系コンクリート	コンクリート組成及び物性値： 石灰岩系	床面： 2.8cm 壁面： 2.8cm			エントレイン メント係数	<input type="text"/>	当該変数推奨範囲の最大値
					溶融炉心の 拡がり面積	原子炉下部キャビティ床面積の約 1/10 から落下量に応じて拡大 溶融物存在時	落下時に細粒化等により冷却 が進む
				Kutateladze 係数	0.1 (0.8 MW/m ² 相当 ^(注)) 全体固化時 0.0625 (0.5 MW/m ² 相当 ^(注)) コンクリート 15%混入時 0.015625 (0.125 MW/m ² 相当 ^(注))	CCI 実験、SSWICS 実験に基づ く熱流束を設定	

本資料のうち枠囲みの内容は商業機密に
属しますので公開できません。

枠囲みの内容は商業機密に属し
ますので公開できません。

解析結果

図 5-5-1～5-5-9 に、本感度解析の結果を示す。

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>感度解析ケース1は、溶融炉心落下時に冷却されず高温のまま床に到達するケースであり、水-溶融炉心間の熱流束は、ベースケースでは、溶融炉心が原子炉下部キャビティに落下するごとに、大気圧条件相当で0.8MW/m²であるのに対して、感度解析ケース1では、最初の落下時に大気圧条件相当で0.8MW/m²に達するものの、その後は瞬時に全体が固化するため、大気圧条件相当で0.5MW/m²となる。このため、溶融炉心温度、コンクリート表面温度はベースケースよりも高温の期間が若干長く維持される。その結果、コンクリート侵食深さはわずかに増加する程度であり、ベースケースが約3mm、感度解析ケース1が約4mmとなった。なお、感度解析ケース1では、原子炉下部キャビティでの水素生成量がベースケースに比べてわずかながら減少した。具体的には、ベースケースではMCCIによる水素発生量が約3kg、細粒化によるジルコニウム-水反応による水素発生量が約18kgであるのに対して、感度解析ケース1では、MCCIによる水素発生量が約4kg、細粒化によるジルコニウム-水反応量による水素発生量が約11kgとなった。これは、感度解析ケース1においてエントレインメント係数を小さくしたことから、細粒化によるジルコニウム-水反応量が少なくなったためである。</p> <p>感度解析ケース2は、溶融炉心落下時に細粒化等により冷却が進むケースであり、水-溶融炉心間の熱流束について、ベースケースに比べて、溶融炉心の拡がり面積を制限したことで、溶融炉心と水の接触面積が小さくなり、その結果、溶融炉心の単位時間当たりの除熱量が小さくなったことで、熱流束が高く維持される時間が長くなっている。また、溶融炉心温度、コンクリート表面温度もベースケースに比べて高温の期間が長く維持され、特にコンクリート表面は融点温度に達している期間が長く、この間にコンクリート侵食が継続する。その後、コンクリート表面温度の低下に伴い、コンクリート侵食は停止する。その結果、コンクリート侵食深さは約19cmとなったが、原子炉下部キャビティ底面からのコンクリート厚さは数メートルあり、侵食深さは十分小さいことを確認した。最終的な原子炉格納容器内の水素濃度は約6vol%（ドライ条件換算）にとどまり、水素処理装置（原子炉格納容器内水素処理装置（PAR）及び格納容器水素イグナイタ（イグナイタ））による処理が可能なレベルに収まっている結果となっている。感度解析ケース2においては、コンクリート侵食深さが増加したことにより水素発生量は約53kgとなり、また、エントレインメント係数を大きくしたことにより、細粒化によるジルコニウム-水反応量が大きくなり、水素発生量は約23kgとなった。表5に水素発生量の内訳を示す。表5に示すとおり、MCCIによる水素発生は原子炉容器破損後30分に顕著であり、その後、コンクリート侵食の停止に伴い水素発生も停止する。その結果、水素発生量としては、MCCIにより約6%増加しており、原子炉容器内及び原子炉容器外で反応するジルコニウム量を足すと、全炉心内のジルコニウム量の約37.9%が水と反応する結果となっている。これについて、MCCIにより発生する水素は、すべてジルコニウムに起因するものであることを確認した。また、追加発生となる水素については、水素処理装置（PAR及びイグナイタ）を使用することで処理が可能である。</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉				相違理由	
	表5 水素発生量の内訳					
	時刻		RV 破損前	RV 破損後 30分		RV 破損後後期
			1.5 時間	2.0 時間		10 時間
	原子炉 容器内	Zr	257.6kg (29.2%)	257.6kg (29.2%)		257.6kg (29.2%)
		ステンレス	21.4kg (2.4%)	21.6kg (2.5%)		22.9kg (2.6%)
		小 計	279.0kg (31.6%)	279.3kg (31.6%)		280.5kg (31.8%)
	原子炉 容器外	Zr	0.0kg (0.0%)	11.9kg (1.3%)		23.46kg (2.7%)
		ステンレス	0.0kg (0.0%)	0.0kg (0.0%)		0.0kg (0.0%)
		小 計	0.0kg (0.0%)	11.9kg (1.3%)		23.46kg (2.7%)
	MCCI	Zr	0.0kg (0.0%)	47.5kg (5.4%)		53.0kg (6.0%)
		ステンレス	0.0kg (0.0%)	0.0kg (0.0%)		0.0kg (0.0%)
		小 計	0.0kg (0.0%)	47.5kg (5.4%)		53.0kg (6.0%)
	合 計	Zr	257.6kg (29.2%)	317.1kg (35.9%)		334.1kg (37.9%)
		ステンレス	21.4kg (2.4%)	21.6kg (2.5%)		22.9kg (2.6%)
		小 計	279.0kg (31.6%)	338.7kg (38.4%)		356.9kg (40.4%)
<p>※（ ）内は全炉心 Zr 量の 100% が反応した場合の水素発生量（約 882.6kg）に対する割合を示す。</p>						
<p>評価</p> <p>感度解析パラメータの組合せを考慮した場合、熔融炉心落下時に冷却されず高温のまま床に到達するケースでは、コンクリート侵食に対する感度は小さく、その不確かさが有効性評価へ与える影響は小さい。熔融炉心落下時に細粒化等により冷却が進むケースでは、コンクリート侵食は約 19cm となった。ただし、本感度解析は、熔融炉心の拡がり面積として、極端な条件で局所的に熔融炉心が堆積するよう設定していることから、実機条件よりも厳しい条件を与えたものである。</p>						

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="232 268 981 354" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「本製品（又はサービス）には、米国電力研究所（The Electric Power Research Institute）の出資により電力産業用に開発された技術が取り入れられています。」</p> </div>	<div data-bbox="1115 268 1921 354" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「本製品（又はサービス）には、米国電力研究所（the Electric Power Research Institute）の出資により電力産業用に開発された技術が取り入れられています。」</p> </div> <div data-bbox="1176 395 1863 986" style="text-align: center;"> </div> <p data-bbox="1258 1056 1751 1082">図 5-1-1 代替格納容器スプレィ作動時刻感度解析（1）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-1-2 代替格納容器スプレィ作動時刻感度解析（2）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-1-3 代替格納容器スプレイ作動時刻感度解析（3）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

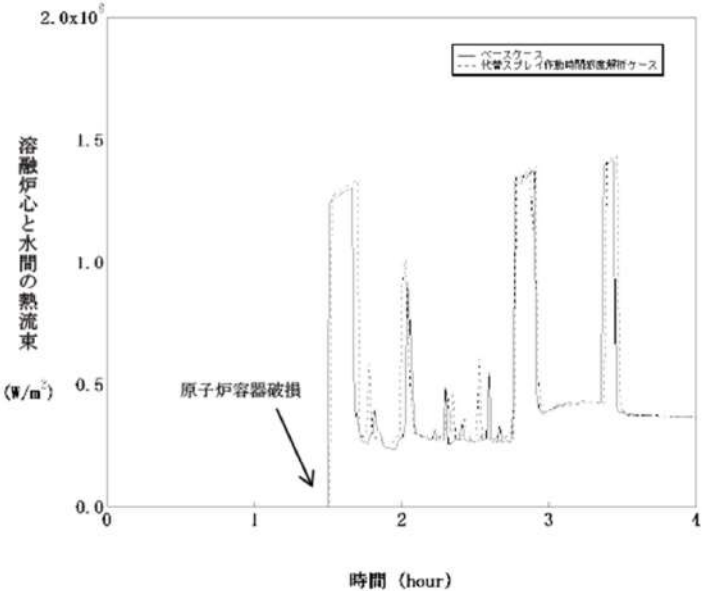
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-1-4 代替格納容器スプレイ作動時刻感度解析（4）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1254 1021 1747 1045">図 5-1-5 代替格納容器スプレイ作動時刻感度解析（5）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

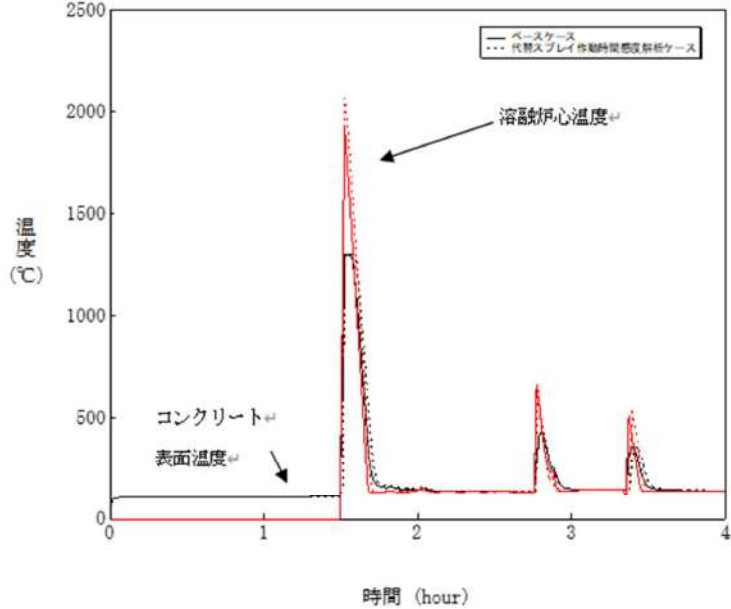
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-1-6 代替格納容器スプレイ作動時刻感度解析（6）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p>図 5-1-7 代替格納容器スプレイ作動時刻感度解析（7）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-1-8 代替格納容器スプレイ作動時刻感度解析（8）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>原子炉格納容器内の水素濃度(ドライ条件換算) (vol%)</p> <p>時間 (hour)</p> <p>13vol%</p> <p>— ベークケース - - - 代替スプレイ作動時刻感度解析ケース</p>	

図 5-1-9 代替格納容器スプレイ作動時刻感度解析 (9)

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

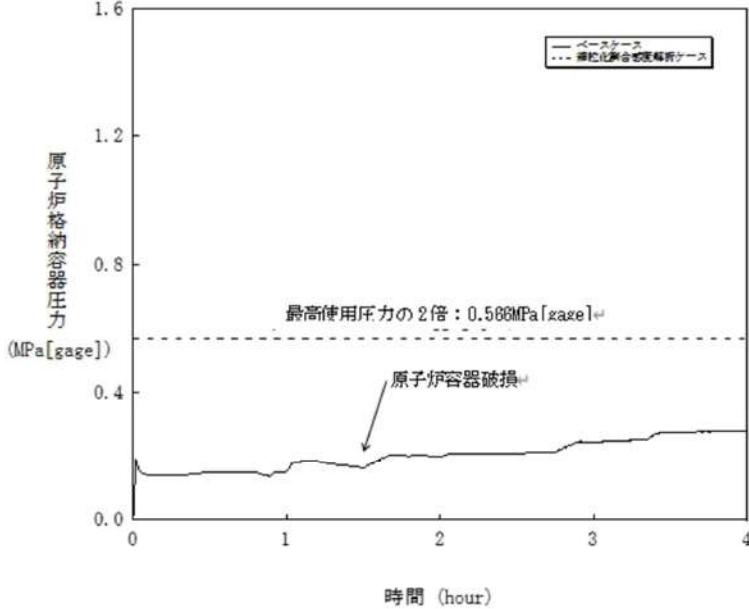
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-2-1 溶融炉心の細粒化割合感度解析（1）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

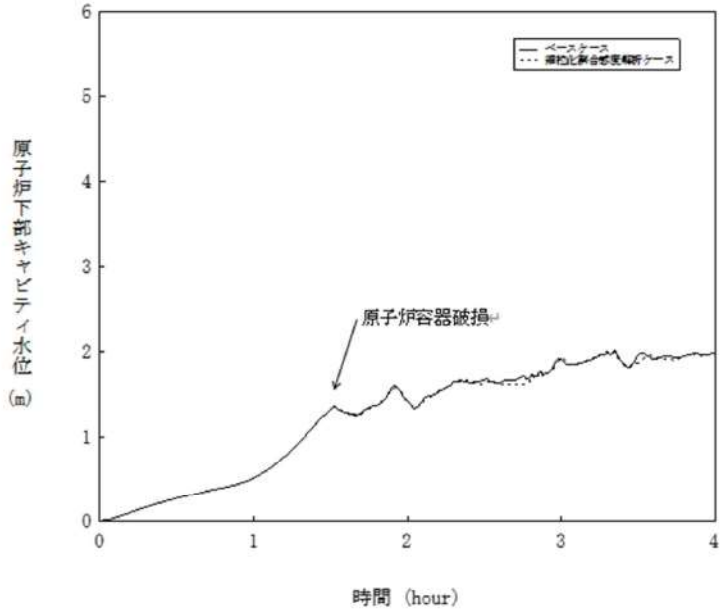
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1294 1023 1704 1046">図 5-2-2 熔融炉心の細粒化割合感度解析（2）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

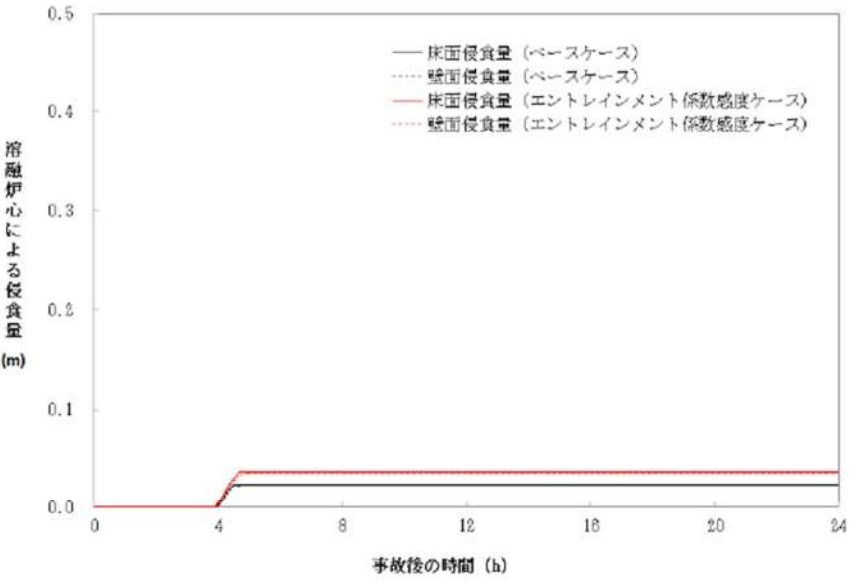
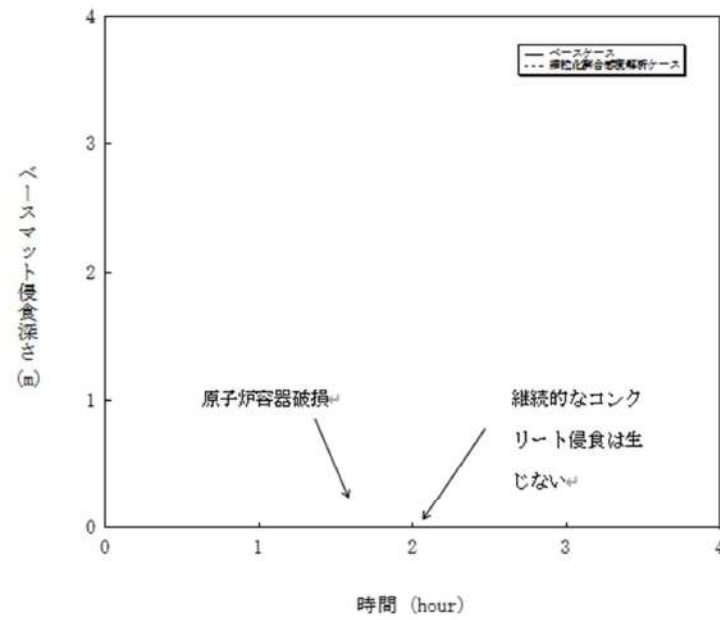
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1294 1023 1709 1046">図 5-2-3 熔融炉心の細粒化割合感度解析（3）</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p data-bbox="257 981 907 1013">図 5-1-1a コンクリート侵食量の比較 (エントレインメント係数)</p> <div data-bbox="616 1077 1008 1141" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	 <p data-bbox="1288 1021 1713 1045">図 5-2-4 溶融炉心の細粒化割合感度解析 (4)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-2-5 熔融炉心の細粒化割合感度解析（5）</p>	

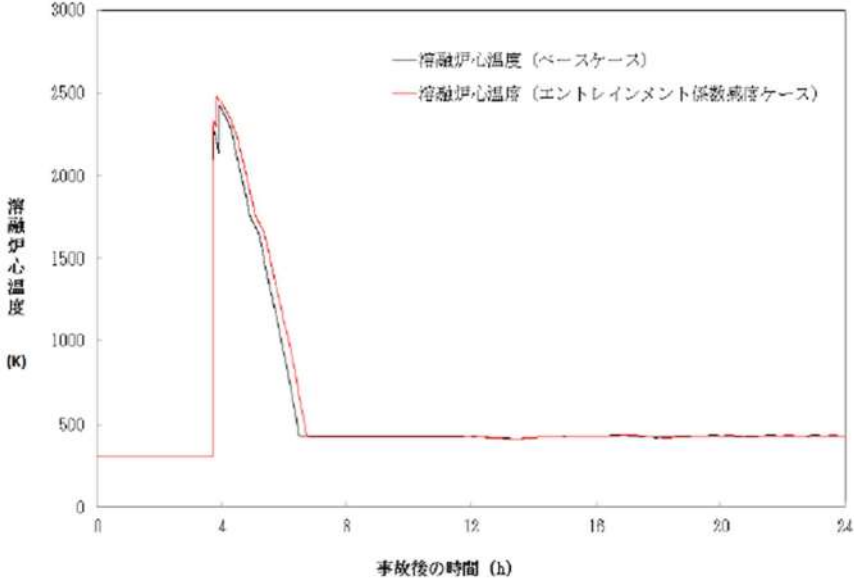
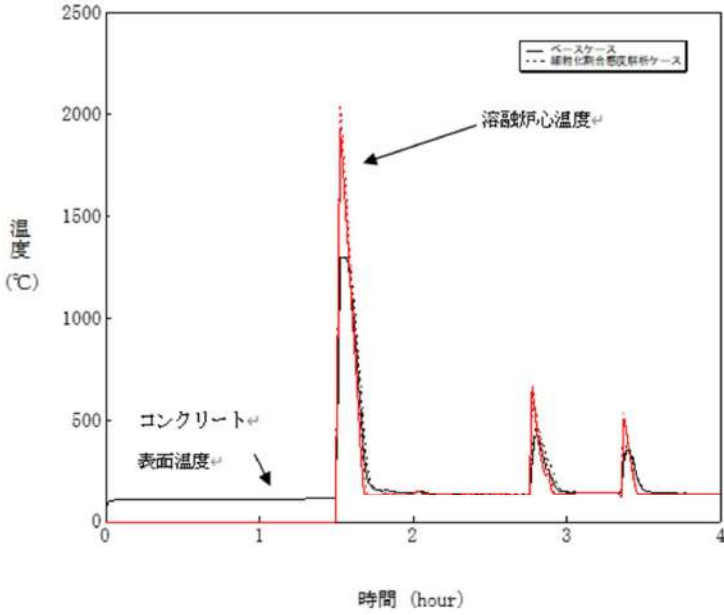
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-2-6 溶融炉心の細粒化割合感度解析（6）</p>	

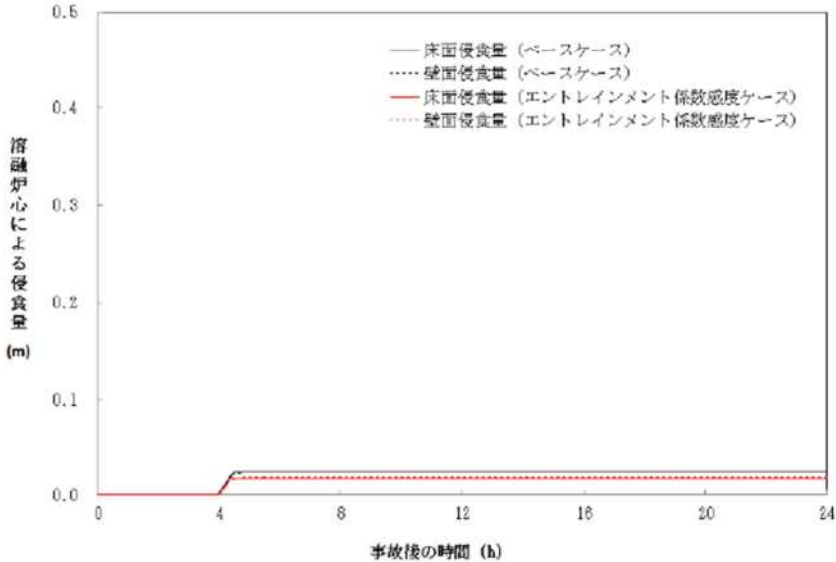
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p>図 5-1-1b 熔融炉心温度の比較 (エントレインメント係数)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>	 <p>図 5-2-7 熔融炉心の細粒化割合感度解析 (7)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p data-bbox="271 1054 904 1082">図 5-1-2a コンクリート侵食量の比較（エントレインメント係数 ）</p> <div data-bbox="616 1153 1014 1214" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p>本資料のうち枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<div data-bbox="181 264 1014 834" data-label="Figure"> <p>— 溶融炉心温度（ベースケース） — 溶融炉心温度（エントレインメント係数感度ケース）</p> <p>Y-axis: 溶融炉心温度 (K) X-axis: 事故後の時間 (h)</p> </div> <div data-bbox="295 986 875 1018" data-label="Caption"> <p>図 5-1-2b 溶融炉心温度の比較（エントレインメント係数 ）</p> </div> <div data-bbox="607 1082 1005 1145" data-label="Text" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>本資料のうち枠囲みの内容は商業機密に属しますので公開できません。</p> </div>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-2-8 熔融炉心の細粒化割合感度解析 (8)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>原子炉格納容器内の水素濃度（ドライ条件換算） (vol%)</p> <p>時間 (hour)</p> <p>13vol%</p> <p>ベースケース 細粒化割合感度解析ケース</p>	

図 5-2-9 熔融炉心の細粒化割合感度解析（9）

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-2-10 溶融炉心の細粒化割合感度解析（10）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

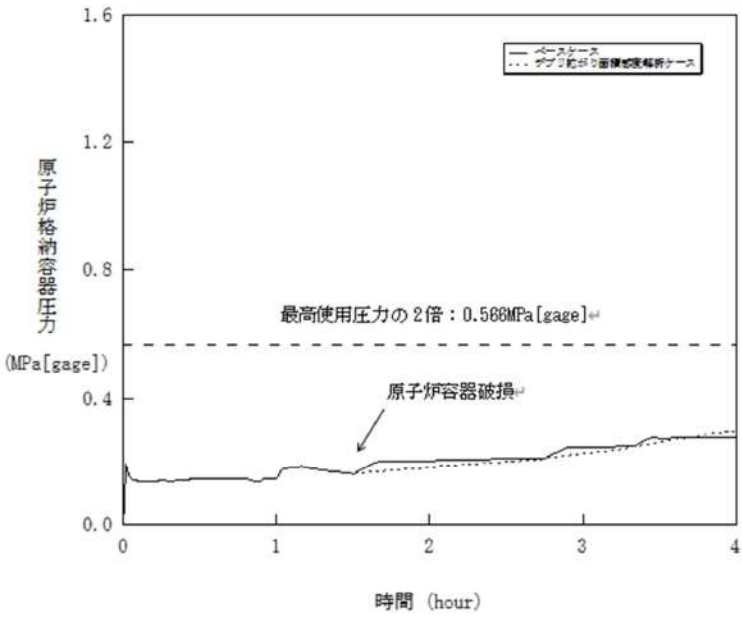
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-3-1 溶融炉心の拡がり面積感度解析（1）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p>図 5-3-2 溶融炉心の拡がり面積感度解析（2）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

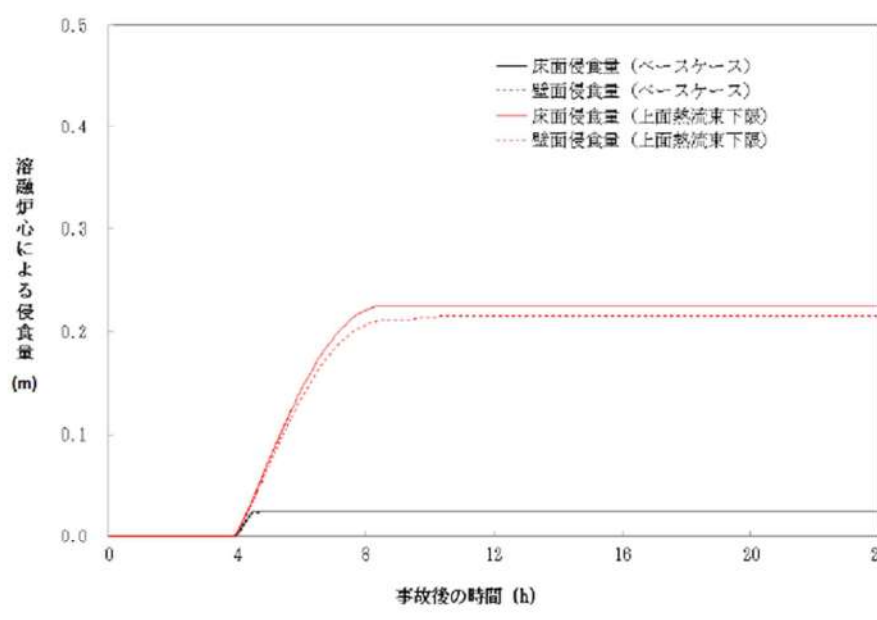
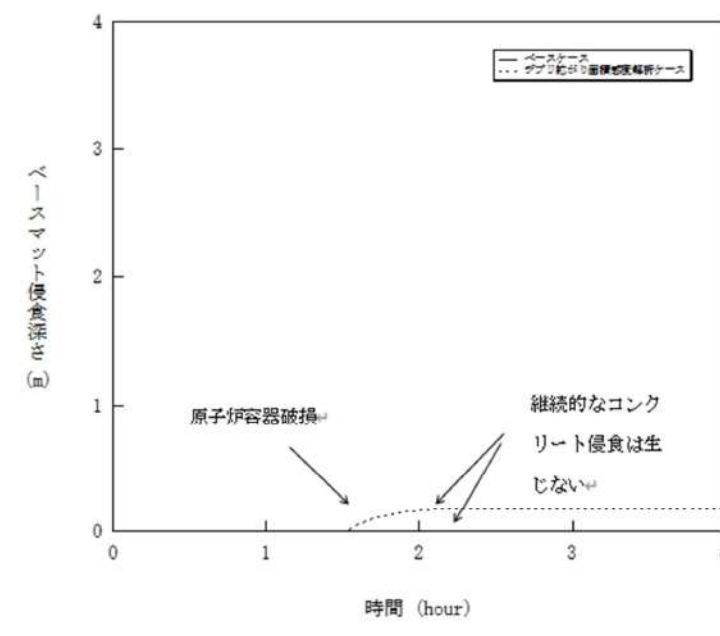
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-3-3 溶融炉心の拡がり面積感度解析（3）</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p>図5-2a コンクリート侵食量の比較（上面熱流束 800kW/m² 一定）</p>	 <p>図5-3-4 熔融炉心の拡がり面積感度解析（4）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

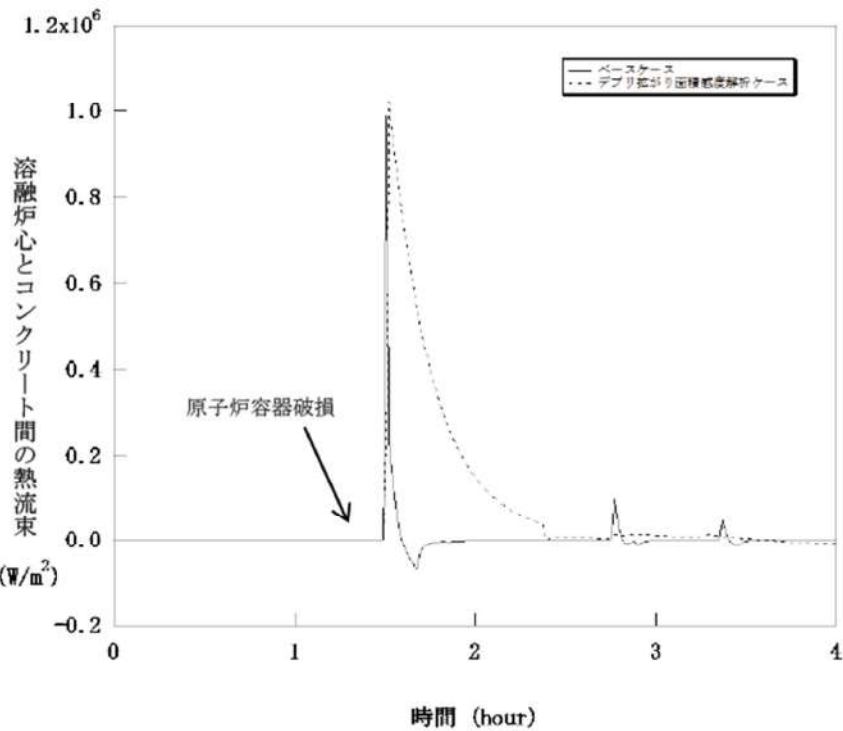
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-3-5 溶融炉心の拡がり面積感度解析（5）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p style="text-align: center;">図 5-3-6 溶融炉心の拡がり面積感度解析（6）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-2b 溶融炉心温度の比較（上面熱流束 800kW/m²一定）</p>	<p>図 5-3-7 溶融炉心の拡がり面積感度解析（7）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-3-8 溶融炉心の拡がり面積感度解析（8）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

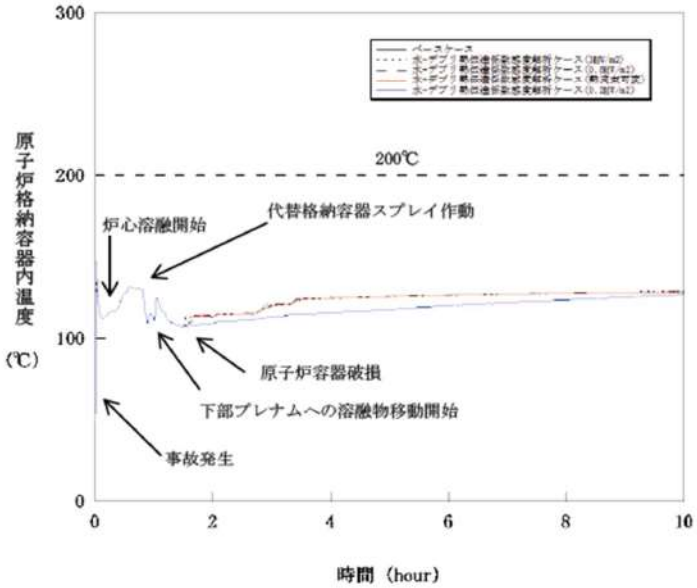
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-3-9 熔融炉心の拡がり面積感度解析（9）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

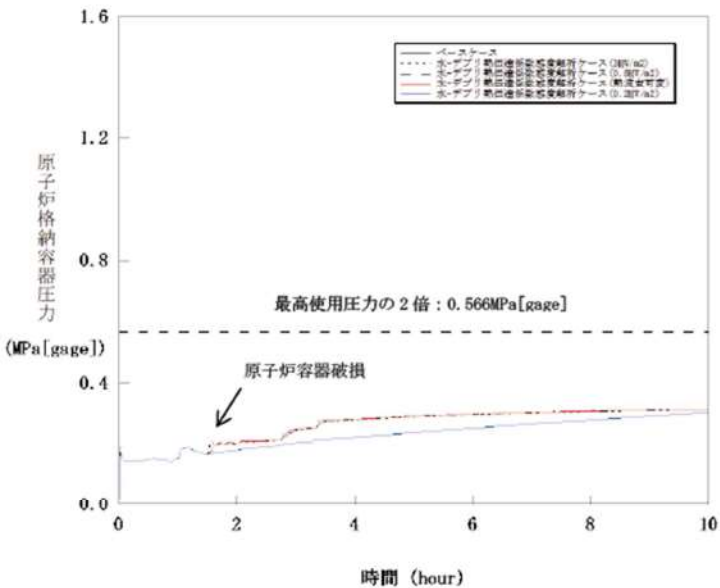
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1272 986 1742 1018">図 5-4-1 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析（1）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 熔融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p>図 5-4-2 水-熔融炉心間の熱伝達係数感度解析（2）</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-4-3 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析 (3)</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-3-1a コンクリート侵食量の比較 (床方向対流熱伝達係数大)</p>	<p>図 5-4-4 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析 (4)</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-4-5 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析 (5)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-4-6 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析 (6)</p>	

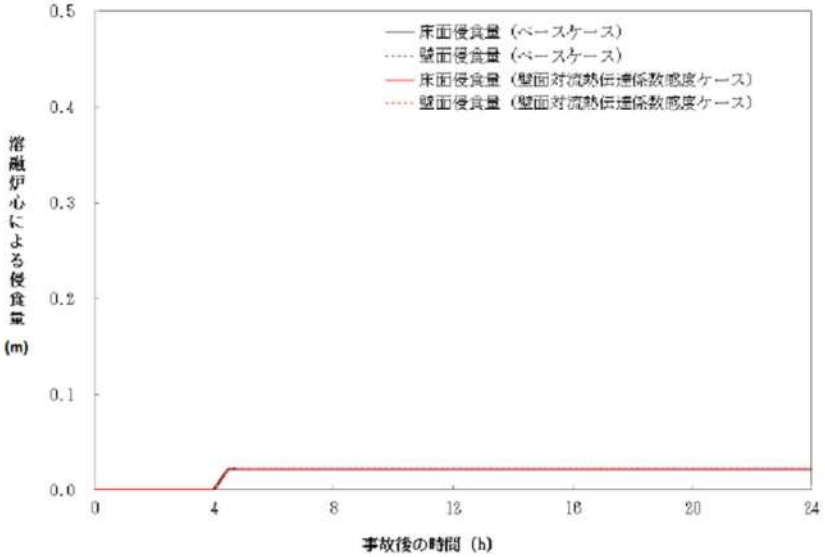
赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-3-1b 溶融炉心温度の比較 (床方向対流熱伝達係数大)</p>	<p>図 5-4-7 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析 (7)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p data-bbox="300 954 880 978">図 5-3-2a コンクリート侵食量の比較（壁方向対流熱伝達係数大）</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

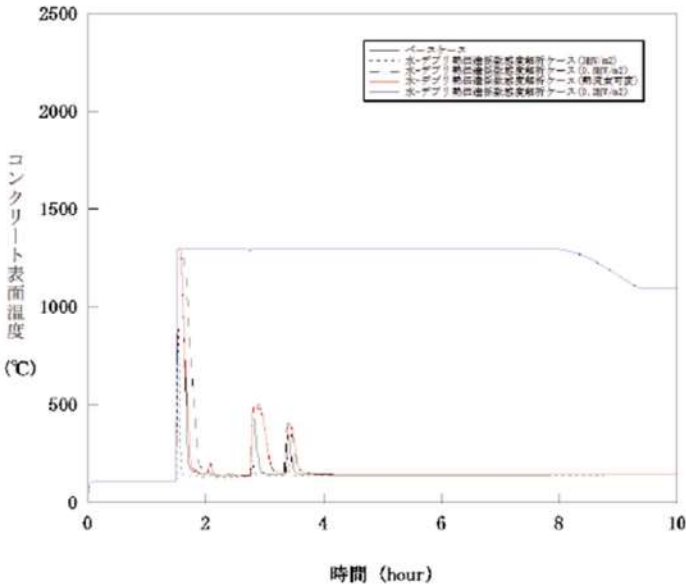
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
<p>図 5-3-2b 溶融炉心温度の比較（壁方向対流熱伝達係数大）</p>		

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p data-bbox="1265 954 1742 978">図 5-4-8 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析（8）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図 5-4-9 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析 (9)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-4-10 水-溶融炉心間の熱伝達係数感度解析（10）</p>	

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて (添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について)

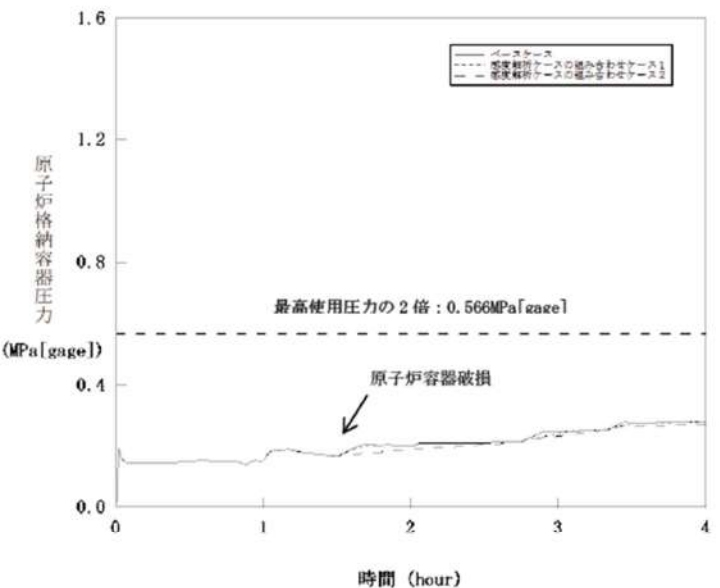
赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p>図5-5-1 感度解析ケースの組合せ (1)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶解炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	 <p style="text-align: center;">図 5-5-2 感度解析ケースの組合せ (2)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

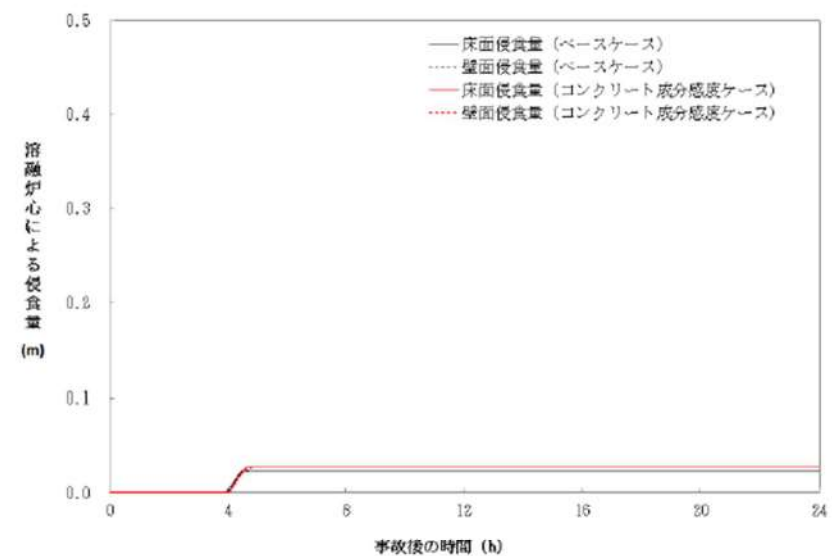
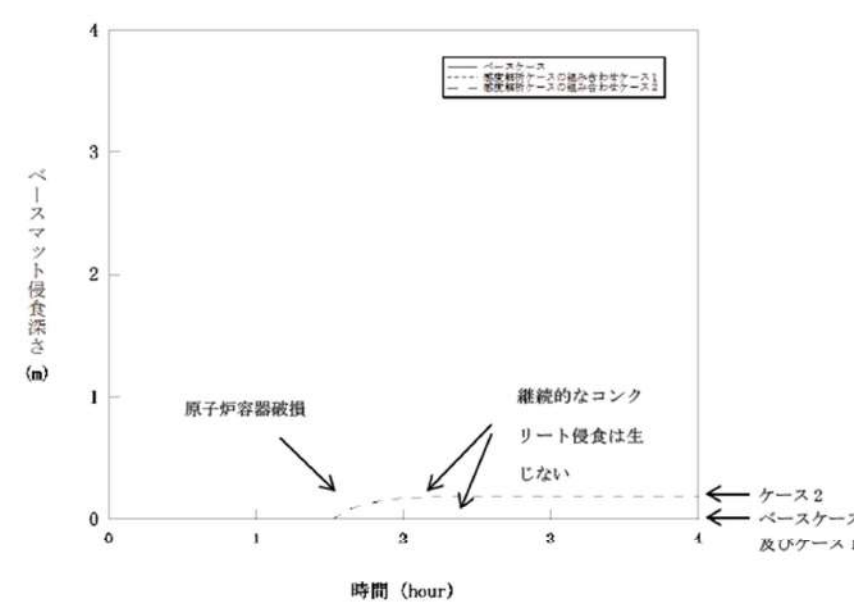
付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-5-3 感度解析ケースの組合せ（3）</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p data-bbox="313 949 862 981">図 5-4a コンクリート侵食量の比較（石灰岩系コンクリート）</p>	 <p data-bbox="1321 949 1680 981">図 5-5-4 感度解析ケースの組合せ（4）</p>	<p data-bbox="1971 167 2116 335">※コンクリート組成に関する感度解析は基本的考え方の6.5.9に記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-5-5 感度解析ケースの組合せ (5)</p>	

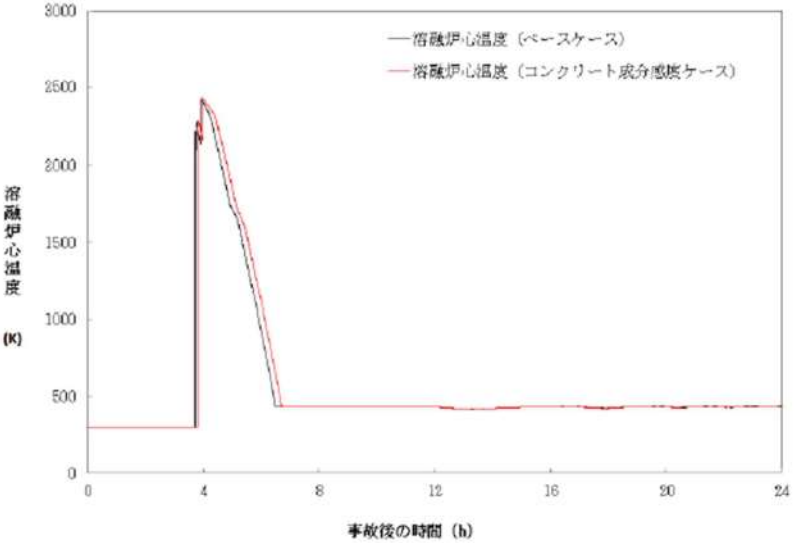
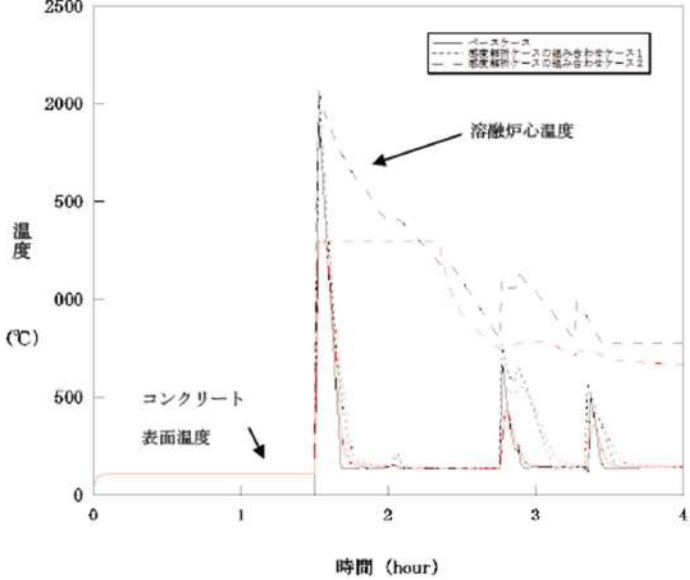
赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">図 5-5-6 感度解析ケースの組合せ (6)</p>	

赤字：設備、運用又は体制の相違 (設計方針の相違)
 青字：記載箇所又は記載内容の相違 (記載方針の相違)
 緑字：記載表現、設備名称の相違 (実質的な相違なし)
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
 <p data-bbox="353 954 833 976">図 5-4b 溶融炉心温度の比較 (石灰岩系コンクリート)</p>	 <p data-bbox="1332 954 1680 976">図 5-5-7 感度解析ケースの組合せ (7)</p>	<p data-bbox="1975 172 2123 331">※コンクリート組成に関する感度解析は基本的考え方の6.5.9に記載</p>

赤字：設備、運用又は体制の相違（設計方針の相違）
 青字：記載箇所又は記載内容の相違（記載方針の相違）
 緑字：記載表現、設備名称の相違（実質的な相違なし）
 下線：従来のPWRの公開文献から追加した内容

泊発電所3号炉 有効性評価 比較表

付録3 重大事故等対策の有効性評価に係るシビアアクシデント解析コードについて（添付3 溶融炉心とコンクリートの相互作用について）

女川原子力発電所2号炉	泊発電所3号炉	相違理由
	<p style="text-align: center;">(t)</p> <p style="text-align: center;">時間 (hour)</p> <p style="text-align: center;">図 5-5-8 感度解析ケースの組合せ (8)</p>	